

令和4年度（2022年度）博士論文

主要部内在型関係節の語用論的研究

ーコーパスから得られた「～た（だ）＋の＋を」で主節他動詞に  
接続するタイプを手掛かりとしてー

埼玉大学人文社会科学部

博士後期課程 日本アジア文化専攻

学籍番号 15GD001

田村 隆夫

主指導教員名 山中信彦教授

— 目次 —

<b>1. 序論</b>	<b>6</b>
1.1 研究の目的	6
1.2 本論文の構成	7
1.3 本論文で使用する「主要部内在型関係節」関連の用語について	8
<b>2. 日本語の主要部内在型関係節に関する先行研究の概要</b>	<b>11</b>
2.1 主として構造的側面からの研究	11
2.1.1 黒田（1999、2005）の研究	11
2.1.2 三原（2006、2008）の研究	14
2.1.3 長谷川（2002）の研究	15
2.1.4 天野（2011）の研究	17
2.2 主として機能的側面からの研究	18
2.2.1 坪本（2002、2014）の研究	18
2.2.2 野村（1998、2002、2016）の研究	21
2.2.3 レー（1988）の研究	22
2.2.4 近藤（2018）の研究	23
2.3 形式的特性と意味的特性の相関関係に力点を置く研究	24
2.3.1 小原（2002）の研究	24
2.3.2 堀江（2009）の研究	26
2.4 先行研究で不明な点	28
<b>3. 本論文の分析対象と分析方法</b>	<b>32</b>
3.1 分析対象	32
3.2 コーパスから得られた実例を主要部内在型関係節と判定する際の留意点	33
3.3 分析方法	42
<b>4. 考察 I 主要部内在型関係節（構文）の使用実態</b>	<b>43</b>
4.1 観察結果（数値による基本的データ）	43
4.2 主要部内在型関係節（構文）の出現形態・出現環境①	46
4.2.1 主要部内在型関係節構文 基本形	46
4.2.1.1 主要部内在型関係節構文 基本4文型	46

4.2.1.2	内在型の後に主節主語が現れる意義と「知覚者」に与えられる視座からの描写	49
4.2.1.3	実例に見る内在型の後に主節主語が現われることの表現効果	50
4.2.2	主要部内在型関係節構文 一部省略形	53
4.2.2.1	一部省略形で観察される主要部の先行提示の主な3つのパターン	54
4.2.2.2	会話のやり取りの表現中に見られる一部省略型	56
4.2.2.3	他の文環境でも観察される一般的な省略	57
4.2.2.4	詳細な文型分類の中で特に頻繁に観察された一部省略形	58
4.2.3	基本形・省略形の実例数一覧（詳細な文型分類）	61
4.3	主要部内在型関係節の出現形態・出現環境②	63
4.3.1	主節他動詞の出現形態・出現環境としての活用形	63
4.3.2	終止法	63
4.3.3	テ形・連用形（接続法中止形）と行為の連続環境	65
4.3.4	連体形	68
4.3.4.1	連体形と局所的文法形式あるいは特徴的な語彙への接続	68
4.3.4.2	関係節化	69
4.3.5	その他の興味深い出現形態・出現環境	70
4.3.5.1	他の事態表現の内部や直後に生起する主要部内在型関係節構文	70
4.3.5.2	感情表現	72
4.3.5.3	主要部内在型関係節の連鎖現象	73
4.4	テ形・連用形及び連体修飾節（主要部外在型関係節）による表現との差異	77
4.4.1	テ形・連用形	77
4.4.1.1	テ形・連用形の概観	77
4.4.1.2	テ形・連用形による表現と内在型構文による表現の差異	78
4.4.2	連体修飾節（主要部外在型関係節）の概観	80
4.4.3	連体修飾節による表現と内在型構文による表現との差異	85
4.4.3.1	複数の主要部	85
4.4.3.2	被修飾名詞句の明示の問題	88
4.4.3.3	名詞句に付加された連体修飾節が与える影響（複数の出来事と事態展開の細分化）	89
4.5	「意識対象」表現としての内在型の特徴と内在型構文に想定される修飾機構	90
4.5.1	「指し言語」（本多:2005）と「その場の関心固定ツール」（菊地:2006）	90

4.5.1.1	主要部にモノ的絵画イメージが色濃い実例	… 90
4.5.1.2	主要部内在型関係節と「現象描写文」	…………… 91
4.5.1.3	主要部内在型関係節と「その場の関心固定ツール」(菊地:2006)	…………… 95
4.5.1.4	その他のモノ的絵画イメージや主要部環境の取り込みが観察される実例	… 97
4.5.2	主要部内在型関係節構文内に想定される修飾機構	…………… 99
4.5.2.1	英語の関係節構文との対照と主要部内在型関係節構文内の修飾機構の想定	100
4.5.2.2	三好(2021)による「連体修飾」の範囲の確認	…………… 101
4.5.2.3	主要部内在型関係節構文に想定される修飾機構	…………… 103
4.6	主要部内在型関係節構文の使用状況から観察される基本的な語用論的特徴の整理	… 106
4.6.1	主節主語と主要部内在型関係節との位置関係によって生じる表現効果上の差異	106
4.6.2	「気付きとその内容とそれへの対応」と主節他動詞の意味内容	…… 107
4.6.3	「気付きとその内容とそれへの対応」と2局面表現としての内在型構文	… 108
<b>5.</b>	<b>考察Ⅱ 主要部内在型関係節(構文)の使用動機</b>	…………… <b>111</b>
5.1	陳述(断定)機能を担う関係節を項内に含む複文としての主要部内在型関係節構文	112
5.1.1	主要部内在型関係節と英語の陳述(断定)機能を持つ関係節との類似性	…… 112
5.1.2	主要部内在型関係節に見られる提示的機能	…………… 118
5.1.2.1	提示的機能	…………… 118
5.1.2.2	提示的な側面のある主要部内在型関係節からの主要部の先行提示とその実例	119
5.2	主要部内在型関係節構文と当該構文による表現が持つ臨場性	…………… 123
5.2.1	知覚行為の非明示性と臨場性	…………… 123
5.2.1.1	日本語で知覚行為が明示的に示されない傾向	…………… 123
5.2.1.2	〈事態把握〉の2つの基本類型(池上2011)と日本語表現	… 125
5.2.2	言語表現と自己の表示・非表示と臨場性	…………… 127
5.2.2.1	〈環境論的自己〉(Neisser 1993)と〈主観的把握〉(池上2005, 2011)	… 127
5.2.2.2	ゼロ形としての自己の表現	…………… 128
5.2.2.3	「直接知覚される自己」(本多2005)	…………… 129
5.2.2.4	〈主観的把握〉の構図(池上2005)の持つ臨場性と主要部内在型関係節構文	130
5.2.2.5	〈主観的把握〉と聞き手/読み手としての自己投入(池上2011)	…… 131
5.3	BCCWJから得られた主要部内在型関係節構文と知覚行為意識の実際	… 133
5.3.1	主節他動詞として知覚動詞が使われている主要部内在型関係節構文	… 133

5.3.2	主要部内在型関係節構文の実例と知覚動詞の有無の関係	134
5.3.3	表現者が描写する知覚事態と主節主語にとっての知覚事態の異同	137
5.3.3.1	表現者と主節主語が同じ場合	137
5.3.3.2	表現者と主節主語の事態の捉え方の間に差異が認められる場合	138
5.3.3.3	その他の表現者と主節主語の事態の捉え方の諸相	139
5.4	主要部内在型関係節構文の使用動機に想定される「表現欲求の内実」	142
5.4.1	渡辺 (2001, 2007, 2008) の「人間観」と様々な「欲求」	142
5.4.1.1	様々な「欲求」と「自己形成」	142
5.4.1.2	「自己評価の試み」(渡辺 2008) と「自己形成」との間に想定される相補的關係	146
5.4.2	「アフォーダンス」と「知覚のなかの行為」	147
5.4.2.1	アフォーダンス	147
5.4.2.2	アフォーダンスとノエの『知覚のなかの行為』	148
5.4.2.3	「知覚と行為の循環」とアフォーダンスの「文化学習」	152
5.4.2.4	人間の持つアフォーダンスと「自己評価欲求」	153
5.4.3	「自己評価欲求」(渡辺 2001, 2007, 2008) から捉えた二種類の修飾機構の実際	154
5.4.3.1	「過去の経験の積み重ねによる自己形成」(渡辺 2008) の態様と連体修飾機構	154
5.4.3.2	「自己評価の試み」(渡辺 2008) の様相を臨場的に表す主要部内在型関係節構文	155
5.4.3.3	二種類の修飾機構とその英語訳に使用される等位文と進行形との関係性	157
5.5	主要部内在型関係節構文と当該構文の表現者に想定される表現欲求の内実	159
5.5.1	「セルフ・カウンセリング」と「自己評価分析」(渡辺 2001, 2007, 2008)	159
5.5.1.1	セルフ・カウンセリング (渡辺 2001, 2007, 2008)	159
5.5.1.2	セルフ・カウンセリング (渡辺 2007) の実例	161
5.5.1.3	セルフ・カウンセリングによる発見	163
5.5.1.4	自己評価分析 (渡辺 2008) と「自己評価の試み」(渡辺 2008)	165
5.5.1.5	「主要部内在型関係節構文」の構成部分と「自己評価の試み」の要素間の関係	166
5.5.2	文脈内の一表現単位としての主要部内在型関係節構文と表現範囲の選択	168
5.5.2.1	主要部内在型関係節構文生成の際に見られる表現範囲の絞り込み	168
5.5.2.2	主要部内在型関係節構文生成の際の連体修飾節による先行事態の取り込み	171
5.5.3	主要部内在型関係節構文の成立条件を考える	176
5.6	主要部内在型関係節構文の表現者の表現欲求とレトリック効果	179

5.6.1	主要部内在型関係節構文とレトリック	179
5.6.1.1	主節主語に想定される自己評価の試みとレトリック効果	179
5.6.1.2	アフォーダンスと間接知覚とレトリック効果	181
6.	結論	186
	参考文献	188
	引用文献	190
	資料（実例データ）	190
	添付参考資料（p. 1～p. 16）	

## 1. 序論

本論文は、主要部内在型関係節に関する語用論的研究である。

主要部内在型関係節は、「守隆は末子の久隆が出家していたのを還俗させて跡取りとした。(2004 八幡 和郎(著) 江戸三〇〇藩バカ殿と名君 光文社)」の中に観察される。通常の関係節(連体修飾節)を用いれば、「守隆は出家していた [末子の久隆] を還俗させて跡取りとした。」と表現され、主要部(被修飾名詞句)である「末子の久隆」は関係節(連体修飾節)の後に隣接する。一方、先の例では、主要部(被修飾名詞句)は、関係節(連体修飾節)相当と考えられる「[末子の久隆]が出家していたの」の中に内在する。この種の、節の内部にある名詞句を主要部(被修飾名詞句)として解釈できる関係節が主要部内在型関係節であり、多くの研究が為されてきた。

私が「主要部内在型」という言葉に出会ったのは、福地肇の著書『英語らしい表現と英文法』(福地(1995))に於いてであった。福地(1995:45)は

(1) 警官は[泥棒が逃げる]の/ところを捕まえた。 (福地の(2.80))

(2) 警官は[逃げる]泥棒を捕まえた。 (福地の(2.81))

という例を挙げ、(2)のように、「従属節が『泥棒』にかかる連体修飾節(関係節)になっていけば、選択制限を満たす形が整う」が、(1)では「それが崩れている。この『主要部内在型』とも言える関係節は、日本語が、英語とは逆に、 [略] 非名詞句指向の言語であることを示している」としている。

特に意識したことのない言い回しを「選択制限」という観点から捉え直してみると、奇異な感じがすると同時に、この主要部内在型関係節が、日本語の非名詞句指向の特徴と結びつけられている点に新鮮な印象を覚えた。当時、高校の英語の教員として、英語の名詞句指向の特質を福地(1995)から学びながら、新たに、母語である日本語に対する興味が湧いてきたのを覚えている。本論文は、私が日本語に興味を抱く切っ掛けになった、その主要部内在型関係節を研究対象としている。

### 1.1 研究の目的

本論文の目的は二つあり、①主要部内在型関係節の使用の実態を明らかにすること、② ①を踏まえて、主要部内在型関係節の使用の動機を明らかにすること、である。そのため、本

論文では、「現代日本語書き言葉均衡コーパス」(BCCWJ)を利用して得られた主要部内在型関係節と考えられる実例の意味内容とその出現形態・出現環境との関連を考察する。合わせて、テ形・連用形による表現や通常の連体修飾節による表現と、主要部内在型関係節を使用した表現との間に見られる意味的差異及び表現効果上の差異を考察することで、主要部内在型関係節の使用の動機を明らかにすることに努める。尚、本論文の考察の対象は、主要部内在型関係節を構成する動詞が形式名詞の「の」を「タ形」で連体修飾し、当該関係節がヲ格で主節他動詞に接続するものに限られる。

実例を観察して注目されるのが、以下の3点である。①主節主語が主要部内在型関係節の前の位置に生起する実例数よりも後ろの位置に生起する実例数の方が上回ること、②実例に共通して観察される意味内容が、「気付きとその内容とそれへの対応」を表すと考えられること、③主要部内在型関係節によって描写される「事態」に関して、主要部内在型関係節構文の「表現者」の事態認識と同構文内の「主節主語」に想定される事態認識との間に、微妙な差異が存在する可能性が観察されること、である。

これまでの先行研究では、①と③の点に関して特別な注意が払われてこなかったと考えられる。本論文では、主要部内在型関係節構文の「使用動機」を、同構文の表現者が同構文の使用によって実現させたい「表現欲求の内実」という観点から考察する。具体的には、人の「欲求」に関する精緻な理論を展開する渡辺(2001, 2007, 2008)に依拠することになるが、そうすることで、上記①～③についての統一的で自然な説明が得られると考える。また、そこから、主要部内在型関係節構文を、〈自己評価欲求〉(渡辺 2001)に基づく、〈自己評価の試み〉(渡辺 2008)の過程を、その場に臨場する様相で現象描写的に言語化するのに適した表現形式であると捉える視点が得られ、同時に、一部の連体修飾節(主要部外在型関係節)が当面の〈自己形成〉(渡辺 2001, 2007, 2008)の様態を表現するのに適した文法形式として捉えられることになり、両者間の相互に補完的な関係も明らかになると考える。

## 1.2 本論文の構成

次の2章では、主要部内在型関係節に関する先行研究を概観する。主要な研究や本論文の研究目的に資すると考えられるものを、生成文法や認知言語学といった枠組みに拘らず取り上げる。3章では、本論文の分析対象と分析方法について述べる。本論文では、主要部内在型関係節の使用実態を捉えるためにBCCWJというコーパスを利用して実例を集めている。



そのため、事例の収集の仕方、取り分け、主要部内在型関係節と判断する際の基準について記した。4章では、考察Ⅰとして、得られた事例の出現形態及び出現環境について観察結果をまとめ、使用実態の把握に努める。本論文が主要部内在型関係節（構文）の基本形と想定するものとその一部省略形について述べ、事例を示すとともに、注目点について言及する。また、主要部内在型関係節の特性を捉えるため、テ形・連用形による表現や通常の連体修飾節（主要部外在型関係節）を用いた表現との比較を試みる。5章では考察Ⅱとして、主要部内在型関係節の使用動機を探る。まず、当該関係節の基本的な語用論特性とそれと表裏の関係にある統語的性格の注目すべき点を英語の一部の関係節に見られる現象と比較する。また、主要部内在型関係節の表現者と主節主語が同じなのか異なるのか、異なる場合、表現者と主節主語が「事態」を同じように捉えていると解釈できるのかといった問題を検討する。その上で、本多（2005）、菊地（2006）、池上（2004-2005, 2011）、渡辺（2001, 2007, 2008）の研究が主要部内在型関係節の使用動機を明らかにする上で重要な視点を提供することについて述べる。ギブソン（2004）やノエ（2010）の研究にも触れ、「現象」や「知覚」、それらと「言語表現」との間の関係等について検討する。また、主要部内在型関係節構文を、〈自己評価欲求〉（渡辺 2001）に基づく〈自己評価の試み〉（渡辺 2008）の過程を言語化するのに適した表現形式と捉えることで、一部の連体修飾節（主要部外在型関係節）が当面の〈自己形成〉（渡辺 2001, 2007, 2008）の様態を表現するのに適した文法形式として捉える視点が得られることを見る。最後に、結論の章で、本論文の研究の結果をまとめる。

### 1.3 本論文で使用する「主要部内在型関係節」関連の用語について

【主要部内在型関係節】：「現象描写文」＋形式名詞「の」＋（「格助詞」）

- 守隆は 末子の久隆が出家していたの(を) 還俗させて跡取りとした。
- 警官は 泥棒が逃げるの(を) 捕まえた。

（「内在型」と略記する場合がある。研究者によっては、「内在節」とする場合があり、当該研究者からの引用の際には、「内在節」を使用した。また、関連する「主語」や「目的語」を指す場合には、「内在節」という語を使用し、「内在節主語」「内在節目的語」と表示した。）

【主要部内在型関係節構造】：主節他動詞部分の目的語相当部分（想定される修飾機構を含む）

- 守隆は 末子の久隆(が)出家していたの(を) 還俗させて跡取りとした。
- 警官は 泥棒(が)逃げるの(を) 捕まえた。

(「内在型構造」と略記する場合がある。)

… 主要部内在型関係節内の特定の名詞句が、主節他動詞の目的語と解釈される段階では、当該主要部内在型関係節と当該目的語との間に、ある種の緊密な関係が成立する。そこには、一般的な関係節構造(連体修飾節構造)の「関係節」と「主要部」との間に見られる修飾関係に似た、修飾相当の構造が成立すると想定される。この構造を、〈主要部内在型関係節構造〉と呼ぶことにする。

【主要部内在型関係節構文】：主要部内在型関係節＋主節主語部分＋主節他動詞部分、(随意要素を含む)

\*主節主語部分は主要部内在型関係節に先行する場合を含む。

- 守隆は 末子の久隆(が)出家していたの(を) 還俗させて跡取りとした。
- 警官は 泥棒(が)逃げるの(を) 捕まえた。

(「内在型構文」と略記する場合がある。)

≪「現象」・「知覚」・「表現」関連の用語について≫

【表現者】…「言語学では、言語と関わる人間を〈話者〉という用語で指す(池上(2011))」とされているが、本論文では〈話者〉という語は稀にしか用いず、主に「表現者」という語を使用している。これは、次のような事情による。主要部内在型関係節の作成者が当該関係節で描写する事態を、主節主語も、作成者と同じ様に(同様の構えで)捉えているとは必ずしも言えない、と考えられるのである。言い換えれば、作成者は、自分自身が主節主語でない場合、主節主語が知覚したと想定される事態を、自身の知覚ではなく他者の知覚という予め限界のある中で、表現として提供しているのである。そこで、本論文では、当該関係節の作成者が同関係節を「事態表現として選択する」際に、以上の点にどの程度意識的なのか探る意味も込めて、〈話者〉ではなく、「表現者」という語を主に使用することにした。

【知覚】【直接知覚】【間接知覚】

本論文では、主要部内在型関係節に「現象文」性を認めている(小原(2002)を踏襲している)。そこで、「現象」や「知覚」それらと「表現」との関係を、一定の視点から捉えるために、ギブソン(2004)の「知覚」に関する議論を導きの糸とすることにした。

ギブソン(2004)は、「知覚」を「直接知覚」と「間接知覚」に分け、言語によって創出される知覚は、間接知覚に分類されている。以下、主要な論点を確認する。

- ・ギブソン(2004)は、「生態学的な事物や事象に関する、他者が介在しない直接的な知覚」

について、「これは、物理学ではなく生態学で言う、物質《substances》・面《surfaces》・媒質《medium》などの水準での知覚である。このような知覚は、刺激情報《stimulus information》（即ち、不変項《invariants》）に立脚しており、刺激情報は、探索や移動を通じて抽出される。直接的な知覚には、いわゆる記憶の一形態（即ち、「今ここから見える面」だけでなく、遮蔽された面に関する意識性）が含まれる。[略]（ギブソン 2004:255）」としている。また、「我々が知覚すべく（即ち、直接的に認識すべく）存在しているのは、物質・媒質・面・配置・事象である。知覚することは、即ち、動物を包囲している、光・音・匂い・力学的接触到に含まれる情報を抽出することである。[略]（ギブソン 2004: 361）」としている。

さらに、「対象や面に関する直接的な知覚《direct perception》でさえ、時間の経過に伴って共有される。時間を経て共通の観察点を取ったり、今占めているのとは異なる位置から見ることができるからである。絵画を見ることで得られる、環境の一部に関する媒介された知覚は、共有される。このような知覚は、他の光景に向かって開いた一種の窓であり、誰でもその窓を通して見ることができる。言語による記述や、数学における記号から得られる知覚では、媒介の度合いは一層強いと言える。このような知覚（知識）でさえ、その言語や記号を学んだ人々の間では明らかに共有される」とする。

そして、「我々は、『世界を共有している』という意識性《awareness》を持つ、即ち、互いの知覚を共有し合う。これは、非常に多くの哲学者が考えているように「我々が他者と言語を共有しているから」だけではない。我々の知覚は固定的な観点に立脚しているのではないから、つまり、我々には、時間経過に伴って不変項を抽出する能力があるからでもある。このことが、絵や言葉を介して知識を獲得する能力を支えている（ギブソン 2004: 354-355）」としている。

・以上から、表現者は、直接知覚を言語化して表現形式に取り込むことができるとともに、それを聞き手・読み手に表現として伝達することができることになる。聞き手・読み手は、表現者が伝達するその表現から間接知覚を経験することになる。ギブソン（2004）は、間接知覚は、「直接的な知覚とは別の水準にある」とし、「無限の利用可能な情報の中から、媒介者によって**選択**された情報である」とするが、「旅行家・探検家・研究者が理解したことは、このようにして、全ての人々が利用できるようになる（ギブソン 2004: 354）」としている。

## 2. 日本語の主要部内在型関係節に関する先行研究の概要

### 2.1 主として構造的側面からの研究

#### 2.1.1 黒田（1999、2005）の研究

現代日本語の主要部内在型関係節に関する本格的な研究は、黒田の研究に始まるとされている。その総括的な研究と考えられる黒田（2005:169）は、

- (3) 駅で酔っ払いが騒いでいたのが警官に捕まった (黒田の(1))
- (4) 太郎が林檎が皿の上にあるのを取った (黒田の(2))
- (5) 田中が学生たちが歩いてくるのに出会った (黒田の(3))

という例を挙げ、「これらの文において、『駅で酔っ払いが騒いでいたの』『林檎が皿の上にあるの』『学生たちが歩いてくるの』は節の形をとりながら、それぞれ主文の主語、目的語、及び二格支配の補語の位置を占めているように見える。しかし意味上はそれらの節の中に含まれている名詞『酔っ払い』『林檎』『学生たち』が主文の主語、目的語、補語の役割を担っている」とする。

また、通常の関係節で書き換えた場合について、黒田（2005:169）は、

- (6) 駅で騒いでいた酔っ払いが警官に捕まった (黒田の(4))
- (7) 太郎が皿の上にある林檎を取った (黒田の(5))
- (8) 田中が歩いてくる学生たちに出会った (黒田の(6))

のように示して、「(3)－(5)の『駅で酔っ払いが騒いでいたの』『林檎が皿の上にあるの』『学生たちが歩いてくるの』に例示されているような節構造を主辞内在関係節、(6)－(8)の『駅で騒いでいた』『皿の上にある』『歩いてくる』に例示される通常の関係節を主辞外在関係節と呼ぶことにする」<sup>1</sup>としている。

---

<sup>1</sup> 黒田（2005）の付記には、「本稿の初出は、「主部内在関係節」黒田成幸、中村捷編『ことばの核と周縁—日本語と英語の間』くろしお出版、1999、pp. 27-103. 本書に再録するにさいして、headの訳語としての「主部」を通例に従って「主辞」と改めた。（黒田 2005:233）」とある。

本論文では、坪本（2002）・野村（2002）・三原（2006）などに従い「主要部内在型関係節」という用語を使用した。また、野村（2002）のように、主要部内在型関係節と主節を合わせたものを主要部内在型関係節構文と呼ぶ場合があり、本論文でもそれを採用している

**【特設注1】黒田(2005)、三原(2006)、長谷川(2002)で使用されている用語とXバー理論**

黒田(1999, 2005)、三原(2006, 2008)、長谷川(2002)では、生成文法の用語が用いられている。それらの用語間の関係が分かるように、安藤・小野(1993)から、「X-bar theory (Xバー理論)」の項目の解説を引用する。

「標準理論で提案された句構造規則 (phrase structure rule) には、語彙要素間の縦の関係である支配関係と、横の関係である姉妹 (sister) 関係に何の制限も課されていなかったため、次のような句構造規則が存在しない、あるいは存在してはならない理由が明らかにされていなかった。

- (1) a.  $NP \rightarrow Det V$
- b.  $V \rightarrow P VP$
- c.  $PP \rightarrow P V N AP$

そのため、自然言語の可能な句構造が無限にあってもよいことになり、子供の言語獲得の面からも、このような制限のない句構造規則は到底認められるものではなかった。そこで、句構造規則を厳密に制限する仕組みが必要であることが提案された。それがXバー理論であると言ってよい。

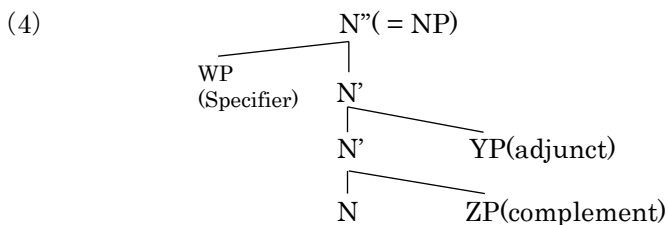
Xバー理論による句構造に関する制限は、次のように規定される。

- (2) a.  $X'' \rightarrow Y'' X''$
- b.  $X' \rightarrow X Z'$  (X, Y, Zは任意の範疇)

句構造規則は、この単純な制約により厳しい制約を受けることになる。まず、可能な句構造規則が制限される。XがNである場合を考えてみよう。すると、(2)からは(3)のような句構造規則が生成される。

- (3) a.  $NP \rightarrow YP N'$
- b.  $N' \rightarrow N ZP$

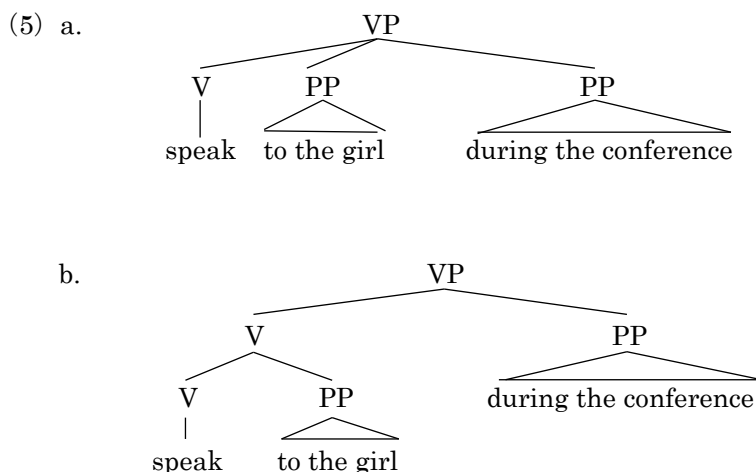
この句構造規則を樹形図に展開すると、次のようになる。



この構造は、名詞句の主要部が必ずNであり、Nの一段上にはN'があり、最終的に投射はN''(=NP)までで終わり、これが従来の句範疇(phasal category)と呼ばれるものとなる。したがって、名詞句の句構造に関して、 $NP \rightarrow V PP$ とか $NP \rightarrow A$ のような規則がありえないことが規定できる。

また、(2)を仮定すれば、従来、句範疇(phasal category) (X'')と語彙範疇(lexical category) (X<sup>0</sup>)しか設定されておらず、X'という中間範疇が認められていなかったために、厳密な構造記述ができなかつ

たものも明確に記述することができるようになった。例えば、**speak to the girl during the conference** という動詞句内の構造は、従来の句構造規則では(5a)のようにしか記述できず、**to the girl** という前置詞句と **during the conference** という前置詞句の **speak** に対する依存関係の差(意味的なつながりの強さ)を記述することができなかった。しかし、Xバー理論を用いれば、(5b)のように明確に差を記述することが可能である。



つまり、句範疇、語彙範疇のほかに、X'という中間範疇を仮定することによって、このような精緻な記述が可能となる。

Xバー理論は当初、語彙範疇(つまり、N,V,A,P)にのみ適用されていたが、Chomsky(1986b)以後は、補文標識(complementizer) Cや屈折要素 INFLにも適用され、従来 S'と呼ばれていた範疇は CP、Sと呼ばれていた範疇は IPとなった。また、限定詞 Detを主要部とする DP分析も提案され、一致要素(agreement)には AgrP、時制要素(tense)には TPなども提案されるに至っている。Chomsky(1992)や Chomsky and Lasnik (1992)では、(2)の式形に加えて、(6)のようなものも必要であると主張されている。

- (6) a.  $X \rightarrow Y X$   
 b.  $X'' \rightarrow Y'' X''$

(2)の式形が規定しているのが、指定部と補部であったのに対して、これら2つの式形は、両者とも、付加部(adjunct)が現れうる位置を規定したものである。(6a)は、ゼロレベル範疇 Yがゼロレベル範疇 Xに付加(adjunction)されることがあるということを規定しており、(6b)は、最大投射 X''に別の最大投射 Y''が付加されうることを規定したものである。前者の例としては、主要部移動(head-movement)や動詞移動(V-movement)などがあり、AGRに時制要素 Tが移動し、[AGR T AGR]のような構造の形成を可能にするものである。また、後者の例としては、名詞句 NPに関係節 CPが付加され、[NP NP CP]のような構造が形成される場合である。(安藤・小野 1993:309-312)』

黒田(2005)は、先の(3)－(5)に例示されているような節構造を成す主辞内在関係節を名詞句と捉え、(9)のような「純内在説」を提唱している。

(9) 純内在説の基本原理

- (a) 主辞内在関係節は範疇S, (あるいは範疇NがSを直接支配しているもの)であるが、
- (b) 主辞内在関係節は名詞句がテータ統率される位置を占め、
- (c) この位置に放下さるべきテータ役割はSの境界を越えて主辞内在関係節に含まれる名詞句に放下される。 黒田(2005:194)

その上で、(9)の基本原理に関連する様々な論点に関して詳細な議論を展開している。

また、黒田(2005)は、脚注の中で、主辞内在関係節は英語では head internal relative clause あるいは internally headed relative clause と呼ばれているが、英語でそう呼ばれる日本語の構造が、「普遍文法、比較文法の立場からいって、英語の同じ術語で意図されている他言語の構造と同一視されるべきであるかには、問題が残る(黒田 2005:170)」としている。英語の同じ術語で意図されている他言語の構造は、一般に限定的修飾節でありえ、主辞に不定性の制約があるなど、「ここでいう日本語の主辞内在関係節とは異なる性格をもつという(黒田 2005:170)」との紹介をしている。

### 2.1.2 三原(2006、2008)の研究

三原(2008)は、主要部内在型関係節を副詞節として捉えている。「内在節とは、名詞化辞の『の』でまとめられた文が、主節の表す事態に対する『背景』として予め提示される、副詞節であると考え。(三原 2008:94)」とする。

三原(2008:95)は

- (10) a. [<sub>NP</sub>[<sub>S</sub> 太郎が来た][<sub>N</sub> 時]]
- b. [<sub>NP</sub>[<sub>S</sub> 大阪に引っ越した][<sub>N</sub> 翌日]] (三原の(14))

を挙げ、「名詞化辞の『の』は、実質的な意味内容を持たない『形式名詞』であるが、Nには違いないので、先行するSを包み込んで、全体の範疇は、NPとなる。(三原 2008:94-95)」とし、(10)のように全体がNPとなるものが副詞節として機能するのは、日本語では珍しいことではないとしている。その上で、

- (11) a. 警官は[<sub>NP</sub>[<sub>S</sub> 男が逃げようとする][<sub>N</sub> の]]を、pro 呼び止めた。
- b. [<sub>NP</sub>[<sub>S</sub> 銀行から強盗が逃走しようとした][<sub>N</sub> の]]が、pro バリケードを張っていた警官隊に逮捕された。 (三原の(15))

を示し、(11a)の pro は目的語として、(11b)の pro は受動文の主語として、働いているとする。また、(11a, b)について、「内在節では、主節の動詞が要求する主語や目的語が表面に現われないが、これらはゼロ代名詞であるとする。このゼロ代名詞は、内在節の中にある、いわゆる『主要部』に対応するものである」としている。そして、「『警官が呼び止めた』『警官隊に逮捕された』という主節の出来事は、『男が逃げようとする』『強盗が逃走しようとした』という内在節に対する背景として提示されるとき、その中心人物の『男』や『強盗』を内在節の中で言語化しておいて、主節で pro とするのは自然なことだろう。(三原 2008:95-96)」と指摘している。

また、三原は、主要部内在型関係節に付加される助詞について、「内在節に付けられている『が／を／に』は提示機能を担う後置詞であり、『内在節＋後置詞』の総体が、主節事態に対する背景的事態を表す副詞節として機能する。提示機能を担う後置詞とは、概ね『～について言えば』という aboutness 機能を有する後置詞を言う。(三原・平岩 2006:167)」とする。

### 2.1.3 長谷川 (2002) の研究

長谷川 (2002) は、「主部内在関係節」の構造について、「主部内在関係節は、I Pを補部取るDPとして分析する。そして、内在主部の意味役割認定には、主要部Dからその補部(および補部が支配する要素)に向けたDP一般に必要な意味役割素性の『一致』操作が適用されるシステムを導入する。(長谷川 2002:1)」としている。

長谷川 (2002) は、黒田 (1999) によって提起された「節境界を越えての格付与」という捉え方に代えて、新たなミニマリストプログラム<sup>2</sup>的な立場に立って、「一致による意味役割の認定」という捉え方を提案していることになる。

その上で、(12)のような構造を提案している。

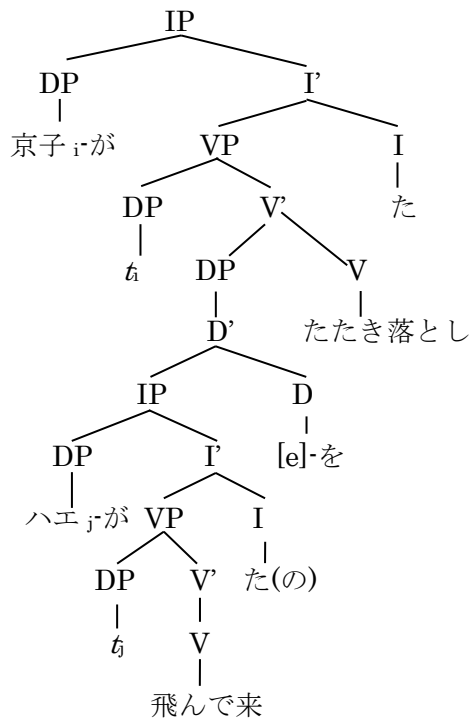
---

<sup>2</sup> 長谷川(2002)に関して、安藤・小野(1993)から、項目解説を最小限引用する。minimalist program(最小主義者のプログラム)の解説には、「Chomsky(1992)で示された考え方で、人間の言語が、一般的にどのような基本デザインにより構築されているか、という問題に対する1つの解答。

[略] 6. 新しい格理論：照合理論 格理論も修正されている。従来の理論では、格は「統率により与えられるもの」とされていたが、最小主義者のプログラムでは「照合(check)されるもの」とされている。 [略] 名詞は、辞書においてすでに格も、 $\phi$ 特徴( $\phi$ -feature)(人称、性、数など)と共に持っているものと仮定する。これらをN特徴(N-feature)と呼ぶ。また、動詞は、 $\phi$ 特徴、格、そして時制などの特徴を持っている。これらをV特徴(V-feature)と呼ぶ。一方、一致要素AGR-S, AGR-Oも、それぞれN特徴とV特徴を持っているとされる。 [略] (安藤・小野 1993:157-175)」とある。



(12)



長谷川信子 (2002:12)

以下、(12)に関する説明を(13)のように提示している。

- (13) [略] 内在関係節を、IP を補部を取る DP として分析し、IP 内に存在する主要部の意味役割認定は、一致操作により行われるという提案をした。この提案は、内在関係節だけに関わるものではなく、言語における意味役割認定として一般的なものである。この一致による意味役割の認定は、英語などの主要部前置言語では述語が先行するためにその必要性が表面化されないが、日本語などの主要部後置言語においては、先行する名詞句や補文などの要素自身の意味役割認定において一般的かつ不可欠な操作である。そして、この操作を可能とするために、主要部後置言語では D が IP の機能範疇となり、補文は IP を補部として取る DP として構造化される。そして、この構造が許されることが、主部内在関係節の成立を可能にしているのである。つまり、この構造を許す主要部後置言語にのみ主部内在関係節がゆるされるのである。 長谷川信子 (2002:31-32)

としている。また、英語などとの比較を念頭に次のような指摘も行っている。

- (14) 述語が先行する言語では補文自身にその意味役割の特定に関する  $\phi$  素性や格は不要なのである。それに対し、日本語のような主要部後置言語では、C が IP の機能範疇では、意味役割の特定には不十分なため、後続の述語の出現まで一致操作を待たねばならない。それでは、明らかに主要部前置言語に比べ、言語処理に大きな負荷が予想される。しかし、D を IP の機能範疇とするなら、それ自身で  $\phi$  素性を持ちそれに付随する格要素と共に述語の

出現以前に意味役割の特定が可能となるのである。そして、D が IP の機能範疇となれる、という主要部後置言語に許されたパラメーターが、取りも直さず、主部内在関係節の存在を可能にするのである。長谷川信子 (2002:29)

この長谷川 (2002) の「一致による意味役割の認定」<sup>3</sup>という捉え方は、日本語の基本構造 [S O V] が、主要部内在型関係節構文の成立を保証しているということを意味するため、重要である。また、5章で考察する日本語の「無助詞格成分」あるいは「主題性の無助詞」と、主要部内在型関係節が持つ「意識の対象」を表示する機能の、類似点と相違点を考察するに当たっても適切な説明を与えるものと考えられる。

#### 2.1.4 天野 (2011) の研究

天野 (2011) は、主要部内在型関係節にヲが接続するタイプを、「意味的には他動行為の〈対象〉を表す補語であるヲ句と、他動行為を表す述語句とが結び付いて成り立つ、他動構文である (天野 2011:137)」とする。その他動という点では、従来最も副詞句的とされる (15) のような例も、「臨時的な他動文の対格」と解釈されることになる。

- (15) 二人がそれを手帳に写しとろうとするのを、じれったそうに手をふって、「いいんだよ、それは持ってお行き。こっちにゃ住所の控えはあるから」 (「ちょ」レー(1988) p. 83)  
(天野の(23)) (天野 2011:130)

そして、「ヲ句は見かけ上事態を表すように見えても、ヲ句全体が名詞性をもち、主節事態と

---

<sup>3</sup> 長谷川 (2002) は、次のように黒田 (1999) の説を要約 (問題点も指摘) している。尚、(1) の a~e には、黒田が「証拠」とするものがまとめられているが、以下の引用では省略する。

i) 以上、黒田の分析をかなり詳しく述べてきたが、ここに要点をまとめておく。

(1) 黒田の主部内在関係節の分析 (純内在節) (cf. 黒田 (1999:51))

- a. 主部内在関係節は名詞句であり副詞節ではない。
- b. 主部内在関係節の範疇は S (あるいは範疇 N が S を直接支配している構造) であり、外在主要部は存在しない。
- c. 主部内在関係節は  $\theta$  統率される位置に生起する。
- d.  $\theta$  統率される位置に放下される意味役割は、S 境界を越えて主部内在関係節に含まれる名詞句に付与される。
- e. (c) の  $\theta$  付与は A/A の原理に従うが、移動に関わる条件のうち、S 境界のみを含む島 (副詞節、間接疑問文など) の条件には従わない。

つまり、内在関係節とは、構造的には外在主要部を持たない文であるが、関係節外部の  $\theta$  統率子により名詞に与えられる意味役割は、文境界が意味役割付与には透明 (transparent) であると仮定することにより、文中内部の名詞句へと放下されるというのが、黒田の分析である。  
(1) は、長谷川の (16)) 長谷川信子 (2002:8-9)

ならば2つ目の事態ではなく、主節の表す1つの事態の参与者としてその主節事態に組み込まれ一体化する『モノ』と捉えられている(天野 2011:130)」とする。

(15)のような場合、「ヲ句の後続に直接結び付く語彙的な他動詞が存在しない場合であっても、そのヲ句は推論による拡張他動関係の補語であり、また、その文は他動構文である(天野 2011:123)」とするのである。さらに、(15)の「『二人がそれを手帳に写しとろうとするの』という句からは、これから進展する事態の方向性の意味が解釈される。今後、二人がそれを手帳に写しとるという行為が引き続いて行われ実現するという予測がなされるのである。そのような、予測される事態の進展の方向そのものが、〈對抗動作性〉<sup>4</sup>の対象となる『モノ』である。『じれったそうに手をふって』は、この予測される進展の方向を対象として、それを遮り、やめさせる行為なのである。(天野 2011:130)」としている。

その点を指摘したうえで、

(16) 警官は男が逃げようとするのを呼び止めた。 (三原 2008:88) (天野の(42))

(17) 警官は逃げようとする男を呼び止めた。 (天野の(43))

について、(17)の表す他動事態は、「『呼び止める』という具体的行為の対象が、〈男〉であるということを第一義的に意味する」と指摘する。一方、(16)の表す他動事態は、「『呼び止める』という具体的行為により実現される、〈さえぎる〉という行為の対象が、『男が逃げようとする』という事態の進展として予測されるある〈方向性〉である、という意味を表す可能性をもつ文だと言える。(天野 2011:137)」としている。

## 2.2 主として機能的側面からの研究

### 2.2.1 坪本(2002、2014)の研究

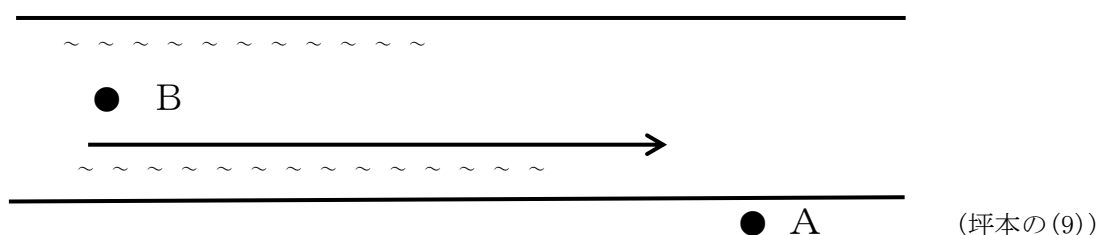
坪本(2002)は、主要部内在型関係節構文の根本には、「〈現場性〉すなわち、〈行為実践的〉な意味における主観的な表現が内在化している。これは、言語主体が状況に密着し、状況の変化とともに動く、といった意味である。(坪本 2002:40)」としている。

坪本(2002:30-31)は、(18)を示して、(19)と(20)の相違について指摘している。

---

<sup>4</sup> 天野は、動こうとする方向を止める〈對抗動作性〉の意味を持つ「AがBをV」構文の例として、「太郎が成長を止めた」(天野 2011:22)のような例文を挙げている。

(18)



(19) イチローは[ピッチャーがボールを投げたの] を打った。 (坪本の(10))

(20) イチローは[ピッチャーが投げたボール] を打った。 (坪本の(11))

(18)のように、時間の流れを川とその岸という形で表した場合、「時間が流れる水のように語られるとき、われわれは、いわば、川岸に立ってその流れを見ているところがある」としたうえで、「川岸に視点を固定する見方は、客観的な見方であり、〈認識重視の立場〉と言える」とする。そして、(18)の「B地点に視点を置いた表現は、状況に密着して状況と共に動き、状況の変化に参加するように状況を捉えており、〈行為実践的な立場〉と呼ぶにふさわしい」とする。そして、(19)の表現は、「変化する〈動く世界〉に対応する行為の場面でのみ可能な表現である。『ピッチャーがボールを投げた』と言う場合、そこに立ち会っているという観点が必要である」としている。一方、(20)の場合は、『ピッチャーが投げたボール』は、客観的なモノであって、主観の介入はない。このような主要部外在型関係節の場合は、先のA地点からの表現であり、〈行為実践的立場〉に対して、〈認識重視の立場〉によるものである。(坪本 2002:30-31)」としている。

また、坪本(2014)は、主要部内在型関係節には、『現場性』に裏打ちされた『体験内在的』な時間性と空間性、つまり、時間的空間的に隔たった二つの点の関係を時間の連続的な流れ、空間的な広がりの中の出来事として伝えるという側面(坪本 2014:81-82)」があるとする。この指摘には、「関連性の条件」の再考が関わっている。

坪本(2014:68-69)は、主要部内在型関係節構文の「成立条件との関係から、特に、『同時性』『場所の同一性』の問題を考える」として、(21)～(23)を挙げている。(21)は、「成立条件『関連性の条件』として提案されたものである(Kuroda1975-76:86))」とされている。

(21) (i) この構文が許容されるために、主節の語用論的な内容と直接関連するように、  
「の」節は語用論的に解釈される必要がある。

(ii) 2つの節の内容は、語用論的に密接に連結されて、ひとつの superevent を構成する。

(22) a. 同時性      b. 同一場所      c. 緊密な語用論的關係      (Tsubomoto:1981)

(23) 同一場所性、同時性の解釈は、HIR 構文<sup>5</sup>が許容されるための必要条件でもないし、十分条件でもなく、許容性条件(acceptability conditions) ではない。

(Nomura2000:146)

(21)～(23)は、黒田の本来の規定である(21)に対して、Tsubomoto(1981)が(22)を提案し同時性と同一場所性を同列に扱ったことを、Nomura(2000)が批判したという関係にある。そこで、「語用論的に密接であって、2つ(以上)の節がひとつのまとまった出来事をあらわしている、とはどういうことか。『語用論的に密接』であるとはどういうことか(坪本 2014:69)」という点に、時間の問題が関係しているとして、坪本(2014)が規定したのが(24)である。

(24) 言語主体にとって2つの出来事の「あいだ」が「生き生きとした時間」であれば、すなわち、時間・場所の間隔の大小に関わりなく、その間が主体にとってアクチュアルであれば、「いまここ」とみなされる。      坪本(2014:69)

これに関連して、次の(25)(26)について、以下のような指摘が為されている。

(25) [ミカンが裏山で採れた]のを家族そろって家で食べた。      Nomura(2000:157)

(坪本の(44a))

(26) [社長が明日その部屋を使う]のを社員たちが今日徹夜で掃除する。      Nomura(2000:145)

(坪本の(48a))

(25)については、「時計時間では時間も場所も同じとは言えないが、ミカンの収穫を家族で楽しむまでの時間はひとつのものであり、例えば時空を超えて時計時間では計れない充実感を伴うといったことも考えられる。(坪本 2014:70)」とされる。(26)については、「別々に見れば『明日』と『今日』とは違うが、社長の部屋の使用は(社員の立場からすれば)『いま』の(自分の)問題である。(坪本 2014:71)」とする。

また、坪本(2014)には、主要部内在型関係節が名詞句なのか副詞節なのかという議論に関して次のような指摘がある。まず、坪本自身が、この種の構文には構文機能として「項」と「副詞節」の2つの側面として特徴づけられる内在的な性質がある、と言及してきたとする。そのうえで、(27)～(30)のような一連のパラダイムの存在を示して、主要部内在型関係節は副詞節であって名詞句ではないとする立場をとった場合には、これらの「パラダイムの存在をなんらかの形で説明する必要がある。副詞句説の立場では、偶然にすぎないことにな

---

<sup>5</sup> 主要部内在型関係節構文のこと。英語の頭文字を使って略記されている。

る（坪本 2014:57）」と指摘している。（(27ab)～(30ab)は、坪本（2014）が Ohori(1995:94)から引用したものである。）

(27a) 警官が[容疑者が逃げていった]のを捕まえた。 (坪本の(6)a)

(27b) [容疑者が逃げていった]のが警官に捕まえられた。 (坪本の(6)b)

(28a) 警官が容疑者を捕まえた。 (坪本の(7)a)

(28b) 容疑者が警官に捕まえられた。 (坪本の(7)b)

(29a) [容疑者が逃げていった]のが立ち止った。 (坪本の(8)a)

(29b) 警官が[容疑者が逃げていった]のを立ち止まらせた。 (坪本の(8)b)

(30a) 容疑者が立ち止った。 (坪本の(9)a)

(30b) 警官が容疑者を立ち止まらせた。 (坪本の(9)b)

## 2.2.2 野村（1998、2002、2016）の研究

野村（2002）は、主要部内在型関係節構文を認知言語学的な立場から考察している。主要部内在型関係節構文は、参照点構文<sup>6</sup>として分析されるべきで、「それ自身の意味構造を有し、主要部外在型関係節とは区別されるべき独立した構文である（野村 2002:248）」とする。

主要部内在型関係節構文の(31)に関して、以下のように述べている。

(31) [太郎が料理を作ってくれる]のを食べる。 (野村の(4)a)

「認知主体はまず『太郎が料理を作ってくれる』という従属節事態全体を参照点としてもちだし、それに関連する要素の集合の中から『料理』を主節動詞との関連で目標として選び、それに注意の焦点を移行させることになる。（野村 2002:238）」とする。

また、生成文法的な研究は、両構文が「真理条件を共有するという暗黙の前提に基づき、主要部内在型関係節を空の外在主要部を持つ主要部外在型関係節に構造的に還元しようとする

<sup>6</sup> 野村（2002）は、「参照点能力」に関して、次のように説明している。

i) Langacker(1993)は、参照点を介して目標を位置づける「参照点能力」は人間の持つ基本的な認知能力のひとつであり、それは様々な言語表現に反映されていると論じている。例として X's Y の形式で表される英語の所有表現を考えてみよう。所有表現は次のように所有関係、親族関係、身体部位関係などさまざまな関係を表す。

(1) the boy's watch; the girl's uncle; the dog's tail; the cat's fleas; Lincoln's assassination  
(Langacker 1993:8)

ラネカーはこうしたさまざまな関係を表す所有表現のスキーマを、認知上際立った所有者 X を参照点としてもちだすことによって、所有物 Y を目標として位置づける参照点構文と特徴づけている。X, Y の認知的際立ちの差は \*the watch's boy, \*the tail's dog, \*the flea's cat, \*the assassination's Lincoln などと言えないことから裏づけられる。

((1)は、野村の(2)) (野村 2002: 231-232)

る分析（野村 2002:248）」であるとして批判される。「主要部内在型関係節構文の『主要部』と呼ばれてきたものは、認知主体の注意の焦点が従属節事態全体からそれに関連する認知的際立ちの高い概念に移行した結果生じた現象(epiphenomenon)にすぎない（野村 2002: 248）」とする。「主要部」を欠く主要部内在型関係節の存在についても指摘があり、「主要部」の明示的存在を前提とする還元主義的分析に対する批判がなされている。

本論文は、「主要部」を欠く主要部内在型関係節と考えられる事例を取り上げて考察の対象としている。その関係上、野村（1998）に関しては、3.1で再び取り上げる。

野村（2016）は、「主要部内在型関係節構文の関連性条件が、2つの事象を単一の高次の事象にまとめあげる事象統合に関する制約として理解されるべき（野村 2016:207）」だとしている。そして、「同時性解釈、同一場所解釈、個体レベル述語の生起制限は、2つの事象が適切に統合される限りは成り立たなくてもよく、これらは事象統合の典型的帰結として導かれるべきものであり、関連性条件を構成する下位条件とみなされるべきでない（野村 2016:207）」とする。また、「事象統合の型としては『原因』型と『前提条件』型の2つ」があり、「この2つの型は語彙・文法にわたるさまざまな言語事象に繰り返し現れるもので、関連性条件が一般的な事象統合を反映したものにすぎないことがわかる。（野村 2016:207）」とする。

### 2.2.3 レー（1988）の研究

レー（1988）も主要部内在型関係節に相当するもの<sup>7</sup>を取り上げている。レー（1988）の研究の主眼は、「『の』による埋め込み文の中のある構成要素が、埋め込み文の述語に対してある格に立つと同時に、外側の主文とも関係するような場合（レー1988: iii）」の埋め込み文を、「言語主体（話し手、または書き手）が、どのような意図で使うのか、また、このような『の』による埋め込み文と、主文との間の関連性が、『の』の名詞性や、それにつく『が』『を』のような格助詞の格関係表示機能の性質に、構文上、どのような影響を及ぼすのかを解明（レー1988: iii）」することにあるとしている。

レー（1988）の特色の一つが、主要部内在型関係節のように「の節」の中の一構成要素だけが主文の述語と意味的な関係を持つような構文は、主要部内在型関係節とは別の形でも現れることが指摘されていることである。それぞれ、「伝達関係の連体節」「対比関係の連体節」

---

<sup>7</sup> レー（1988）では、主要部内在型関係節に相当するものが「描写関係の連体節」という用語で取り上げられている。

として考察が加えられている。<sup>8</sup>

レー (1988) は、この「伝達関係の連体節」と「対比関係の連体節」、及び主要部内在型関係節に相当する「描写関係の連体節」の三者を合わせて、「事態顕述の連体節構文」と呼んでいる。以下、「事態顕述の連体節構文」を「言語主体の表現の姿勢」という観点から、位置付けている記述を引用する。

(32) 事態顕述の連体節構文は、「静的な個体」を、それが含まれている、あるいは、それが痕跡として、残存しているような「動的な事態・状況」を通して、言語主体が認知して表現するものである。 レー (1988: 36)

レー (1988) に関しても 3. 1 で再び取り上げる。

#### 2. 2. 4 近藤 (2018) の研究

近藤 (2018) は、「認知言語学の概念である事態把握が文法にどのように現れるか」という側面を加えた日本語文法の分析の中で、主要部内在型関係節についても触れ、次のような論を展開している。

「ノは『見る』『出会う』『手伝う』等の動詞と共起して、話し手の目の前の〈見え〉を対象とすることができる。「いわゆる主要部内在型関係節は、ノが切り取る話し手の〈見え〉が『話し手と聞き手の見えの共有』となることを実現 (近藤 2018:211-212)」 と言う。

次の(33)～(35)を挙げ、(33a, b)について、「内の関係」節である(35a, b)と比較している。

(33) a. 【リンゴがテーブルの上に置いてある】ノをとって、ナイフで切った。(近藤の(24) a)

b. 【ケーキが冷蔵庫に入っている】ノを出して、食べた。(近藤の(24) b)

(34) a. あ、リンゴがテーブルの上に置いてある！ (近藤の(25) a)

=話し手のイマ・ココの〈見え〉

---

<sup>8</sup> レー (1988) の「伝達関係の連体節」の一例を引用する。

i) 級友を刺した3年生の女生徒はバレーボール部の選手として活躍していた明るい、普通の子だった。学校では非行や暴力騒ぎはまったくなかった。「信じられない」と学校の関係者がいっているのは、正直な気持ちなのだろう (朝日新聞「天声人語」1979 夏)

レー (1988: 4)

意味的に、「正直な気持ちなのだろう」は、「の節」が表わす事態全体ではなく、その一構成要素である「信じられない」という引用節の内容であると解されるとある。

レー (1988) の「対比関係の連体節」の一例を引用する。

ii) サムリン政権計画省のニム・バンダ次官 (四二) によれば、全土の米の収穫は、八十三年に百六十万トンに達したのが、自然災害で逆戻り。(朝日新聞 1985-8)

レー (1988: 78)

この場合は、「が」「を」は格助詞だと断定できないとされている。



b. あ、冷蔵庫にケーキが入っている！ (近藤の(25)b)

=話し手のイマ・ココの〈見え〉

(35) a. 【テーブルの上に置いてある】リンゴをとって、ナイフで切った。 (近藤の(26)a)

b. 【冷蔵庫に入っている】ケーキを出して、食べた。 (近藤の(26)b)

(33a, b)の話し手は、イマ・ココでの〈見え〉である(34a, b)を画像として切り取り、それが主文の補語とされ、リンゴあるいはケーキというモノではなく、(34a, b)の画像が聞き手に提供されるとする。「単にリンゴをとって切ったのではなく、また、単に冷蔵庫のケーキを出して食べたのでもない、ある事態の丸ごとを主文の述語が表わす働きかけの対象として言語化します(近藤 2018 : 212)」とされている。

「内の関係」節との違いは、以下のように指摘されている。(33a, b)の聞き手は、(35a, b)にはない「事態を丸ごと捉えた鮮明な状況描写またはイメージが心に浮かび、聞き手は『切る』『出す』の対象が、それぞれ『リンゴ』『ケーキ』であることを語用論的に推論する」とする。それに対して、働きかけの対象としてリンゴとケーキを取る(35a, b)は、「そのような鮮明なイメージを聞き手に喚起しないのではないのでしょうか」とし、「いわゆる主要部内在型関係節は、ノが切り取る話し手の〈見え〉が [略] 『話し手と聞き手の見えの共有』となることを実現します。主要部内在型関係節は、〈見え〉を伴う話し手の主観的な事態把握の言語化の方向が示唆されます(近藤 2018 : 212)」としている。

## 2.3 形式的特性と意味的特性の相関関係に力点を置く研究

### 2.3.1 小原(2002)の研究

小原(2002)は、構文文法理論を踏まえた研究である。「形式的特性と語用論的特性が相関関係にあるとするアプローチをとる」としている。そして、典型的用法における主要部内在型関係節構文は、「共通の登場(人)物を持つ二つの状況を時間的順序に沿って語る、という『談話推進』(narrative-advancing)機能を持つ(小原 2002:281)」とされ、これは、典型的関係節である主要部外在型関係節には無い機能だとされている。

小原(2002:283-286)は、主要部内在型関係節が「が一の」変換や疑問詞に関して「が」等位接続節と同様の形式的ふるまいをするとし、「が」等位接続文の「が」の両側の各々の節

が断定機能<sup>9</sup>を持つことに注目する。そして、当該関係節は主要部外在型関係節のような修飾節とは異なる断定機能を持つとして論を進める。そして、「ある節が断定の機能を持つ場合、その節は『現象文』か『判断文』のいずれかである（森田 1990、寺村 1992）」（小原 2002:286）、とされているとし、主要部内在型関係節は現象文であると主張する（小原 2002:286）。

小原（2002:286-287）は、「日本語では、現象文と判断文は論理学でいう主辞（主題）に係助詞『は』が付くか否かによって形式的に区別され」、「現象文には『は』は現れないが、判断文では主題に相当する名詞句に『は』が付く」ことを、次のような例を挙げて指摘する。

- (36) a. どうしたの？ (小原の(10)a)  
 b. 現象文 (小原の(10)b)

雅子が家出したの。

- (37) a. 雅子はどう？ (小原の(11)a)  
 b. 判断文 (小原の(11)b)

(雅子は) 家出したの。

そして、主要部内在型関係節は、「『が—の』変換や疑問詞を許さず<sup>10</sup>、形態統語論的にはむしろ『が』等位接続節に類似している」ものの、「が」等位接続節では、「は」が付くにもかかわらず、主要部内在型関係節では「は」が許されず、それは語用論的に、当該関係節が判

<sup>9</sup> 次の、ランプレヒトの前提 (presupposition) と断定 (assertion) の定義が紹介されている。

- i) 前提：その文が発話された時点で、聞き手が既に知っているかあるいは当然と受け止めるだろうと話し手が考える、語彙や文法によって喚起される文の命題。  
 断定：その文が発話された結果、聞き手が知っているかあるいは当然と受け止めるべき文の命題。  
 (Lambrecht 1994:52, (2.12))  
 小原(2002:285)

<sup>10</sup> それぞれ、以下のような例が示されている。

- i) 「が—の」変換 (注) EHRC：主要部外在型関係節  
 IHRC：主要部内在型関係節  
 a. EHRC (修飾節)  
 [[太郎が/の世話していた]犬]がやっと元気になった。  
 b. 「が」等位接続文の S1  
 [[太郎が/\*の犬を世話していた]が、その犬はやっと元気になった。  
 c. IHRC  
 [[太郎が/\*の犬を世話していた]の]がやっと元気になった。 (小原の(6))
- ii) 疑問詞  
 a. EHRC  
 [[誰が買って来た]りんご]を花子が食べましたか？  
 b. 「が」等位接続文の S1  
 \*[[誰がりんごを買って来た]が、花子がそれを食べましたか？  
 c. IHRC  
 \*[[誰がりんごを買って来た]の]を花子が食べましたか？ (小原の(7))  
 小原(2002:284)

断文ではなく「現象文としてのみ機能するから（小原 2002:287）」だとしている。

(38) 「が」等位接続節

[息子が/は魚を釣って来た]が、夫は食べなかった。 (小原の(13))

ここでは、語用論的に、主要部内在型関係節も「が」等位接続節と同様に、断定節として機能するが、「が」等位接続節は判断文でも現象文でもあり得るのに対して、主要部内在型関係は現象文に限られることが指摘されていることになる。

### 2.3.2 堀江 (2009) の研究

堀江 (2009) は、「存在論的中間的構文」という概念を提唱し、日本語においてもこれに相当する構文があるとし、「主要部内在型関係節」について言及している。「存在論的中間的構文」について(39)のように規定している。

(39) 存在論的中間的構文

存在論的中間的構文とは、(a)言語的表示とその存在論的解釈の間にミスマッチを示す構文であり、(あるいは、かつ) (b) 妥当な意味解釈を得るために、2つの隣接した存在論的レベルにアクセスすることが必要な構文である。 堀江 (2009:33, (2.6))

そして、『存在論』という時に筆者が想定しているのは、Lyons (1977:443, 微修正) が提唱する以下のような区別である (Horie 1998a:173)」とする。(40)として引用する。

(40) 第一次存在物：人、動物、物 (persons, animals, things)

第二次存在物：出来事、過程、事象 (events, processes, satate-of-affairs)

第三次存在物：命題 (propositions) 堀江 (2009:33, (2.7))

堀江 (2009:34) は、主要部内在型関係節の具体例として(41)と(42)を挙げ、構造的な見解を述べた後、意味的な特徴を(43)のように説明している。

(41) ジョンは[泥棒が店から出てきた]のをつかまえた。 (堀江の(2.9))

(42) 男は[テーブルの上に無造作に現金が置いてあった]のをわしづかみにして逃げた。

(堀江の(2.10))

(43) 意味的にも、内在節には通常の関係節にはない特徴がみられる。その1つは、黒田が指摘した「関連性条件」(Relevancy Condition) という、内在節に課せられる制約である。これは、内在節には、それが表す事象と主節の表す事象が「一連の出来事」として見なしうる時間的な同時性、空間的な隣接性が要求されるというものである。通常の関係節にはこのような制約は課せられない。 堀江 (2009:35)

そして、(44) の内在節と通常の関係節である(44') とを比較して、「関連性条件」の制約の有無が分かるとする。

(44)? 子供は [今朝母親がケーキを切ってくれた] のを3時のおやつに食べた。

(堀江の(2.11))

(44') 子供は [今朝母親が切ってくれた] ケーキを3時のおやつに食べた。(堀江の(2.11'))

加えて、主要部内在型関係節について、存在論の観点から(45)のように述べている。

(45) また、内在節は、(40)で示した存在論の観点から、非常に興味深い意味的特徴を有している。それは、「ケーキ」「現金」のような「個体」(モノ)と、「個体」を含む「事象・状況」(デキゴト)の両方をプロファイル(profile)するという「存在論的二重性」と言うべき特徴である。(40)の存在論的区別に従えば、内在節は、「第一次存在物(モノ)」と「第二次存在物(デキゴト)」の両方を示しうる構文であるということになる。堀江(2009:35)

尚、堀江(2009)では、主要部内在型関係節は名詞化辞の「の」あるいは「ところ」によってコード化されるが、「ところ」の場合には容認性が低いものがあることが指摘されている。

(46) ジョンは[泥棒が店から出てきた]の/ところをつかまえた。堀江(2009:39, (2.22))

(47) 男は[テーブルの上に無造作に現金が置いてあった]の/?ところをわしづかみにして逃げた。堀江(2009:39, (2.23))

上の(46)の場合に「ところ」が容認されるのは、内在型が表す出来事が動的(dynamic)なものであるためだとされ、それに対して、(47)の内在型が表す出来事は静的(static)なものであるため「ところ」の容認性が低くなるとされている。そして、『ところ』という名詞化辞の有する『状況』という語彙的意味が『動的』なデキゴトを示すのに適している(堀江(2009:39))とされる。また、(47)の場合のように、『静的』な状況を表している『内在節』では、『動的』な状況を表す『ところ』という名詞化辞との意味的不整合性から容認度が低くなるものと考えられる(堀江(2009:39))とする。

以上のように「ところ」に制約があるのに対して「の」にそれが見られないことに関して、次の(48)のような指摘が為されている。

(48) [略] 「の」による「内在節」の持つこのような「融通性」は、「名詞化」という統語的機能は果たしつつ、語彙的意味を有していない、「の」という名詞化辞の特異な構造的な特徴に帰することができる。名詞化辞の「の」は、国語学で「準体助詞」という用語で呼ばれ、「ところ」のように語彙的な意味を持つ名詞が機能語化(国語学でいう「形式化」)した「形式名詞」とは区別されてきた。 [略] 堀江(2009:40)

また、堀江（2009）では、主要部内在型関係節と「結果生産物」構文の存在論的特徴と、コード化する名詞化辞の相互関係が次の(49)のようにまとめられている<sup>11</sup>（主要部内在型関係節は、「内在節」と略記されている）。

(49) 内在節：

a. モノと動的なデキゴトを同時にプロファイルするタイプ

名詞化辞：「の」「ところ」

b. モノと静的なデキゴトを同時にプロファイルするタイプ

名詞化辞：「の」

「結果生産物」構文：ある動作（過程）の結果、モノに生じる変化をプ

ロファイルする

名詞化辞：「の」「もの」

堀江（2009:41）

## 2.4 先行研究で不明な点

2.1～2.3 で見た先行研究の指摘に関して、< >内に示すような不明な点がある。

A. 天野（2011）の指摘 <①主節主語が主要部内在型関係節の前後のどちらの位置を占めるかで表現効果に違いが生じるのではないか。②内在型の格については、口語的には、助詞表示無しで主節動詞の使用で明らかになると考えられる。内在型には、意識対象として、独特の性格が与えられているのではないか。③〈対抗動作性〉は、「欲求」に対する〈対抗性〉と捉えるのが自然ではないか。>

(50) 警官は男が逃げようとするのを呼び止めた。 (三原 2008:88) (天野の(42))

(51) 男が逃げようとするのを警官が呼び止めた。

(52) 冷蔵庫にヨーグルト入れといたの 食べてくれたみたい。

(53) 冷蔵庫にヨーグルト入れといたの 無くなってる。

(54) 冷蔵庫にヨーグルト入れといたの 知ってた？。

<sup>11</sup> 「結果生産物」構文として、次の例が示されている。

i) a. [新聞紙をまるめた] もの/のを燃やした。 (堀江の(2.24))

b. [するめをあぶった] もの/のに醤油とマヨネーズをつけて客に出した。 (堀江の(2.25))

また、これらの「結果生産物」構文において、「節内部に生起する名詞『新聞紙』『するめ』は、『燃やす』『あぶる』といった行為（過程）の前の『モノ』の状態、主要部の位置に置かれた『もの』『の』は、行為（過程）後の『モノ』の『結果』状態を表している（堀江 2009: 40-41）」とされ、「『もの』『の』は節内部の名詞『新聞紙』『するめ』とは存在論的に別の『モノ』（『ある行為の結果できたモノ』）を示している（堀江 2009: 40-41）」との指摘がある。

(55) 公家の青侍が女を迎えてゆくふうにとりつくろって、高倉通りを北へ落ちてゆくうちに、大きな溝があったのを、心急くままたに宮は女装の裾かるがるととび越えてしまわれた。

1987 原著者不明/ 大原 富枝 大原富枝の平家物語 集英社

①(51)の「男が逃げようとするのを警官が呼び止めた」のように、主節主語の「警官が」を内在型の後に配置すると、(50)の〈対抗動作性〉の意味合いはやや薄れるように感じられる。(51)では、読み手は、男と警官の二人を、ほぼ同時に、ほぼ同一方向に捉えられる位置から、二人に視線を向けているように思われる。(51)の場合、(50)に見られる、読み手の視線が警官の視線の方向と重なるように誘導されやすい傾向が弱いと考えられる。

②(52)～(54)に「ヲ」は付いておらずヲ句ではないが、会話表現としては自然である。(52)と(53)は、「冷蔵庫にヨーグルト 入れといたの」の部分が同じで、「ヨーグルト」は、(52)では目的語、(53)では主語と解される。同じ表現から、主節他動詞の意味機能によって、タイプの異なる内在型構文が生成されている。また、(54)は内在型ではなく補文節だが、主節他動詞の意味機能から当該構文の把握も容易である。

意識対象としての内在型((54)の事態を表す補文節も含む)は、主語や目的語等の文法関係の把握に先立って人の意識を引き付ける性格を備えているのではないか。この点は、「その場の関心固定ツール(菊池 2006)」との関係で、4.5.1で考察する。

③(55)の「大きな溝があった」は静的事態であり、〈対抗動作性〉や〈方向性推進〉<sup>12</sup>に、基本的には馴染まない。また、「とび越えてしまわれた」には、〈対抗動作性〉や〈方向性推進〉より「回避」の意味合いが強く感じられる。<sup>13</sup>

「大きな溝がある」という事態には、「高倉通りを北へ落ちてゆ」きたい「宮」の望みと対立するという意味で、〈対抗性〉を感じさせる性格があると言える。内在型で描写される事態に、しばしば、「欲求」にとって〈対抗性〉のあるものが選ばれている印象がある。内在型を、「欲求」との関係から捉えるのが妥当なのではないだろうか。

<sup>12</sup> 天野(2011)は、i)の例を挙げ、ii)のように説明している。

i) もう少しで網棚に荷物が届きそうなのを助けた。

(= (方向性推進))

ii) i)は、方向性推進系の「助ける」が、放っておいてもこの先荷物が届きそうな方向にあるのに対して、さらに力を加えて届くようにと推進したことを表しているが、 [略]

天野(2011:59)

<sup>13</sup> 坪本(2002)は、「の」節が静的な状態を表す場合にも触れ、「 [略] 状況にいあわせて(見て)いるということがある。その上で、主節事態の生起は、そうした状況と呼応して(あるいは、そうした状況が「きっかけ」となって)生じているという表現であると考えることができる(坪本 2002:29)」としている。

B. 坪本 (2002) の指摘 <①主節主語が主要部内在型関係節の前後のどちらの位置を占めるかで表現効果に違いが生じるのではないか。②同時性や同一場所性として具現化される緊密な語用論的關係には、緊密さの度合いに幅があるのではないか。そのような語用論的關係の性格は、「欲求」の観点から捉えることで自然な理解が得られるのではないか。>

①坪本 (2002) は、(56)は、「変化する〈動く世界〉に対応する行為の場面でのみ可能な表現である。『ピッチャーがボールを投げた』と言う場合、そこに立ち会っているという観点が必要である」とし、(57)の「ピッチャーが投げたボール」は、「客観的なモノであって、主観の介入はない。このような主要部外在型関係節の場合は、先のA地点からの表現であり、〈行為実践的立場〉に対して、〈認識重視の立場〉によるものである。(坪本 2002:30-31)」とする。

(56) イチローは[ピッチャーがボールを投げたの]を打った。 坪本(2002:30, (10))

(57) イチローは[ピッチャーが投げたボール]を打った。 坪本(2002:30, (11))

(58) [ピッチャーがボールを投げたの]をイチローは打った。

(59) [ピッチャーがボールを投げたの]をイチローが打った。

(60) [ピッチャーが投げたボール]をイチローが打った。

しかし、(59)の「[ピッチャーがボールを投げたの]をイチローが打った」のように、主節主語の「イチローが」を内在型の後に配置した場合、「そこに立ち会っているという観点」は感じられるものの、(56)の、「変化する〈動く世界〉に対応する行為の場面でのみ可能な表現」という意味合いはやや薄れるように感じられる。<sup>14</sup>(59)では、読み手は、ピッチャーとイチローの二人を、ほぼ同時に、ほぼ同一方向に捉えられる位置を占め、そこから二人に視線を向けているように思われる。(59)の場合、(56)の、読み手の視線がイチローの視線の方向と重なるように誘導されやすい、という傾向が弱いためだと考えられる。<sup>15</sup>

②坪本 (2014) は、(61)のように述べ、(62)(64)がその例に当たると考えられる。

<sup>14</sup> 坪本 (2002) は、主要部内在型関係節の前置についても触れているが、副詞句節のように、付加詞句と捉えることの可能性が高まることに主眼があるようである。

<sup>15</sup> 坪本 (2002) は、「ここでは、イチローがピッチャーがボールを投げるのを見ているという視点で言語主体は状況に参加しているのである」とし、主要部内在型関係節構文のような表現形式では、「第三者の行為も自分の行為として捉え、主体と世界の変化（この場合、『の節』で表される状況、出来事）との接触面における同時性あるいは一体性が主張されることになる」としている。また、「言語主体がイチロー（主節主語）の視点に立つという〈現場性〉に立脚すると」、主要部内在型関係節構文の表現には、「中心的参与者間（この場合、打者と投手）との間の『間』（ま）とか『間合い』といったものとかタイミングが問題になり、それが構文の形式に反映することも考えられる（坪本:2002:31）」としている。

(61) 言語主体にとって2つの出来事の「あいだ」が「生き生きとした時間」であれば、すなわち、時間・場所の間隔の大小に関わりなく、その間が主体にとってアクチュアルであれば、「いまここ」とみなされる。 坪本 (2014:69, (42))

(62) [ミカンが裏山で採れた]のを家族そろって家で食べた。 ((25)を再掲)

(63) [ミカンが裏山で採れた]のを家族の誰も食べようとしなかった。

(64) [社長が明日その部屋を使う]のを社員たちが今日徹夜で掃除する。 ((26)を再掲)

(65) [社長が明日その部屋を使う]のを帰りがけにちょっと掃除しておくか。

しかし、(63)(65)はほぼ自然な文であるが、(62)(64)の場合に当てはまる(61)のような特徴は、特に認められない。この点は、「欲求」の観点から捉えることでより自然な説明が可能なのではないか。主要部内在型関係節構文と「欲求」との関係については、5.4で考察する。

C. 近藤 (2018) の指摘 <内在型では、厳密には〈見え〉が生じない事態が表現されることがあると考えられる。この点は、「欲求」の観点から説明できるのではないか。>

(66) また同じ檀弓篇に、孔子が 父の埋葬地が不明であつたのを 探し出し、目印として墓を作つたが、その後、雨がひどく降つてその墓が崩れたのに、孔子はそれを聞いて泣きながら、「古は墓を脩めず」といつてそのままにした、と

2003 近藤 啓吾(著) 四禮の研究 臨川書店

(66)には、「父の埋葬地が不明であつたのを」とあり、〈見え〉の中に「父の埋葬地」が無いことが分かる。「あるはずのものが無い」という意識の状態も〈見え〉と捉えるなら、その〈見え〉である「あるはずのもの」を「孔子が探し出す」表現と考えることもできる。しかし、「あるはずのものが無い」という〈見え〉は、「父の埋葬地がある」ことを願う孔子の「欲求」が創り出している、とするのがより自然だと考えられる。

(67) 冷蔵庫にヨーグルト入れといたの 無くなってる。

(68) 冷蔵庫にヨーグルト入れといたの 食べてくれたみたい。 ((49)(48)を再掲)

(67)では、「ヨーグルトが無くなってる」という気づきが述べられるが、厳密には、「ヨーグルトが無い」という事実は存在しない。例えば、「牛乳がある、パンがある、卵がある、…」等々が本来の事実を表す表現である。(67)の「ヨーグルトが無くなってる」という発見には、例えば、健康のために特定の人物にヨーグルトを食べて欲しかった場合であれば、その欲求が実現されたのではないかという推測が伴うことが想定される。(68)では、その欲求の実現への期待と想像が、「食べてくれたみたい」の中に感じられる

以上のA～Cについては、5.4及び5.5で詳述する。



### 3. 本論文の分析対象と分析方法

#### 3.1 分析対象

本論文では、「現代日本語書き言葉均衡コーパス」BCCWJ『少納言』を使用している。検索の際は、検索文字列の欄に「たのを」及び「だのを」([主要部内在型関係節の末尾+ヲ格])を入力し、得られたデータから当該関係節と考えられるものを収集した。従って、本論文の考察対象は、「現象描写文」が形式名詞の「の」に基本的にテンスが過去で接続して主要部内在型関係節を形成し、ヲ格で主節他動詞に接続することで構成される主要部内在型関係節構文、となる。

『少納言』は、実例数が500を超えると、ランダムに選ばれた実例が500のみ表示される。一方、メディア/ジャンルと期間を絞り込める。(69)は、絞り込みのため、メディア/ジャンルの書籍の欄の“+”、及び期間の欄の1970年代の“+”をそれぞれクリックした状況を実際に近い形で示したものである。

(69)

メディア/ジャンル

(検索対象とするメディア/ジャンルを選択できます。+をクリックすると細かく指定できます。)

書籍 (1971-2005)

日本十進分類法(NDC):0 総記 1 哲学 2 歴史 3 社会科学 4 自然科学 5 技術・工学 6 産業  
7 芸術・美術 8 言語 9 文学 分類なし

期間

(検索対象とする期間を選択できます。+をクリックすると細かく指定できます。)

1970年代: 1971 1972 1973 1974 1975 1976 1977 1978 1979

従って、メディア/ジャンル及び期間を最小に絞り込んで検索し、得られた実例を合わせることで、全実例に近いものを集めることができる。しかし、それでも、検索結果数が膨大な場合には、全ての検索結果数は表示されても、全ての検索結果の実例を表示できない場合が出てくる。本論文で取り上げた、「たのを」及び「だのを」の場合は、資料収集のセッションでの検索結果の全て((たのを 3744例)及び(だのを 161例))を実例候補として扱えたが、

分析予定であった「たのが」及び「だのが」には、取り上げきれない場合が出た。<sup>16</sup>尚、データ収集時後の分析では、『中納言』も利用している。

### 3.2 コーパスから得られた実例を主要部内在型関係節と判定する際の留意点

BCCWJ『少納言』からは、主要部内在型関係節の候補としての様々な実例が得られた。そこで、どのようなものを主要部内在型関係節と判断するのか、その基準が重要になる。特に、知覚構文との関わりや、先にあげた先行研究中のレー(1988)や野村(1998)の指摘が、分類判断に関わるため、それらについて再度取り上げたうえで、本論文の考え方を述べたい。

#### ① 知覚構文に関する扱い

コーパスから得られた実例を、知覚構文と捉えるか主要部内在型関係節構文と判断するかという問題に関して、井川(2012)を見ていく。議論の対象は、英語の場合、補文中に裸不定詞をとる知覚構文のみとされているが、指針として参考になると考え、はじめに、英語の「知覚構文」の性質などに言及している部分を見ていく。

井川(2012)は、次の(70)について、「John は過去のある時点において知覚対象として、Mary という個体を見たという解釈ではなく、Mary がその場を離れるという事態全体を知覚したことを表す。いわば、知覚動詞 saw はNPではなく、[Mary leave]という補文PVCを目的語としてとっている(井川2012:67-68)」<sup>17</sup>とする。

---

<sup>16</sup> 『少納言』の全体像の理解に役立つように、『少納言』上の“検索にあたっての注意点から”、以下の3点に関する記述を引用する。

検索方式：

本サイトでは全文検索をおこなっていますので、指定された文字列を含むすべてのテキストが検索されます。例えば検索文字列に「リズム」を指定すると、「リズム」だけでなく、「アルゴリズム」や「フォルマリズム」などが検索され、「国語」を検索すると「母国語」「外国語」なども検索されます [略]。

検索結果の上限：

検索文字列によっては非常に多くの検索結果が得られることがあります。その場合、本サイトでは500件で表示をうちきります。ただし最初に見つかった500件を表示するのではなく、一旦コーパス全体を検索したうえで、無作為に500件を選んで表示します。これは最初に見つかった500件だけを表示すると、検索結果がコーパスの冒頭部分に偏ってしまうためです。

検索結果とセッションの関係：

1回のセッション(本サイトへの接続)中に同じ文字列を検索した場合には同じ検索結果が返ってきます。しかし一旦セッションを打ち切り、その後再度接続した場合には、セッションごとに異なる検索結果が表示されます。

<sup>17</sup> 引用文中の「補文PVC」という表記は、前文脈で、「補文PVC (Perception Verb Complement)」とされている。

(70) John saw Mary leave. (井川の(3.23))

そして、「この文を発話するにあたって、ジョンは必ずしもメアリーの姿を確認しなくてもよい。人が移動する一瞬の姿を見て、それがその場の状況からメアリーとしか考えられないとき (井川 2012:68)」、(70)を発することは可能だとする。

また、「このPVCはメアリーがその場を離れるというイベントを表す」として、「Higginbotham(1983:107)は、[Mary leave]の部分の以下のように、イベントを量化する一種の制限量化詞 (restricted quantifier) のような働きをしていると考えるのである (井川 2012:68)」として、(71)を示している。

(71) [∃X:x is an event & leave (Mary, x)] (井川の(3.24))

その上で、(72)のように指摘している。

(72) 知覚構文 (perceptual reports) に関して、中右 (1985:132) は「知覚動詞の補文として具現されている状況は、知覚作用によって捉えられている知覚対象である。」従って、「知覚作用が現に働くとき、それが捉える対象はその作用と同時的に存在していなければならない。」と述べている。上述したとおり、PVCに裸不定詞 (naked infinitive) が現れる知覚構文では、個体としての「もの」を知覚対象とするのではなく、イベントとしての一事態全体、事態の出来を知覚することを表す。 井川 (2012:67-68)

主要部内在型関係節構文の場合、従属節 (主要部内在型関係節) は、「イベントとしての一事態全体、事態の出来を」表すように見え、主節他動詞が働きかける対象は、基本的に「個体としての『もの』」と考えられる。一方、知覚構文は、上に引用した井川 (2012) によれば、「個体としての『もの』」を知覚対象とするのではなく、イベントとしての一事態全体、事態の出来を」対象とする。この点は、日本語の知覚構文にも基本的に当てはまると考えられる。

また、井川 (2012:94) は、

(73) 私はその部屋にひとりの男がいるのをみて、(驚いた)。 (井川の(3.93))

に関する脚注((井川の(3.93))の脚注(3.29))で、(73)は、「主要部内在型関係節の文ではないかという指摘があるかもしれない。実際に、この文の構造は二義的である」とする。たとえば、(73)を「『(奇妙な姿をした) その男の姿をみて、驚いた』』というような主要部内在型関係節的な解釈をする場合と『誰もいないと思ったのに人間がいるという状況に驚いた』という知覚構文の解釈がある」とする。しかし、筆者の調査によると、特に文脈がなければ、(73)は「『(誰もいないのではなく) 男が一人いる状況を目でみて確認した』』という解釈をする話者の方がやや優勢なように思われる」としている。

一方、主要部内在型関係節の解釈のほうが優勢であるような文として、

(74) 一人の男がいるのを見て、声をかけてみた。 ((井川の(3.93))の脚注(3.29)の(i))

の例を挙げている。

以上のように、両構文を見分けるに当たっては、微妙な点がある<sup>18</sup>。本論文は、知覚構文そのものは考察の対象にしていらないが、主要部内在型関係節の特徴が色濃く反映されていると考えられる場合には、「知覚構文」としての読みの可能性がある場合でも考察の対象とすることにした。その文の「表現価値」がどこにあると考えられるかという点を重視した。それぞれの「表現価値」については、4章・5章を通じて明らかにする。

## ② 相手の動きや状態に対する働きかけを表す動詞が使用されている場合の扱い

①で知覚構文の扱いについて述べた。主節他動詞が知覚動詞の場合、その目的語がモノなのか事態なのかという点が問題であった。この点については、知覚動詞以外でも問題になる場合があるので、ここで整理しておきたい。

日本語記述文法研究会編第11部(2008:280)では、「の」「こと」を伴う名詞節に関して、両者が同じように用いられる場合が取り上げられ、[動詞述語の補語になる場合]の例文が挙げられている。

### 1) 認識を表す動詞

・ニュースで、台風がこちらへ近づいている {こと/の} を知った。

### 2) 感情を表す動詞

・両親は、兄から連絡がない {こと/の} を心配している。

### 3) 態度を表す動詞

---

<sup>18</sup> 井川(2012)は、日英語の知覚構文の差にも言及している。先に(73)として示した例は、その差を説明するために使われており、以下の(iii)に当たる。その説明部分を引用する。

なお、面白いことに、英語の知覚構文においては、存在文の *there* 構文は、ふつうの環境では生起しない。

i) a. \*I saw there be a man in the room.

b. \*I saw there be a man drunk

(Higginbotham 1983, 1999)

しかし、(ii)のような場合は容認される。主節のほうに、Modal や否定の意味要素が必要であるようだ。

ii) I wouldn't like to see [there be so many mistakes].

(Higginbotham 1983, 1999)

ここでも、英語の知覚構文の方が制約が厳しいことがわかる。日本語においては、これまでも既に見てきたが、(iii)のように、存在詞がPVC内でふつうに現れる。

iii) 私はその部屋にひとりの男がいるのを見て、(驚いた)。 井川(2012:93-94)

- ・部長は、佐藤が部内トップの業績を上げた {こと/の} を高く評価した。

#### 4) 制止や中止を表す動詞

- ・これ以上被害が広がる {こと/の} を防がなければならない。

#### 5) 使用の動作を表す動詞

- ・この器具は畑の土を掘り起こす {こと/の} に使う。

日本語記述文法研究会編第 11 部 (2008:18)

さらに、「の」を伴う名詞節が補語になり、「こと」を伴う節は補語にならない動詞についての指摘があり、(1) 知覚を表す動詞 (2) 相手の動きや状態に対する働きかけを表す動詞 (3) 遭遇を表す動詞と以下の例文が挙げられている。

#### 1) 知覚を表す動詞

- ・不審な男が銀行に入っていく {\*こと/の} を見た。
- ・その辺でカラスが鳴いている {\*こと/の} が聞こえる。<sup>19</sup>

#### 2) 相手の動きや状態に対する働きかけを表す動詞

- ・姉と私は毎食後、母が食器を洗う {\*こと/の} を手伝います。
- ・さっき、蝶がクモの巣にかかってもがいていた {\*こと/の} を助けてやった。
- ・父は私が話している {\*こと/の} をさえぎって説教を始めた。

#### 3) 遭遇を表す動詞

- ・小柄な老婦人が大きな犬を散歩させている {\*こと/の} に出会った。

日本語記述文法研究会編 11 部 (2008:21)

本論文では、(2) (3) については、内在型として扱ったものが多い。「～が～するのを～する」のように、目的語が「事態全体」と捉えられるものの、事態参与者に対する働きかけが際立つ場合は、内在型として扱った。例えば、「手伝う」の場合は内在型とせず、「助ける」の場合は内在型とし、「さえぎる」と類似の動詞の場合は、内在型として扱ったうえでその数を示した。①で述べたことと合わせ、本論文では、(1) 知覚を表す動詞 (2) 相手の動きや状態に対する働きかけを表す動詞 (3) 遭遇を表す動詞の 3 タイプのうち、事態全体が動詞の対象として感じられる場合であっても、モノを対象とする意味合いが強い場合は、内在型

<sup>19</sup> 「聞く」に関しては、次のような説明と例文が挙げられている。『聞く』という動詞が、ある情報を伝え聞くという意味で用いられている場合は、名詞節が述べる事態が存在する場面や時点とは離れた場面や時点で『聞く』という動作が行われる。その場合は、次のように、『こと』を伴う名詞節が用いられる。

- ・田中さんから、学生時代に世界一周旅行をした {こと/?の} を聞いた。」

日本語記述文法研究会編 11 部 (2008:21)

構文内の主節他動詞として扱うことにした。

### ③「伝達関係の連体節」及び「対比関係の連体節」に関する扱い

レー (1988) は、先にあげた研究で、主要部内在型関係節として取り上げられているものの他に、「の節」の中の一構成要素だけが主文の述語と意味的な関係を持つような構文は、別の形で現れてくるものがあることを指摘し、「伝達関係の連体節」及び「対比関係の連体節」という名称を与えて考察している。また、本論文でもコーパス分析の過程で、このレー (1988) が指摘する類の構文に少なからず遭遇した。<sup>20</sup>

ここでは、「伝達関係の連体節」の場合に、「の節」の中の一構成要素だけが主文の述語と意味的な関係を持つと考えられる機構について確かめたい。レー (1988:18-19) は、

(75) こうした食い違いは、今年一月の中曽根首相訪韓の際にも、表れ、韓国側が「日米韓三角安保協力に合意」と伝えたのを日本政府は最後まで否定し続けた。

(朝日新聞、1983-11) (レーの(2.23))

に関して、「日本政府が最後まで否定し続けたのは韓国側が『...』と伝えたという事態全体ではなく、『日米韓三角安保協力に合意 (する)』という内容のみであると解釈することができる」とする。つまり、「日本政府は、韓国側が何かを伝えたことを、認めながら、その『何か』の内容を否定したわけである」としている。

「伝達関係の連体節」も「対比関係の連体節」も、「の節」の中の一構成要素だけが主文の述語と意味的な関係を持つと考えられる。文構造を重視する観点からは、考察の対象とすべきかもしれない。しかし、これまでの主要部内在型関係節に関する主な先行研究では、「伝達関係の連体節」や「対比関係の連体節」<sup>21</sup>は考察対象とされていないようである。本論文では、両者と主要部内在型関係節とでは、何を「表現価値」とするかという点で相違があると考え、考察の対象から外している。

### ④「主要部」を欠く主要部内在型関係節に関する扱い

野村 (1998) は、主要部内在型関係節に「主要部」を欠く主要部内在型関係節があること

<sup>20</sup> 「対比関係の連体節」の内、本論文では考察対象としていない「～たのが」の例が多く観察された。レー (1988) の挙げる次のタイプのものである。

i) 東京都中央卸売市場の話では、クジラ肉の扱い量は減少の一途。五十七年に二千六十五トンあったのが、昨年は七百二十一トンになり、今年は、取引のあったのが四回で、計百十二トンを扱っただけ。(中略) 当然、これにつれて卸売価格は急上昇。五十七年にはキロ当たり九百九十三円だったのが、昨年は千五百六十六円に跳ね上がった。

(朝日新聞、1987-6) レー (1988:77)

<sup>21</sup> 天野 (2011) は、レー (1988) の「対比関係の連体節」についても主要部内在型関係節としている。また、レー (1988) の「対比関係」は、天野 (2011) の〈対抗動作性〉に当たるとする。

を指摘している。本論文では、主要部内在型関係節とその出現形態・出現環境との相互関係の特徴を捉えることが課題である。そのため、この「主要部」を欠く主要部内在型関係節を出現形態・出現環境の一類型として捉え、考察対象の幅を広げることにした。

野村（1998:40-46）は、「主要部」を欠く主要部内在型関係節を3つに分類している。タイプ1の例にはメトニミー、結果目的語に対する被影響目的語、イディオムが含まれている。タイプ2では、従属節が状態変化を表している。タイプ3では、主要部が文脈から復元可能なゼロ要素として実現されている。

野村の挙げる例文をいくつかに絞り以下に示す。

〈タイプ1〉

- (76) a. [今朝顔を剃った] のが<sup>22</sup>夕方にはまた伸びてきた。  
b. [土を2メートルほど掘った] のを上から覗き込んだ。  
c. [宴会で足が出た] のを幹事が立て替えた。 (野村の(4))

〈タイプ2〉

- (77) 花子は[太郎が生魚を干した]のを食べた。 (野村の(15))

〈タイプ3〉

- (78) a. [りんごが机の上にある]のをとった。  
b. [φ机の上にある]のをとった。 (野村の(18))  
(79) 異物の侵入に怒った巣の中のシロアリが、棒に攻撃をしかけてくる。そこをすかさず棒を引き抜き、「ひっかかった」のを食べるという一種の接触行動である。  
(正高信男『なぜ、人間は蛇が嫌いか』 p. 145) (野村の(20))

タイプ1の(76a)には、「顔を剃る」と言うメトニミーが含まれ、(76b)には、「穴を掘る」という結果目的語に対する「土を掘る」と言う被影響目的語が含まれ、(76c)には、「足が出る」というイディオムが含まれる。これらは、通常の関係節に書き換えられないとされる。

- (80) a. \*[今朝剃った] 顔が夕方にはまた伸びてきた。  
b. \*[2メートルほど掘った] 土を上から覗き込んだ。  
c. \*[宴会で出た] 足を幹事が立て替えた。 (野村の(5))

タイプ2の(77)の従属節は「生魚」から「干し魚」への状態変化を表している。花子が食べたのは「生魚」ではなく「干し魚」であり、通常の関係節に書き換えるとおかしくなる。

---

<sup>22</sup> この例は、本論文では扱えなかったタイプに属するもので（黒田（2005）を概観する際には取り上げた）、主要部内在型関係節が主格として主節動詞に接続するタイプのものである。

(81) ??花子は[太郎が干した]生魚を食べた。 (野村の(16))

この(77)は、Tonosaki(1998)等が考察した change relative<sup>23</sup> に当たる。change relative の場合、change(変化)する意味内容を表現しているため、意味的には主要部内在型関係節と類似の性質を持つと考えられる。“変化”が表現され、“出来事の生起”表現となるからである。野村(1998)は、この例のような change relative を、主要部内在型関係節と別の構文と見る必要はないとしている。一方で、文法的な振る舞いに違いがあることを理由に、通常の主要部内在型関係節に含めない立場もある。change relative の場合、「の」は形式名詞ではなく、変化後の個物を示す名詞に代わって使われる代名詞である。本論文では、主要部内在型関係節で重要なのは、「主体が〈出来事〉の生起(「現象」事態)に臨んで、〈主要部〉に〈働きかける〉」という主体の構えであって、代名詞が指すモノそのものではないと考え、change relative は考察の対象から外すことにした。

タイプ3は、主要部が文脈から復元可能なゼロ要素として実現されている場合で、(78b)は2通りに曖昧だとされている。第一の解釈は、従属節に後続する「の」が代名詞で、従属節が通常の関係節として機能すると捉えるもの。第二の解釈は、従属節に後続する「の」が名詞化辞(形式名詞)で、従属節が主要部内在型関係節として機能するが、主要部+助詞の「りんごが」が省略されていると捉えるものである。第二の解釈では、主要部が言語化されていないので通常の関係節に書き換えることはできないとされている。

タイプ3に見られるこれら2つの解釈は意味の上では非常に近く、区別することの困難が指摘されているが、ここで、野村(1998)の具体的な考察について見ていきたい。取り上げられている例の一つが、次の(82)((79)を(82)として再掲)である。

(82) 異物の侵入に怒った巣の中のシロアリが、棒に攻撃をしかけてくる。そこをすかさず棒を引き抜き、「ひっかかった」のを食べるという一種の接触行動である。

(正高信男『なぜ、人間は蛇が嫌いか』 p.145) (野村の(20))

野村(1998:45)は、(82)の「下線を引いた『の』は先行文脈に現れる名詞句(『シロアリ』)を指す代名詞ともとれるし、単なる名詞化辞ともとれる。『の』に前接する従属節は前者の場合には通常の関係節であり、後者の場合は主要部内在型関係節である」とする。主要部内在型関係節の解釈の場合、『(シロアリが)』ひっかかったのを食べる」の括弧内の要素が先行文脈の影響で省略されていると考える、とされている。

<sup>23</sup> Tonosaki(1998)は、change relative として、以下のような例を挙げている。

i) John-wa [[kurozato-o tokashita]no]-o dango-ni tuketa. Tonosaki(1998:144)



また、野村（1998:45-46）では、通常の関係節の解釈（「の」は代名詞）と主要部内在型関係節の解釈（「の」は名詞化辞）の2通りの潜在的に可能な解釈のうち、どちらかひとつに決まる要因について、3つ指摘されている。一つは、「従属節と主節の間にいわゆる『関連性条件』(Relevancy Condition) が成り立っているかどうかである」とする。関連性条件（主要部内在型関係節構文において主節と従属節が密接な意味論的／語用論的關係によって結ばれていなければならないこと）が「満たされないときは主要部内在型関係節の読みは得られないことになる」とし、(82)において『ひっかかったのを』の代わりに『大きいのを』としてみよう。これが主要部内在型関係節だとして、主要部を補充してみると『\*シロアリが大きいのを食べる』（『食べる』の主語は猿）となり、関連性条件が満たされないため、主要部内在型関係節の読みは得られない。よって『大きいのを食べる』は『の』が『シロアリ』を指す代名詞の読みしか得られないことになる」とする。二つ目は、「対比的な文脈の有無である。『の』はなんらかの対比的な文脈に置かれたときに代名詞の解釈を受けるとされる（金水1994）」としている。三つ目としては、「主要部が（敬意の対象となる）人かどうかである」とされている。

本論文では、「主要部」を欠く主要部内在型関係節を、文脈によって「主要部」を欠く主要部内在型関係節とも代名詞の「の」の使用例とも考えられるものとして考察することにした。明らかに代名詞の「の」と考えられる場合は、当該関係節と捉えられる可能性が無いものとして、考察の対象から外している。

#### ⑤ B C C W J から得られた実例を分類判断した際の幾つかの事例

次の(83)では、主節他動詞は「ご覧になった」である。視覚で捉えたのは、基本的に「写真」というモノと考えられるため、内在型として取り上げた。(84)も同様に判断した。

(83) …先週わたしと子供たちの写真が『プラウダ』に出たのをご覧になったと思います  
が 1996 シドニィ・シェルダン(著)/ 天馬 龍行(訳) 神の吹かす風 アカデミー出版

(84) 【評価Cの下】某書評家が誉めていたのだけれど、アマゾンから実物が届いたのを  
見てテンション・ダウン。 2008 Yahoo!ブログ Yahoo!

(84)では、「実物」の配送の全過程を話者が知覚するのは不可能で、話者が「見た」のは、「実物が届いた」という結果状態の中で際立つ、モノとしての「実物」と考えられる。但し、(83)(84)とも「見る」に至る経緯という意味での「事態」に対する関心が強く感じられる。

次の(85)(86)は、モノとしての際立ちが強いと捉え、当初は内在型と判断したが、いずれも、モノに質的な変化が見られることを重視し、内在型から除外することにした。

(85) 見るからに、国学者らしい風格と意気とを具へてをられた先生だつた。伊原宇三郎画伯の描いてくれた油画像が、この冬出来上つたのを見てつく／＼とさう思った。

1996 折口 信夫(著) 折口信夫全集 折口信夫全集刊行会 | 編纂 中央公論社

(86) ある時病院を訪れると、お前たちの母上は寝台の上に起きかえって窓の外を眺めていたが、私の顔を見ると早く退院がしたいといい出した。窓の外の楓が あんなになつたのを見る と心細いというのだ。

2004 有島 武郎(著) 小さき者へ; 生れ出ずる悩み 岩波書店

(85)は、油画像の製作過程への関心も感じられるが、油画像は完成と同時に正式に「油画像」になると捉え、内在型構文から除外した。(86)も、窓の外の楓が「心細い」と感じさせるほど変化している。一方、(85)(86)の「の」を代名詞と読むのは無理がある。(85)は「油画像」、(86)は「窓の外の楓」、が表示されており、代名詞と捉えると、(85)の場合は「油画像が出来上つた油画像」、(86)の場合は「窓の外の楓があんなになつた窓の外の楓」のような表現と類似してしまう。あるいは、「油画像という語を使うまでもないあるモノ」、「楓という語を使うまでもないあるモノ」のようなニュアンスが感じられることになる。従って、両者とも状態変化としての事態を知覚したことを表す知覚構文として捉えるのが自然だと考える。

(87)は、知覚構文とも内在型構文とも捉えられ、両義的である。

(87) その後、図面に記されていない既製のドアや家具が 付いてしまったのを見て、江島さんは がっかりして、Aさんに報告しましたが、

2005 笠原 顯司(著) 「住みか」のヒント 東京図書出版会; リフレ出版(発売)

①「住みか」の一部の様子が変化してしまった「事態」を「見た」、という知覚構文としての読みと、②「既製のドアや家具」が「がっかりさせる」モノとして際立つ、という内在型構文の読みが考えられる。

(88) 『燕京文学』ですよ。北京図書館の中に埋もれていたのを 見つけました」北京

図書館?

1995 中 = (蘭) = (英) 助(著) 北京の貝殻 筑摩書房

(88)は、『 』が付された『燕京文学』ですよ」が前文にあり、主要部の先行提示的な意味合いもある。『燕京文学』というモノが際立ち、内在型の読みも強い。一方、「北京図書館の中に埋もれていた」という「事態」を「見つけた」との意味合いも感じられ、静的事態の「発見」を表す知覚構文としての読みも考えられる。さらに、「の」の代名詞読みも有り得る。雑誌であれば、同内容の印刷物が複数あるのが基本だからである。

### 3.3 分析方法

主要部内在型関係節の使用実態と使用動機を明らかにするために、以下の①～③の分析・考察を行うことにした。

(89)

- ① BCCWJ『少納言』を利用して得られた主要部内在型関係節構文と考えられるものを、一定の文型に分類し、その出現頻度等を考察する。
- ② 当該構文（ここでは、「現象描写文」が「の」に接続する際のテンスが基本的に過去で、「の」節がヲ格として後続部分に接続する場合）の主節他動詞の形態（活用形）と出現頻度等を考察する。
- ③ 主要部内在型関係節とそれに対応すると考えられるテ形・連用形による表現及び主要部外在型関係節（連体修飾節）が使用された表現を比較した場合の意味的差異、表現効果上の差異を考察する。

①は、(A)主要部内在型関係節の動詞の自他の別、(B)主要部内在型関係節の主語あるいは目的語の省略の有無と主節主語の省略の有無、(C)主節主語に付加される助詞表示の別、加えて、主節主語の文中の出現位置等を分類の基準とした。

②は、主要部内在型関係節構文の後続部分の特徴から、当該構文の出現し易い環境が捉えられると考え、採用した。

③は、主要部内在型関係節に関する先行研究で、主要部外在型関係節（連体修飾節）との構造的な比較が特に生成文法分野で為されたり（野村（1998）の批判がある）、認知言語学分野で、主要部内在型関係節と主要部外在型関係節（連体修飾節）との意味的な相違が取り上げられたりしている（野村（2002）等）という事情も関係している。また、主要部内在型関係節構文を事態の継起表現という観点から見ると、それは単文を並べても表現でき、テ形・連用形での表現も可能である。これらによる表現との比較から、当該構文の語用論的特性、使用動機が捉えやすくなることが期待できると考え採用した。

#### 4. 考察 I 主要部内在型関係節（構文）の使用実態

本章では、B C C W J から得られた主要部内在型関係節（構文）の使用実態を、その出現形態及び出現環境との関連に着目して観察し分析する。

使用実態の観察からまず明らかになってくるのは、主要部内在型関係節構文が表現する「現象」事態の「継起」的側面とその様相である。そこには、主要部内在型関係節の「表現者」がそれによって描写される「現象」事態の「知覚者」（想起・想像する場合を含む）であるという関係性が関わり、当該構文の語用論的特性もそこから生じるものと考えられる。

以下、はじめに、B C C W J を利用して得られた主要部内在型関係節構文について、その基本的な観察結果を数値にして示す。次に、本論文が当該構文の基本形として想定したもの及びその一部に省略のある一部省略形に該当すると考えられる実例について見ていく。

##### 4. 1 観察結果（数値による基本的データ）

本論文が考察の対象としている主要部内在型関係節構文は、「現象(描写)文」の末尾が「～た／～だ」という形（テンスが過去）で形式名詞の「の」に接続されて主要部内在型関係節を形成し、ヲ格として主節他動詞に接続することで生成される複文である。

B C C W J を利用して収集された主要部内在型関係節構文は、252例である。この内、文型分類を避けたものが20例ある（（詳細）文型 $\boxed{1}$ ～ $\boxed{30}$ とは別に $\boxed{31}$ として分類した）。分類を避けた20例の内、7例が主要部内在型関係節構文を元の文としてそこから関係節化が生じていると考えられるものである。

総数252から文型分類を避けた20例を除く232例中、主節及び従属節の基本要素が揃った基本形と呼べるものが35例、一部に省略のある一部省略形が197例観察された。基本形35例の内、主節主語が主要部内在型関係節の前に現われるものが13例、後に現われるものが22例観察された。232例中、主節主語が表面上現われているものが79例に上った。その内、主節主語が内在型の前に現われ、助詞表示が「が」の例が7例、「は」の例が17例、内在型の後に現われ、助詞表示が「が」の例が44例、「は」の例が11例あった。

主節主語及び内在節主語が表面上いずれも現われず（内在節動詞が他動詞の場合に内在節目的語が現われない場合を含む）、当該構文の項関係が自動詞及び他動詞の意味機能によって推定されるものが、232例中、65例観察された。

主要部に提題の「は」が付加され主題として先行提示されているとの解釈が可能で、当該主要部が繰り返されず内在型内に現れない例が18例観察された。

本論文では、主要部の先行提示に伴いその繰り返しが避けられると考えられる例も一部省略形に分類した。そのことを考慮しても、一部省略形が相対的に多いことが際立つ。他に注目されるのが、主節主語が主要部内在型関係節の前に現われる例よりも後に現われる例が多く観察されたことである。また、主節他動詞の活用形として、終止法断定形の過去形が96例、接続法中止形のテ形・連用形が112例観察され、テ形・連用形の使用頻度が相対的に高いことも注目される。

**(90a) B C C W J から得られた主要部内在型関係節構文に関する基本的な観察結果データ**

(※「内在型」：現象描写文が「の」に「た/だ」で接続&「内在型」がヲ格で主節他動詞に接続)

- a. 文型 (252-20=232 例中) : 基本形……………35 例 一部省略形……………197 例
- b. 基本形の主節主語位置 : 内在型前……………13 例 内在型後…………… 22 例
- c. 助詞別の主節主語位置 : 内在型前「～が」… 7 例 内在型後「～が」… 44 例  
(主節主語有り 79 例) 内在型前「～は」…17 例 内在型後「～は」… 11 例

\* 主格表示が「～も」等は文型分類を避けた。

- d. 主節主語及び内在節主語/  
目的語省略時の内在節動詞 : 自動詞……………45 例 他動詞 ……………20 例
- e. 主要部先行提示 : 「無助詞格成分」… 6 例  
(主要3タイプ(省略形中)) 「 」『 』 …………… 3 例  
提題の「は」……………18 例
- f. 関係節化 : …………… 7 例

**(90b) 主節他動詞の活用種類別実例数**

終止法				接続法				
断定形		命令形	意志形	中止形		連体形		条件形
非過去形	過去形			連用形	テ形	非過去形	過去形	
17	79	0	5	39	73	11	28	0

(動詞の活用の種類は、日本語記述文法研究会編 I (2008:128) に従った)

(90c) 頻繁に観察された主な主節他動詞

(1) 知覚を表す動詞

「見る」等の動詞 ⇒ 15例

「見つける」(8例) + 「発見する」(2例) 等の動詞 ⇒ 10例

(2) 相手の動きや状態に対する働きかけを表す動詞

「助ける」等の動詞 ⇒ 10例

「制する」(6例) + 「止める」(3例) + 「よける」(3例) 等の動詞 ⇒ 12例

(3) その他の動詞

「拾う」等の動詞 ⇒ 9例

「食べる」(7例) + 「飲む」(4例) 等の動詞 ⇒ 11例

「持って行く」(5例) + 「持って来る」(2例) 等の動詞 ⇒ 7例

「買う」等の動詞 ⇒ 6例

「もらう」等の動詞 ⇒ 6例

「入れる」等の動詞 ⇒ 5例

「撮る・シェーする」等の動詞 ⇒ 5例

「貼る」等の動詞 ⇒ 5例

## 4.2 主要部内在型関係節（構文）の出現形態・出現環境①

BCCWJから得られた実例を観察した結果、構造的な観点からの文型分類が可能と考え、下位区分を想定した。語用論的な特性を捉える手掛かりが得られるものと期待される。

4.2.1では、主節及び従属節を構成する基本的な要素が全て揃った基本形と呼べるものを取り上げる。4.2.2では、基本形の一部に省略箇所のある一部省略形を取り上げる。

### 4.2.1 主要部内在型関係節構文 基本形

基本形は(91)のⅠ～Ⅳに示すものである。其々、実例を挙げ若干の注目点について触れる。その後、Ⅲ及びⅣに関して、主節主語が主要部内在型関係節の後に現われる意義を考える。

#### 4.2.1.1 主要部内在型関係節構文 基本4文型

基本形として、下の(91)に示すような基本4文型が想定される。Ⅰ・Ⅱに対するⅢ・Ⅳの特徴は、主節主語部分が、従属節（主要部内在型関係節）の後に現われることである。

主語や動詞については、助詞や助動詞等を含めて、「主節主語部分」「主節他動詞部分」「内在節自動詞部分」「内在節他動詞部分」等とするのが正確な記述だが、支障がないと考えられる場合は、「主節主語」「主節他動詞」「自動詞」「他動詞」のように、簡略化して表記した。

#### (91) 主要部内在型関係節構文 基本形（基本4文型）

- I. 主節主語 + 内在節主語 + … + 自動詞 + の + を + 他動詞
- II. 主節主語 + 内在節主語 + … + 目的語 + 他動詞 + の + を + 他動詞
- III. 内在節主語 + … + 自動詞 + の + を + 主節主語 + 他動詞
- IV. 内在節主語 + … + 目的語 + 他動詞 + の + を + 主節主語 + 他動詞

以下、実例を示す。（実例中に施した記号等は、本論文の執筆者によるものである。）

- I. 主節主語 + 内在節主語 + … + 自動詞 + の + を + 他動詞

(92) 家康が死んで二年目、元和四年（一六一八）の秋の一日、国千代は江戸城の西の丸の濠に鴨がいたのを鉄砲で打って、母君のお江に届け、でかしたでかしたとよこばれたが、秀忠はお江のところを訪れて料理した鴨と酒をすすめられ、鴨が城内の濠の

ものと聞くとたちまち機嫌が悪くなった。

1977 田中 澄江(著)人物日本の女性史 集英社

【主節主語部分】:「国千代は」⇒助詞表示=「は」、歴史的人物

【主節動詞部分】:「打って」⇒接続法中止形テ形

【特徴】[主題+解説]型事象叙述文<sup>24</sup>:主題=「国千代は」=主節主語

- (93) また、ギリシャ神話で、オルフェウスが 愛しい妻エウリディケーが 冥界に行ったのを追いかけて行き、「けっして振り返ってわたしを見ないで」と念を押されていたにもかかわらず、思わず振り返って視てしまい、またもや永遠の別れを余儀なくされてしまったように。

2005 鎌田 東二(著) 霊性の文学誌 作品社

【主節主語部分】:「オルフェウスが」⇒助詞表示=「が」、歴史的人物に類する

【主節動詞部分】:「追いかけて行き」⇒接続法中止形連用形

- (94) また同じ檀弓篇に、孔子が 父の埋葬地が 不明であつたのを探し出し、目印として墓を作つたが、その後、雨がひどく降つてその墓が崩れたのに、孔子はそれを聞いて泣きながら、「古は墓を脩めず」といつてそのままにした、と

2003 近藤 啓吾(著) 四禮の研究 臨川書店

【主節主語部分】:「孔子が」⇒助詞表示=「が」、歴史的人物

【主節動詞部分】:「探し出し」⇒接続法中止形連用形

## II. 主節主語 + 内在節主語+…+目的語+他動詞+のを + 他動詞

- (95) 重次郎は売り払いをたのまれ、次郎左衛門が 真鴨十羽を 襦半につつみ 持参したのを、密猟と知りながら、札金を手にしたい欲から、柳籠へ入れ、風呂敷でくるみ、もち歩いたが、買う者もでず売ることもできなかった。

1995 樋口 秀雄(著) 江戸の犯科帳 新人物往来社

【主節主語部分】:「重次郎は」⇒助詞表示=「は」

【主節動詞部分】:「入れ」⇒接続法中止形連用形

<sup>24</sup> 益岡 (2020) は、「テンプレート構造論」について、次のように記述している。

i) 日本語では、属性叙述文の構成 ([主題+解説]) がテンプレート (鋳型) として組み込まれており、この主題構文のテンプレートが事象叙述文の構成においても必要に応じて活用される。

すなわち、事象叙述文においても、文脈により当該の名詞句が属性叙述の場合と同様の“所与性”が与えられるとき、次の (ii) のように、主題の形で表すことができる。

ii) (その)親は子供を軽々と抱き上げた。 益岡(2020:7-8)

本論文では、益岡の指摘する (ii) のような文について、[主題+解説]型事象叙述文と表示した。



【特徴】[主題+解説]型事象叙述文：主題=「重次郎は」=主節主語

- (96) 私達は 二、三の新聞が、いち早く、グロース・シュレックホルンに於ける私達の遭難を 伝えたのを切りぬいて、暢気な旅に於ける出来ごとが、決して夢でなかったと云う証拠にしようとした。 1998 辻村 伊助(著) スイス日記 平凡社

【主節主語部分】：「私達は」⇒ 助詞表示＝「は」

【主節動詞部分】：「切りぬいて」⇒ 接続法中止形テ形

【特徴】[主題+解説]型事象叙述文：主題=「私達は」=主節主語

### III. 内在節主語+…+自動詞+のを+ 主節主語 + 他動詞

- (97) 唇の端からまた血が 出てきたのを、ニックはシャツの袖でぬぐった。 2002 アレックス・カーヴァ(著)/ 新井 ひろみ(訳) 悪魔の眼 ハーレクイン

【主節主語部分】：「ニックは」⇒ 助詞表示＝「は」

【主節動詞部分】：「ぬぐった」⇒ 終止法断定形過去形

【特徴】[主題+解説]型事象叙述文：主題=「ニックは」=主節主語

- (98) 合併区域：湊村・相賀村・神集島・屋形石村・横野村・中里村鬼塚村いい伝えによると古くこの地に鬼(盗賊)が いたのを源久という人が 滅ぼし、その主領を討ちとったところを鬼塚として死骸を埋めたといわれる。 2005 福岡 博(著) 佐賀地名うんちく事典 佐賀新聞社

【主節主語部分】：「源久という人が」⇒ 助詞表示＝「が」

【主節動詞部分】：「滅ぼし」⇒ 接続法中止形連用形

- (99) 本来ならほぼ同じ長さの後篇を書く予定だったが、中断したままずっと歳月が経ってしまい、ついに書くことがなかった。 前篇だけが十七年間眠っていたのを、一九九九年に元『世界』の編集長山口昭男氏が 読み直して、これだけでも独立してるじゃないですかと言いだし、わたしも読み直してそう思ったの 2003 中野 孝次(著) 中野孝次の生きる言葉 海竜社

【主節主語部分】：「元『世界』の編集長山口昭男氏が」⇒ 助詞表示＝「が」

【主節動詞部分】：「読み直して」⇒ 接続法中止形テ形

### IV. 内在節主語+…+目的語+他動詞+のを+ 主節主語 + 他動詞

- (100) これは兵隊に行く前の写真ですね。母が この写真を 捨てようとしたのを祖母が 預かって、私に渡してくれました。 1999 津島 佑子(著) 私 新潮社

【主節主語部分】：「祖母が」⇒ 助詞表示＝「が」

【主節動詞部分】：「預かって」⇒接続法中止形テ形

(101) 見かねて、岩崎警部補が食堂に行って、定食弁当を買って来たのを、まさか彼女が持って行くわけにはいかないので、代りに乃木が、机の上に届ける。

1988 胡桃沢 耕史(著) 翔んでる警視正 天山出版

【主節主語部分】：「乃木が」⇒ 助詞表示＝「が」

【主節動詞部分】：「届ける」⇒ 終止法断定形非過去形

(102) はじめての大陸の港に着いたときのことは、だれでも例外なしに口にするのに、父からはきいたことがない。まことにへんな例外で、それがぼくの父というのが、なんともおかしい。父の異母兄山本三造さんが 移民の許可を とっていたのを、父が ゆずりうけて、アメリカ移民になった。というのはなしもきいた。おそらくほんとだろう。だとすると、父は田中種助ではなく、山本三造としてアメリカに移民したことになる。

2001 田中 小実昌(著) アメン父 講談社

【主節主語部分】：「父が」⇒ 助詞表示＝「が」

【主節動詞部分】：「ゆずりうけて」⇒ 接続法中止形テ形

尚、B C C W J から得られた 2 5 2 例の内、詳細な文型分類に当て嵌めるのを避けた 2 0 例の中に、主節他動詞として思考動詞が使用されているものがある。内在型構文の主節他動詞として稀なタイプである。(103)がその例である。

(103) 甚之助も芝に出向いた。同僚は二日めの夜菅笠を被って夜分に仏具屋の木戸を叩いた。見張っていた甚之助は、その同僚の後から水茶屋勤めふうの女が ずっと現われたのを、通りすがりと思っていた。「何とそれが、与力の付けた女探索だったのですよ。初め見たときは下女のなりで野暮ったい女と思ったのですが」濃い化粧をして夜目にも色っぽいのがその女だとは気付かなかった。

2004 別所 真紀子(著) 残る蜚 新人物往来社

(103)では、「水茶屋勤めふうの女がずっと現われた」事態を目撃して、甚之助の脳裏に、女を「通りすがりと思」う、という瞬間的な思考が生じたことが表現されている。

#### 4.2.1.2 内在型の後に主節主語が現れる意義と「知覚者」に与えられる視座からの描写

基本4文型に分類されるものは、252例中35例とかなり少ない。実例数は少ないものの、注目されるのがⅢ・Ⅳの構造である。Ⅰ・Ⅱに対するⅢ・Ⅳの特徴は、主節主語が、従属節（主要部内在型関係節）の後に現われることである。その結果、従属節・主節共に、出

来事の生起表現を構成する各要素が、出来事単位毎に纏まって生成されることになる。すなわち、従属節が[内在節主語+内在節自動詞]、または、[内在節主語+内在節目的語+内在節他動詞]、主節が[[内在型構造≡主節目的語]+主節主語+主節他動詞]という順に生起する。主節内で目的語が主語の前に位置することになるが、日本語では比較的自然的な語順である。「内在型」は、主節他動詞の前の位置を占め、主節他動詞の生成と同時に、[内在型構造≡主節目的語]となることが想定されるに至る、と解される)

以下に、(104)(105)について出来事単位(後続部分を含む)毎に番号を付したものを示す。

(104) 母が この写真を 捨てようとしたのを祖母が 預かって、私に渡してくれました。

((100)から一部を再掲)

→ [生起順] ①母が写真を捨てようとした ②祖母が(写真を)預かった ③祖母が(写真を)私に渡した

(105) 父の異母兄山本三造さんが 移民の許可を 取っていたのを、父が ゆずりうけて、アメリ

リカ移民になった。

((102)から一部を再掲)

→ [生起順] ①山本三造さんが移民の許可を取っていた ②父が(移民の許可を)ゆずりうけた

③父がアメリカ移民になった

情報構造の観点からは、主節主語の前の位置への主要部内在型関係節の配置には、当該関係節が担う新情報としての価値や、従属節が持つ情報量の多さ等が関与すると考えられる。一方、主節主語が主要部内在型関係節に先行する場合の主節主語の指示対象に目を向けると、歴史的人物やそれに類する人物が多く観察された。歴史を語る場合に、文頭に歴史的人物を配する文構成が物語の展開に統一性を与えることや、歴史的人物を文の主題として設定する機会が多くなることが考えられる。

しかし、多くの場合、出来事の生起表現が、意図的に、出来事表現単位毎に纏めて表されている印象を受ける。主節主語が主題化されることは少なくないものの、表現者は、直接知覚の様相になるように、「事態」を臨場的に描写していることが窺える。

主節主語が主要部内在型関係節に先行する場合や、当該関係節に後続し、提題の「は」が付加される場合については、4.6で取り上げる。

#### 4.2.1.3 実例に見る内在型の後に主節主語が現われることの表現効果

ここでは、主節主語が内在型の後に現われることが、どのような表現上の効果をもたらすかを、その効果が鮮明な実例で確認する。

(106)は、小説内の一シーンである。友人同士の二人が、一年前の夏に共に体験した出来事

を、会話の中で想起し合っている。(107)に、一連の連続する諸現象・諸行為にそれぞれ番号を付したものを示す。

(106)「去年は海行って楽しかったね」一年前の夏、中学生の時の友人達を交えて、房総に泊まりがけで海水浴に行ったのだ。「咲、因幡の白うさぎみたいに真っ赤になっちゃってさ」「そうそう。私駄目なのよ。由里ちゃんみたいにきれいに焼けないの」「花火して、ナンパされて、ボディーボードして」「大きい波が来て、由里ちゃんがひっくり返って、ビキニの上が取れちゃって」「そうそう。流れちゃったのを、どっかのおじさんが 拾ってくれてさ」「由里ちゃん、泣いちゃって可愛かった」

1997 山本 文緒(著) シュガーレス・ラヴ 集英社

(107) ①花火して ②ナンパされて ③ボディーボードして ④大きい波が来て ⑤由里ちゃんがひっくり返って ⑥ビキニの上が取れちゃって ⑦流れちゃった ⑧どっかのおじさんが拾ってくれて ⑨由里ちゃん泣いちゃって

(106)の主要部内在型関係節構文は、「ビキニの上が取れちゃって(そうそう)流れちゃったのをどっかのおじさんが拾ってくれてさ」の部分である。

(106)は、描写されているのが二人が共有している体験で、小説家の技巧も加味されているとはいえ、一連の体験が、二人の複数の話し手によって語られるにも関わらず、不自然さが無い。諸現象・諸行為を、生起順に時間軸に沿って描写しながら辿ることが貢献しているものと思われる<sup>25</sup>。

(106)は、「の」を「代名詞」として読むことができないわけではない。その場合は、モノに焦点が当てられ、モノの行方に注意が向く印象がある。二人がとっさに関心を寄せざるを得なかったのは、「モノ」なのか「事態」なのかという問題と関わる。

「外在型」は、「流れちゃったビキニの上をどっかのおじさんが拾ってくれてさ」になる。

<sup>25</sup> 『事典哲学の木』(2002)には、「エピソード記憶」への言及がある。

i) 【略】 哲学的記憶論は人間の自覚的な時間意識と不可分であり、ベルクソンの言う「エピソード記憶」すなわち言語的に語れる自らの体験系列の記憶に集中する。なぜなら、こうした記憶こそ人間的な時間意識に基づく記憶だからであり、人間の世界への態度の基本をなす枠組だからである。 【略】 『事典哲学の木』(2002:225) 項目執筆担当者: 中島義道

また、同じく、『事典哲学の木』(2002)の「知覚」の項目の中に、次の記述がある。

ii) 【略】 知覚と言えば予期と想起から区別されて、現在という時間意識の基本を形成する体験とみなされているが、知覚は現在の体験であると同時に、その中に過去の意味を沈殿させ、未来への展開可能性を孕んでいるのであり、この点で根本的に歴史的現象なのである。こうしてみると、知覚は空間的地平と時間的地平の中に自らの位置を占める存在者にとって最も基本的な世界一内一存在の在り方を示すものだということになる。

『事典哲学の木』(2002:707) 項目執筆担当者: 村田純一

既に咲が「ビキニの上」という言葉を口にしてしているため、重複表現となる。同時に「ビキニの上」というモノに焦点が当たる表現になる。咲の「ビキニの上が取れちゃって」という発話に触発され、由里が「流れちゃった」と加えることで描写されるこのシーンには、咲と由里の二人で会話を紡ぎ合うような語り口の魅力がある。それは、継起的に連続する出来事が眼前に繰り広げられる様を臨場して知覚するような描写でもある。その魅力が消えてしまう。

「テ形・連用形」による表現は、「流れちゃって、どっかのおじさんが拾ってくれてさ」になる。この場合、事態の推移を、固定された視点から継続観察するような、由里の観察者としてのイメージが強まる。そのような状況描写と、(106)の内在型が描く、困惑してしまい事態を落ち着いて観察するような余裕も無くなってしまった様子は、相当異なるものである。

主節主語が内在型の前に配置される「内在型」構文は、①「大きい波が来て、由里ちゃんがひっくり返って、ビキニの上が取れちゃって」「そうそう。どっかのおじさんが、流れちゃったのを、拾ってくれてさ」、または、②「大きい波が来て、由里ちゃんがひっくり返って、どっかのおじさんが、ビキニの上が取れちゃって」「そうそう。流れちゃったのを、拾ってくれてさ」、等となる。いずれも極めて不自然な会話である。①②が不自然になるのは、咲の「ビキニの上が取れちゃって」という発言に、由里が「流れちゃったのを」という言葉を加えた上で、「どっかのおじさんが」「拾ってくれてさ」と当該構文の使用を選択したことが関係している。鍵になるのは、主要部内在型関係節によって表現される連続する2つの事態（「(ビキニの上) 取れちゃって」「流れちゃった」）は、咲と由里がそれぞれ別々に描写している点である。そのような関係があるにも拘らず、主節主語を内在型の前に配置しようとする、①では、2つの事態（「取れちゃって」「流れちゃった」）の連続性が「どっかのおじさんが」によって切断されてしまい、②では、当該構文の使用を選択したわけではない咲が当該構文の主節主語だけ表現してしまうという、まとまりを欠いた表現になってしまうのである。

以上から(106)の場合に確認できるのは、主要部内在型関係節構文の以下のような性格である。主節主語が主要部内在型関係節の後の位置を占めることは、当該関係節の後に「主節主語+主節他動詞」という一つの表現単位が生成されることを意味する。それは、当該関係節によって描写された一つの出来事事態に継起的に後続するもう一つの出来事事態を描写することを可能にする（「内在型構造≒主節目的語」が利用される）。それらの描写順は、出来事の生起順と同じであり、当該構文の表現者による被描写事態の知覚順と同じである。当該構文の「表現者」は、連続して生起する事態を、内在型で描写される事態の「知覚者」に与えられる視座から臨場的に描写していると言える。(106)の共同表現者である咲と由里は、1年

前に二人が共有した体験を、当該体験の知覚者として想起しながら描写し合い、聞き手や読み手に間接知覚を提供する言語表現を完成させていく。そこで表現される、連続的に展開される出来事の中で、とっさに関心を寄せざるを得なかった事態（対応要請を迫られた事態）が主要部内在型関係節によって描写される。(106)では、そのような事態に対応したのが、困惑してしまい何をする間も無かった咲と由里の二人ではなく、「どっかのおじさん」だった。当該関係節によって描写された事態からの対応要請を受けての対応行為（「拾ってくれてさ」）が次に表現されることで、主要部内在型関係節構文としての一表現単位が完成する。

#### 4.2.2 主要部内在型関係節構文 一部省略形

基本形のⅠ,Ⅱ,Ⅲ,Ⅳ型に省略のあるものが観察された。以下、Ⅰ型～Ⅳ型内の、内在節主語、内在節目的語、及び主節主語の中の、一部あるいは全てが省略されている例を見ていく。

省略があるにも拘らず、文意が損なわれることなく主要部内在型関係節構文が成立するのは、文脈から、内在節主語、内在節目的語、あるいは、主節主語が復元できるからである。

そんな中、敢えて主要部内在型関係節構文内の主要部となる要素を先行提示していると思われる例も観察された。また、その省略部分の復元機構には一定のパターンが観察される。

主要部の先行提示の主なパターンは、A. 提題の「は」が付加されて先行提示され、文の態様が、益岡（2020）の言う「[主題+解説]型事象叙述文」になっている場合。B. 本来内在型内にある主要部が、「無助詞格成分」の形式で先行提示され、主要部の繰り返しが避けられる結果、内在型内の主要部が表面上現われない場合。C. 「」『』が付加された主要部相当部分が、焦点化された状態で先行文脈内にある場合である。この内、AとBの文展開は外在型に書き替えられない。主要部が省略されているため、連体修飾節構造の被修飾名詞句を配置できないからである。これは、外在型と異なる独自の形式的特徴になる。

ここでは、以下の四点について見ていく。①主要部の先行提示の主な3つのパターン ②会話内のやり取りの中で見られる一部省略形 ③一般的に見られる省略が主要部内在型関係節構文内でも観察される例 ④詳細に文型分類した（主節主語の格表示も分類の基準に加えた場合）全ての基本形・一部省略形の中で、特に頻繁に観察され実例数の多い一部省略形である。

尚、注目点として、本論文が一部省略形とし、主要部の先行提示としたものの内、先行提示部分がタイプを表し、復元される主要部の部分がトークンを表すと考えられる例が多数観察されたことが挙げられる。この点については、4.2.2.4で触れる。

#### 4.2.2.1 一部省略形で観察される主要部の先行提示の主な3つのパターン

##### A. 提題の「は」付与型

主要部内在型関係節の主要部相当部分が、提題を表す「は」と共に先行提示され、繰り返しを避けるため、主要部が表面に現われないものである。主題設定の上、後続部分で主題に関わる出来事の展開を表現している。このパターンは、しばしば観察された。

内在型構文では、内在節動詞及び主節他動詞が行為・行動を表すことが多い。そのため、この種の主題化が為される内在型構文は、先に触れたように、益岡（2020）の指摘する「[主題+解説]型事象叙述文」という日本語の類型論的な特性を体現する典型的な表現群を形成するものと思われる。益岡（2020）が挙げている典型例は、主節主語に「は」が付加されるものだが、内在型構文の実例には、各種主要部の「主題」化が観察される。

次の(108)では、「銃弾」が主要部相当で、内在節主語と想定される名詞句である。

(108) 銃弾は 被害者の頭部に留まっていたのを病院で取り出し、鑑識課で検査をした結果、現場に残されていたマイクロモデルAから発砲されたものだということが判りました

1988 (泡) 坂 妻夫(著) 花火と銃声 講談社

【先行提示主要部】＝銃弾（は）、内在節主語省略

【特徴】①[主題+解説]型事象叙述文 ②主節主語としては、“病院で”により、例えば“担当医が”等が示唆される。

(109) 「栓？道具？」「ここは元々波が削って自然にできた岩の隙間を、人がさらに削って広げたんだ。柔らかい岩だから鑿で削れる。隙間は海へ通じていて、潮の満ち干で水が出入りしていたのを、岩で栓をして塞いだ。潮が流れこまないように」

2004 時海 結以(著) 業多姫 富士見書房

【先行提示主要部】＝隙間（は）、内在節主語省略、内在節目的語省略、主節主語省略

【特徴】[主題+解説]型事象叙述文

従属節は2つの部分で構成されている。従属節①（「隙間は海へ通じていて」）内の主語は主題化（「隙間は」）されている。この主題化された「隙間（は）」の部分は、従属節②（「潮の満ち干で水が出入りしていた」）の中では、「水」の出入りする「経路」を表している。そして最後に、この「隙間」は、主節他動詞（「塞いだ」）の目的語となっている。

(110) あんたはリー・ジュリアンを覚えているだろう？「イギリス人と中国人の混血ですね」リー・ジュリアンは熊谷曹長が使っていた密偵で、旧英系の官吏のなかに人脈をもっており、反日分子の動きに関する情報は正確だった。「リーは、もとはと言えば福

原総領事が使っていたのを俺がそのまま引き継いだんだ。福原総領事は俺が生きているのを見て、喜んでくれた。当然、香港でイギリス軍に逮捕されたものと思っていたのだろう。実に奇遇だったよ。 2000 帚木 蓬生(著) 逃亡 新潮社

【先行提示主要部】＝リー（は）、内在節目的語省略

【特徴】①[主題＋解説]型事象叙述文 ②話者自身が直前に相手に話しかけた問いの中に、既に「リー」への言及がある

この例で表現されている行為は、「リーを（密偵として）使う」ことである。文脈内で行われる行為内容に違いはない。この行為は「引き継」がれ、行為主体の方が変化している。

## B. 無助詞格成分

下の(111)では、内在節主語として復元されることになる主要部が、「無助詞格成分」として先行提示され、文の「主題」を表している。「無助詞格成分」単独で一つの文を形成するものが二つ同格的に連続している。

(111) 三代目、名称クロ。雌、黒いペルシャ猫、血統書付き。浅草松屋のペットショップで、大きくなりすぎて売れ残っていたのを、うちで引き取った。

1995 樋口 修吉(著) 花川戸へ 中央公論社

次の(112)は、先行提示されている主要部が内在節目的語として復元されるものである。

(112) ふつうなら燃えたはずの軸も、一本だけ助かった。弘法大師真蹟千字文である。たまたま本能寺に泊っていた島井が、光秀の軍に攻められている最中、壁からはずし、命がけで、攻め手の囲みを破って持ち出したためであった。島井とは、それほど名物を愛し、また肚のすわった博多商人である。その島井が所蔵している最高の茶道具が、天下三肩衝のひとつといわれる檜柴肩衝である。 珠光名物で、濃い飴色のふっくらした茶壺。 同じ博多商人の神谷が一千貫文で買ったのを、島井が二千貫文で譲り受け、大事にしている。

1978 城山 三郎(著) 黄金の日日 新潮社

(112)に見られる文の構成からは、無助詞格成分と内在型構文がそれぞれ持つ表現特性が連携し合うような、レトリック性が感じられる。島井は既に「茶壺」を所有しており、〈1〉感嘆を込めて、「茶壺」を主題として取り上げ〈2〉それを所有することになった具体的な経緯を伝えている。「〈1〉→〈2〉」のような展開では、島井を対応行為に至らせた事態（「同じ博多商人の神谷が一千貫文で買った」）への気付きを表現する内在型は、具体的な経緯を語る〈2〉の段階で生じ易く、また〈2〉の段階に適した表現型式であると言える。

無助詞格成分の形式を利用した主要部の先行提示には、「感嘆」が込められ、文末は「大事



にしている」という感情表現で結ばれている。「珠光名物で、濃い飴色のふっくらした茶壺」に対する扱いは丁寧で、「の」を代名詞として捉えるのは、かなり無理があると思われる。

次の(113)では、先行提示部分と内在型主要部に一部不一致（藤原実方の墓⇔藤原実方）が見られるが、文意理解に問題は無い。また、「藤原実方の墓」は、無助詞格成分の先行提示ではなく見出し項目的で、省略も通常のものと同変らないとすることも自然である。主要部内在型関係節構文として取り上げたが、特異な例である。名所案内的な言葉の調子が感じられ、写真も添えられているようである。

- (113) 藤中将実方の墓● J R 東北本線名取駅下車 平安中期の歌人、藤原実方の墓。道祖神社の前を通りかかった時に落命したのを村人が葬ったといわれている。

2004 実著者不明 奥の細道 富田文雄 | 写真 学習研究社

【先行提示主要部】 = (藤中将実方の墓⇔) 藤原実方の墓⇔藤原実方 = 内在節主語

#### C. 「 」や『 』の形

主要部が「 」や『 』が付された形で先行文脈内に提示され、内在型で再度表現することが避けられ、省略部分が生じていると考えられる場合である。

- (114) 「父や、中本さんたちの同人雑誌ですよ。『燕京文学』ですよ。北京図書館の中に埋もれていたのを見つけました」 「北京図書館？」 (88)を(114)として再掲

1995 中 = (蘭) = (英) 助(著) 北京の貝殻 中蘭英助 | 著 筑摩書房

【先行提示主要部】 = 『燕京文学』、内在節主語省略、主節主語省略

【「の」 = 代名詞】の読みも成立

- (115) —やばいかな？—瞬思い、安全策をとって、「ミネラル」といった。出て来たのを一口のむと、ウイズ・ガス、つまり味のないソーダ水だった。

1998 奥田 継夫(著) 食べて歩いてやっと旅人らしく 三一書房

【先行提示主要部】 = 「ミネラル」、内在節主語省略、主節主語省略

【「の」 = 代名詞】の読みも成立

#### 4.2.2.2 会話のやり取りの表現中に見られる一部省略型

会話相手の表現内からの復元が容易なために主要部を表現する必要がなく、内在型内に主要部の省略が生じたと考えられる主要部内在型関係節構文が観察された。

- (116) 彼女のギターを聴くのは久しぶりだったが、それは前と同じように僕の心をあたためてくれた。「あなたギター練習してるの」「納屋に転がってたのを借りてきて

し弾いてるだけです」

1987 村上 春樹(著) ノルウェイの森 講談社

【ⅠまたはⅢからの内在節主語・主節主語省略】

【「の」＝代名詞】の読みも成立。「ギター」はタイプとして捉えられる可能性が高い。

(117) 欠席学生なんだから、ほっといてくれ、と思いながら文大が黙っていると、男は学生証のはしをつまみぺたぺたテーブルを叩きながら、「さて、どうしてわたしの自転車に乗っていったのか、話してもらおうか」「捨てられてたのを直して乗ってたんですけど」 1998 廣瀬 誠(著)/鷺田 小彌太(著) 論争を快適にする 30 の法則 PHP 研究所

【ⅠまたはⅢからの内在節主語・主節主語省略】

【「の」＝代名詞】の読みも成立する。

#### 4.2.2.3 他の文環境でも観察される一般的な省略

ここまで一部省略形の実際を見てきたが、この他、内在型構文以外で見られる一般的な省略と同じタイプのものも観察された。

A. 表現者と主節主語が同一であることが想定される表現では、主節主語が省略されやすい。

(118) それからその付近にやはりノートが一冊あったのを差し押えたように記憶していますが、この点はあまり明確にいま記憶がございませんです。

1976 野間 宏(著) 狭山裁判 岩波書店

【ⅠまたはⅢからの主節主語省略】

【省略主節主語部分】＝「話者」または「話者」の所属する機関

B. 主節主語省略は、前文脈に引き続いて、同じ主語の行為が表現される場合に多い。

(119) 宗俊は一息入れた。小姓が茶を捧げてきたのを、グッと飲み干した。口中に爽やかな香りが広がった。 1992 多岐川 恭(著) 練堀小路の悪党ども 新潮社

【ⅡまたはⅣからの主節主語省略】

【省略主節主語部分】＝「宗俊は」

C. 主節主語と同一の内在型主語は、明示する必要がない場合が多い。

(120) 「わたしは、よく、おかしいことを考えるんですよ」「どんなことを考えるんだね、半介?」「宇宙って、ヘンなものですねえ」「どうして…?」「如来様は煙草の灰を畳に落としたのを、細い指でつまんで灰皿に入れながら、微笑して言った。

2005 三橋 一夫(著) 鬼の末裔 出版芸術社

【Ⅱからの内在節主語省略】

【特徴】[主題+解説]型事象叙述文。この場合、主節主語に代わる「自分で」等を、内在節で使用することも有り得るが、内在節主語「如来様が」の非表示が原則だと考えられる。厳密には、「煙草の灰」の全てを落としたり、落とした灰の全てを灰皿に入れたりすることは想定し難い。「煙草の灰」の一部に関わる継起的事態の表現と考えられる。

#### 4.2.2.4 詳細な文型分類の中で特に頻繁に観察された一部省略形

ここでは、文型を詳細分類した場合に、特に頻繁に観察される一部省略形について見ていく。以下、一部省略形のタイプを示す際、取り消し線は、省略されていると想定される部分である。次の[23]の場合、省略前の形式は、主節主語が内在型相当部分の前にある場合と後にある場合の2通りが考えられる。表現者は2通りの内のどちらかを暗黙のうちに想定している可能性もある。しかし、形式上は区別がつかないため、考えられる2通りのタイプを示してある。(以下の[30]、[9]の場合も同様である)

Aは、主節主語と内在節主語が省略されていて、内在型内の動詞が自動詞の場合である。

- A. [23] I. 主節主語 + 内在節主語 + … + 自動詞 + の + 他動詞 …… 45例  
 III. 内在節主語 + … + 自動詞 + の + 主節主語 + 他動詞

次の(121)は、事態の概要が前文脈で既に表現されている。

(121) 宋代の寺院で一等材相当を使用しているのは、奉国寺大殿（一材二十九c m）と華嚴寺大殿（三十c m）であるが、ともに九間の序堂である。序堂でも九間もの大きさになると、一等材より広いものが使われ、大殿と呼ばれている。二等材相当（二五・五c m）を使用しているのは、巨大な応県木塔で、八面三間の五重の殿閣である。高さは六七・三mで、日本の法隆寺五重塔の二倍もある。少し傾いたのを修復しており、途中まで登って参観することができた。

2004 川端 俊一郎(著) 法隆寺のものさし ミネルヴァ書房  
 対応を要する事態がかつて起きた（「少し傾いた」）ことが内在型で示され、その対応が既に為されたこと（「修復しており」）が主節他動詞で表現されている。簡潔な表現である。

次の(122)は、いくつかの要因が重なって、「表現されていない部分」が多い。

(122) ダレスとは米国のCIA長官だったアレン・ダレスのことで、いつも彼が小脇に抱えていたことから、この名がついた。それは、オードリー・ヘップバーンが映画「ローマの休日」で履いていたサンダルが日本で大量に生産され、いまでも「ヘップサンダル」に名をとどめているようなもので、被害者は兄・裕一の「ダレス靴」を、通学

用に使っていた。この鞆は最初の自供（六月二十一日）では、自転車の荷台にゴム紐でくくりつけられていたのを、「自転車からおろして鞆ごと山の中へおっぽうっちゃったんだ」というものだった。 2004 鎌田 慧(著) 狭山事件 草思社

①「この鞆は」の部分は、「主題」として先行提示され、繰り返しを避けるため内在型内の主要部としては表現されていない。②鞆を自転車からおろした主体は、「自転車からおろして鞆ごと山の中へおっぽうっちゃったんだ」と語る主体であるため省略されている。③「荷台にゴム紐でくくりつける」行為は受身の形で表現されているため、行為の主体は明示されていない。こうして、内在型構文内では、内在節主語・主節主語に加え、鞆を自転車の荷台にくくりつけた主体も、そして主要部も表面上表現されていない。あるいは、逆にも、以上のような事情で、内在型構文に「表現されない部分」が多いことで、自然な日本語になっている。

Bは、主節主語、内在節主語/目的語が省略され、内在型内の動詞が他動詞の場合である。

B. 30 II. 主節主語 + 内在節主語+…+目的語+他動詞+のを + 他動詞 …20例  
IV. 内在節主語+…+目的語+他動詞+のを+ 主節主語 + 他動詞

(123) その時、ふと思い出したのが『村山龍平伝』(昭和二十八年十一月・朝日新聞社)だ。

分厚い本なので、押入れの奥に突っ込んであったのを引っぱり出したら、薄井秀一という名前が出てきた。 2002 横田 順彌(著) 明治時代は謎だらけ 平凡社

『村山龍平伝』は、具体的な個物を指すと考えられるが、『村山龍平伝』が、〈タイプ⇔トークン〉<sup>26</sup>関係のタイプに当たり、復元される主要部がトークンの可能性もある。

(124) 今日作ろうと試みて、作ったのですが、全く変わりません。ティッシュケースくらいの大きさの木の箱に30m線を巻き、バリコンは例によって100均のラジオから取り出したのを使いました。 2005 Yahoo!知恵袋 Yahoo!

(124)は、〈タイプ⇔トークン〉関係の読みも強い。その場合、「バリコン」と復元される主要部は、同一物と認められなくなる。この種の例を内在型構文と認めない立場もあるかもしれない。しかし、本論文では同構文の一つの特徴として捉えている。一部省略形の中には、①具体的な個物の省略 ②〈タイプ⇔トークン〉関係、と双方の読みが考えられるものがある。

(125)では、レシピの概略が素描されている。そこには、個々の準備状況・調理場面の具体

<sup>26</sup> 『オックスフォード言語学辞典』(2009)のトークン token の項目には、i) のようにある。  
i) 実例をまとめたもの[タイプ]と区別される実例についていう。例えば、fluffy には f という文字のトークンが3つと、l,u,y という文字のトークンが1つずつある。「タイプ」とは反対。したがって、同じ[fluffy という]単語では、6つの連続した文字のトークンは、4つのタイプ(f,l,u,y)の実例ということになる。 中島・瀬田 (2009:409) 『オックスフォード言語学辞典』

的な例を、事例として取り上げているような印象がある。

(125) お雑煮にくるみを搗ったものを入れる人いますか？どこの地域の方ですか？お雑煮煮に入れるわけではありませんが、お雑煮の中から餅を出して、くるみダレにつけて食べます。お雑煮の出汁は、煮干出汁。具は、大根、にんじん、ゴボウ等の根菜類や、わらび、きのこ等の山菜です。くるみは 山で取ってきたのを 搗り潰して、砂糖を入れ、雑煮の出汁でのばしてタレにします。岩手県下閉伊郡岩泉町です。

2005 Yahoo! 知恵袋 Yahoo!

個別具体的な調理過程がイメージされると、主題化部分と主要部間に、〈タイプ⇄トークン〉関係を読み取る態勢が弱まり、主題化部分と主要部を具体的個物と捉える傾きが増す。

次のCは、主節主語が省略され、内在節主語と自動詞が表現されている場合である。

- C. ⑨ I. 主節主語+ 内在節主語+…+ 自動詞+の+ 他動詞 …… 5 6 例  
III. 内在節主語+…+ 自動詞+の+ 主節主語+ 他動詞

(126)では、おばあさんが「あるモノがある状態にあること」（「セロリの葉っぱがはみ出している」）を「指し」て話しかける事態が、内在型構文で表わされている。

(126) おねだりおばあさん マルシェでいろいろ買い物をしていたときのこと。見知らぬおばあさんが、近づいてきて、「あなた、そのセロリこここのところでいいからちょうだい」私の買い物袋からセロリの葉っぱが はみ出していたのを 指して話しかけていることはわかったのですが、何を言ってるのか一瞬理解に苦しみました。セロリは香味野菜なので、たしかにちょっと入れると格段においしい。だけど1本買うと老婆には多すぎる。捨てたり、無駄にするくらいなら、ほんの少し分けてというのが、彼女の節約術だったみたい。これぞ、モノを大事にする老婆心のなせるワザ？あまりに威風堂々たるおねだりに、つい圧倒されてさしあげてしまいました。

2002 脇 雅世(著) フランス仕込みの節約生活術 128 集英社

(127)では、内在型が、主節主語が待ち構えていた事態を表している。

(127) 「そうよ。今日逢えなかったら、明日も来たかも…」赤城はちらっと越路をにらんでみせた。「あたしがそんなにチライ思いをしているのに、あんたはヒドいんだよ。やっとあんたが 帰ってきたのを みつけて、あとを追っかけてたら、知らん顔してサッサ、サッサ行っちゃうんだよ。エレベーターも閉めるし、あたしのことキラっているとしか思えなかったね」「ごめん、ごめん。ほんとに気がつかなかったんだ」

1984 生島 治郎(著) 片翼だけの天使 集英社

#### 4.2.3 基本形・省略形の実例数一覧（詳細な文型分類）

BCCWJ『少納言』で得られた主要部内在型関係節構文の詳細な文型分類を試みたものが(128)である（主節主語に「が」と「は」のどちらが付くかを（ ）内に示し、分類を細分化した。省略部分と考えられるものには、内在節主語のように、中央を横切る線を施した。）

関係節化の7例を含む、1～30に分類するのを避けたものは、31として表示した。

##### (128) 基本形・省略形の実例数一覧（詳細な文型分類）

- |   |  |         |
|---|--|---------|
| <span style="border: 1px solid black; padding: 0 2px;">1</span> I.    | <u>主節主語</u> (が) + <u>内在節主語</u> + … + <u>自動詞</u> + <u>の</u> + <u>他動詞</u>              | …… 3 例  |
| <span style="border: 1px solid black; padding: 0 2px;">2</span> I.    | <u>主節主語</u> (は) + <u>内在節主語</u> + … + <u>自動詞</u> + <u>の</u> + <u>他動詞</u>              | …… 8 例  |
| <span style="border: 1px solid black; padding: 0 2px;">3</span> II.   | <u>主節主語</u> (が) + <u>内在節主語</u> + … + <u>目的語</u> + <u>他動詞</u> + <u>の</u> + <u>他動詞</u> | …… 0 例  |
| <span style="border: 1px solid black; padding: 0 2px;">4</span> II.   | <u>主節主語</u> (は) + <u>内在節主語</u> + … + <u>目的語</u> + <u>他動詞</u> + <u>の</u> + <u>他動詞</u> | …… 2 例  |
| <span style="border: 1px solid black; padding: 0 2px;">5</span> III.  | <u>内在節主語</u> + … + <u>自動詞</u> + <u>の</u> + <u>主節主語</u> (が) + <u>他動詞</u>              | …… 13 例 |
| <span style="border: 1px solid black; padding: 0 2px;">6</span> III.  | <u>内在節主語</u> + … + <u>自動詞</u> + <u>の</u> + <u>主節主語</u> (は) + <u>他動詞</u>              | …… 5 例  |
| <span style="border: 1px solid black; padding: 0 2px;">7</span> IV.   | <u>内在節主語</u> + … + <u>目的語</u> + <u>他動詞</u> + <u>の</u> + <u>主節主語</u> (が) + <u>他動詞</u> | …… 3 例  |
| <span style="border: 1px solid black; padding: 0 2px;">8</span> IV.   | <u>内在節主語</u> + … + <u>目的語</u> + <u>他動詞</u> + <u>の</u> + <u>主節主語</u> (は) + <u>他動詞</u> | …… 1 例  |
| <span style="border: 1px solid black; padding: 0 2px;">9</span> I.    | <u>主節主語</u> + <u>内在節主語</u> + … + <u>自動詞</u> + <u>の</u> + <u>他動詞</u>                  | …… 56 例 |
|   | III. <u>内在節主語</u> + … + <u>自動詞</u> + <u>の</u> + <u>主節主語</u> + <u>他動詞</u>             |         |
| <span style="border: 1px solid black; padding: 0 2px;">10</span> II.  | <u>主節主語</u> + <u>内在節主語</u> + … + <u>目的語</u> + <u>他動詞</u> + <u>の</u> + <u>他動詞</u>     | …… 11 例 |
|   | IV. <u>内在節主語</u> + … + <u>目的語</u> + <u>他動詞</u> + <u>の</u> + <u>主節主語</u> + <u>他動詞</u> |         |
| <span style="border: 1px solid black; padding: 0 2px;">11</span> I.   | <u>主節主語</u> (が) + <u>内在節主語</u> + … + <u>自動詞</u> + <u>の</u> + <u>他動詞</u>              | …… 1 例  |
| <span style="border: 1px solid black; padding: 0 2px;">12</span> I.   | <u>主節主語</u> (は) + <u>内在節主語</u> + … + <u>自動詞</u> + <u>の</u> + <u>他動詞</u>              | …… 1 例  |
| <span style="border: 1px solid black; padding: 0 2px;">13</span> III. | <u>内在節主語</u> + … + <u>自動詞</u> + <u>の</u> + <u>主節主語</u> (が) + <u>他動詞</u>              | …… 16 例 |
| <span style="border: 1px solid black; padding: 0 2px;">14</span> III. | <u>内在節主語</u> + … + <u>自動詞</u> + <u>の</u> + <u>主節主語</u> (は) + <u>他動詞</u>              | …… 1 例  |
| <span style="border: 1px solid black; padding: 0 2px;">15</span> II.  | <u>主節主語</u> (が) + <u>内在節主語</u> + … + <u>目的語</u> + <u>他動詞</u> + <u>の</u> + <u>他動詞</u> | …… 2 例  |
| <span style="border: 1px solid black; padding: 0 2px;">16</span> II.  | <u>主節主語</u> (は) + <u>内在節主語</u> + … + <u>目的語</u> + <u>他動詞</u> + <u>の</u> + <u>他動詞</u> | …… 5 例  |
| <span style="border: 1px solid black; padding: 0 2px;">17</span> IV.  | <u>内在節主語</u> + … + <u>目的語</u> + <u>他動詞</u> + <u>の</u> + <u>主節主語</u> (が) + <u>他動詞</u> | …… 2 例  |
| <span style="border: 1px solid black; padding: 0 2px;">18</span> IV.  | <u>内在節主語</u> + … + <u>目的語</u> + <u>他動詞</u> + <u>の</u> + <u>主節主語</u> (は) + <u>他動詞</u> | …… 2 例  |
| <span style="border: 1px solid black; padding: 0 2px;">19</span> II.  | <u>主節主語</u> (が) + <u>内在節主語</u> + … + <u>目的語</u> + <u>他動詞</u> + <u>の</u> + <u>他動詞</u> | …… 0 例  |
| <span style="border: 1px solid black; padding: 0 2px;">20</span> II.  | <u>主節主語</u> (は) + <u>内在節主語</u> + … + <u>目的語</u> + <u>他動詞</u> + <u>の</u> + <u>他動詞</u> | …… 0 例  |

- 21 IV. 内在節主語 + … + 目的語 + 他動詞 + のを + 主節主語(が) + 他動詞 …… 6 例
- 22 IV. 内在節主語 + … + 目的語 + 他動詞 + のを + 主節主語(は) + 他動詞 …… 1 例
- 23 I. 主節主語 + 内在節主語 + … + 自動詞 + のを + 他動詞 …… 4 5 例
- III. 内在節主語 + … + 自動詞 + のを + 主節主語 + 他動詞
- 24 II. 主節主語 + 内在節主語 + … + 目的語 + 他動詞 + のを + 他動詞 …… 1 4 例
- IV. 内在節主語 + … + 目的語 + 他動詞 + のを + 主節主語 + 他動詞
- 25 II. 主節主語 + 内在節主語 + … + 目的語 + 他動詞 + のを + 他動詞 …… 7 例
- IV. 内在節主語 + … + 目的語 + 他動詞 + のを + 主節主語 + 他動詞
- 26 II. 主節主語(が) + 内在節主語 + … + 目的語 + 他動詞 + のを + 他動詞 …… 1 例
- 27 II. 主節主語(は) + 内在節主語 + … + 目的語 + 他動詞 + のを + 他動詞 …… 1 例
- 28 IV. 内在節主語 + … + 目的語 + 他動詞 + のを + 主節主語(が) + 他動詞 …… 4 例
- 29 IV. 内在節主語 + … + 目的語 + 他動詞 + のを + 主節主語(は) + 他動詞 …… 1 例
- 30 II. 主節主語 + 内在節主語 + … + 目的語 + 他動詞 + のを + 他動詞 …… 2 0 例
- IV. 内在節主語 + … + 目的語 + 他動詞 + のを + 主節主語 + 他動詞
31. 1 ~ 30 に分類するのを避けた例 (内、関係節化 … 7 例) …………… 2 0 例

合計：2 5 2 例

### 4.3 主要部内在型関係節の出現形態・出現環境②

4.2では、主要部内在型関係節（構文）の出現形態を、文型という観点から捉えてその分類を試みた。ここでは、出現形態としての主節他動詞の活用形について見ていく。

#### 4.3.1 主節他動詞の出現形態・出現環境としての活用形

主要部内在型関係節構文252例の内、主節他動詞の各活用形の使用頻度は、以下の表(129)のようになる。テ形・連用形を合わせると、終止法断定形過去形・非過去形の合計を上回る。（動詞の形態の分類は、（日本語記述文法研究会編 I 2008:128）に従った）

(129) 主節他動詞の活用種類別実例数 ((90b)を(129)として再掲)

終止法				接続法				
断定形		命令形	意志形	中止形		連体形		条件形
非過去形	過去形			連用形	テ形	非過去形	過去形	
17	79	0	5	39	73	11	28	0

#### 4.3.2 終止法

主節他動詞が終止法の例を簡単に見ていく。

##### A. 主節他動詞の出現形態が終止法断定形・過去形

次の(130)は内在型が「タ」形、(131)は「テイタ」形、(132)は「テオイタ」形の例である。（正確には、「内在型内の「現象」を描写する文が、形式名詞の「の」を「～タ」で連体修飾している例」とすべきであるが、簡略化して表記する場合がある。）

(130) やがて飲み物が来てもメリーさんは目を開けなかった。志摩ちゃんが 声をかけよう

としたのを 僕は 無言で 止めた。こうして約三十分の間、僕達は誰も口をきかなかった。

1988 佳村 昌季(著) 第11幕への序曲「浮輪をしたハチ公」実業之日本社

【特徴】「相手の動きや状態に対する働きかけを表す動詞」である「止める」が主節他動詞として使われている。このため、事態そのものが目的語となっていると捉え、内在型構文と



しない判断も有り得る。一方、事態内の「志摩ちゃん」が意味的に際立つと考えるのも自然である。(130)については、判断が分かれる可能性がある。

(131) ちなみに当時その日のライブ録音のテープを会場で売っていたのを買いました。。。

(大自慢)

2005 Yahoo!知恵袋 Yahoo!

【他動行為】：遭遇した好ましい現象継続事態（「会場で売っていた」）への対応

(132) ボンカレーの一番辛いやつを 買っておいたのを今日の夜に食べた。所詮ボンカレ

ーだから、と思って食べたらかなり辛かった。

2008 Yahoo!ブログ Yahoo!

【他動行為】：目的（食べる）のために取った行為の結果継続状態（「買っておいた」）への対応

#### B. 主節他動詞の出現形態が終止法断定形・非過去形

(133) マンガ中では、雪山に行った静香が 遭難したのを、タイムマシンとタイムフロ

シキで大きくなった「現在」ののび太が 助けに行く（未来ののび太は風邪で寝込んで

いる最中）が、オッチョコチョイの連続で、「一人にしておくくと危なっかしくて見ていられない」と言われるエピソードがあったけ。

2005 Yahoo!知恵袋 Yahoo!

(134) これも清水さんに上っていただきましょうといい、タッパーに 入れたのを私が 持

って行く。計四郎さん、よろこばれて、 2000 庄野 潤三(著) 鳥の水浴び 講談社

#### C. 主節他動詞の出現形態が終止法意志形

(135) アンドレが 試合中に 右腕に サポーターを 付けたのを チェックしようとした 高

橋氏をロープに振ってラリアット！！

2005 Yahoo!知恵袋 Yahoo!

「チェックしようとした」とあるように、「する」が意志形である。「チェックしようとした」全体では、末尾が連体形で「高橋氏」を連体修飾しており、関係節化が生じている。

#### D. 主節他動詞の出現形態が接続法条件形

(当該構文外で接続法の例になるが、ここで取り上げた)

(136) 米屋はますますパン屋さんとの競争に負けることになっていく。さて、なにかいい

方法はないものか、と考えるうち、ふと思いついた。「そうだ、炊く人がいないなら、

ウチで炊いて届けばいいじゃないか！昔平の気圧の問題も、下で炊いたのを 持って

行けば解決できる」たしかに、これは妙案だった。

1990 上前 淳一郎(著) 人・ひと・ヒット 文芸春秋

内在型構文からは除外している。「持って行けば」の「行けば」が条件形である。想像内の表現だが、「米」は質的に変化し、「の」は代名詞と考えられる。個別具体的な調理過程が取り上げられるイメージがあり、従属節・主節内の目的語は双方ともトークンの感じられる。

### 4.3.3 テ形・連用形（接続法中止形）と行為の連続環境

主要部内在型関係節構文は、内在型が「現象」事態（行為・行動としての「出来事」が多い）を表し、主節他動詞も行為・行動を表すことが多い。また、主節他動詞の活用形では、テ形・連用形の使用頻度の高さが目立つ。当該構文は、出来事の生起表現環境に出現し、自ら表現し、さらに他の出来事表現に連なる傾向があると考えられる。（内在型が表す「現象」は静的事態を含み、その場合、事態の「発見」的様相での描写となる。）

A. ある目的の達成のための手段としての行為が、内在型と主節他動詞で表わされ、その目的となる行為が後続部分で表わされる。

(137)は、内在型が「タ」形の例、(138)は、内在型が「テイタ」形の例である。

(137) 私達は 二、三の新聞が、いち早く、グロース・シュレックホルンに於ける私達の  
遭難を 伝えたのを切りぬいて、暢気な旅に於ける出来ごとが、決して夢でなかったと  
云う証拠にしようとした。 (96)を(137)として再掲

1998 辻村 伊助(著) スイス日記 平凡社

【目的】「出来ごとが、夢でなかったと云う証拠にする」

【目的達成のための対応行動】「二、三の新聞を切り抜く」

【内在型の役割】好都合な出来事の発生を表現する：「新聞が私達の遭難を伝えた」

(138) 長男と次男が早く死んだので、守隆は 末子の久隆が 出家していたのを還俗させて  
跡取りとした。 2004 八幡 和郎(著) 江戸三〇〇藩バカ殿と名君 光文社

【目的】「久隆を跡取りとする」

【目的達成のための対応行動】「久隆を還俗させる」

【内在型の役割】対応前の継続した事態を表現する：「末子の久隆が出家していた」

B. 対応を迫られる行為が内在型で表わされ、対応内容を主節他動詞が表し、結果を後続部分が表す。(139)は内在型が「タ」形の例、(140)は内在型が「テイタ」形の例である。

(139) 彦市は、三月末老耄れた烏猫が流水に乗って流され始めたのを、助けようとして氷  
の海に落ちる。断崖下の石浜にたどり着いたが、足が折れ顔は

2004 菊地 慶一(著) 流水 響文社

(140) なんでも子熊の頃に、獵師の仕掛けた猪用の罠に掛っていたのを助けてから仲良くな  
ったとっておった」 2004 高橋 三千綱(著) 暗闇一心斎 文藝春秋

C. 多数の行為の連続

(141)では、一単位としての内在型構文内で、内在型で二つの行為、残余の部分で三つの行為が描写されている。

(141) 友人にピカソと親しい絵描きがいる。相当に名のある男だが、彼の個展にピカソが来て、サイン代わりに三、四本の線でラク書きをして行ったのを、まるで宝物のように **しまい込み**、複写までして 来る人ごとに見せている。

2000 岡本 太郎(著) 青春ピカソ 新潮社

次の(142)は、内在型構文の前後に出来事表現が多数現われる例である。警察業務の事例を詳細に記録するための記述だと考えられる。諸行為に番号を付したものを(143)に示す。

(142) 事例 2 4 5 逮捕時の状況 松井巡査が被疑者に対し、暴行の現行犯人として逮捕する旨を告げたところ「このくらいで逮捕するのか。」と言って駆けて逃げようとしたので、長田巡査の協力を得、2名で被疑者の両腕を掴んだら振りほどこうとしたのを、**押さえつけ**制圧して逮捕した。

2002 実著者不明 実務逮捕手続書 捜査実務研究会|編著 松華堂;立花書房(発売)

(143) ①松井巡査が被疑者に対し、暴行の現行犯人として逮捕する旨を告げた  
②「このくらいで逮捕するのか。」と言って ③駆けて逃げようとした  
④長田巡査の協力を得、2名で被疑者の両腕を掴んだ ⑤**[内在型]**振りほどこうとした  
⑥**[主節他動詞連用形]**押さえつけ ⑦制圧して ⑧逮捕した。

内在型は、巡査が注意を高める必要を感じる「切っ掛け」となる事態を表している。

次の(144)では、内在型の前後に多数の行為表現が配置されている。

(144) **重次郎は**売り払いをたのまれ、次郎左衛門が 真鴨十羽を 襦半につつみ 持参したのを、密猟と知りながら、札金を手にしたい欲から、柳籠へ**入れ**、風呂敷でくるみ、もち歩いたが、買う者もでず売ることもできなかった。 ((95)を(144)として再掲)

1995 樋口 秀雄(著) 江戸の犯科帳 新人物往来社

連続して繰り返される、行為や行動に番号を付したものを(145)に示す。

(145) ①売り払いをたのまれ ②真鴨十羽を襦半につつみ ③**[内在型]**持参した  
④**[主節他動詞連用形]**柳籠へ入れ ⑤風呂敷でくるみ ⑥もち歩いた  
⑦(買う者もでず) 売ることもできなかった<sup>27</sup>

(144)で、「もち歩いた」モノで重要なのは、金銭に変えられる見込みのある「真鴨十羽」

<sup>27</sup> 本来、「買う者もでず」「売ることもできなかった」という行為は無い。ある行為への欲求があり、それが叶わないことで発せられ成立する表現である。詳しくは、5.6.1.2で触れる。

のはずだが、表現されているのは、「襦半につつみ持参した」「柳籠へ入れ」「風呂敷でくるみ」「もち歩いた」等いずれも「行為」表現である。モノであることが明確化される連体修飾節構造は、一つも使われていない。

連体修飾節構造に替えられる可能性があるのは、「次郎左衛門が襦半につつみ持参した真鴨十羽」のみだと考えられる。「次郎左衛門が襦半につつみ持参した真鴨を柳籠へ入れ、風呂敷でくるみ、もち歩いた」は、表現効果を別にすれば特に問題は無い。しかし、「#？柳籠へ入れ、風呂敷でくるみ、次郎左衛門が襦半につつみ持参した真鴨十羽をもち歩いた」<sup>28</sup>の場合は、意味内容が異なってくることも考えられる上、各表現単位の相互の関係が判然としない表現となる。「襦半につつみ持参した」「柳籠へ入れ」「風呂敷でくるみ」「もち歩いた」という「行為」の連鎖の生起順に合わない表現になるからだと考えられる。

「？？柳籠へ入れた、次郎左衛門が真鴨十羽を持参したの」にも、違和感がある。これは、内在型構文では、内在型で描写され事態が、本来、人に対応を迫ることに関わると考えられ

---

<sup>28</sup> この文の意味内容が判然としないのは、「行為」の生起順と、連体修飾節構造を含む「行為表現」の生起順が合致しないことによると考えられる。これは、グライスの挙げる、会話参加者が従うとされる「1つの大原則と4つの公準」の内の一部に従わないことを意味する。すなわち、会話の公準の「様態の公準」、「順序だった話し方をすること」に従わないことになる。

中島(2012)はグライスについて解説し、グライスの“Logic and Conversation”(Grice 1975:1989)では、会話参加者は1つの大原則と4つの公準に従っているとされているとする。その原則と公準に関する部分を引用する(中島(2012)には、英語も記されているが、日本語訳のみを挙げる)。

(1) 協調の原則 会話における自分の貢献(つまり、発話)を、それが生じる時点において、自分が参加している話のやりとりの中で合意されている目的や方向性から要求されているようなものにせよ。

(2) 会話の公準

a. 量の公準

i. 発話の情報量を要求されているだけの量にすること、また、ii. 要求されている以上の量にしないこと

b. 質の公準

i. 間違っていると思っていることや ii. 確たる証拠のないことを言わないようにすること

c. 関係の公準

関係のあることをいうこと

d. 様態の公準

明瞭な話し方をすること

i. 不明瞭で、ii. 多義的な表現を避け、iii. 簡潔で、iv. 順序だった話し方をすること

中島(2012:37-38)

また、中島(2012)は、Huang(2007)にある例を挙げ、「公準に従うことで出てくる含意」について、説明している。ここでは、様態に関するものだけを引用する。

(3) a. John went to a McDonald's and bought two hamburgers.

b. John first went to a McDonald's and then bought two hamburgers. 中島(2012:40)

(3a)は、(3b)を含意し、andの前後2つの節で示されている出来事がandの前が先に起こり、andの後ろが後に起こったと解釈されるとしている。すなわち、「マクドナルドに行き、ハンバーガーを2つ買った」と解釈されるとしている。中島(2012:40)

る。内在型である「次郎左衛門が真鴨十羽を持参したの」という表現には、人に対応を迫る意味合いがあり、新情報でもある「次郎左衛門が真鴨十羽を持参したの」に、「柳籠へ入れた」という背景情報を付与することは、内在型の特性と衝突するものと考えられる。また、内在型構文の主要部（主節目的語）の確定が、主節他動詞の生起を待つ点も重要である。「の」が付加され抽象的客体化されている、「次郎左衛門が真鴨十羽を持参したの」という表現は、背景情報の付与に耐えるだけのモノ性を獲得していないと考えられる。

次の例は、既に取り上げた。

- (146) 「去年は海行って楽しかったね」一年前の夏、中学生の時の友人達を交えて、房総に泊まりがけで海水浴に行ったのだ。「咲、因幡の白うさぎみたいに真っ赤になっちゃってさ」「そうそう。私駄目なのよ。由里ちゃんみたいにきれいに焼けないの」「花火して、ナンパされて、ボディボードして」「大きい波が来て、由里ちゃんがひっくり返って、ビキニの上が 取れちゃって」「そうそう。流れちゃったのを、どっかのおじさんが 拾ってくれてさ」「由里ちゃん、泣いちゃって可愛かった」

((106)を(146)として再掲) 1997 山本 文緒(著) シュガーレス・ラヴ 集英社

#### 4.3.4 連体形

主節他動詞が連体形で生起し、主要部内在型関係節構文が他の局所的な文法形式に組み込まれたり、一部の特徴的な語彙に接続されたりするものが観察された。

##### 4.3.4.1 連体形と局所的な文法形式あるいは特徴的な語彙への接続

###### A. 「～しているとき」を構成する環境

主要部内在型関係節構文が、「～しているとき」という時を表す節を構成している。

- (147) 金泉少年への発砲に関する報道を読んでみよう。交通部の報告によれば、三日午前八時三十分、第百二六貨物列車(軍用)が、車両(一二〇〇八号)の車軸一つが 焼けたのを修理しているとき、約二〇メートルほどのところで学生五名が歩いていくのを見て、同列車護送憲兵米七二七部隊一三中隊所属レイモンド・ベイリー一等兵が学生たちに停止命令を出したが、学生たちが何のことか分からずそのまま歩いていくと、命令に応じなかったという理由で発砲、

2001 呉 連鎬(著)/ 大畑 正姫(訳)/ 大畑 龍次(訳) 朝鮮の虐殺 太田出版

現象描写の一般的なプロセスである、〈主語表示 → (目的語表示) → 動詞表示〉というステップを踏む内在型構文が、「とき」を連体修飾して「～とき」という従属節を構成している。

「連体修飾節」部分と「とき」は、「外の関係」にあり、「とき」の持つ意味的な空所は、「現象」そのものであると考えられる。尚、「車軸」に若干変質が想定されるが内在型構文とした。

主要部内在型関係節では、現象描写文が「の」を連体修飾している。連体形は終止形と同形のため、当該関係節では事態の成立の様相（事態が進行中の場合も、事態は一部「成立」している）で表現され、後続の主節他動詞も連体形で「とき」に接続する。内在型構文は、「とき」の持つ意味的な空所を単独で埋めることが可能な形式だと言える。

#### B. 特徴的な語彙に接続する環境

内在型構文は、複数の「継起」的事態を表す。その「継起性」を意味内容の中核に持つ「経緯」という語に、内在型構文が「～という」を介して接続されているのが(148)である。

(148) この『竜の聖域』の第一章の部分は、このファンタジア文庫ならびにドラゴン・マガジンでの担当編集者O氏にわたしが最初に読んでいただいた文章でしたし、実は、この『竜の聖域』、本当はかなり以前に一度完成していて、さる事情でずうっとお蔵入りになっていたのを、やっと今回、多少手を入れて、ようやくこちらで引き取っていただいたという経緯があったり、と…。うーん。個人的に、いろいろと思入れがありますし。

1992 ひかわ 玲子(著) 竜の聖域 富士見書房

また、「…この『竜の聖域』」は、『 』の付いた無助詞格成分で、先行提示に当たる。

#### 4.3.4.2 関係節化

主要部内在型関係節構文の主節他動詞が連体形で、当該構文内の特定の名詞句を連体修飾している例が観察された。これは、関係節化が生じていることを表す。次の(149)～(151)では、主要部外在型関係節構造（連体修飾節構造）が生成されている。

(149) また幕末の文久元年（一八六一）の丹波組の記録によると、出水で桶が流されたのを引き上げてくれた、下流の稲荷島（島田市稲荷）へ貰い受けに行ったときの礼金などに金三朱を支出している。 2001 松村 博(著) 大井川に橋がなかった理由 創元社

【元になる内在型構文】「下流の稲荷島（島田市稲荷）が、出水で桶が流されたのを引き上げてくれた」

「下流の稲荷島（島田市稲荷）」に、「桶が流されたのを引き上げてくれた」という背景情報が付与されている。「下流の稲荷島（島田市稲荷）」は、桶を貰い受けに行く相手であり、

礼金を支出するだけの価値ある行動をしてくれた主体でもある。「下流の稲荷島(島田市稲荷)」は、「桶が流された」という突発現象を知覚し、対応し、「桶」を「引き上げてくれた」。

(150) 草津宿は東海道と木曾路、つまり中仙道の分れるところで、宿場の手前、立木大明神のある所から街道の両側に人家が建ち並び、その突き当りに高札場があって、左、木曾海道中仙道と記した標石がみえる。木曾街道のほうから大きな猪を檻に入れたのをかついだ男が二人、追分のところで一休みしているのを附近の子供達が物珍らしそうに覗き込んでいた。 2001 平岩 弓枝(著) はやぶさ新八御用旅 講談社

【元になる内在型構文】「男が二人大きな猪を檻に入れたのをかついだ」

次の(151)には、関係節化の過程に注意すべき点がある。

(151) 日頃からケガをしておびえた生き物の面倒を見ていたため、少年兵四一二号もそんな動物の仲間のように思えたのだ。実際、少年を見ていると、先だってヌマオオヤマネコに捕らわれたのを助けてやった、怯えきった小さなウサギを思い出した。

2005 アンジー・セイジ(著)/ 唐沢 則幸(訳) 七番目の子 竹書房

【元になる内在型構文】「怯えきった小さなウサギが、ヌマオオヤマネコに捕らわれたのを助けてやった」

【元になる内在型構文】は、いささか奇異に感じられる。「捕らわれる」前から、「怯えきっていた」ような印象になるからである。これは、関係節化の際、「捕らわれたのを助けてやった」が「ウサギ」に先行するのに合わせて、「怯えきった」が追加されたためと考えられる。事態の推移に沿う随伴表現として付け加えられたもので、レトリック的な性格も読み取れる。

#### 4.3.5 その他の興味深い出現形態・出現環境

4.3.5.1 では、補文節内での生起状況を確認する。4.3.5.2 では、感情表現一般に先行する位置での生起を見る。4.3.5.3 では、繰り返し構造的な、出現形態・出現環境の側面を見る。

##### 4.3.5.1 他の事態表現の内部や直後に生起する主要部内在型関係節構文

###### A. 知覚動詞の補文節内

内在型構文から関係節化が生じた、「大きな猪を檻に入れたのをかついだ男」が補文節内に含まれている。

(152) 木曾海道中仙道と記した標石がみえる。木曾街道のほうから大きな猪を檻に入れた

のをかついだ男が二人、追分のところで一休みしているのを附近の子供達が物珍らしそうに覗き込んでいた。

((150)から一部を(152)として再掲) 2001 平岩 弓枝(著) はやぶさ新八御用旅 講談社  
「子供達」の知覚事態の内部に、「一休み」の前の複数の行為(「大きな猪を檻に入れる」と「かつぐ」)の残像が残るような、入れ子構造的な表現になっている。

## B. 認識動詞の補文節

「内在型構文+「の」」が、認識動詞の補文節を構成している。

(153) ホロヴィッツはかつての時代へのノスタルジーを象徴する唯一の音楽家として生き残っていた人である。彼を最初にレコードで聞いたのは小学生のころで、父親が集めていたSPレコードのなかに何枚かがあって、確か、ショパンを父が繰り返し聴いていたのを、私も黙ってそばに座ってきいたのを記憶している。いや、より正確に言えば、おとなになって聴き直し「ああ、これはホロヴィッツだったのだな」と思ったということだったろう。

1990 横溝 亮一(著) ウィーンのおばあさんとプラハのおじいさん 音楽之友社  
父の行為(「ショパンを聴く」)に始まり、それに気づいた私が、父のそばに座り、続いて、そこでショパンを「きく」、自分の小学生の頃の姿が想起されている。

## C. 事態を表す補文節を目的語に取る動詞の生起直後

(154)は、「事態をなげいてモノを復興した」、という表現構造になっている。

(154) その三月、皇后は父が再興した興福寺維摩会が、しばらく絶えていたのをなげいて、再び復興せられたが、他方、

1986 林 陸朗(著) 光明皇后 吉川弘文館

(155)は、「事態を見かねてヒトを帰した」という表現構造である。

(155) 生活苦の母子五人が、叔父が花連港吉野村にいる、というだけの風聞を頼りに、乞食をしながら金を貯め基隆に到着した。三十六歳の母親と十二歳から二歳までの四人の子を連れて、花連港の無料宿泊所に泊まったが叔父はいない。三味線で花連港の街を門づけして回っていたのを街民が見かねて金を集め、基隆から故郷へ帰した。

2001 竹中 信子(著) 植民地台湾の日本女性生活史 田畑書店

但し、これらの主要部内在型関係節構文としての認定判断は、分かれる可能性がある。

(156) その三月、皇后は父が再興した興福寺維摩会が、しばらく絶えていたのを再び復興せられたが、

(156)のように、「なげいて」が無ければ内在型構文である。しかし、「なげいて」のある(155)



では、「父が再興した興福寺維摩会が、しばらく絶えていたのを」の部分が「なげいて」の目的語として先行するため、「興福寺維摩会」が「再び復興せられた」の目的語であることは容易に分かる。(154)の例を「省略」と捉えるのも自然である。(155)の場合も同様である。

#### 4.3.5.2 感情表現

主節動詞の後に、しばしば、ある種の感情表現が観察される。以下、「感情表現相当」と思われる箇所には波線を施して実例を示していく。

次の(157)は、主節他動詞の意味内容そのものに感情が含まれている。

(157) 当時、人気を得つつあったベースボールに落雲館の学生も夢中になった。逸らしたボールを追って学生たちが苦沙弥先生の家の庭に侵入してきたのを叱りつけたものだから、苦沙弥先生、学生たちから復讐のダムダム弾攻撃を挑まれたのだ

1999 池内 了(著) 天文学者の虫眼鏡 文藝春秋

次の(158)には、文字通り、「感激した」とある。

(158) 東北の寒村の早春、庭先の残雪のすぐそばに、活き活きとした水仙の新芽が 固い土を押し上げて出てきたのを見つけて、幼な心にも生命の息吹きや自然の神秘に感激した。

1998 小野寺 時夫(著) 治る医療、殺される医療 読売新聞社

次の(159)には「がっかりして」、(160)には、「テンション・ダウン」が現れている。

(159) その後、図面に記されていない既製のドアや家具が 付いてしまったのを見て、江島さんは がっかりして、Aさんに報告しましたが、

((87)を(159)として再掲)

2005 笠原 顯司(著) 「住みか」のヒント 東京図書出版会;リフレ出版(発売)

(160) 【評価Cの下】某書評家が誉めていたのだけれど、アマゾンから実物が 届いたのを見て、テンション・ダウン。

((84)を(160)として再掲) 2008 Yahoo!ブログ Yahoo!

次の(161)は、感情表現の現れ方が興味深い。

(161) 家康が死んで二年目、元和四年(一六一八)の秋の一日、国千代は江戸城の西の丸の濠に鴨が いたのを鉄砲で打って、母君のお江に届け、でかしたでかしたとよるこぼれたが、秀忠はお江のところを訪れて料理した鴨と酒をすすめられ、鴨が内内の濠のものと聞くとたちまち機嫌が悪くなった。

((92)を(161)として再掲)

1977 田中 澄江(著) 人物日本の女性史 集英社

感情表現は、波線部 ①お江：「でかしたでかしたとよるこぼれた」と ②秀忠：「たちまち機嫌が悪くなった」である。プラス・マイナス両感情の強いコントラストが施されている。

次の(162)～(164)にも感情表現が見られる。

(162) その飛行機の中で、鈴木先生がぼくの隣に座って、いきなり「お前、中国をやらんか」と言われました。『瀟湘臥遊図巻』という、東京国立博物館にある南宋の絵画についてレポートを書いたのを先生が読んで気に入ってくださったらしい

2001 小川 裕充(著) 本の窓 小学館

(163) 珠光名物で、濃い飴色のふっくらした茶壺。同じ博多商人の神谷が一千貫文で買ったのを、島井が二千貫文で譲り受け、大事にしている。

((112)から一部を(163)として再掲) 1978 城山 三郎(著) 黄金の日日

(164) ヴィオラ奏者で、バルトークにヴィオラ協奏曲を委嘱し初演したプリムローズも、外国人教授として芸大に招かれ官舎に住んでいたことがある。彼が日本に滞在したのは昭和四七年からだが、その時の名前入りの家具が残っていたのをピュイグ=ロジェ先生が発見し、彼と同じ官舎に住むことに光栄を感じておられた。

2003 永富 正之(著) ある「完全な音楽家」の肖像

アンリエット・ピュイグ=ロジェ|著;船山信子|編 音楽之友社

#### 4.3.5.3 主要部内在型関係節の連鎖現象

先に生成された主要部内在型関係節構文を、次に生成される主要部内在型関係節構文が、自身の目的語として自身の中に含み込む実例が観察された。複数の行為の連鎖表現となる。

(165) [ [ 長芋を薄い輪切りにしたの ] を縦横に細かく細かくたたいたの ] をかけます。

1992 実著者不明 ひとり暮らしごはんの友 仲屋むげん堂企画室|著 岩波書店

但し、この例の場合、「長芋を薄い輪切りにしたの」は、「長芋」が「輪切りに」された結果生産物で、元の「長芋」が「変化」したものとして解釈され、「の」が代名詞として読まれる可能性が大である。その場合は、「主要部内在型関係節」ではなく、**change relative** とされる。しかし、この例からも、「主要部内在型関係節の連鎖」が成立する可能性が示唆される。

これに関連して、田村・仁科(2017)は、第35回大会日本英語学会シンポジウム(東北大学)で、BCCWJから得られた主要部内在型関係節構文の使用実態の分析状況を報告するとともに、次のような作例を示し、容認度の問題を含めて、主要部内在型関係節の連鎖構造の統語的特性と意味特性について発表している。

(166) 長島が低いボール球をすくい上げたのが、フェンスを軽々と越えたのを、太郎が素手でキャッチしたのを、花子が大切に保存しておいた。

(167) ゴッホのひまわりを、技官が壁からはずしたのを、館員が木枠に収めたのを、助手が静かに運び出したのを、運転手が座席の上に置いておいたのが、床にずり落ちてしまった。

Cecchetto, C., C. Donai (2015) は、連鎖現象に関してではないが、主要部内在型関係節一般の理解の助けにもなり、連鎖現象にも関わるとされる指摘をしている。通常の関係節と主要部内在型関係節の両方を持つ日本語を例に挙げ、通常の関係節は主要部 (head) がスペルアウトの前にレイジング (raising) され、主要部内在型関係節は、スペルアウトの後にレイジングされるとする (before or after Spell-Out) (Cecchetto, C., C. Donai 2015:80-81)。

ここでは、まず、生成文法の Spell-Out (書き出し) という考え方を、原口・中村・金子 (2016) によって確認する。

(168) Spell-Out (書き出し) 統語派生のある段階で、感覚運動システムのインターフェース (接触領域) にとってのみ解釈可能な音声情報を剥ぎ取り、感覚運動システムに送り込む操作。これは、感覚運動システムと概念・意図システムが独立した器官であり、一方にとって解釈可能な情報が、もう一方にとって解釈不可能な情報であるとする仮説に基づく。各インターフェースには解釈可能な情報のみが転送されなければならないため、音声に関する情報が意味情報を解釈する概念・意図システムに転送されるのを阻止する必要がある。

[略]

原口・中村・金子 (2016:671-672)

具体例として、(169)の情報を持つ語彙項目 airplane に関する説明がある。

- (169) a. 音韻素性: [bgins with vowel]  
b. 意味素性: [artifact]  
c. 形式素性: [nominal]

ここで、a の音韻素性は統語論から意味部門へと至る派生にとって解釈不可能な情報であるため、意味部門へと転送されるのを阻止する必要がある。そこで、この音韻素性を統語論から剥ぎ取って音韻部門へと書き出しする。これによって、意味部門へは概念・意図システムが要求する b の意味素性: [artifact]、及び c の形式素性: [nominal] だけを転送することができるとする (原口・中村・金子 (2016:671-672))。

上の Cecchetto, C., C. Donai (2015) の指摘を、(168)の原口・中村・金子 (2016) を参考にして言い換えれば、主要部内在型関係節は、「感覚運動システムのインターフェース (接触領域) にとってのみ解釈可能な音声情報を剥ぎ取り、感覚運動システムに送り込まれた」結果

として現象文が表現された後、主要部がレイジング(raising)<sup>29</sup>されると捉えることになる。

このように、現象文のスペルアウトの後に主要部がレイジングされるという捉え方が可能であれば、連鎖現象に関しても、先行する主要部内在型関係節構文のスペルアウト後に主要

---

<sup>29</sup> Cecchetto, C., C. Donai (2015)は、“raising”による関係節の構造分析の優位性を、日本語が通常の関係節と主要部内在型関係節の両方を持つことを例に挙げ、以下のように指摘している。

((i)は、Cecchetto, C., C. Donai の(118))

An advantage of (any version of) the raising analysis is that it accounts for the existence internally headed relative clauses, which simply realize overtly what the raising analysis takes to be the underlying structure of externally headed relative clauses. One example of an internally headed relative and of the corresponding externally headed relative structure is given in (i), from Japanese (the “head” noun is italicized). This feature of the raising analysis should not be underestimated. While the raising analysis can explain the existence of two related relativization strategies by simply assuming that the “head” can raise at different points (before or after Spell-Out), alternative approaches have a harder time explaining why relativization can be realized through two different structures. ((i) is from Shimoyama 1999, 147.)

(i) a. Yoko-wa [[Taro-ga sara-no ue-ni oita] *keeki*]-o  
Yoko-TOP Taro-NOM plate-GEN on-LOC put cake-ACC  
tabeta.

ate

‘Yoko ate a piece of cake which Taro put on a plate.’

b. Yoko-wa [[Taro-ga sara-no ue-ni *keeki*no  
Yoko-TOP Taro-NOM plate-GEN on-LOC cake-ACC  
oita]-no]-o tabeta.  
put-NOMINALIZER-ACC ate

‘Yoko ate a piece of cake which Taro put on a plate.’

Interestingly, when the relative clause head *keeki* ‘cake’ does not move (namely, in the internally headed relative in (i b)), the nominalizer particle *no* surfaces in the right periphery of the relative clause. This particle is not present when *keeki* moves. In our relabeling approach, this can be interpreted as indicating that in (i a) *keeki* moves to the structural position that is occupied by the nominalizer particle in (i b). The particle is not needed in (i a), since the movement of *keeki* can relabel the structure by turning it into a nominal constituent. Interestingly, this correlation between head-internal relatives and nominalizer particles is not restricted to Japanese, but is widely attested cross-linguistically ([...]).

Cecchetto, C., C. Donai (2015:80-81)

【繰り上げ raising】についても確認しておきたい。『オックスフォード言語学辞典』(2009)では、i)のように説明されている。一方、『増補版チョムスキー理論辞典』(2016)では、i)の「目的語への繰り上げ」と「主語への繰り上げ」の内、前者に関するこのような分析は現在では認められていないとされている(原口・中村・金子(2016:393)『増補版チョムスキー理論辞典』)。

i) 名詞句または他の要素が、従属節からそれを含む上位の節へ移動する統語的過程。例えば、I believe him to be honest. において、私が信じている内容は ‘He is honest’であり、あるレベルでは him は不定詞節の主題と主張できる (I believe [him to be honest]) が、その形は I believe him のような単文の場合と同様に目的語である。したがって、この代名詞は主節の目的語位置に繰り上げられなければならない (I believe him [to be honest]) と言われている。

これは「目的語への繰り上げ」、すなわち、目的語位置への繰り上げの一例であるが、その場合に似た理由もあって、He seems to be honest. の例では、(It seems [he is honest]あるいは[He is honest] seems からの)「主語への繰り上げ」が提案されている。【略】

中島・瀬田 (2009:242) 『オックスフォード言語学辞典』

部がレイジングされることが繰り返されることが想定されることになり、主要部内在型関係節の連鎖の基本的な機構を見えやすくすることが期待される。

この主要部内在型関係節の連鎖現象は、かなり稀なものと考えられるが、子供による使用としては比較的自然な面もあるのではないだろうか。次の(170)のような表現を、カード・ゲームに夢中の子供が使ってもそれほど不思議ではない。勝敗の行方が気になる子供を前に、ジョーカーを引いた年長者が大げさに表情を変えて興じることがある。そんな年長者の姿を脳裏に浮かべて、ジョーカーの動きを辿る表現である。

(170) さっきのは、僕がジョーカー持ってたのをお祖父ちゃんが引いちゃったのをお祖母ちゃんが引いちゃったのをおばさんが引いちゃったのをお姉ちゃんが引いちゃったんだよね！

#### 4.4 テ形・連用形及び連体修飾節（主要部外在型関係節）による表現との差異

内在型構文、あるいは、外在型を含む文には、元々は別個の意味内容を表現可能な二つの文が、一つの文表現に利用されるという側面がある。そこで表される二つ（以上）の現象の継起的側面は他の形式でも表現可能で、動詞のテ形・連用形によるものがそれに当たる。本節では、内在型構文とテ形・連用形及び連体修飾節による表現との差異について見ていく。

##### 4.4.1 テ形・連用形

はじめに、テ形・連用形について概観する。

###### 4.4.1.1 テ形・連用形の概観

日本語記述文法研究会編（2008）『現代日本語文法6』第11部複文には、次の指摘がある。

テ形・連用形による表現に関して、その汎用性について解説した部分で、「外界に同時に存在する複数の事態を述べる時、その出来事は単文を並べていくことによって表現できるが、テ形あるいは連用形でつなぎ、1つの長い文を作ることによって表現することもできる。（日本語記述文法研究会編 11部 2008:279）」とされ、次の例が挙げられている。

- ・ 駅前に白いビルがある。そのビルの1階に銀行がある。
- ・ 駅前に白いビルが {あり／あって}、そのビルの1階に銀行がある。

日本語記述文法研究会編第11部（2008:280）

また、「あるいは、時間の流れに沿って順に生起する複数の事態を述べる時にも、同様にテ形あるいは連用形によって文をつなぐことができる。（日本語記述文法研究会編第11部（2008:280）」とし、次の例が挙げられている。

- ・ 昨日、友達と買い物に行った。レストランで昼食を食べた。
- ・ 昨日、友達と買い物に {行き／いって}、レストランで昼食を食べた。

日本語記述文法研究会編第11部（2008:280）

そして、「連用形とテ形の基本的な働きは、このように単文をつないで複文を構成することにあり、その際、つながれる2つの文の意味的な関係については何も述べられない。たとえば、次の『歩いて』は、テ形・連用形の節と主節の意味関係がそれぞれ時間的前後関係、原因・理由に解釈できる。

- ・ 駅まで歩いて、電車に乗った。(時間的前後関係)
- ・ 駅まで歩いて、足が痛くなった。(原因・理由)

このように、テ形・連用形はそれ自体がもつ意味が稀薄であり、その意味の解釈は、前後の事態や文脈に依存する。このような性質を持つために、テ形・連用形はさまざまな用法をもつ。(日本語記述文法研究会編第 11 部 (2008:280))とされている。

加えて、「テ形・連用形は、時間の流れに沿って順に生起する複数の事態をつなぐことができる。このような用法を継起という (日本語記述文法研究会編第 11 部 (2008:283))とし、「この場合、従属節と主節の述語は動作・変化・動きを表す動詞が用いられる。(日本語記述文法研究会編第 11 部 (2008:283))としている。そして、「2つの事態の前後関係が必ず決まっている場合がある。この場合、従属節の動作は主節の事態の前提を表す。(日本語記述文法研究会編第 11 部 (2008:283))としていて、前提を表す例も挙げられている。

- ・ リンゴを受け取り、一口食べた。
- ・ 新宿へ行って、映画を見た。 日本語記述文法研究会編第 11 部 (2008:283)

これらのうち、「時間の流れに沿って順に生起する複数の事態」をつなぐ「継起」の用法は、内在型の基本的な機能でもある。それでは、「テ形・連用形」の「継起」と内在型の「継起」には、どのような違いがあるのだろうか。

次の 4.5.1.2 では、内在型による「継起」表現と「テ形・連用形」による「継起」表現との差異が比較的分かり易い実例でこの問題を見てみたい。

#### 4.4.1.2 テ形・連用形による表現と内在型構文による表現の差異

内在型構文とテ形・連用形による表現との差異について実例に沿って見ていく。

- (171a) 天正 10 年 (1582 年)、本能寺の変が起きたとき、家康は忠勝ら少数の随行とともに堺に滞在していたが、家康が京都に行って信長の後を追おうと取り乱したのを  
忠勝が 諫めて、「伊賀越え」を行わせたという。 2008 Yahoo! ブログ Yahoo!

(171b1) 《内在型構文》

家康が京都に行って信長の後を追おうと 取り乱したのを、 忠勝が諫めて、

(171b2) 《テ形/連用形》

家康が京都に行って信長の後を追おうと {取り乱して/取り乱し}、 忠勝が諫めて、

(171b3) 《知覚動詞テ形/連用形》

家康が京都に行って信長の後を追おうと取り乱したのを {見て/見}、 忠勝が諫めて、

(171b4) 《認識動詞テ形/連用形》

家康が京都に行って信長の後を追おうと取り乱したのを{知って/知り}、忠勝が諫めて、(171b1)の内在型からは、家康と忠勝が同席していたことが推測される。ここで、「諫めて」の前で、知覚動詞の「見て」が使用されると、かなりの距離（または、相当な心的距離）が二人の間にある印象を与える。認識動詞の「知って」の場合では、別席にあって（あるいは相当離れたところに居て）伝え聞いた印象を伴う。

内在型構文からは、「家康」の行為に、同席する「忠勝」が、とっさの行動を取った様子が伝わる。「忠勝」が「家康」の行為を知覚した時は、即、対応が要請されていると感じた時である。この「現象知覚≒対応要請察知」（≒は、ほぼ同時に生じるという意味で用いている）局面は、「忠勝」の行為（「諫めて」）に直結する。「現象知覚≒対応要請察知」局面から「現象事態参与者からの対応対象選出≒対応行為実行」局面に一気に移る様相が描写される。ここからは、内在型が、事態を描写しながら知覚行為に言及しないことが、継起的に連続する事態の一体性を大きく印象付けることに繋がると推測される。

形式名詞の「の」を連体修飾する内在型は、事態の抽象的客体化を伴うと考えられる。当該事態への瞬時の意識の固定が感じられるが、知覚行為は明示されないままである。知覚／認識動詞の場合も、対象となる事態を表す際に抽象的客体化が為される。一方、テ形・連用形そのものでは、事態の抽象的客体化は生じない。

(171b2)のテ形・連用形を見ると、他と異なり、従属節事態と忠勝の対応との緊密な関連性に注意が向かない。表現者は、ほぼ同じ方向同じ距離に、家康と忠勝を見られる位置を占め、そこから、観察継続を前提に事態を描写している。視点は固定されている。一方、抽象的客体化を伴う表現は、表現者が視線を向ける先である客体化された事態に、忠勝も視線を向けていると想定することになる。テ形・連用形表現の視点固定が、中立的な立場からの事態観察の印象を与えるのに対し、他の三つは、読み手の知覚が主節主語の知覚として横滑りするような、瞬時の視点移動を通して、忠勝に自己投入しやすい描写になると考えられる。

(171b3) (171b4)は、主節他動詞が知覚／認識動詞であると同時にテ形・連用形でもある。忠勝の取る一連の行動は、その知覚／認知行為（「見る」・「知る」）も含めて描写される。それらの忠勝の行動は、一般の動詞のテ形・連用形表現の場合と同様に、固定された視点から、表現者の観察対象となり中立的に描写されることになる。

(171b3)で、忠勝と家康の間に、かなりの距離（または、相当な心的距離）が感じられるのは、「見て／見」の使用に起因する。内在型構文では「家康が取り乱した事態」と忠勝の「瞬



時の対応」が描かれる。対して、「見て／見」が使用されると、忠勝の視覚による事態把握が明示される。すると、忠勝の対応は、視覚による事態把握に基づいて選択されたものとなる。視覚による対象化と、それに基づく選択判断が察知され、加えて、テ形・連用形の中立的視点の効果も加味され、「距離」感が生じるものと考えられる。

#### (172) <テ形・連用形と内在型構文に於ける事態の抽象的客体化と知覚意識>

<事態の抽象的客体化>

《内在型構文》	《テ形/連用形》	《知覚動詞テ形/連用形》	《認識動詞テ形/連用形》
○	無関与	◎	◎

<知覚行為の明示／暗示> \* 《内在型構文》は、主節他動詞≠知覚動詞の場合

《内在型構文》	《テ形/連用形》	《知覚動詞テ形/連用形》	《認識動詞テ形/連用形》
暗示	暗示	明示	明示

#### 4.4.2 連体修飾節（主要部外在型関係節）の概観

主要部内在型関係節に対して主要部外在型関係節と呼ばれるものは、従来、連体修飾節（あるいは、名詞修飾節）として研究されてきたものである。ここでは、内在型の性格を捉える上で重要な論点を中心に、連体修飾節に関して指摘されてきた点を確認していく。主要部内在型関係節が描写するのは「現象」であるため、当該関係節と比較する際は、「現象描写文」内の名詞句を主要部（被修飾名詞句）とする連体修飾節構造、ということになる。

ここでは、日本語記述文法研究会編（2008）『現代日本語文法 6 第 11 部複文』の「名詞修飾節」に関する記述等を通して、これまで指摘されてきた点を見ていきたい。日本語記述文法研究会編第 11 部（2008）には、「節による名詞修飾」の分類として、「名詞修飾の構造による分類」と「名詞修飾の機能による分類」が挙げられている。

このうち、「名詞修飾の構造による分類」は、2つに分けられる。

1) 被修飾名詞が修飾節の中の述語に対して格関係をもつもの（いわゆる「内の関係」）

・先生からいただいた本 日本語記述文法研究会編第 11 部(2008:49)

2) 被修飾名詞と修飾節の中の述語との関係に格関係がないもの（いわゆる「外の関係」）

・先生から本をいただいた思い出

・ 先生から本をいただいた翌年

・ 先生から本をいただいたお礼

日本語記述文法研究会編第 11 部 (2008: 49)

また、「名詞修飾の機能による分類」も、2 つに分けられている。

### 1) 限定的名詞修飾節

修飾節が、被修飾名詞となる名詞が表すものの集合の中から、指示対象を限定して取り出す働きをする。

- ・ つらい経験をしてきた人間には、他人の痛みが分かるだろう。
- ・ 現在絶滅の危機にある動物が何種類くらいいるか知っていますか。
- ・ 正直者が幸せをつかむという物語は世界中の民話にある。

日本語記述文法研究会編第 11 部 (2008:50)

### 2) 非限定的名詞修飾節

修飾によって指示対象を限定する必要がない名詞に対して用いられる修飾節は、名詞についての補助的な情報をつけ加えたり、主節の事態に対する背景的な事態を提示するといった働きをする。

- ・ つらい経験をしてきた私には、他人の痛みが分かる。
- ・ 正直者が幸せをつかむという『笠地蔵』の物語が好きだ。
- ・ 私の同僚であったその男性は、非常に有能だった。
- ・ 私は改札口にいた駅員に、市役所への道を尋ねた。しばらく地図に見入っていた駅員は、タクシーで行くことを勧めた。
- ・ 二足歩行動物である人間にとって、腰痛は宿命的な病である。

日本語記述文法研究会編第 11 部 (2008: 50-51)

内在型は、内在型構文内の主節他動詞に先行する。また、内在型の前後に、複数の行為・行動が表現される場合が多い。内在型との比較のために内在型によって描写される事態の事態参与者を連体修飾節（名詞修飾節）構造で表現した場合、主要部は、多くの場合、「非限定的名詞修飾節」の修飾を受けることになると考えられる。連体修飾節（名詞修飾節）構造の被修飾名詞句に「所与性」が与えられる場合が多いからである。

以下、「非限定的名詞修飾節」関連の記述を引用する。

- (173) 被修飾名詞の指示対象を修飾節によって限定する必要がない場合には 2 通りある。1 つは、修飾節がなくても被修飾名詞の指示対象が同定できる場合である。これには、(1) (2) のように、代名詞や固有名詞など、特定の存在を表す名詞が被修飾名詞である場合と、(3)

のように被修飾名詞が修飾節のほかに「この」「その」などの語によっても修飾されている場合、(4)のように文脈によって被修飾名詞の指すものが特定できる場合がある。

・ つらい経験をしてきた私には、他人の痛みが分かる。 ……(1)

・ 正直者が幸せをつかむという『笠地蔵』の物語が好きだ。 ……(2)

・ 私の同僚であったその男性は、非常に有能だった。 ……(3)

・ 私は改札口にいた駅員に、市役所への道を尋ねた。しばらく地図に見入っていた駅員は、タクシーで行くことを勧めた。 ……(4)

(1)では、「私には、他人の痛みが分かる」という主節の事態に対して「私はつらい経験をしてきた」という背景的な事態が、修飾節の形で提示されている。(2)(3)では、「『笠地蔵』の物語」や「その男性」についての補助的な情報が、それぞれ修飾節として加えられている。

もう1つは、被修飾名詞を総称的な意味で用いる場合である。

・ 二足歩行動物である人間にとって、腰痛は宿命的な病である。

この例の場合、「人間」は「人間全般」という意味で用いられており、「人間にとって、腰痛は宿命的な病である」という主題の事態に対して背景的な事態が、修飾節の形で提示されている。 日本語記述文法研究会編第11部(2008: 50-51)

次に、日本語記述文法研究会編第11部(2008)で、被修飾名詞が修飾節の中の述語に対して格関係をもつものとされた「内の関係」等について、大島(2010)の研究を見ていきたい。

大島(2010:16)は、寺村(1975-1978)・奥津(1974)の連体修飾節構造に関する研究が、日本語の連体修飾節構造を「内の関係」「外の関係」の2種に分けていることについて、「充分に根拠のあることだ」とし、「修飾節の述語にとって必須の補語であれば修飾節が形成しやすい」ことを指摘したうえで、(174)を挙げ、内の関係の修飾節と元になっている文とを比較して、(175)のように整理している。

(174) 田中さんが 本を 買った。

田中さんが 買った 本 (大島の(1.29))

(175) 両者を比較すると、大きい特徴として、次の2点が挙げられる。

①主名詞の位置が異なる ②助詞「を」が消去されている

したがって、もとの文の意味関係が解釈されるためには、「消去された」関係が復元するものでなければならない。「～が」「～を」などを中心とする必須補語は助詞を消しても述語との関係が容易に復元できる要素の端的なものであり、主名詞にしやすい。他方、

時を表す成分や、「～で」による場所などは必須ではない補語だが、述語との関係が明白であるがゆえに修飾節が可能になっている。 大島 (2010: 16)

また、内の関係と外の関係のまとめを次のように行っている。

(176) 内の関係がいかなる名詞についても成立しうるのに対し、外の関係はある特定の名詞のみが形成できるものである。 [略] 外の関係の場合、連体修飾節構造の形式を決めているのは個々の名詞が独自にもつ統語的・意味的性質である。言い方をかえれば、名詞がもつ特性が連体修飾節の統語形式に反映されているのが外の関係と言えるだろう。内の関係では名詞がもつ統語的・意味的性質が統語形式に反映されるのではなく、主名詞はあくまで2つの文のいわば「結び目」として機能する。このように、内の関係と外の関係は統語的性質を全く異にするものである。この2つのカテゴリーを、連体修飾節構造の2分類としてたてる所以である。 大島 (2010: 29)

以上のように、大島 (2010) は、連体修飾節構造を2つに分類することを提唱し、主名詞の特徴と修飾部分との関連を重視している。<sup>30</sup>

そして、「連体修飾節の基本的機能は主名詞の表す事物ないし、事物のもつ属性について“限定”を加えることである。 [略] そしてこの“限定”には「集合限定」と「属性限定」の2種類がある。(大島 2010:37)」としている。

大島 (2010) は、この2種類の関係について、連体修飾節(177)とその解釈(179)、連体修飾節(178)とその解釈(180)、を示している。

(177) このワークステーションを使える人を探している。 (大島の(1. 16))

(178) このワークステーションを使える人が隣の研究室にいる。 (大島の(1. 16))

<sup>30</sup> 三好 (2021) では、寺村 (1975-1978)・奥津 (1974) によって展開され、大島 (2010) でも継承されている、「内の関係／外の関係」、「同一名詞連体修飾／付加名詞連体修飾」という分類に関して、次のような問題点が指摘されている。

i) [略] 外の関係は、被修飾名詞句の側に、内容補充を可能にする意味的な空所が存在することが成立条件に含まれており、「底の名詞の内容を表す」という機能面での規定が可能である。しかし、内関係の場合は、「被修飾名詞句が連体修飾節の用言に対して補語の関係にある」（つまり、連体修飾要素の側に意味的な空所がある）と規定されているため、被修飾名詞句に対してどのような限定作用を持っているかという点とはそもそも独立した概念なのであり、更なる検討を要すると考える。

[略] 「内の関係／外の関係」という観点は、連体修飾構造が成立するための文構造的な根拠を説明する際には有益なものとなるが、連体修飾要素がどのような機能を担っているか、という問題とは別のレベルの概念であると言わなければならない。

三好 (2021: 17-18)

(179) このワークステーションを使える、そういう条件に合う人を探している。

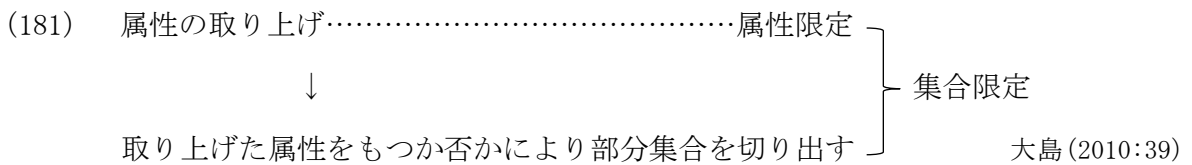
(大島の(1.16))

(180) ある人が隣の研究室にいる。その人はこのワークステーションを使える。

(大島の(1.16))

(177)について、大島(2010:38)は、『…の条件に合う人』というのは、『…という属性をもった人』ということに他ならない。すなわち名詞の表す事物の集合からある部分集合を切り出す際には、まずその事物に関して列挙することのできるさまざまな属性の中からある属性が取り上げられ、続いてその属性をもつか否かのチェックが行われて部分集合が切り出されているのである」としている。また、(178)については、「この文の『(その)人』の指示対象はあらかじめ定まっている。そして、その『人』のもつさまざまな属性の中から『このワークステーションを使える』という属性が取り上げられる。ところが、(177)の場合とは異なり、その属性をその『人』がもっていることは明らかなので、そのあとの部分集合の切り出しは行われない」としている。

続けて(181)のような図式を示して、



「属性限定は当該の事物に関連して列挙することのできる複数の中からある属性を取り上げる機能であり」、(177)(178)の両方に見られるとしている。「これに対して集合限定は、属性の取り上げを経て部分集合が切り出されるプロセスまでを含んでおり」、こちらは(177)のみ見られるとしている。つまり、「集合限定は属性限定を含んでいるのである」とする。そして、次のように整理している。

(182) 連体修飾節はすべて属性限定の機能、すなわち複数の属性の中からある属性を取り上げる機能を備えており、主名詞の指示性があらかじめ定まっているかどうかによって集合限定の機能が発動されるか否かが決まると考えられる。大島(2010:39)

本論文との関係で注目されるのが、日本語記述文法研究会編第11部(2008)の「非限定名詞修飾節」と、大島の「属性限定」の捉え方の関係である。大島の、「主名詞の指示性があらかじめ定まっているかどうかによって集合限定の機能が発動されるか否かが決まる」との指摘に従えば、「修飾節がなくても被修飾名詞の指示対象が同定できる場合」には、「集合限定」の機能は発動されず、「属性限定」となる。内在型を外在型に変えた場合に、指示性が定まっ

ている、すなわち、所与性が与えられている場合が多いと考えられ、その修飾部分の性格は、「属性限定」になり易い。また、内在型は行為・行動を表すため、連体修飾節構造の場合、主要部はその行為・行動に参加したという事態参与者としての属性を与えられることになる。

#### 4.4.3 連体修飾節による表現と内在型構文による表現との差異

内在型をそれと対応すると考えられる外在型にして比較した場合に、意味内容が曖昧になったり、差異が際立つ場合がある。4.4.3.1 及び 4.4.3.2 で順次見ていきたい。

##### 4.4.3.1 複数の主要部

次の(183a)の内在型を、対応すると考えられる外在型にして表すと、(183b)のようになる。しかし、修飾機構が変わることで、修飾部分と被修飾部分との関係が曖昧になる。

(183a) その数日後、植松の店の裏で、伊勢と加勢した布田が組織の連中に袋叩きにされていたのを救ってくれたのが、佐々木だった。

1996 白川 道(著) 海は涸れていた 新潮社

(183b) その数日後、植松の店の裏で、組織の連中に袋叩きにされていた伊勢と加勢した布田を救ってくれたのが、佐々木だった

通常の関係節(183b)では、組織の連中に「袋叩きにされていた」のが、伊勢だけなのか、加勢した布田も袋叩きにされたのか、はっきりしない。「組織の連中に袋叩きにされていた」の部分が、「伊勢と加勢した布田」の二人を修飾するという解釈と、「伊勢と加勢した布田」の「伊勢」のみを修飾するという解釈の二つの読みが可能になるからである。

次の(184a)には、内在型独自の性格が観察される。

(184a)すばやく走るのを“いだてん走り”と言うだけあって、この神さまは足が速い。そもそも素姓はシヴァ神の子。つまりバラモン教の神だったが、いつとはなく仏教に取り込まれて仏法を守護する神の一人となった。あるとき、これもめっぽう足の早い捷疾鬼と名乗る悪鬼が、仏舎利(お釈迦さまの遺骨)を盗んで逃げたのを、追いかけて取りもどしたという伝説の持ちぬし…。

2004 杉本 苑子(著) オール讀物 文藝春秋

(184b) あるとき、これもめっぽう足の早い仏舎利(お釈迦さまの遺骨)を盗んで逃げた捷疾鬼と名乗る悪鬼を、追いかけて取りもどしたという伝説の持ちぬし…。

(184c) あるとき、これもめっぼう足の早い仏舎利（お釈迦さまの遺骨）を盗んで逃げた捷疾鬼と名乗る悪鬼を追いかけて、仏舎利を取りもどしたという伝説の持ちぬし…。

(184d) あるとき、これもめっぼう足の早い捷疾鬼と名乗る悪鬼が盗んで逃げた仏舎利（お釈迦さまの遺骨）を、追いかけて取りもどしたという伝説の持ちぬし…。

連体修飾にした場合（(184b)）、「取りもどした」のが「捷疾鬼と名乗る悪鬼」との読みが優勢になりかねない。被修飾名詞句の「悪鬼」に焦点が当たるからである。動詞の意味機能から、「悪鬼を」「追いかけて」、「仏舎利を」「取りもどした」、との読みの可能性は開かれているが、意味解釈に負荷がかかる。(184c)は冗長である。(184d)は「盗んで逃げた」を複合動詞的に使用した場合で、当該部分が、次の「追いかけて取りもどした」という行為表現と対になる印象が強い。しかし、被修飾名詞句の仏舎利（お釈迦さまの遺骨）に焦点が当たるため、(186a)の「盗んで逃げたのを、追いかけて取りもどした」という表現が持つ、「足の早い」者（捷疾鬼）と「足が速い」者（いだてん）の連続する行為の素早さの競い合いのイメージが薄れる。(184a)の内在型構文では、従属節である主要部内在型関係節で描写される事態の「複数の事態参与者」（「捷疾鬼」&「仏舎利」）が、“いだてん”に、「複数の行為」（「追いかける」&「取りもどす」）を動機付け、当該事態参与者は、結果的に背景内で、当該構文の主節の項関係に組み込まれることになると想定される。文意理解も容易である。

野村（2002）は、主要部内在型関係節構文を参照点構文として分析している（2.2.2）。

(185) [太郎が料理を作ってくれる]のを食べる。（(31)を(185)として再掲）野村（2002:235）

野村（2002）によると、(185)について、「認知主体はまず『太郎が料理を作ってくれる』という従属節事態全体を参照点としてもちだし、それに関連する要素の集合の中から『料理』を主節動詞との関連で目標として選び、それに注意の焦点を移行させることになる。（野村2002:238）」とされる。この観点からは、(184a)の場合、従属節事態に関連する要素の集合の中から、「追いかけて」と「取りもどした」という主節動詞との関連で、「悪鬼」と「仏舎利」を「目標として選び、それに注意の焦点を移行させている」という見方ができる。

参照点の論を提示するラネカーは、Active zone についても言及している。Langacker(1990)が、以下の英文の差異について、Active zone との関係で説明している箇所を見る。（(i)の“hear”が[HEAR’]、(ii)の“hear”が[HEAR]と記されている）。

(186)

i) She heard the piano.

ii) She heard the sound of the piano.

[HEAR] focuses on the direct interaction between the sound and the perceiving individual, while [HEAR'] profiles instead the mediated interconnection between the perceiver and the sound source, but both relations are part of the meaning of both expressions, despite their differing salience.

Langacker (1984:195)

(i) は、文字通り読むと、ピアノという物体を聴くことになり、奇異に感じられる。しかし、実際には、Active zone (活性化領域) が関わり、(i) の場合はそれが「音」ということになる。加えて、(ii) に比べ、(i) の場合は音源である「ピアノ」がより際立ち、(ii) の場合は「音」が(i) よりも際立つとされている。

「ピアノ」と「音」との関係は、「全体」と「部分」の関係にある。内在型と内在型主要部との関係も、「全体」と「部分」の関係にある。このラネカーの観点からは、主要部内在型関係節構文の主節他動詞が機能する際、Active zone (活性化領域) として事態描写としての主要部内在型関係節の中の「主要部」に際立ちが与えられる、と解することが可能となる。

尚、野村 (2002) は、主要部内在型関係節の意味構造が、ラネカーの理論的發展を示す3つのモデル (参照点モデル、az/profile モデル、焦点連鎖モデル) においてどう表されるかを、「表1 主要部内在型関係節の分析のまとめ」として(187)のように示している。<sup>31</sup>

(187) 表1 主要部内在型関係節の分析のまとめ 野村 (2002:237, 表1)

	az/profile モデル	参照点モデル	焦点連鎖モデル
従属節事態	プロフィール	参照点R	F 1
従属節事態に関連する要素の集合		支配域D	C 2
主要部	活性化領域	目標T	F 2

もう一つ注意したいのが、(185)では、認知主体の注意は〈参照点R→目標T〉という順に移行しているが、以下の(188)(189)では、逆に〈目標T→参照点R〉という順に向かっていると考えられることである。これには、主要部の主題化 (先行提示) が関わる。

(188) この鞆は最初の自供 (六月二十一日) では、自転車の荷台にゴム紐でくくりつけられていたのを、「自転車からおろして鞆ごと山の中へおっぼうっちゃったんだ」というものだった。 ((122)の一部を(188)として再掲) 2004 鎌田 慧(著) 狭山事件 草思社

(189) 逃走中にわざわざ筑橋署へハガキを書いて駆落ちの金をつくるためだったと知らせ、

<sup>31</sup> 野村 (2002:233, 図2) には、F = focus of attention C = context と表示してある。



逮捕後は凶器の千枚通しは店で氷割りに用いていたのを彼女が持って来た」と一貫して供述している榎津だから、警察ではくりかえし追及されたし検事も執拗に尋問した。

1975 佐木 隆三(著) 復讐するは我にあり 講談社

(188)(189)には、捜査過程で得られた供述内容に関する記述が含まれている。凶悪事件が発生した場合の主たる関心は、発見された遺留品や凶器等の物証から遡及的に犯罪の実像に迫ることである。「モノ→事態」と辿るこの過程が、書き手達が向ける注意の経路に反映され、内在型構文内の〈目標T→参照点R〉として確認できる。((188)目標T:「鞆」→参照点R:「自転車の荷台にゴム紐でくくりつけられていた」、(189)目標T:「千枚通し」→参照点R:「店で氷割りに用いていた」) 遺留品や凶器の主題化によって、注意の経路に変化が見られ、参照点構文に、〈参照点R→目標T〉から〈目標T→参照点R〉への転換が起きていると考えられる。

#### 4.4.3.2 被修飾名詞句の明示の問題

次の(190a)にも、内在型独自の性格が観察される。

(190a) 木曾街道のほうから大きな猪を檻に入れたのをかついだ男が二人、追分のところで一休みしているのを附近の子供達が物珍らしそうに覗き込んでいた。

((150)&(152)を(190a)として再掲)

ここで、(190a)に対応する外在型による表現としては、次の二通りが考えられる。

(190b) 大きな猪を入れた檻をかついだ男が二人、

(190c) 檻に入れた大きな猪をかついだ男が二人、

(190b)では、かついだモノが檻であることが、(190c)では、かついだモノが猪であることが前景化される。それに対して、内在型の(190a)は、猪を檻の中に入れる「行為」とその「過程」が前景化される。また、「結果状態」(“猪が檻の中にいる”そのような状態の“檻”をかついでいる)も「含意する」表現となる。

外在型は、被修飾名詞句の明示が必須の文法形式である。それに対して、内在型は、外在型の被修飾名詞句に相当する主要部は節に内在し、主節動詞の使用と共に背景内に想定されるという特殊な修飾機構を持つ。そのような関係の中、(190a)では、主節他動詞が使用されても、男二人がかついだのが、体に直接触れる「檻」なのか、利用価値の大きい「猪」なのか、という点に言及されないままである。(190a)は、内在型独自の特徴を示す例と言える。

#### 4.4.3.3 名詞句に付加された連体修飾節が与える影響(複数の出来事と事態展開の細分化)

主要部内在型関係節構文内の名詞句に連体修飾節が付加されることで、複数の行為が簡潔に表現される例が観察された((191))。中には、対応すると考えられる外在型に書き替えようとするとその修飾節の表現効果に支障をきたす例も観察された((192b))。

次の(191)は、外在型にしても問題は生じないが、事態の生起順に沿った表現ではなくなる。

(191) マンガ中では、雪山に行った静香が 遭難したのを、タイムマシーンとタイムフロシキで大きくなった「現在」ののび太が 助けに行く (未来ののび太は風邪で寝込んでいる最中) が、オッチョコチョイの連続で、「一人にしておくとは危なっかしくて見られない」と言われるエピソードがあったけ。 ((133)を(191)として再掲)

2005 Yahoo!知恵袋 Yahoo!

内在節主語は、「雪山に行った静香が」である。また、主節主語は、「タイムマシーンとタイムフロシキで大きくなった「現在」ののび太が」である。双方とも、それぞれの、波線部で表示された連体修飾節(非制限的用法)によって、背景的情報が与えられ、複数の出来事の生起が生起順に簡潔に表現されている。

内在型構文内の事態参与者の一部に連体修飾節が付加されて先行する事態が表されることで、事態の進展具合や途中経過が伝わるような例も観察された。(192a)はその例である。

(192a) たまたま寄りあって酒を飲んでいて近衛の兵士のひとりが、酒の勢いで、いっそ謀叛でもやらさうかと口走ったのを、同僚のひとりが 訴えてた。一同はただちに捕えられ、しゃべった兵士は斬首、聞いていて訴えなかった者は縛り首、訴えてた者は五品の官に抜擢されたことがあった。

1997 立間 祥介(著) 新十八史略 駒田信二|他著 河出書房新社

(192b) 酒の勢いで、いっそ謀叛でもやらさうかと口走ったたまたま寄りあって酒を飲んでいて近衛の兵士のひとりを、同僚のひとりが 訴えてた。

(192b)では、外在型主要部は「近衛の兵士のひとり」である。既に「所与性」が与えられているとも解され、その場合、先行する非制限的用法の連体修飾節は、当該兵士に背景的な「属性」を与えることになる。すると、当該兵士の取った諸行為の性格は均一化されてしまい、前後関係がはっきりしなくなる。一方、(192a)の内在型では、内在節主語と内在節動詞の間にある「酒の勢いで」が、諸行為の前半と後半の関連を端的に伝えている。「酒の勢いで」によって酔いが高じたことが示され、その結果として、謀叛を口走るに至った経緯が鮮明である。通常の関係節(192b)からは、酒の酔いの度合いが高じていく過程が感じられない。

#### 4.5 「意識対象」表現としての内在型の特徴と内在型構文に想定される修飾機構

BCCWJから得られた内在型の実例の中には、内在型で描写された事態を「意識対象」という視点から捉えた場合、独特の性格が観察されるものがある。描写事態がよりモノ的な絵画的イメージを帯びているのである。これは、内在型中の「主要部」を取り巻く「環境」が、主要部と「連動」して、主節他動詞の対象として「取り込まれてくる」現象が観察されることと関わると考えられる。4.5.1では、これらの現象を、本多(2005)と菊地(2006)の視点から捉える。4.5.2では、三好(2021)及び大島(2010)の指摘を確認しながら、主要部内在型関係節構文内に想定される修飾機構について見ていく。

##### 4.5.1 「指し言語」(本多:2005)と「その場の関心固定ツール」(菊地:2006)

内在型構文の主節他動詞の目的語は、通常「モノ」である。しかし、本論文では、知覚動詞が使用され目的語が「事態」を表すことが想定される文であっても、「モノ」が意味的に際立つ場合には内在型構文として考察対象としている。

また、主節他動詞が知覚動詞でなくても、事態とモノの関わりが重層的で、内在型構文の目的語として、モノ的な絵画的イメージが色濃い場合が観察されている。4.5.1.1では、そのような場合について見ていく。

##### 4.5.1.1 主要部にモノ的な絵画的イメージが色濃い実例

次の(193)は、技の型の範例の描写である。

(193) 4 相手の右手を一旦左に逆にして倒したのを図の如く左膝外側部に当て更に右へ逆にとる。(そうすると相手は自然に起き上らうとす

1991 南 博(著) 近代庶民生活誌 南 博|ほか編 三一書房

(193)では、内在型の「相手の右手を一旦左に逆にして倒したのを」の部分と、主節他動詞の「左膝外側部に当て」との間に、「図の如く」が挟まれている。「図」は、「左膝外側部に当て」た場合の静止状態のイメージである。直前の内在型である「相手の右手を一旦左に逆にして倒したの」は、「相手の右手」を「一旦左に逆にして倒す」という「行為」とその「行為の結果状態」である「静止状態のイメージ」を二つとも表している。この「一旦左に逆にして倒したの」という結果状態は、次の「左膝外側部に当て」という行為の「起点」となり、

「図の如く」は、目標とされる静止状態をイメージ化している。要所毎の体勢・行為の結果状態(途中経過も暗示される)を把握させることが一連の行為の指南に役立つことから、「図」が利用されている。「行為とその結果状態のセット」を内在型表現が描写可能なことで、行為の「図示」の一翼を担っていると言える。(193)は、主要部(「相手の右手」と主要部の環境としての背景(相手の体の部位や着衣との位置関係)まで主節他動詞の目的語の中に含み込んだ、モノ的な絵画的イメージが色濃い例である。

次の(194)では、画家が「ナス」に対して取った「行為」が時間軸に沿って表現される。絵画空間内の「ナス」の配置具合が、その配置行為の結果として描写されることで、絵画イメージの骨格が想像しやすくなっている。

(194) この方の絵も女人肌で毎年奉納なさっている。画家の中島千波さんは ナスを左向きに二つ、右向きに二つ置いたのを縦一列にして 描いている。このナスのシンプルな構図は新鮮で、ぼんぼりを引きたてさせていた。あちこちで、知名人のぼんぼりを見つける興味は尽きない。 2002 木村 しづ子(著) 柿の木の下で 日本随筆家協会  
2次元の平面に広がる「絵の構図」を、内在型構文が表現している。

(194)では、「ナス」の①左右方向の確定と②前後方向(奥行)の確定が、2段階で表現されている。まず、内在型の[現象知覚⇌対応要請察知]局面で、①左右方向が確定される。読者はそのイメージをしばし記憶することが期待される。次に、②主節他動詞に「縦一列にして」が使われ、読者が持った第一イメージに修正が加えられる。すると、前後方向(奥行)が確定され、目標とされる絵画イメージが得られる。ここでは、内在型で描写された「4個のナス全体の左右の方向のイメージ」が、「残像」として、「縦一列にして」という主節他動詞の対象として取り込まれている。第一イメージが修正される際、4個のナスは一つ一つ動かされるのではなく、全体が一気に「縦一列」になる印象が強い。内在型で描写されたイメージが、[事態参与者からの対応対象選出⇌対応行為実行]局面に持ち込まれている。

(194)の場合は、「ナス」が、内在型の「主要部」を取り巻く無地の「環境」から浮き立つ印象がある。その浮き立つ4個の「ナス」の位置関係がイメージの中で移動している。

#### 4.5.1.2 主要部内在型関係節と「現象描写文」

主要部内在型関係節は、「現象描写文」が形式名詞の「の」を連体修飾することで生成される。4.5.1.2では、本多(2005)の「現象描写文」に関する指摘を見ていく。

##### A. 「共同注意」

本多 (2005) は、「現象描写文」について、「共同注意」との関連で論じている。本多が「共同注意」という概念について整理して取り上げている箇所を引用する。

(195) a. 太郎が注意を向けているもの X に、私も注意を向ける (視線追従 (gaze following) など)。

b. 太郎の注意を、私が注意を向けているもの X に向けさせる、そのために、太郎の注意をまず私に向けさせる。

c. 私と太郎が同じもの X に注意を向けている。

d. 私と太郎が同じもの X に (ほぼ) 同じ位置から注意を向けている = 見えの共有。

e. 私と太郎が、同じもの X に注意を向けながら、その X をめぐって協調行動をしている (joint engagement)。 本多 (2005:202-203)

本多 (2005:202-203) では、一般的な用語の解説としては (195a) が提示されることが多いこと、また、実際の研究文献では (195e) のような意味で用いられることもあり、Tomasello (1999) や 宇野・池上 (2003) がこれに含まれることが指摘されている。

また、(195b) には、「(指令的/宣言的) 指さし」や「物の提示」が含まれるとされている。(195d) は、「現在の自分がいる観察点が、過去ないし未来の他者の観察点と同一でありうること、および現在の他者がいる観察点が、過去ないし未来の自分の観察点と同一でありうること、すなわち、観察点の公共性 (略) と、それに基礎づけられた視座の移動の能力 (略) に支えられて」(195c) から生じる、とされている。そして、「このことは、二人の知覚者が同時に完全に物理的に同じ観察点に立つという現実には不可能なことが起こらなくても」、(195d) が成立し得ることを意味しているとし、「この『視点を重ねる』(浜田 1999) ことが、言語理解の基礎をなしている (本多 2005:203)」としている。

#### B. 「指し言語」と「語り言語」(本多 2005)

本多 (2005) は、先に見た「共同注意」の観点から、一部の「現象描写文」に「指し言語」的な性格を認めている。「相手が受け止めてくれることを期待しながら相手の前に題目を投げ出す言語が指し言語 (本多 2005:242)」であり、「相手がそれを受け止めてくれることによって、自分が興味を抱いている対象を相手が共有してくれる、すなわち共同注意が成立することになる。(本多 2005:242)」としている。

本多 (2005) が「指し言語」と「語り言語」という言語の発達の二段階と、文法との関連について考察している箇所を引用する。

(196)            [略]            Gibson の言語観の一端を紹介した。それは、言語は話し手が知覚

しているものを同時に他者に知覚させる働きを持つものである (Gibson 1966:26)、すなわち本書の枠組みで言うならば言語には共同注意を成立させる働きがある、というものであった。その議論で Gibson が「言語」として想定していたのは語である。

Gibson (1966) はさらに、言語の特徴としての「語り (predication)」に言及している。Gibson のいう「語り」とは「事物について述べること (the making of statements about things)」(Gibson 1966:26) であり、これは文法 (grammar) と関連付けられている (1966:281)。また「語り」と「文法」は、それぞれ「ラベルづけ (labeling)」と「語彙 (vocabulary)」との対比関係におかれている (1966:281)。

この Gibson の言語観を踏まえて、Reed (1995, 1996) は、子どもの言語発達の進み方として、「指し言語 (indicational language)」から「語り言語 (predicational language)」へという二段階からなる経路を想定している。「指し言語」とはほぼ指差しを言語化したものと言えるものである。文法構造を持たず、それぞれの子供に特有の形式をもつ。一方「語り言語」とは、子どもの属する言語共同体で共有されている規範にのっとった言語形式をもち、また、規則に従った文法構造をもつ「生成的な言語 (generative language)」である。つまり指し言語と語り言語の違いは「各子どもに固有の形式をもつか、共同体の中で認められた形式をもつか」「統語構造をもたないか、もつか」ということにある。

Reed のこの議論を参照しつつ、本書では、「指し言語」と「語り言語」を次のように捉え直した概念を採用する。まず、「各子どもに固有の形式をもつか、共同体内部で認められた形式をもつか」という点は本書では考慮しない。本書は大人の文法知識を問題としているので、共同体内部で認められた形式のみを取り上げる。第二に、本書では「語り言語 (predicational language)」という概念を、文法構造全般ではなく、「題目に対する解説」と捉えることにする。文法構造の中でとくに共同注意との関連が深いのは、題目と考えられるからである。

したがって、「指し言語」とはほぼ指差しを言語化したものと言えるもので、共同注意的な場面、すなわち相手がこちらからの働きかけを受け止めてくれる態勢にあるとこちらが期待できる（こちらの投機行為に対するグラウンディングが期待できる）場面において、題目を選択し、相手の注意をそれに向けさせる言語のことになる。別の言い方をすれば、相手が受け止めてくれることを期待しながら相手の前に題目を投げ出す言語が指し言語である。相手がそれを受け止めてくれることによって、自分が興味を抱いている対象を相手が共有してくれる、すなわち共同注意が成立することになる。

一方「語り言語」としては、題目を選択し、相手の注意をそれに向けさせた上で、それについて語る言語を考える。別の言い方をするならば、指し言語という形で相手の前に投げ出した題目について、何かを語るまで到達している言語を語り言語とする。

[略]

この考え方では、Gibson や Reed のもとの見解とは異なり、指し言語と語り言語をそれぞれ語と文に対応させることはしない。以下に見るように、文の中には本書の意味での語り言語に含まれるものばかりではなく、指し言語的な性質を強くもつものもあるからである。

本多(2005:241-242)

### C. 「指し言語」<sup>32</sup>としての「現象描写文」(本多 2005)

本多(2005:247)は、一部の現象描写文が、「指し言語的な性質を強くもつ」とし、(197)のような現象描写文を例に挙げる。

- (197) a. からすが飛んでる。 (本多の(337a))  
b. 雨が降っている。 (三尾 1948:46) (本多の 337b))  
c. わあー、空がとても青い。 (本多の(337c))  
d. 見てみな、波が荒いよ。 (本多の(337d))  
e. おーい、山の端が真っ赤だ。 (本多の(337e))  
f. あっ、隣が火事だ。 (仁田 1991:123, 124) (本多の(337f))

また、現象描写文の一般的な捉え方を(198)のように指摘している。

- (198) (三尾 1948:64-65)、(仁田 1991:122)によれば現象描写文とは、ある時空のもとに生起、存在する現象をそのまま主観の加工を加えないで言語表現化して述べ伝えたものである。主観の加工・判断作用を加えていない文であるため、仁田(1991)の言う「判断のモダリティ」は存在しない。したがって、文としては無題文であり、文全体が新情報の提示

<sup>32</sup> 本多(2005)では、他に、「指し言語」の諸相として、次のようなものを取り上げられている。

- i) 一語文  
ごきぶり！／お茶！ (本多(2005:243))  
ii) 一名詞句文(連体修飾構造)  
a. きれいな花！  
b. ひろい部屋！ (本多(2005:245))

本多(2005)は、このうち、一語文に関して、次のように指摘している。

- iii) これらの発話は、モノを相手に対して提示してそれに注意を向けさせる行動に対応すると考えられる。ただしモノそれ自体を提示するのではなく、言語表現という表象を介して共同注意を達成している。すなわち、モノの表象を題目として投機しているわけである。指し言語である一語文は指さしと同様の機能を帯びていると考えられる。

本多(2005: 243)

となる。そして現象描写文のなかに感情体験を意味するものがあるという指摘が国語学の文献でなされている。 本多(2005:247)

そのうえで、一部の現象描写文を「指し言語」とする理由を次のように述べている。すなわち、本多(2005)の枠組みでは、(197)のような例は、「知覚者・話者の視野の中にある〈コト〉を表象の形で相手に対して提示してそれに注意を向けさせる、共同注意のための発話であり、コトを分析せずに丸ごと表象化して題目として投機する発話である。題目を受ける解説に相当するのはコトの認識に伴う話者の感情的な経験であるが、これは見えの共有による共感形成によって伝えられることになる(本多2005:247)」としている。

主要部内在型関係節の表現者は、当該関係節によって描写される「現象」の知覚者である(想起・想像する場合を含む)と想定される。従って、本多(2005)の枠組みに照らせば、当該関係節の表現者が、この表現形式を、指し言語的な性格を持つものと感じている可能性がある。本多(2005)の枠組みに単純に従うなら、当該関係節は「現象描写文」性の指し言語的な性格を持つことになる。

しかし、無視できない相違点もある。本多(2005)は「文」としての「現象描写文」を「指し言語」的な構文としていて、体言化された「現象描写文」を「指し言語」的としているのではない。さらに、主要部内在型関係節には、文脈内に個物を導入する性格が認められるものの、当該関係節と主節他動詞との関係を、本多(2005)の「題目として投機する」部分と、「題目を受ける解説に相当する」部分との関係に相当すると捉えるのはかなり困難である。

#### 4.5.1.3 主要部内在型関係節と「その場の関心固定ツール」(菊地:2006)

菊地(2006)は、「主題性の無助詞」に「何かはその場(対話の場)の関心をフィックスする」機能を認めている。内在型がモノ的な絵画的イメージを帯びる場合や、描写事態の「主要部」を取り巻く「環境」が、主要部と「連動」して主節他動詞の対象として取り込まれる現象には、この「何かはその場(対話の場)の関心をフィックスする」機能と類似の機能が関係していることが示唆される。また、この菊地(2006)の指摘は、本多(2005)が「現象描写文」の一部に「指し言語」的な性格を認めている点とも符合する。当該関係節の主要な構成部分を成す「現象描写文」に、「指し言語」的な性格や「何かはその場(対話の場)の関心をフィックスする」機能を想定することで、自然な理解が得られると考えられる。

ここで、菊地(2006)の指摘を確認する。菊地(2006)は、「 $\phi$ は無助詞をあらわす」としたうえで、次のような指摘をしている。以下引用する。



(199)  $\phi$ は、「何かはその場（対話の場）の関心をフィックスし、それについて、その場で必要なやりとりをしようとする」場合の手段（その場の関心固定ツール）として機能する。

菊地 (2006:23)

菊地は、『 $\phi$ の特徴』によって $\phi$ が使われるという場合のほか、他に候補となる助詞が（いずれも）使いにくい場合の方策として $\phi$ が要請されるだけ、と見られるケースもある（菊地 2006:22）」とする。

菊地 (2006:22) は、(200)の例を挙げ、

(200)

a. 雨 $\phi$ 降って（い）ますか？（久野 973:218, 注7）（菊地の(29)）

b. はさみ $\phi$ ある？（尾上 1987, 1996）（菊地の(30=21a 再)）

c. あっ、この時計 $\phi$ 止まってる。（甲斐 1992:102, 例(4)）（菊地の(31)）

d. [ずっと山田さんを探している] あれっ！ 山田さん $\phi$ あんなところにいるよ。

（大谷 1995:289, 例(11)）（菊地の(32)）

e. コーヒー $\phi$ 飲みます？（長谷川 1993:165, 例(37)）（菊地の(33)）

(200a)～(200d)は、いずれも、「ハとガの勢力関係の狭間で $\phi$ が要請される場合である」としている。つまり、「主題性（有題文性）と現象文性をともに有していて、ハ・ガのどちらを使うというわけにもいきにくく、 $\phi$ が使われるのだと見られる」とする。「一部のケースでは、ハを使えば対比性が、ガを使えば排他性が出るということにもなりやすく、 $\phi$ はそれを避けることにもなっている」とし、(200e)は、「ハを使えば対比性、ヲを使えば排他性が出かねないケースである。このように、 $\phi$ は、まさに無形ならではの「便利屋」的な機能を負わされる面がある（これらの $\phi$ は、本稿冒頭で述べた「主題性の $\phi$ 」か「非主題性の $\phi$ 」か見きわめがたいケースもある）」としている。

(200)については、「他に候補となる助詞が使いにくい場合の方策として $\phi$ が要請される場合がある」として、(201)のようにまとめられている。

(201)

1) 主題性（有題文性）と現象文性をともにもつ場合は、 $\phi$ が使われる。

2) ハを使えば対比性が感じられてしまい、それを避けたい場合、および、ガなどの格助詞を使えば排他性が感じられてしまい、それを避けたい場合は、 $\phi$ が使われる。

菊地 (2006:24)

菊地 (2006) は、主題性の無助詞を、「それについて、その場で必要なやりとりをしよう

する」場合の手段としている。その場のフィックス対象としては、モノやコトが想定される。一方、主要部内在型関係節は、現象描写文が「の」によって体言化されるものであり、事態を表す。その点は異なるが、当該関係節による描写事態に対応して取られる行為が後続の主節他動詞で表され、主要部内在型関係節構文が形成される。従って、主節他動詞が表す対応行為の対象事態が当該関係節としてその場にフィックスされていることが想定される。

#### 4.5.1.4 その他のモノ的絵画イメージや主要部環境の取り込みが観察される実例

内在型に、菊地（2006）が「主題性の無助詞」の機能として指摘する「その場の関心固定ツール」性があることが独特の形で示されているのが、次の(202)である。

(202) …弔辞には、「冗談じゃないよ、和子ちゃん」いう題で書いたけどさ、冗談じゃない死に方したね。彼女はママ（かし子さん）がおって、毎日毎日、ママを お見舞いに行ってた のを残して死んだから。フランス映画社は柴田さんという社長がいるの。だからまだいいけど、  
1994 横尾 忠則(著)/ 淀川 長治(著) 二人でヨの字 筑摩書房  
主節他動詞として「残して」が使われている。「彼女」が「死んだ」ことによって、結果的に、「ママを」「残して」しまう事態になった。

(202)の「残して」には、定型表現、あるいは、やや破格な表現としての印象もある。しかし、仮に目的語を補文節として捉えると、意外なほど自然に感じられる。残したのは、ママだけでなく、「彼女は…、毎日毎日、ママをお見舞いに行ってた (の)」という、「補文節で表されているような記憶残像」を表現者に残して、「和子ちゃん」が「死んだ」と捉えるのである。ママを残しただけでなく、けなげな娘である「和子ちゃん」の、繰り返される「お見舞い」の記憶を、表現者に残したのである。

通常は、「彼女は…、毎日毎日、ママをお見舞いに行ってたの」という内在型で表される事態を表現者が「その場の関心固定ツール」性を生かして捕え、そこを起点として「対応」が為される事態が描写されるのだが、ここでは、「その場の関心」は固定されたまま、彼女の死と共に「残されてしまった」と言える。

(203) カセット・テープは、取り敢えず母の遺品が手箱にいっぱいあったのをそのまま持って来た。晩年の母は音楽が最上の慰めで、とりわけ歌曲を愛し、

1991 桐島 洋子(著) 刻のしづく 世界文化社  
文頭で、「カセット・テープは」と主題が示され、発見された事態（「母の遺品が手箱にいっぱいあった」）が内在型で表現されている。指示物は、「母の遺品」と言い換えられている。

(203)には、「そのまま」とあるが、厳密には、「そのまま」持ってくることは不可能である。カセット・テープが手箱にあるという「発見」状態のまま、「手箱」のふたを開けたまま持ってくることは、現実離れしている。仮に「手箱」にふたが無かった場合でも、「発見」時の状態のまま持ってくるのは、困難である。一方、「そのまま」は、「特に選別などせずに」持ってくる、という意味とも考えられる。しかし、次のように捉えるのが妥当だと考えられる。すなわち、話者は、手箱の中に、遺品であるカセット・テープが「いっぱい」あるという、遺品発見の小さな驚き、あるいは、小さな感動を「そのまま」持ってきたのである。それを支える文法機構が、内在型であると言える。「事態参与者」であるカセット・テープを、主節他動詞で表される対応行為の対象として選出する際に、「発見事態の小さな感動」という、カセット・テープを取り囲む「環境」まで、当該他動詞の「持って来た」が対象として取り込んでいると考えられる。「取り敢えず」という語が含意するのも、発見事態の雰囲気に入れずに、「取り敢えず」、「持ってきた」という意味合いだと感じられる。

(204) ヴィオラ奏者で、バルトークにヴィオラ協奏曲を委嘱し初演したプリムローズも、外国人教授として芸大に招かれ官舎に住んでいたことがある。彼が日本に滞在したのは昭和四七年からだが、その時の名前入りの家具が 残っていたのを ピュイグ＝ロジェ 先生が 発見し、彼と同じ官舎に住むことに光栄を感じておられた。

((164)を(204)として再掲)

2003 永富 正之(著) ある「完全な音楽家」の肖像

アンリエット・ピュイグ＝ロジェ|著;船山信子|編 音楽之友社

(204)では、「家具が残っていたのをピュイグ＝ロジェ先生が発見し」とあり、「家具」はもちろん、「家具」が発見された空間である「官舎」までが、「家具」を取り巻く「環境」として、言語化されることなく知覚内容に含まれてくる。内在型の「の」節が持つ「その場の関心固定ツール」性は、「主題性の無助詞」のような単体のモノではなく、「現象事態」全体を固定する。そのため、「家具」を取り巻く空間、場所としての「官舎」も想起可能になる。「その時の名前入りの家具」を取り巻く、ピュイグ＝ロジェ先生にとって重要な「環境」への言及が、次の「彼と同じ官舎に住むことに光栄を感じておられた」という表現である。この表現が、内在型表現を通して、効果的に導入されていると考えられる。「発見し」の対象は、直接的には、「その時の名前入りの家具」というモノだが、内在型の「その場の関心固定ツール」性が、「現象事態」を固定することで、モノと共にそのモノを取り巻く「環境」も、発見対象に取り込まれてくる印象がある。

「テ形・連用形」を使用して表現した場合、「その時の名前入りの家具が残っていて、ピュイグ＝ロジェ先生が（それを）発見し」となる。発見されることになる事態である「家具が残っている」様が、あらかじめ、説明的な表現部分で知らされてしまう構造になる。

外在型の場合は、「残っていたその時の名前入りの家具をピュイグ＝ロジェ先生が発見し」となる。被修飾名詞句である「その時の名前入りの家具」に焦点が当たる。この場合、その後続く、「彼と同じ官舎に住むことに光栄を感じておられた。」と矛盾するわけではない。しかし、内在型表現には、この「彼と同じ官舎に住むことに光栄を感じておられた。」という感情表現と「主要部とそれを取り巻く環境」の発見の間に、緊密な関係がある印象が強い。

次の例は、視線の向く先の自然さに関わる。

(205) 私達は 二、三の新聞が、いち早く、グロース・シュレックホルンに於ける私達の遭難を 伝えたのを切りぬいて、暢気な旅に於ける出来ごとが、決して夢でなかったと云う証拠にしようとした。

(96)&(137)を(205)として再掲

1998 辻村 伊助(著) スウィス日記 平凡社

視線の方向は、内在型構文の場合には、①新聞の全体 → ②遭難を伝えた記事の部分、と移動する。これは、新聞の記事を切りぬく際の、視線の移行順序と調和している。一方、外在型を使用した文は、「私達は、いち早く、グロース・シュレックホルンに於ける私達の遭難を伝えた二、三の新聞を切りぬいて」となる。視線の方向は、最後に、二、三の新聞に向かう。内在型構文では、焦点が、新聞全体から「記事掲載部分」に絞られ、「切り抜く」箇所に視線が移動するが<sup>33</sup>、外在型では、最後に新聞全体に向かう印象が残る。

内在型構文では、新聞全体と記事掲載部分の大小関係が、内在型の「その場の関心固定ツール」性によって目的語環境内に取り込まれてくる印象がある。

#### 4.5.2 主要部内在型関係節構文内に想定される修飾機構

4.5.2 では、主要部内在型関係節構文内に想定される修飾機構について考察する。

<sup>33</sup> Langacker (1990)の Active zone という捉え方が、(191)の視線の移動の理解に役立つと思われる。文字通り読めば、「新聞」全体を切りぬくことになり不合理だが、「新聞」の「記事掲載部分」が「新聞」の Active zone (活性化領域) に当たると考えれば分かり易い。まず、全体としての「新聞」に視線が向かい、次に「記事掲載部分」に向かうと捉えられる。「新聞」と「記事掲載部分」との関係は、「全体」と「部分」の関係になる。一般に、内在型と内在型主要部との関係は、「全体」と「部分」の関係にあるが、この例の場合、「新聞」＝「主要部」、「記事掲載部分」＝「主要部」内部環境、Active zone (活性化領域)＝「記事掲載部分」という関係にあると考えられる。

本論文が「修飾」機構と呼ぶのは、①主節他動詞の使用で、従属節内の名詞句が目的語相当と解釈される際の、当該名詞句と当該名詞句を特徴付ける要素との間に想定される緊密な関係性のことを指し、②英語の一般的な関係節に見られる「〈もの〉を〈こと〉」から取り出して露呈する（池上 1981）」機序と対照的な側面と類似的な側面を持つ現象を指す。

4.5.2.1 では、「〈もの〉を〈こと〉」から取り出して露呈する（池上 1981）」英語の関係代名詞の構文について見る。4.5.2.2 で、三好（2021）、4.5.2.3 では、岸本・菊地（2008）について確認した後、本論文が主要部内在型関係節構文内に想定する修飾機構について述べる。

#### 4.5.2.1 英語の関係節構文との対照と主要部内在型関係節構文内の修飾機構の想定

池上（1981）は、以下のような指摘をしている。

(206) 〈個体への注目〉と〈全体的状況への注目〉という対立は、日本語における〈もの〉と〈こと〉の対立を想起させる。池上（1981:256）

(207) 英語はむしろ〈もの〉を〈こと〉から取り出して露呈する。関係代名詞の構文をこの視点から考えてみると興味深い。池上（1981:258）

(208) [...] The fact that the relative clause construction has never been developed in Japanese is simply a natural consequence of the conflict between the *koto*-oriented character of the Japanese language, on the one hand, and the essentially *mono*-oriented character of the relative clause construction. The function of the relative clause construction is to focus on a *mono* entity involved in the event to be described, take it out of the frame of *koto* event, give it a special grammatical status as ‘antecedent’ and hang on it as a subordinate clause the remains of the destroyed *koto* event. [...] (Ikegami, Y. 1991:295)

Ikegami（1991）は、(208)に続けて、(209)と(210)の英文について述べている。

(209) I remember a party of graduate students to which I was invited at the University of Chicago many years ago. (Ikegami, Y. 1991:295)

(210) I remember that I was invited to a party of graduate students at the University of Chicago many years ago. (Ikegami, Y. 1991:296)

(209)では、私が覚えているのは‘a party of graduate students’ というモノであるのに対して、(210)では、‘I was invited [...] many years ago’ というコトであるとされている。両者の内、日本語で好まれるのは、(209)のコトからモノとしての‘a party of graduate

students' が取り出されそこに焦点が当たるような文のタイプではなく、(210)のように、それがコトの中にその一部として残っているようなタイプであると指摘されている。

また、Ikegami (1991) は、内在型構文に関して、'It is interesting to note that instead of the *mono* type relative construction, Japanese has traditionally a peculiar *koto* type quasi-relative construction.' (Ikegami, Y. 1991:296) と指摘している。

英語の一般的な関係節が「〈もの〉を〈こと〉から取り出して露呈する(池上1981)」とすれば、主要部内在型関係節構文では、「〈もの〉を〈こと〉から取り出す」が、「露呈」せず、「取り出し」も、想定されるに止まる。<sup>34</sup>

尚、英語の関係節の一部に、通常の関係節の「修飾」機能ではなく、直前に隣接する不定の名詞句と連動することで「断定」機能を担うと考えられるものがある。このタイプの関係節構文と内在型構文との関係性については、5.1.1で取り上げる。

#### 4.5.2.2 三好(2021)による「連体修飾」の範囲の確認

三好(2021)は、連体修飾節の議論に先立って、「連体修飾」の範囲を確認する作業を行っている。参考になる点である。三好(2021)は、(211)のように述べている。

(211) そもそもここで問題にする「連体修飾」とはどういった範囲のものであるのか、ということを確認しておく必要があるだろう。周辺のなものまで含めれば、以下の例はいずれも「何らかの形で名詞を修飾している(主要部である名詞(句)に対し、何らかの付加的な要素が現れている構造である)」と言える。 三好(2021:4)

(212)~(217)が例として挙げられている。

〈連体修飾節〉

(212) a. この大学に通う男性を紹介された。

b. 彼が結婚しているという事実に驚いた。 三好(2021:4)

〈連体修飾句〉

(213) a. この家の女性に会いました。

b. 会社勤めの人は週末まで仕事をしている。 三好(2021:5)

<sup>34</sup> 池上(1981)は、「〈もの〉的な対象まで〈こと〉的に現象化されうる」とし、「現在でも、『子供ガ泣イテイルノニ出会ッタヨ』とか『子供ガ泣イテイルノヲ助ケテヤッタヨ』というような表現は日常ごく普通である(池上1981:260)」としている。続けて、次のように指摘している。

i) 「泣イテイル子供ニ出会ッタヨ」とか「泣イテイル子供ヲ助ケテヤッタヨ」と言う方が確かに論理的なのであろうが、余りに個体の輪郭が強く出過ぎて『固い』表現と感じられるのである。 池上(1981:260)

〈コト／ノ節の補部〉

(214) a. 花子が学校にきた の／こと を知っている。

b. 彼女が買ったのを私も買いたいと思った。

三好 (2021:5)

〈数量詞〉

(215) a. 7人の侍が村にやってきた。

b. 学生はほとんど研究室で話していた。

三好 (2021:5)

〈指示詞〉

(216) a. その人は家で小型犬を飼っている。

b. この本は近くの書店(で)買いました。

三好 (2021:5)

〈連体詞〉

(217) a. あらゆる動物が地球上で暮らしている。

b. いわゆる動く歩道で歩くのは苦手です。

三好 (2021:5)

これらの内、(212) (213)の一重下線部については、「何らかの性質・状態を付け加える修飾」として機能しているとし、一方、(214)～(217)の一重下線部は、「名詞句を特定化する修飾」として機能しているとする (三好 2021:5)。そして、「『名詞句に何らかの性質・状態を付け加える修飾』と『名詞句を特定化する修飾』を区別し、それぞれ〈叙述的修飾〉と〈量化的修飾〉と呼ぶ」として、(218)を示している。

(218) 〈叙述的修飾〉と〈量化的修飾〉

〈叙述的修飾〉…主要部の名詞句に対し、何らかの性質・状態を付け加える修飾。

〈量化的修飾〉…主要部の名詞句について、存在量や照応情報を定める修飾。

三好 (2021:6)

以上を踏まえ、三好 (2021) は、「連体修飾」の範囲を以下のように確認している。<sup>35</sup>

<sup>35</sup> 三好 (2021) は、次のような「連体修飾要素の分類」を提示している。

i) 連体修飾要素の分類 (三好の(2.69))

〈非制限的修飾〉……被修飾名詞句が表示する事物に対し、何らかの背景的な情報を付け加える修飾。

〈制限的修飾〉……被修飾名詞句が表示する事物から、その一部を取り出す修飾。

〈範疇限定〉……恒常的な属性によって被修飾名詞句を限定し、集合名詞に対して制限的解釈が成立する修飾。

〈時間限定〉……時間領域の属性によって被修飾名詞句を限定し、集合名詞および個体名詞に対して制限的解釈が成立する修飾。

〈可能世界限定〉…可能世界の属性によって被修飾名詞句を限定し、集合名詞・個体名詞・個別事象名詞の全てに対して制限的解釈が成立する修飾。

三好 (2021: 53-54)

(219) 結局、本書で「連体修飾」と見なすのは、「略」「形態的に連体修飾であることが明確であり、かつ、名詞句に対し叙述的修飾として機能しているもの」と規定される範囲のものになる。三好 (2021:7)

#### 4.5.2.3 主要部内在型関係節構文に想定される修飾機構

三好 (2021) が、連体修飾節以外のものも含めて「何らかの形で名詞を修飾している」とするものは、修飾構造部分が成立すれば、文の完成を待たずに当該部分のみで修飾機構が確定する。一方、主要部内在型関係節構文内に想定される修飾機構は、主節他動詞の生起と共に複文が完成され、それと同時に、結果的に修飾機構が想定される。従って、主要部内在型関係節構造に見られる修飾機構に関しては別途考える必要がある。

岸本・菊地 (2008) は、指示修飾と指示物修飾について(220)のように指摘している。

(220) 形容詞が、名詞の表す概念を修飾する場合、名詞が指示する概念を修飾するという意味で、指示修飾 (reference modification) と言う。これに対して、形容詞が名詞で指示される外界の指示物を修飾する場合、指示物修飾 (referent modification) と言う (Bolinger 1967; 安井他 1976)。たとえば、John is a good cook. という例では、good は、主要部名詞の cook が表す概念である「料理人」を修飾し、「料理人として有能な人物 / 腕が立つ料理人」という指示修飾の解釈を持つのが通例であるが、a cook で指示される人物を修飾し、「善良な料理人」という指示物修飾の解釈も可能である。このような多義性は、主要部名詞が一定の機能を表す場合に現われるのが通例で、John is a good person. のような例では、指示物修飾の解釈しかない。 [略] 岸本・菊地 (2008:108)

主要部内在型関係節構文は、基本的に、従属節・主節とも「現象 (描写) 文」を生成することから、想定される修飾機構は、指示修飾ではなく指示物修飾となると考えられる。また、当該関係節内の主要部が主節他動詞の目的語相当の機能を発揮する際には、主要部の指示性は定まっていると解される。従って、先に見た、大島 (2010) の分類で言えば、連体修飾の基本的な機能である「属性限定」機能は、「集合限定」の機能の発動には至らず、「属性限定」に止まると考えられる。

主要部内在型関係節構文内に想定される修飾は、「指示物修飾」であり、「現象 (描写) 文」生成の直後に主節他動詞の生成と同時に想定されるものである。ここから、本論文では、主要部内在型関係節構文内に想定される修飾機構は、「主要部に主要部内在型関係節で描写された事態に参加したという属性を付与する修飾機構」と捉えることにする。(221)に、「主要部

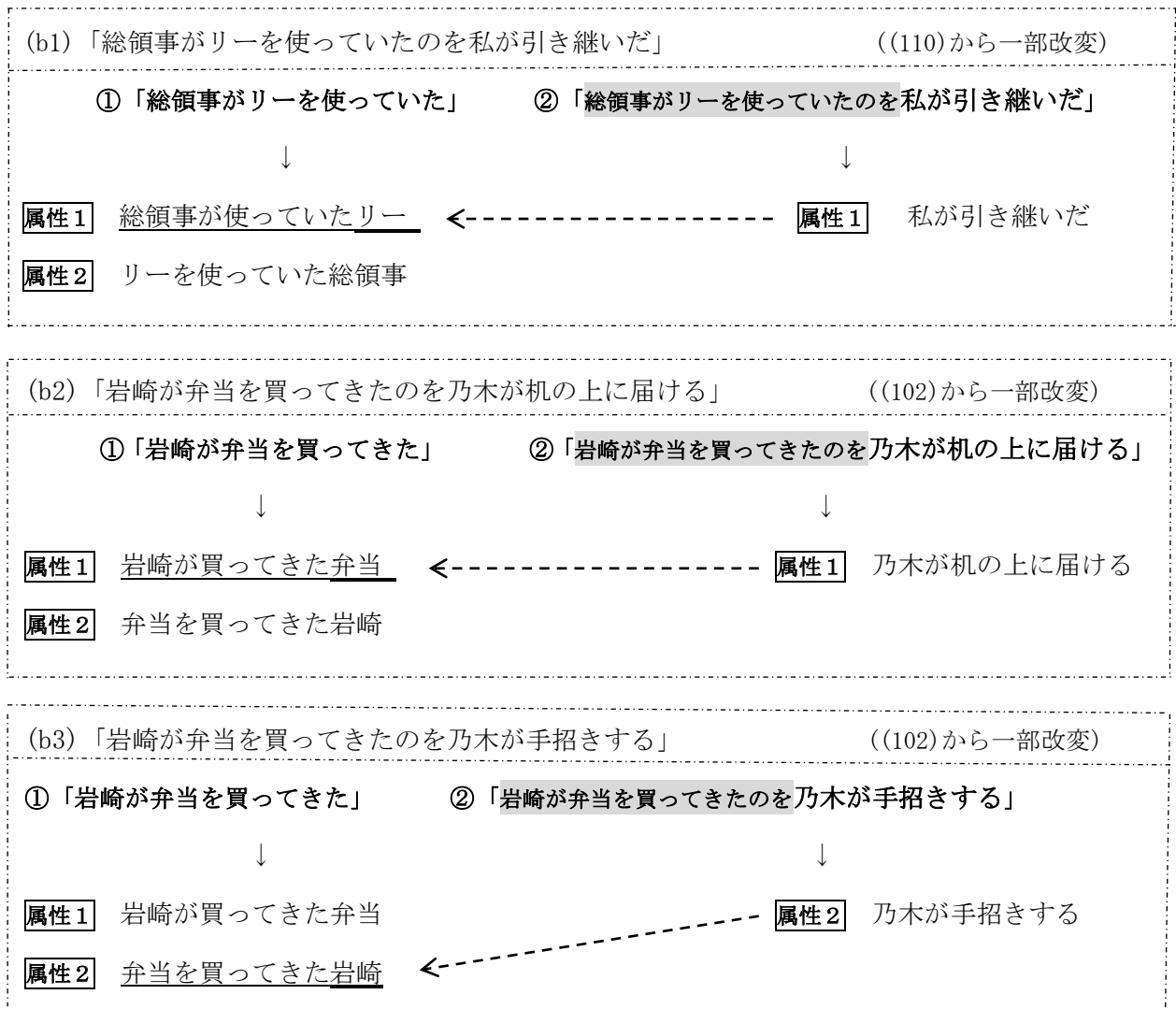


内在型関係節構文内に想定される修飾機構」を図式的に示す。

(221) 主要部内在型関係節構文内に想定される修飾機構

- a. 主要部に、主要部内在型関係節で描写された事態に参加した、という属性を付与する。
- b. 修飾機構の図示

以下の(b1)～(b3)で、属性1 属性2と属性が複数表記されているのは、主節他動詞が生成される前の主要部内在型関係節段階では、主要部候補が複数有り得るからである。想定される修飾関係は、可視化するために、連体修飾節構造によって表示してある。



主節他動詞が生成される前の主要部内在型関係節段階では、主要部候補が複数有り得る。その中で、(221b2)の場合は、主節他動詞が「(机の上に)届ける」であるため、動詞との共起関係により「弁当」が被修飾名詞句（主要部）相当となり、(221b3)の場合は、主節他動詞が「手招きする」であるため、動詞との共起関係により「岩崎」が被修飾名詞句（主要部）

相当となる。

尚、4.3.5.3 で、主要部内在型関係節の連鎖現象に触れた。場合によっては、連鎖現象も生じ得る。その際は、3度目以降の新たな陳述（断定）毎に、関係する事態参与者に、当該「事態に参加したという属性」が加わるものとする。（3度目の陳述（断定）が為された場合には、関係する事態参与者に、2度目の陳述（断定）で描写された事態に参加した、という属性が加わる。）

#### 4.6 主要部内在型関係節構文の使用状況から観察される基本的な語用論的特徴の整理

本節では、B C C W J から得られた主要部内在型関係節構文に共通して観察される表現内容の性格を、「気付きとその内容とそれへの対応」と捉え、関連する語用論的特徴を見ていく。

##### 4.6.1 主節主語と主要部内在型関係節との位置関係によって生じる表現効果上の差異

主要部内在型関係節構文の主節主語の生起位置とその表現効果との関連について見ていく。

(222) (私の)娘が紙飛行機を飛ばしたのをイチローが追いかけている。

(223) (私の)娘が飛ばした紙飛行機をイチローが追いかけている。

(224) イチローは(私の)娘が紙飛行機を飛ばしたのを追いかけている。

(225) イチローは(私の)娘が飛ばした紙飛行機を追いかけている。

(226) イチローが(私の)娘が紙飛行機を飛ばしたのを追いかけている。

(227) イチローが(私の)娘が飛ばした紙飛行機を追いかけている。

(228) (私の)娘が紙飛行機を飛ばしたのをイチローは追いかけている。

(229) (私の)娘が飛ばした紙飛行機をイチローは追いかけている。

(222)(223)は、表現者が、事態を、娘とイチローをほぼ同一の方向に捉えられる位置から知覚し、それをほぼそのままの様相の描写となるように表された表現と位置付けられる。その内、(222)では、連続する出来事が一体化された事態として捉えられ、(223)では、事態参与者の一部(「紙飛行機」)に、先行する事態に参加したという属性が付与されている。

(224)(225)は、「は」が使用され、主節主語の「イチロー」が主題化されている。少なくとも、二通りの読みが考えられる。一つは、従属節による描写事態が、「イチロー」の視点からの知覚事態として捉えられることが期待される描写。もう一つは、(222)(223)に見られる継起的事態の基本的事態把握を、「イチロー」を主題に設定して捉え直すのに止まる描写、である。(224)は前者の読みが強く、(225)は、後者の読みが強いと考えられる。

次の(230)(231)を見てみよう。

(230) イチローは[ピッチャーがボールを投げたの]を打った。 ((19)を(230)として再掲)

(231) イチローは[ファンが紙飛行機を飛ばしたの]を追いかけた。

(231)の場合、(222)(223)のような基本的事態把握の単純な捉え直しの読みも有り得るのに対して、(230)では、基本的に、「イチロー」の視点からの知覚事態として捉えられること

が期待されている描写だと考えられる。(230)の場合、瞬時に行われる連続した行為が描写されている。スポーツ中継などでも、打者がピッチャーの投球を待ち構える構図から捉えられることが多い。一方、(231)の場合は、連続する行為に一定の時間がかかる。イチローを主題として設定するような、基本的事態把握からの捉え直しが生じる時間的余裕も十分ある。描写された出来事が起きた時点とその言語化が為され表現される時点が異なれば尚更である。

主節主語のイチローが従属節の前に位置し、「が」が付加された(226)(227)の場合、(222)(223)よりも、「イチロー」に焦点が当たる印象が強まる。「は」を伴う主節主語イチローが、従属節の後に生起する(228)(229)は、描写される事態発生を受けて主節主語がどう臨むのか、主体の対応選択に焦点が当たる印象が強い。

連体修飾機構との関係で注目されるのが、(223)(225)である。共に、文全体には、臨場性が感じられる。臨場的な表現内でも、連体修飾機構は機能すると言える。しかし、一方で、連体修飾節構造が使用される場合は、連続する行為の一体性は背景に引いてしまう。

#### 4.6.2 「気づきとその内容とそれへの対応」と主節他動詞の意味内容

主要部内在型関係節構文に共通して観察される「気づきとその内容とそれへの対応」という表現内容の特徴は、主節他動詞の意味機能からも窺える。本章(91c)では、最も使用数の多いのが知覚動詞あるいは知覚動詞に準じる動詞で、「発見する」「見る」「見つける」等を合計すると25例(「視覚」が関わるもの)観察されることを見た。いずれも、動詞の意味内容に「気づき」の要素が含まれ、その「内容」が表現されることが求められる動詞である。また、本論文では、主節他動詞が「相手の動きや状態に対する働きかけを表す動詞」であっても、すなわち、「事態」を目的語とするような動詞であっても、「事態」内のモノやヒトが際立つ場合には、主要部内在型関係節構文に含めることにしている。そのような性格を持つと考えられる「助ける」「制する」「止める」等の動詞も22例観察されている。「相手の動きや状態に対する働きかけ」を行うには、事態への「気づき」が必要であり、それを前提として、それに続く「働きかけ」の「内容」が個々の動詞で表現されることになる。

注目されるのが、「拾う」等の動詞が9例観察されていることである。「拾う」は、「知覚」や「相手の動きや状態に対する働きかけ」を特に表す動詞ではない。一方で、「拾う」には、「通常の正規の位置から外れて落ちているものを発見して手にする」意味合いがある。本来的に、「発見」の要素が含まれているのである。(232)～(234)等の例がある。

(232) 如了 あなたは元気でいいわねえ。若いし、丈夫だし。トキ ほかにとりえがありませんから。なにしろ十八年前の冬の朝、あの銀杏の木の下で捨てられて泣いていたのを、執事の玄英さまに拾われて養女にさせていただいた身ですもの。

1995 五木 寛之(著) 蓮如 中央公論社

(233) 彼女らは飢饉のとき道端に捨てられていたのを、彼女に拾い上げられ、養われ、教えられ、清らかで滅びることのない生へと手ずから導かれた者であった。

2003 土井 健司(著) 古代キリスト教探訪 新教出版社

(234) 彼女は名乗らなかった。それを無礼だとは思わなかった。町を歩いていて、とてもきれいで儂いものが道端に落ち、無神経な人間に踏まれそうになったのを、そっと拾いあげて守ったような、そんな気分が残っていた。しばらくのあいだ、それを大事に持っていたいと思っていた。数日後、編集部気付で、私宛に手紙が来た。

2003 宮部 みゆき(著) 誰か 実業之日本社

#### 4.6.3 「気付きとその内容とそれへの対応」と2局面表現としての内在型構文

菊地(2006:23)は、「主題性の無助詞」は、「『何かにその場(対話の場)の関心をフィックスし、それについて、その場で必要なやりとりをしようとする』場合の手段(その場の関心固定ツール)として機能する」としている。無助詞が使用される文に、2つの局面(①フィックス局面 ②当該無助詞部分の項関係等への組み込み局面)を認めていることになる。

主要部内在型関係節構文も、2局面から成る表現である。当該関係節構文は、関係節が項の中に組み込まれる複文内で、陳述(断定)が2回繰り返されると考えられる。1回目は「現象文」によるもので、「気付きの内容」が表される。2回目は、それへの「対応」行為が陳述(断定)される。2回目の陳述(断定)の際には、1回目の描写事態の中から対応対象が選ばれ、「現象文」によって導入されたばかりの事態参与者から主要部が選出されることになる。

菊地(2006)が「主題性(有題文性)と現象文性をともにもつ場合は、 $\phi$ が使われる」として挙げた(235)~(239)を見てみよう。 ((200a)~(200e)を(235)~(239)として再掲)

(235) 雨 $\phi$ 降って(い)ますか? (久野 1973:218, 注7) (菊地の(29))

(236) はさみ $\phi$ ある? (尾上 1987, 1996) (菊地の(30=21a 再))

(237) あっ、この時計 $\phi$ 止まってる。(甲斐 1992:102, 例(4)) (菊地の(31))

(238) [ずっと山田さんを探している] あれっ! 山田さん $\phi$ あんなところにいるよ。

(大谷 1995:289, 例(11)) (菊地の(32))

(239) コーヒーφ飲みます? (長谷川 1993:165, 例(37)) (菊地の(33))

上の(235)~(239)内の「雨φ/はさみφ/この時計φ/山田さんφ/コーヒーφ」の各部分は、「意識対象」とされることが期待されて談話内に提示される際には、「新情報」(現象文が持つ情報価値と同じである)性を担うと考えられる。(237)には、「この」という現場指示的な指示詞が含まれ、「談話」的には旧情報性が感じられる。しかし、「この時計」の部分は、改めて「意識対象」として捉え直された上で後続部分と共に文を形成するという点で、「聞き手」にとっては、新情報性を帯びるものの提示となる。また、(238)の場合も、[ずっと山田さんを探している]ことから、「談話」的には旧情報性が感じられるが、新たに「発見」を語ることになるという意味で、「聞き手」にとっては新情報性が生じると考えられる。

(235)(236)(239)は、疑問文である。「雨φ/はさみφ/コーヒーφ」の各部分は第1局面で新情報として提示されてフィックスされ、第2局面で動詞と項関係を結ぶ中で問いが発せられている。「が」は文の主語を表示するが、その文全体が新情報を担うため、本来、1つの局面から成る表現での使用が自然である。そのため、(235)(236)のように、①話者聴者間の「意識対象」の共有局面と、②述部部分での、対象に関する質問内容伝達局面の、2局面構成が自然な場面では、「が」の使用は不自然になる。フィックス局面無しで、「が」による表現がふさわしいのは、表現者自身が事態発見を述べる場合だと考えられる。また、(239)で「を」を使用すると、「コーヒーを飲みます?」となる。この場合もフィックス局面無しで自然なのは、相手への問いではなく、表現者自身の意思表示をする場面だと考えられる。

菊地(2006)が「主題性(有題文性)と現象文性をともにもつ場合は、φが使われる」として挙げた(235)~(239)の例で、「雨φ/はさみφ/この時計φ/山田さんφ/コーヒーφ」の各部分で文を中断することは、基本的に、想定されていないと考えられる。これによく似た特徴を主要部内在型関係節構文も共有しており<sup>36</sup>、陳述(断定)が1回だけで中断されることは

<sup>36</sup> 小原(2002)は、主要部外在型関係節と後続の主要部名詞から成る部分が、外界の対象を指示するため、言語表現として単独で用いられるのに対し、主要部内在型関係節とその後続の名詞化標識「の」だけでは、外界の対象を指示できないとしている。主要部内在型関係節と名詞化標識「の」は、常にもう一つの節と共起する必要があるとし、(i)を示している。

(i) a. Q: 誰が川に落ちたの?

b. 普通名詞

A: 警官.

c. EHRC + 主要部名詞

A: [[泥棒を追いかけていた]警官].

d. IHRC + 名詞化標識

A: \*[[警官が泥棒を追いかけていた]の].

(注) EHRC: 主要部外在型関係節

IHRC: 主要部内在型関係節

(小原の(16)) 小原(2002:290)

想定されておらず、2回繰り返されることになる。無助詞の場合も、内在型構文の場合も、基本的に、2局面から成る一体化された表現としての共通性があると言える。

(239) 以外は、無助詞が主格として動詞に接続している。同じように、主要部内在型関係節の主要部が主格で主節自動詞に接続する、B C C W J から得られた実例が(240)である。

(240) 毛の色つやが急になくなり、首の右側に小さなしこりができたなと思ったのが、あっという間に握り拳ほどの大きさになりました。

1983 鈴木 健二(著) 気くばりのすすめ 講談社

(240) では、主要部が目的格として主節他動詞に接続する場合と同様に、主要部内在型関係節構文が、「気付きとその内容とそれへの対応」を表していると考えられる。この(240)の場合、「思った」とあり「気付き」に言及している。一方、「思った」を表現せずに、「小さなしこりができたのが…握り拳ほどの大きさになりました。」としても自然である。主要部が主格の場合も、主要部が目的格の場合に知覚動詞が現れないことが多いのと同様に、「気付く行為」の言語化が為されず、「気付き」の対象である事態内容の描写を通して、「知覚行為」、あるいは、「気付き」が暗示される傾向があると考えられる。

これら、主要部が主格の場合の表現者の「対応」は、表現者に「気付き」をもたらした事態に、より一層の注意を向け続けることであり、「(再) 知覚」された内容が引き続き描写されるものと考えられる。主要部が主格の場合、当該構文内の従属節及び主節の双方とも、主に、次章の 5.4.2.4 で触れる「知覚のための活動」を描写するものと推測される。また、この種の内在型構文は、表現者の注意を引いた事態を、継続して観察するうちに、その表現価値が増すように感じられる場合に、改めて事の発端からその継起的事態を描写するのに適した表現形式という印象がある。しかし、本論文では、これらについて十分な考察ができていない。今後の検討課題である。

## 5. 考察Ⅱ 主要部内在型関係節（構文）の使用動機

本章では、これまでの考察を基に、主要部内在型関係節（構文）の使用動機を探っていく。

5.1では、主要部内在型関係節構文の基本的な語用論的特性と統語的性格について確認する。主要部内在型関係節は、英語の一部の関係節と同様に、陳述（断定）機能を担うと考えられる。統合度の高い一つの複文内で、二つの陳述（断定）が為されることの意義を確認する。5.2では、本多(2005)の「直接知覚される自己(directly perceived self) (本多 2005:24)」について見る。それを踏まえて、池上(2005, 2011)の指摘する、事態の〈主観的把握〉という観点から、主要部内在型関係節構文について考える。日本語一般に〈主観的把握〉の傾向が見られる中、当該関係節構文にも、主節他動詞が知覚動詞の場合を除いて知覚行為が明示されない等、〈主観的把握〉の構図からの表現という性格が認められ際立つことを見る。5.3では、描写される事態と知覚行為意識の表現の実際を見ていく。当該関係節の表現者の知覚内容と主節主語の知覚内容の異同の問題を中心に考察する。5.4では、主要部内在型関係節の表現者の「表現欲求の内実」と描写事態との関係性について考える。そのため、「自己評価欲求」(渡辺 2001)と「自己形成」(渡辺 2008)の関係、環境が動物に提供する「アフォーダンス」(ギブソン 2004)と「知覚のなかの行為」(ノエ 2004)との関係、を確認する。その上で、主要部内在型関係節構文が、「自己評価の試み」(渡辺 2008)の過程を、その場に臨場する様相で言語化するのに適した表現形式であり、当面の「自己形成」(渡辺 2008)の様態を表現するのに適した一部の連体修飾節（主要部外在型関係節）と、相互に補完的な関係にあることを見る。5.5では、主要部内在型関係節構文の臨場性と表現範囲の選択の関係について考察する。一方では、表現範囲の絞り込みが関わり、他方では、連体修飾による継起的に先行する事態の表現内への取り込みが関わる。5.6では、B C C W Jから得られた多様な実例の中に、主要部内在型関係節構文の語用論的特性が様々に生かされ、レトリック的な効果が生み出される現象が観察されることを見ていく。



## 5.1 陳述（断定）機能を担う関係節を項内に含む複文としての主要部内在型関係節構文

4章では主要部内在型関係節構文の使用実態を分析した。多彩な実例に共通して観察されるのが、表現者（あるいは、主節主語）の「気付きとその内容とそれへの対応」が表現されていることである。この点を基に、本節では、主要部内在型関係節構文の基本的な語用論的特徴及びそれと表裏の関係にある統語的性格について見ていく。

主要部内在型関係節構文は、関係節が項（目的語／主語）内に含まれる複文で、陳述（断定）が2回繰り返される点に特色がある。以下の例は、主要部内在型関係節構文である。

(241) 栗が落ちて (い) たのを拾ってきた。

(242) ネジが緩んで (い) たのを締め直した。

(243) ドアが閉まりかけたのを手で押さえた。

(244) 子供が泣き出したのを抱っこした。

いずれも、文内前部が事態への「気付き」とその「内容」を表し、後部がそれへの「対応」を表している。前部と後部は一体化されたものとして、その機能を果たしている。これは、主要部内在型関係節構文が二つの陳述（断定）から成る複文であることを端的に示している。

2.1.3 で見た長谷川（2002:32）は、「主要部後置言語にのみ主部内在関係節がゆるされる」とする。日本語は主要部後置言語であり、主要部内在型関係節の構造的基盤がここにある。興味深いのが、主要部内在型関係節には名詞修飾機能は認められない、という議論があるように（例えば、小原（2002））、SVO言語である英語の関係節にも、通常の修飾機能とは異なる機能が観察されることである。5.1.1では、英語の一部の関係節に見られる機能と構造との関係性と類似する点が、SOV言語である日本語の主要部内在型関係節構文の基本的な語用論的特徴とその統語的性格に観察されることを見ていく。

### 5.1.1 主要部内在型関係節と英語の陳述（断定）機能を持つ関係節との類似性

次の(245b) (246b)は、松本清張『砂の器』の英語訳内の英文である。(245a) (246a)は、原作の日本語である。(245b)内の波線部は関係節で、名詞（句）の (the) bridge を修飾している。関係節は、主として、語用論的にこのような前提機能を担うものとされてきた。

(245a) 今西は、渡ってきた橋の下を流れている川を思い出した。 （松本清張『砂の器』）

(245b) Imanishi recalled the river flowing under the bridge that he had crossed.

(Cary, Beth. 訳)

(246a) 今西は、タクシーを頼んだ。車は田舎の道を走っていく。道のかたわらには川が流れていた。  
(松本清張『砂の器』)

(246b) Imanishi hailed a taxi that followed a country road beside a stream.

(Cary, Beth. 訳)

(245b) 内の関係節が前提機能を担っているのに対して、(246b) 内の関係節は、(246b) が(246a) の英訳であることから分かるように、前提機能ではなく断定機能を担っている。

(246b) では、関係節が使用された一つの英文内で断定が2回繰り返されていることになる。

次の(247b) (248b) (249b) は、それぞれ、(247a) (248a) (249a) を簡略化し、SVO (あるいは、(S)OV) の視点から図式化<sup>37</sup>したものである。

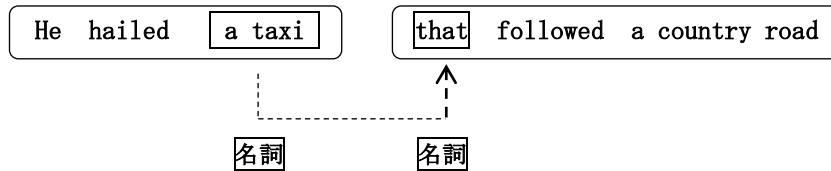
(247a) Imanishi hailed a taxi that followed a country road beside a stream.

(Cary, Beth. 訳) ((246b) を(247a) として再掲)

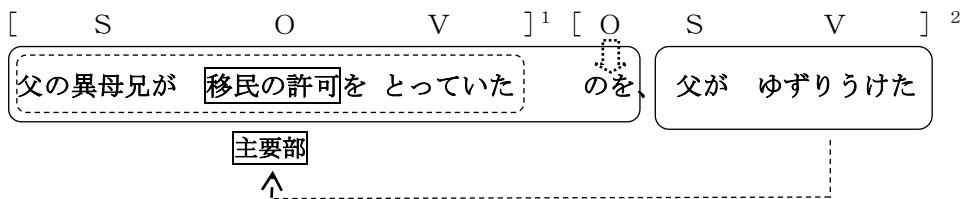
(248a) 父の異母兄が移民の許可をとっていたのを、父がゆずりうけた。((89)&(92) から改変)

(249a) ショパンを父が繰り返し聴いていたのを私もきいた。((90)&(145) から改変)

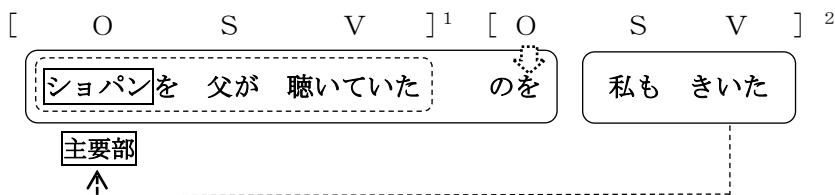
(247b) [ S V O ]<sup>1</sup> [ S V O ]<sup>2</sup>



(248b)



(249b)



<sup>37</sup> 図式化に際し、谷 (2012) を参考にした。谷 (2012) は、英語児の関係節獲得と(247a)のような関係節との関係性を考察している。【特設注2】参照。

(247a)では、“a taxi”が新情報を担い、以降の部分と共に新たな断定を行っている<sup>38</sup>。英語はSVO言語であるため、“Imanishi hailed a taxi”の末尾は、“a taxi”と名詞句となる。この“a taxi”は、形式上は後続部分と関係節構造を形成し自ら主要部となる。不定冠詞付きの“a taxi”は新情報を担い、その意味内容が後続のSVO構造のSの位置に引き継がれ(“a taxi” ⇒ that)、“a taxi that followed a country road beside a stream.”<sup>39</sup>の波線部で、1文内での2番目の断定が為されることになる。

日本語の(248b)は、内在型がSOV、主節部分がOSV、という語順である。内在型が名詞句相当(連体修飾節構造相当)の機能を果たしている。長谷川(2002)が指摘するように、Oの後にVが来て「一致操作」が為されている。また、(249b)は、内在型がOSV、主節部分がOSV、という語順である。(248b)と同様に主節部分にOVの語順が生じている。ここでは、(247b)に示した英語と同様に、①内在型による陳述(断定)②①を利用して得られると想定される項としての目的語及び主節他動詞による2度目の陳述(断定)、が為されている(OVという構造が2回繰り返される)。

関係節とそれを含む主節が一体化された文(関係節を項(目的語/主語)内に含む文)の中で、2度の陳述(断定)が展開されることには、独自の意義があると考えられる。主要部内在型関係節構文の場合、知覚された「現象」が先に陳述(断定)され、その「現象」事態に臨んで取られる対応が2度目の陳述(断定)で示される。「気付き」とその「内容」と「対応」が一体化された形で表現されるのである。

<sup>38</sup> この種の英語の関係節について、河野(2012)に詳細な記述がある。「形式上は制限的である関係節が、意味機能上は非制限的な関係節と同じ役割を果たしているといつてよい、その意味で、この種の関係節は『非制限的な制限的關係節』であるといえる。(河野2012:25)」とあり、多くの実例が挙げられている。ここでは、一例だけ引用する。

尚、次の例の“helicopters”は「不定」であり、さらに“then”が使われていて継起的な事態であることが示されている。

i) Many of the rescued passengers were first taken to the island by helicopters that then returned to continue the search. (The Times<<940929>>)

(救出された乗客の多くはヘリコプターによってまず島に搬送され、その後ヘリコプターは現場にもどって捜索を続けた) 河野(2012:25)

<sup>39</sup> 本論文のようにthatを関係代名詞と捉えず、単に平叙節の内容節を従属節として導くthat(従属接続詞)と同じものとする文法書がある。そこでは、照応要素は形を持っておらず空所であるとされている。(その場合、“a taxi”の意味内容は空所に引き継がれることになる。)以下の文法書がその立場を取っている。Huddleston, R. and Pullum, G. ed. (2002) *The Cambridge Grammar of the English Language*, Cambridge University Press, Cambridge. [Rodney Huddleston・Geoffrey K. Pullum『[英文法大事典]シリーズ 第7巻 関係詞と比較構文』(藤田耕司・長谷川信子・竹沢幸一監訳 岩田彩志・田中秀毅・藤川勝也・辻早代加 訳 開拓社, 2018.)]

【特設注2-①】英語の関係節構造の習得の様態と「節的意味を表す関係節付き名詞句」との関係

谷 (2012) は、(246b)のような英語と英語の関係節習得の様態との関連について考察している。

谷 (2012) では、(246b) のような英文内の“a taxi that followed a country road beside a stream.”の部分は、「節的意味を表す関係節付き名詞句」と呼ぶことにするとされ、統語上の性質として、以下の点が指摘されている。

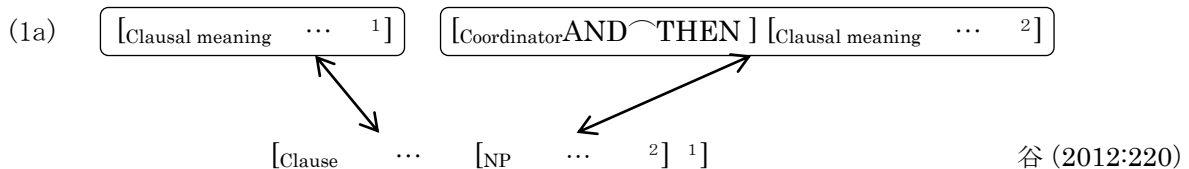
- (i) 名前が示すとおり、関係節を含み、
- (ii) その生起は文末に限定され、
- (iii) 文断片(sentence fragment)のように単独で現れることはない。 谷 (2012:219)

また、当該名詞句とそれが現れる文(母型文)との間に認められる意味上の関係を、四つに分類している。

- (ア) 節的意味を表す関係節付き名詞句が、母型文における項に相当する場合、
- (イ) 節的意味を表す関係節付き名詞句が、母型文における述語に相当する場合、
- (ウ) 節的意味を表す関係節付き名詞句が、母型文の副詞的修飾部(副詞的従属節)に相当する場合、
- (エ) 節的意味を表す関係節付き名詞句と母型文がある種の等位構造をなす場合、

谷 (2012:219)

(246b)のような英文の場合は、上の(エ)に該当する。そして、意味関係に関して、「二つの出来事が継起的に発生する場合、意味構造においては二つの節的意味と継起順序を表す等位接続詞的意味要素(例えば AND~THEN のようなもの)からなる等位構造が認められると考えられる。このような意味構造が節的意味を表す関係節付き名詞句を用いて表現される場合、下の(1a)のような形式と意味の対応関係を示す(谷 2012:220)」とされ、(1a)が図示されている。また、そこで数例挙げられている実例の中で、福地 (1995:107) から引用されたものが(1b)である。



(1b) Ann defeated the World Champion in a game that sent the sellout crowd into a frenzy.

(アンが試合で世界チャンピオンを打ち負かしたので満員の観客が熱狂した)

福地 (1995:107)

その上で、当該名詞句の統語上の性質を、英語の関係節構造の習得の様態と関連させながら、以下のように指摘している。

(2) Diessel (2004:Ch.6) では、英語の関係節構造の習得の様態が示されている。その概要は (3a) のようにまとめられ、関係節構造は (3b) のような混淆構文 (amalgam construction) をその萌芽として、(3b) のような述語名詞関係節構文 (predicate nominal relative) に始まるとされる。

(3) a. [...] relative clauses emerge in presentational constructions in which an intransitive subj-relative is attached to the predicate nominal of a lexically specific copular clause.

(Diesel 2004:148)

b. That's my doggy cries.

b'. This is the sugar that goes in there.

最初期の関係節である述語名詞関係節構文の特徴は、(3a) にも触れられているとおり、文頭が *that's* や *there's* のような特定の語彙に限られ、これらの語彙からも理解されるとおり、述語名詞関係節構文は提示機能 (presentational function) を持つ。また関係節の先行詞は述語名詞であり、その述語名詞は関係節の主語に相当する。さらに関係節は語用論上の前提を成すわけではなく、断定 (assertion) を表す。

本稿で考察した節的意味を表す関係節付き名詞句は、このような述語名詞関係節構文からの拡張もしくは発展であると考えられる。即ち、述語名詞関係節構文は提示機能を持つが、その機能が拡張・一般化され、(1) のような節的意味を表す関係節付き名詞句が文法に導入される。

このような名詞句における関係節は(1a)の図にも示されるとおり、断定を表している点に注意されたい。

[略]

谷 (2012:221)

さらに、谷 (2012) は、(エ)以外の節的意味を表す関係節付き名詞句の文法への想定される導入順序や、節的意味を表す関係節付き名詞句の形式と意味の対応関係が、非典型的というよりは、むしろ典型的である可能性について言及している。

### 【特設注 2-②】日本語児が習得の初期に使用する典型的な名詞修飾節構造

大関 (2008) は、「日本語児が習得の初期に使用する典型的な名詞修飾節構造」について、以下のようにまとめている。

(1) 「日本語児が習得の初期に使用する典型的な名詞修飾節構造」

指示物を特定するための制限用法として、「もの」「ところ」「の」等の名詞を修飾し、その名詞の属性・状態を表す。また、被修飾名詞と修飾節の文法関係には制約を受けずに、主に主節の文頭で使われる。 大関(2008:179)

また、次のような研究課題と結果について記している。

(2) : 日本語児が習得の初期に使用する修飾節(関係節)の意味・機能は、英語児の習得の初期に使用する関係節とどのような違いがあるか。

⇒ 結果: 英語児が目のある物の新情報を提示する機能で使い始めるのに対し、日本語児は、目の中にない物の場所を尋ねたり、ねだったり、それが無いことを訴えたりする発話での名詞修飾節の使用が多く、自分が何について言及しているかを特定させる、典型的な制限用法で初期の修飾節を使用している。 大関(2008:178)

尚、大関(2008)が「の」を修飾する名詞修飾節として挙げている例の名詞修飾節構造には、「主要部内在型関係節」に見られる構造との類似性が感じられるものがある。

(3) [これ蓋ちゆる(=する)] の、ないよ。 (Sumi 2;7)

大関(2008:162)

(4) [チュルチュルと降りた] の、どこに行ったのね? (Sumi 2;3)

大関(2008:166)

(5) [たくちゃん(=たくさん) 飴ちゃん持っていた] の、どこにあるの? (Sumi 2;4)

大関(2008:166)

(3)~(5)では、名詞修飾節内の主語または目的語が主節内の主語として機能しているように見える。この内、(4)と(5)は、疑問文のため、「の」節に「無助詞格成分」の意味合いが強く感じられる。(3)については、(6)のような「主要部内在型関係節構文」に見られる関係も想定できる。

(6a) [これ蓋する] の、ないよ。

(6b) 「蓋(が) ないよ。」 (蓋ではなく、器がないことが意図されていることも考えられる)

尚、上に引用した(Sumi)のデータについては、以下のような記述がある。

(7) 「幼児期の言語生活の実態 I~IV」(野地 1973,1974,1976,1977)

野地潤家収集の1名の男児(収集者の長男。以下 Sumi と呼ぶ)の縦断的データである。速記法を利用して発話場面ごとにカードに書き取り収集している。生後0歳1か月から6歳12ヶ月まで記録しており、ほぼ毎日の記録になっている。

[略]

大関(2008:116)

## 5.1.2 主要部内在型関係節に見られる提示的機能

5.1.1では、主要部内在型関係節構文が統語度の高い複文構造を成し、同時に、語用論的には、二つの陳述（断定）が為される点を確認した。5.1.2では、主要部内在型関係節に見られる提示的機能について見ていく。

### 5.1.2.1 提示的機能

当該構文中の従属節である主要部内在型関係節は、現象描写文が形式名詞の「の」を連体修飾することで生成される。二つの内の一つ目の陳述（断定）がこの現象描写文で為され、情報構造的には、当該関係節自体が新情報を担う。他方で、当該関係節は、二つ目の陳述（断定）が描写する事態の事態参加者を、予め文内に導入する機能も担っている。

『オックスフォード言語学辞典』（2009）では、「提示的」な機能について、(250)を例に、(251)のように解説されている。

(250) There was a man who was following me yesterday.

中島・瀬田 (2009:242) 『オックスフォード言語学辞典』

(251) 提示的 presentational (構文、不変化詞などに関して) 談話の (新しい) 話題を導入する場合をいう。例えば、There was a man who was following me yesterday のような there を伴う構文は、提示的な役割を担う。また、フランス語の *Voici mon ami* (‘Here is my friend’) のような形式についても言う。<sup>40</sup>

中島・瀬田 (2009:242) 『オックスフォード言語学辞典』

主要部内在型関係節構文では、従属節である主要部内在型関係節で、知覚されたと見なされる事態が描写され、当該事態の事態参加者が文内に導入される。その点で、当該関係節には、談話内への提示的機能に似た、文内への提示的な機能が認められる。一方、例として挙げられた (250) のような「there を伴う構文」は、文頭部分の意味内容が比較的稀薄なために、談話内に個物を提示しやすいのに比べ、当該関係節は冒頭から意味内容が豊富で、自身全体が新情報を担うという性格が際立つという相違がある。

---

<sup>40</sup> 以下は、(224)の原著の記載である。

i) presentational (Construction, particles, etc.) which introduces a topic or new topic of dis-course. Thus the construction with there has a presentational role in e.g. There was a man who was following me yesterday. Also of forms such as French *voici* in the presentation e.g. of an individual: *Voici mon ami* ‘Here is my friend’.

Matthews, P. (2007:316-317)

“presentational (提示的)”な機能と文頭から意味内容が豊富であるという特徴を併せ持つ中、「文」的な新情報をいきなり複文内に導入することは、通常適切でない。そのような事情で、4.2.2.1 で見たように、BCCWJ で得られた実例では、提題の「は」を付加して主要部を先行提示するなど、まず「主題」を設定する調整が頻繁に観察されるものと考えられる。

### 5.1.2.2 提示的な側面のある主要部内在型関係節からの主要部の先行提示とその実例

連体修飾節構造生成の際には、被修飾名詞句である主要部を連体修飾節の後に配置する。一方、主要部内在型関係節構文では、主要部を「主題」として文頭に設定し、主要部内在型関係節を文内に導入しやすくする調整がしばしば観察される。この点は、当該関係節構文が持つ独自の語用論的性格である。4.2.2.1 で主要部の先行提示の概要を述べたが、5.1.2.2 では、この独自の性格と、この現象が観察される実例について詳しく見ていく。

主要部の先行提示では、しばしば、次のような「〈1〉 → 〈2〉」のパターンが観察される。〈1〉 事態参与者の一つである「個物」の主題化 → 〈2〉 「当該個物が関わる事態の具体的な生起の経緯の描写」 (= 「切っ掛け」としての事態及びその「顛末」の描写)、というパターンである。また、以下の(252)(253)の場合のように、主要部内在型関係節構文より文脈上前の位置で、一般的な文表現に伴う「個物」の主題化が為され、そのまま当該「個物」が引き続き当該関係節構文の主要部の先行提示部分と解される(すなわち、上記の〈1〉の部分兼ねる)パターンも観察された。

この「〈1〉 → 〈2〉」のパターン内の〈2〉で使用される内在型では、〈1〉に先行提示された個物が関わる事態を、当該個物を内在型内の主語や目的語として語ることができる。また、主節としての内在型構文では、当該個物をさらに主節の目的語(主語の場合もある)にしながら語ることができる。

尚、外在型を使用する際に、内在型の場合と同様に個物を先行提示すると、文頭で「個物」への関心が表現される中、その同じ個物を再び被修飾名詞句として使用することになる。その場合、「個物」表現の重複が生じ、独特な強調点を持つ表現となる。

次の(252)～(254)の内在型構文には、上に示した「〈1〉 → 〈2〉」のパターンが見られる。

A. 無視できない事態の発生を連想させる「個物」を話者が目撃して、それを主題として取り上げることから始まる例。「袖」に結果生産物的側面も感じられるが内在型構文とした。

(252) 次第によっては、当道場にいる限りこの袖は、お前には返さぬ。ずっと片袖でいる



がよい」「かしこまりました」と、梅太郎は即座に答えた。「梅波寒咲の片袖、思うだけで凜烈さが加わります」貞吉はじろりと視線を龍馬に移した。「袖はお前が取ったのか、それとも誰かにちぎられたのを取戻して来たのか」「私がとめているうちに、私の手に残りました」「お前の手に残ったというところを見ると、本人はまた暴れておったのだな」「暴れると言うほどではありません」「言うほどでもない…今日もまた、人が幾らか立っていたであろう」「はい。七、八十人ほど」

1986 山岡 荘八(著) 坂本竜馬 講談社

詳しい状況が分からない貞吉が、事の顛末を、現場に居た梅太郎と龍馬に質している。指導者として梅太郎に手を焼いている貞吉は、「袖」の本来の持ち主である梅太郎にではなく、現場で梅太郎をとめ、結果的に「袖」を手にする事になった龍馬に尋ねている。

貞吉が事の顛末を知りたくなかった切っ掛けは、眼前に「袖」を見たことである。「袖」は主題として提示され、「袖」を巡って何が起きたかが問われていく。(254)に、内在型、代名詞読み、対応すると考えられるテ形・連用形、外在型による表現を並べて比較する。

(252a) 「袖はお前が取ったのか、それとも誰かにちぎられたのを取戻して来たのか」

(内在型)

(252b) 「袖はお前が取ったのか、それとも誰かにちぎられたのを取戻して来たのか」

(「の=代名詞」読み)

(252c) 「袖はお前が取ったのか、それとも誰かにちぎられて、取戻して来たのか」

(テ形・連用形による継起表現)

(252d) 「袖はお前が取ったのか、それとも誰かにちぎられた袖を取戻して来たのか」

(外在型)

(252)の「袖はお前が取ったのか」は、主要部内在型関係節構文以外の文による事態表現で「袖は」の部分で「個物」の主題化が為されている。ここでは、その「個物」が引き続き当該関係節構文の主要部の先行提示部分として機能している。(252d)は、「は」が付加された先行提示部分を敢えて被修飾名詞句にして外在型にしたものである。しかし、「袖」の部分が重複表現となる。加えて、前後に行為表現が生じる(「お前が取った」、「取戻して来た」)中で、唐突に修飾表現が生起することで、表現の流れの腰を折る印象がある。(252b)の「の=代名詞」の読みと(252c)のテ形・連用形は、「(袖を)誰かにちぎられた」(と想定される)事態に直面する緊迫した様子が稀薄である。一方、内在型(252a)では、行為の連続とその内の一つの事態(「(袖を)誰かにちぎられた」)に注意が集中する印象がある。「現象」を「知覚」し

「対応」を迫られる意味合いが前景化されるのが、内在型表現の特徴だと考えられる。

主題の「袖は」は、貞吉の目に留まる「モノ」だが、それは、何らかの行為・行動を強く喚起してくる「モノ」である点も注目される（貞吉の「問い」を動機付けてもいる）。

B. 会話の場で、話者が語りた経験に欠かせない「個物」を主題として取り上げることから始まる例

(253) 「B S Aは昔、わたしも乗ったことがあります。ハルビンで英国人の貿易商が もって  
ておったのを借りましたね」「オートバイにお乗りになるんですか」

1976 五木 寛之(著) 凍河 文芸春秋

【「の」＝代名詞】の読みも成立

(253)も、「B S Aは昔、わたしも乗ったことがあります。」の部分は、主要部内在型関係節構文以外の文による事態表現であり、「B S Aは」の部分で「個物」の主題化が為されている。

(253)を、対応する外在型にした(253a)～(253d)を見てみよう。

(253a) 「\*ハルビンで英国人の貿易商がもっておった [省略部分]を借りましたね」

(253b) 「ハルビンで英国人の貿易商がもっておった B S Aを借りましたね」

(253c) 「ハルビンで英国人の貿易商がもっておった 昔わたしも乗ったことがある B S Aを借りましたね」

(253d) 「昔わたしも乗ったことがあるハルビンで英国人の貿易商がもっておった B S Aを借りましたね」

(253)は、基本的に、外在型にできない((253a))。そこで、先行提示されている目的語相当の「B S A」を外在型の主名詞(被修飾名詞句)の位置に置いてみたのが(253b)である。また、(253c)(253d)のようにしたのは、「貿易商から借りたことでB S Aに乗るという経験を得た」という経緯が不明瞭になる。

話者の意図は、〈1〉まず自分の経験の有る無しを伝えたい(B S Aに乗ったことがある)、〈2〉その経験に至る具体的な経緯を伝えたい、というものだと考えられる。

外在型にした、(253b)の「ハルビンで英国人の貿易商がもっておった B S Aを借りましたね」は、「それに乗ったんです」等、いくつかの展開が考えられる。しかし、そのような表現が、上の「〈1〉→〈2〉」のパターンが持つ固有の表現効果を持つわけではない。

C. 表現者がふと抱いた疑問に対するカギを握る「個物」を主題として取り上げることから始まる例

(254) 伊藤八郎は若いときの父や実の祖父母の写真のコピーを送ってくれたが、このもと

になる写真は、父がどこかにしまっていたのを、父が死んだあと、伊藤八郎が見つけたのだろうか。

2001 田中 小実昌(著) アメン父 講談社

表現者は、写真のコピーを手にする種の満足感を得、同時に、素朴な疑問を抱いている。どのような経緯で「このもとなる写真」を伊藤八郎が手にしたのか知りたくなる。そして、発見時の状況とそれへの対応が推測されている。

ここで、「このもとなる写真は」の部分は、主要部内在型関係節構文から直接先行提示され主題化された主要部である。しかし、当該部分は「このもとなる」と「写真(は)」とから成る。その内の「このもとなる」は、例えば、「コピーする際に写真を使ったはずだ、父がどこかにしまっていたのを、父が死んだあと、伊藤八郎が見つけたのだろうか。」の波線部に示される事実関係を含意可能な表現である。これは、4.5, 3.3 で触れた、主要部内在型関係節構文内の名詞句に連体修飾節が付加され、複数の行為が簡潔に表現されることに準じる現象である。そのように捉えると、(252)や(253)のように、一般的な文表現の際に主題化された「個物」が、引き続き当該構文の主要部の先行提示部分と解される場合と、(254)との関連も明らかになる。どちらの場合も、複数の出来事・事態が表現されているという点で共通しているのである。(252)では、当該構文以外の一般的な文によって、モノから連想される起きたかもしれない事態が描写され、(253)では、出来事表現(「英国人の貿易商がもっておつたのを借りましてね」)の呼び水ともなる自身の経験が描写されている。(254)では、主題化のため先行提示された連体修飾節構造内に、先行する出来事・事態がやや背景化されながら組み込まれた形でやはり表現されているのである。

## 5.2 主要部内在型関係節構文と当該構文による表現が持つ臨場性

主要部内在型関係節構文による表現は、知覚構文の場合と同様、事態が当該事態に臨場する様相で描写されているように感じられる。しかし、この臨場性は、両構文に限られるわけではない。事態把握の類型という観点から、日本語では〈主観的把握〉の構図からの表現が好まれる、との指摘（池上 2011）があり、臨場性はそこに関わるのである。5.2 では、この日本語表現一般に見られる臨場性と主要部内在型関係節構文の持つ臨場性との関係性を見ていく。

### 5.2.1 知覚行為の非明示性と臨場性

BCCWJ から得られた主要部内在型関係節構文の実例を観察すると、主節他動詞として「知覚動詞」が使われているものの数は多くはない。これは、知覚行為が明示的に示されないことが多いとされる日本語の一般的な傾向とも重なる。そこには、日本語表現に見られる事態把握の特徴との関わりも考えられる。

この日本語に見られる事態把握の特徴について、5.2.1.1 では、野村（2014）の指摘を確認する。5.2.1.2 では、池上（2011）の指摘を確認する。

#### 5.2.1.1 日本語で知覚行為が明示的に示されない傾向

野村（2014）は、『ベスト・オブ宮沢賢治短編集』（ジョン・ベスター訳、講談社インターナショナル、1996）所収の「どんぐりと山猫」について原文と英訳を比較して、日英語の好まれる事態把握について、以下の点を指摘している。

(255) は、「主人公の一郎が奇妙な手紙をよこした山猫の行方を捜している場面」であるとして取り上げられたもので、(256) のように指摘されている。

(255) 一郎が顔をまっかにして、汗をぼとぼとおとしながら、その坂をのぼりますと、にわかにはぱっと明るくなって、眼がちくっとしました。そこはうつくしい黄金いろの草地で、  
…。

(p. 26)

Ichiro' s face turned bright red, and sweat fell off it in great drops. But then, quite suddenly, he came out into the light. He had reached a beautiful golden meadow.

(p. 27)

(256) 原文では「にわかにはぼっと明るくなって」や「そこはうつくしい黄金いろの草地で」というように一郎の目に映る景色を描写しているだけなのに対して、英訳の方では移動動詞 came と reached を使って、一郎が移動してきたことを明示している。すなわち、日本語では、目に映る状況の変化を通じて自分が移動したことを表していることになる。

(野村 2014:170)

また、(257)について、知覚行為の知覚動詞による明示の問題が取り上げられている。

(257) 一郎はまた少し行きました。すると一本のくるみの木の梢を、栗鼠<sup>リス</sup>がぴょんぴょんととんでいました。 (p. 26)

Ichiro was walking on when he noticed a squirrel hopping about in the branches of a walnut tree. (p. 27)

(258) 原文が「栗鼠<sup>リス</sup>がぴょんぴょんととんでいました」のように一郎の目に映る状況をそのまま描写することによって知覚行為が行われていることを暗示しているのに対して、英訳では知覚動詞 notice を用いて一郎の知覚行為そのものを明示している。

(野村 2014:170-171)

野村 (2014) は、(256) (258)に見られる傾向の他、日本語が自動詞的表現を好み英語が他動詞的表現を好む、あるいは、日本語が過程表現を好み英語が結果表現を好む、という傾向は、以下の本多 (2005:154-155) の指摘する観点から説明できるとして(259)を引用している。

(259) 英語は状況を外部から見て表現する傾向が比較的強いのにに対して、日本語は状況の中にいて、その現場から見えたままを表現する傾向が強い。 本多(2005:154-155)

この本多 (2005:154-155) の言う「状況の内部／外部から見る」の区別の理解のために、野村 (2014:171) は、(260)のような例えを挙げている。

(260) 今、自分でビデオカメラを片手に周囲を撮影しながら歩いているとしよう。このとき、ビデオに写っているのは景色の推移であり、歩く自分の姿は写らない。しかしビデオに写る景色の推移を通じて、自分が移動しているさま (速度、経路、視線など) がわかる。一方、自分が歩く様子を誰か別な人 (あるいは、幽体離脱したかのような、もう一人の自分) が離れた所から撮影してくれるとしよう。その場合、ビデオには自分が移動するさまが写ることになる。

そして、(260) 内の前者の手法で撮影したのが (257) の原文の日本語で、(260) 内の後者の手法で撮影したのが (257) の英訳になるとしている。この区別が、(259) の引用で述べられている「状況の内部／外部から見る」の区別に当たることが指摘されている。

日本語には、目に映る状況がそのまま描写されることで、知覚行為が行われていることが暗示され、知覚行為が行われていることは明示的に示されない傾向がある、というのである。この点は、日本語の大きな特徴と考えられる。<sup>41</sup>

この日本語で、知覚行為が行われていることが明示的に示されない傾向は、主要部内在型関係節構文の場合に、大きな影響を与えることが実例内に観察される。

### 5.2.1.2 〈事態把握〉の2つの基本類型（池上 2011）と日本語表現

野村（2014）では、上で見た「日本語で知覚行為が明示的に示されない」傾向は、本多（2005）の指摘を基に、「状況の内部から見る」という性格に結び付けられている。これは、池上（2011）の指摘する、〈主観的把握〉か〈客観的把握〉かの問題でもある。

池上（2011）は、話者による〈事態把握〉という認知的な営みに関して、その2つの類型を〈主観的把握〉と〈客観的把握〉と呼び、(261)のように特徴づけをしている。

(261) 〈主観的把握〉：話者は問題の事態の中に自らの身を置き、その事態の当事者として体験的に事態把握をする—実際には問題の事態の中に身を置いていない場合であっても、話者は自らがその事態に臨場する当事者であるかのように体験的に事態把握をする。

〈客観的把握〉：話者は問題の事態の外にあって、傍観者ないし観察者として客観的に事態把握をする—実際には問題の事態の中に身を置いている場合であっても、話者は（自分の分身をその事態の中に残したまま）自らはその事態から抜け出し、事態の外から、傍観者ないし観察者として客観的に（自己の分身を含む）事態を把握する。池上（2011:52）

池上（2011）は、以上に補足的な説明が必要だとして3点指摘している。一つは〈主観的〉／〈客観的〉という用語の適用の問題についての指摘で、「主体としての〈話者〉が客体としての〈事態〉と直接関わり合う（つまり、〈参与〉する）とは、前者が後者と〈体験的〉に（あるいは、自らの〈身体〉を介して感覚レベルで）関わり合うことと解する。この場合、主体が自らの身体性をもって直接事態と関わり合うという意味で客体／客観よりも主体／主観の存在が焦点化される関わり方である [略]（池上 2011:52-53）」としている。そして、「主

<sup>41</sup> これには、日本語と英語の統語構造上の差異が関わっている可能性がある。SVO言語の英語は、動詞を目的語の前に配置する。一方、SOV言語の日本語では、動詞の前に、当該動詞の目的語が配置され、知覚事態が先行して表現される。その表現形式（現象描写文）と意味内容（人の行為等）から、知覚事態の描写であることが把握し易いことが影響している可能性である。

体が客体とは隔離された形での関わり合いでは、焦点化されるのは主体によって関わられる客体そのものの方であり、(自然科学において典型的に求められる構図であることも想起しつつ)〈客観的〉と特徴づけることができる(池上 2011:53)」としている。

二つ目として、「〈主観的把握〉の場合、 [略] もともと問題の事態の外に身を置いているという状況から始めるのであるなら、話者は問題の事態の中に身を置くよう〈自己投入〉(self projection) するという認知的操作をしなければならない(池上 2011:53)」とし、「〈客観的把握〉の場合は、 [略] もともと問題の事態の内に身を置いているという状況から始めるのであるならば、話者は問題の事態の外に身を置くよう離脱が必要である(池上 2011:53)」<sup>42</sup>としている。

三つ目はラネカーの議論に関わる。「もっぱら英語の場合を例として〈主観的把握〉と〈客観的把握〉を取りあげているラネカー(Langacker(1990)ほか)の議論」との関係の指摘である。池上(2011)の当該章の枠組みだと、「主体としての話者が客体としての事態の内に身を置く(〈参与〉、〈主客合一〉)か、外に身を置く(〈隔離〉、〈主客対立〉)か、という2つの場合を想定し、たとえるならば、前者は話者も事態も〈舞台上〉にある場合、後者は事態が〈舞台上〉にあって話者は〈舞台下〉(観客席)にいる場合というように視覚化されることになる(池上 2011:54)」とし、「これに対し、ラネカーの枠組みでは、〈舞台上〉に相当する部分がさらに〈舞台上の照明されている部分〉(onstage)と〈舞台上の照明されていない部分〉(offstage)とに視覚化されるという構図になっている(池上 2011:54)」としている。<sup>43</sup>

以上のような指摘をしたうえで、池上(2011)は、「日本語話者が〈主観的把握〉に傾く」

<sup>42</sup> 池上(2011)は、この場合の離脱は〈主観的把握〉の場合の〈自己投入〉の単純に逆方向の認知的操作ではないとし、「〈自己投入〉の場合、話者が事態の外から内に身を移した後は、事態の外に話者は残らない。事態の内に身を移した話者がそのまま認知の主体として振る舞う。その際、認知の主体として特徴的に自己中心的に事態把握をする話者にとっては、自身は自らの〈見え〉に入らない(従って、〈ゼロ〉として言語化される)。一方、話者が問題の事態の内から外へと離脱する際には、事態の内にはもはや話者の何らの痕跡もなくなるというのではないのである。事態の内にはいた話者は、まず認知的に〈自己分裂〉(self split)とでも呼べる過程を経る。その上で、自らの分身の1つはそのまま事態の内に残し、もう1つの分身だけが事態から離脱し、事態の外に身を置いて認知の主体として機能する。事態の外の分身からは事態の内に残された自らのもう1つの分身は自らの〈見え〉の中に入るわけであるから、事態を構成する一部として明示的に言語化される。簡単な具体例でいうと、道に迷った時、「ココハドコデスカ」と自己をゼロ化した言い方をするのは〈主観的把握〉をする言語の話者、「私ハドコニイマスカ」(“Where am I?”)と自己を明示化して聞くのは〈客観的把握〉をする言語の話者ということである。(池上 2011: 53-54)」としている。

<sup>43</sup> 池上(2011)は、「この構図の差は、〈主観的把握〉で日本語なら話者がごく自然にゼロ化されて表現されるのに対し、主語の義務的な明示化という文法的な制約の介入によって明示的に一人称代名詞によって言語化されるという可能性に対応するためのもののようなものである(池上 2011:54)」としている。

ことを考察する中でいくつかの例を示している。次の(262)はその一つで、日本語の原文とその英語訳を対比し、(263)のように述べている。

- (262) a. まづ高館に登れば北上川、南部より流るる大河なり。 (松尾芭蕉「奥の細道」)  
b. We first climbed up to Palace-on-the-Heights, from which we could see the Kitakami, a big river that flows down from Nambu. (D. Keene 訳)  
池上(2011:57)

(263) 芭蕉自身が旅での自らの体験を語る(262a)では、自分自身は言語化されていず、体験したことが語られているだけである。その英語訳である(262b)では、芭蕉と伴の曾良が‘we’という代名詞で明示化され、後半では見えた景色だけでなく、〈見た〉ということまで言語化されている。 [略] 池上(2011:57)

日本語では、自分自身、そして知覚行為も言語化されておらず、対して、英語では、両者共言語化されていることから、「日本語話者が〈主観的把握〉に傾く」ことが指摘されている。

主要部内在型関係節構文にも、この〈主観的把握〉の特徴が見られる。5.2.2では、〈主観的把握〉か〈客観的把握〉かという観点から、言語に於ける自己の表示の問題を見ていく

## 5.2.2 言語表現と自己の表示・非表示と臨場性

表現者が言語表現する際の自己の言語化の問題と表現の臨場性について見ていく。

### 5.2.2.1 〈環境論的自己〉(Neisser 1993) と 〈主観的把握〉(池上 2005, 2011)

池上(2004-2005)は、「〈主観的〉な事態把握という概念」を「言語学とは別の何らかの視点から、同様の概念についてその有効性を支持する議論が得られる(池上 2004:26)」のが望ましいとし、心理学者のU. Neisserの〈環境論的自己〉(ecological self)の概念に言及している。これは、〈自己〉の言語化の問題に関わる。

(264) Neisser は、どのような観点から考察するかによって〈自己〉の認識の仕方に五つのタイプ—〈対人関係的自己〉(interpersonal self)、〈環境論的自己〉(ecological self)、〈概念的自己〉(conceptual self)、〈(時間的に)延長された自己〉((temporally) extended self)、〈私的な自己〉(private self)—が区別されるとする(Neisser 1993:4-6)。このうち、本稿の議論に特に関係のあるのは〈環境論的自己〉の概念である。これは、〈動作主〉(agent)として活動している自己がその際に自らの身をその中に置いている環境



(environment) との関連で捉えられたもの—Neisser の言葉だと「環境の中に埋め込まれていて、環境と共に知覚される自己」(the self embedded in the environment and coperceived with the environment) —と説明される。つまり、ある環境の中で活動する自己は、自らの身の動きに伴って廻りの環境の自らにとっての見えが変化していくのを知覚する。このような環境の見えの変化を通して、自己は自らの身がどのように動いているかを知覚することができる。(例えば、正面方向にあるものが次第にその大きさを増して迫ってくるように見えるという知覚からは、自らがそのものに向かって接近しつつあるということを読み取れる。) Neisser (1991:201) の言葉を借りると、「すべて知覚するということには、環境と自己の両者を〈共知覚する〉(coperceive) ということが伴う」というわけで、このようにして〈共知覚された〉自己が〈環境論的自己〉である。 池上(2004:26-27)

池上 (2004:28) は、この〈環境論的自己〉と言語との関連について、「本多 (1994:95) の巧みなまとめだと、『言語レベルで環境論的自己に対応するのは、ゼロ形式である』ということになる (池上 2004:28)」とする。次の 5.2.2.2 では、本多 (2005) でこの点を確認したい。

### 5.2.2.2 ゼロ形としての自己の表現

本多 (2005) は、「視野の中にあるものが音形のある言語形式による明示的な指示の対象となり、その視野を作り出しているエコロジカル・セルフとしての話し手自身は明示的には表現されないという構造は、次のような移動する話し手にとっての対象の見えを記述した文においても成立している (本多 2005:26)」とする。本多 (2005:26) は、(265) の例を挙げ、

(265) a, Kyoto is approaching.

b. 京都が近づいてきた。 (本多の(25))

移動を表す動詞 approach 「近づく」の主語の指示対象である京都は都市であり、客観的には位置が固定しているにも拘らず、そのような位置の固定したものを指す名詞句が移動を表す動詞の主語となっていることを指摘している。一方で、この文で述べられた状況を新幹線などの乗客として経験すれば、確かに京都が (自分の方に) 近づいてくるという知覚経験を得ることができるとする。そのように考えると、(265) は、移動する話し手にとっての対象の見えを記述した文だということになる。そして、「話し手はエコロジカル・セルフのレベルで捉えているために音形のある明示的な表現として文の中に登場してはいないが、ゼロ形として表現されているわけである (本多 2005:26)」としている。

これは、「言語レベルで環境論的自己に対応するのは、ゼロ形式である」ということが指摘

されていることになる。また、(265)では、日英両言語の例が示されている点も注意したい。

次の 5.2.2.3 では、「直接知覚される自己」(本多 2005)について見ていく。本多(2005)は、池上(2004)が注目する〈環境論的自己〉と、他者と自己からなる二項関係の中で知覚される自己の、二つの側面を持つ自己を「直接知覚される自己」として捉えている。

### 5.2.2.3 「直接知覚される自己」(本多 2005)

本多(2005)は、「直接知覚される自己」について、次のように述べている。

(266) 発達心理学の用語で言うならば、エコロジカル・セルフとインターパーソナル・セルフはいずれも「二項関係」の中で知覚される自己である。エコロジカル・セルフの場合にその二項を構成するのは事物と自己であり、インターパーソナル・セルフの場合は他者と自己である。そして生後間もない頃には、事物と自己からなる二項関係と他者と自己からなる二項関係は相互に独立して存在する。例えば生後6ヶ月の赤ちゃんは、物を操作しているときには近くに人がいてもほとんど関心を示さない。しかし生後9カ月から12ヶ月にかけて、この二つの二項関係は統合されて、事物・他者・自己の三項からなる関係が成立する。つまり、他者を介して事物と関わり合い、事物を介して他者と関わり合うという、「共同注意」([略])に基づく三項関係が成立する(Tomasello 1999)。

以上のことから、エコロジカル・セルフとインターパーソナル・セルフは生後9カ月から12ヶ月にかけての時期に統合され、相互に影響しあうと考えられる。そのような統合によって成立すると考えられる自己を、本書では以下「直接知覚される自己 (directly perceived self)」と呼ぶことにする。エコロジカル・セルフとインターパーソナル・セルフは、この「直接知覚される自己」のもつ二つの側面と捉えることになる。

本多(2005:24)

本論文では、主要部内在型関係節の使用動機を、渡辺(2001)がその潜在を主張する「自己評価欲求」の視点から捉える。その基本的な前提として、「自己評価欲求」の潜在を察知するのは、概ね、この「直接知覚される自己」だと想定して議論を進めていくことにする。

本多(2005)は、「エコロジカル・セルフもインターパーソナル・セルフとともに、視野の中には含まれない、姿を持たないものである(本多2005:23-24)」とする。そして、一人称代名詞の表現について、世界の知覚と自己の知覚の相補性と言語の構造との関連で、次のように述べている。

(267) 話し手自身を明示しないということは、話し手の存在が表現されていないということで

はない。むしろその逆で、話し手はその存在をエコロジカル・セルフとして捉えられ、ゼロ形によって表現されている。一方話し手が一人称代名詞で表現される場合、そこには見られる存在であり、指示される対象としての話し手と、見る存在であり、指示する主体としての話し手との間に、分裂が生じている。 本多(2005:154)

#### 5.2.2.4 〈主観的把握〉の構図(池上2005)の持つ臨場性と主要部内在型関係節構文

池上(2005)は、「〈主観的把握〉が〈客観的把握〉に、〈客観的把握〉が〈主観的把握〉にそれぞれ転換する可能性が存在している(池上2005:26)」としている。

ここでは、池上(2005)が〈客観的把握〉の構図から〈主観的把握〉の構図への転換が可能な認知的な操作として指摘する〈自己投入〉を取り上げる。その上で、基本的に〈客観的把握〉の構図から描写するとされる英語が、主要部内在型関係節構文を英語に訳す際に、〈主観的把握〉の構図へと転換されている例を見ていく。

先の池上(2011)でも言及されていたが、池上(2005)は、〈自己投入〉という認知的操作について、「舞台の外に身を置いていた認知の主体が舞台の上にあって自らの把握の対象としようとする事態の中に自らを投入し、そのまま舞台の上で自らを観察の原点として事態把握を行うという場合である(池上2005:27)」としている。また、英語の進行形による言語化を、〈自己投入〉による〈主観化〉を特徴づける言語的な指標として取り上げ、例を示して<sup>44</sup>、「単純形の動詞による言語化の場合とは違い、認知の主体が言語化の対象とされている事象の中に自らの視座をすえ(従って、自ら自身は言語化の対象になることなく)臨場して言語化しているという読みを与える。-ing形は〈主観的〉な視点と結びつくという主張(Verspoor 1996)は、この意味で解することが出来よう(池上2005:28)」としている。

(269)は、松本清張『砂の器』の英語訳内の英文である。日本語が主要部内在型関係節構文で表現されている部分に進行形が用いられている。(268)は原作の日本語である。

(268) 「もう一つは、この辺一帯に火事がありましてね。このときも、三木さんは身を挺して火の燃える家屋に飛びこみ、赤ン坊を救い出しました。これは、いったん逃げた母親が火の中に引き返そうとするのを、三木さんが止めて炎の中から助け出してきたのです。これも県の警察部長から感謝状をもらっておられます」(松本清張『砂の器』)

<sup>44</sup> 次の2例が示されている。

- i) 'The rain is falling on the plain'
- ii) 'The farmer was killing the duckling'

池上(2005:28)

(269) “The other commendation was when there was a fire in this area. Miki-san stopped a mother who was trying to go back into her burning house and went in himself to save her baby.” (Cary, Beth. 訳)

下線部の「いったん逃げた母親が火の中に引き返そうとするのを」の内在型部分は、「の」に接続する際の動詞が本論文で考察の対象としている「タ形」ではなく「ル形」である。目的語としては、主要部の「母親」の他に、「事態」そのものも候補となるかもしれない。また、「を」は接続助詞と捉えられる可能性もある。しかし、いずれにしても、火事の現場に臨場する意味合いが伝わる。一方、英訳では、止めた対象が‘a mother’と、動詞の目的語が名詞句で明示され、原作のように、事態そのものに注意が引き付けられるわけではない。しかし、関係節内で進行形が使われることで、母親を止めたのが、母親が引き返そうとしていた最中であったことが分かる。目的語が名詞句で明示される点は異なるが、臨場する意味合いが伝わる表現となっている。

日本語の場合は、〈主観的把握〉の構図から表現される傾向がある。一方、英語は基本的に〈客観的把握〉の構図から表現する傾向があるとされている。そのような関係性の中で、主要部内在型関係節構文による表現が英訳される際に、〈自己投入〉の指標となる進行形による言語化が為され、対応する英文は〈主観的把握〉に転換された表現になっているのである。

主要部内在型関係節構文による表現に共通して観察されるのが、表現者（あるいは、主節主語）の「気づきとその内容とそれへの対応」が表現されることである。主要部内在型関係節構文には、現象描写文が組み込まれている。しかし、知覚動詞が使用されることが少なく、描写事態の知覚対象性は明示されないことが多い。「気づき」の「内容」は描写されても、「気づき」そのものには言及されず、「気づき」が生じたことはその「内容」描写によって示される表現形式となっていると言える。そのような形式によって、「気づきとその内容とそれへの対応」が臨場性の際立つ様相で表現される。

次の 5.2.2.5 では、聞き手／読み手の側の、描写された事態を解釈する際の好みの問題について確認する。

### 5.2.2.5 〈主観的把握〉と聞き手／読み手としての自己投入（池上 2011）

5.2.1.2 でも確認したように、池上（2011）は、「日本語話者が〈主観的把握〉に傾く」ことを主張しているが、それに止まらず、聞き手／読み手の側の好みとしても同じ傾向が認められることを指摘している。

池上 (2011) は、「日本語話者が〈主観的把握〉を好んでするという傾向が認められるのは、話し手、あるいは書き手として、ある事態を言語化するという場合に限らない。聞き手、あるいは読み手として、ある事態を言語化している表現に接する場合にどういう解釈をするかという場合にも同じ好みを認めることができる (池上 2011:58)」としている。次の(270)を挙げ、「日本語話者は歌いながら通常ある種の感動を覚える (池上 2011:58)」として、(271)のように指摘している。

(270) 海は広いな、大きいな。

月が昇るし、日が沈む。 池上(2011:58)

(271) [略] 日本語話者はこの表現を〈主観的把握〉に基づく言語化として一つまり、単なる情景描写ではなく、その場にその情景を見て感動している発話者を想定して一読むのであろう。そしてすぐ自ら自身をも同じ場に置いてみて (あるいは、その発話者に自分を同化して) 情景に感動しているもう 1 人の発話者になるのであろう。〈客観的把握〉に基づく言語化として受けとめられるならば、この表現は確かに誰もが知っていることを述べた平凡な内容のものとしか受けとめられないことになる。 [略]

池上 (2011:58)

この、話し手、書き手、そして、聞き手、読み手が〈主観的把握〉を好んでするという傾向と主要部内在型関係節構文及びレトリック効果との関係性については、5.6で考察する。

### 5.3 BCCWJから得られた主要部内在型関係節構文と知覚行為意識の実際

主要部内在型関係節構文では、表現者（あるいは、主節主語）の「気付きとその内容とそれへの対応」が表現される。当該関係節は、現象描写文が形式名詞の「の」を連体修飾することで生成されるため、知覚動詞の補文節と形式的な類似性がある。しかし、知覚行為が明示される知覚構文に対して、当該関係節構文では、主節他動詞が知覚動詞である場合を除き、知覚行為に言及されない。「気付き」の「内容」は描写されても、「気付き」そのものへの言及は基本的に為されず、「気付き」が生じたことはその「気付き」の「内容」の描写によって示される表現形式となっている。これは、表現の臨場性を高めることに繋がると考えられる。

本節では、BCCWJから得られた実例を通して、主要部内在型関係節構文と知覚行為意識の関係を見ていく。

#### 5.3.1 主節他動詞として知覚動詞が使われている主要部内在型関係節構文

はじめに、主要部内在型関係節構文の主節他動詞として「知覚動詞」が使われているものを見ていく。3.2⑤で、実例を分類判断した際の事例を取り上げたが、以下は、それを含めた、事態表現内のモノとしての主要部が際立つと捉えた内在型構文の実例である。

(272)…先週わたしと子供たちの写真が『プラウダ』に 出たのを ご覧になった と思います  
が (83)を(272)として再掲)

1996 シドニィ・シェルダン(著)/ 天馬 龍行(訳) 神の吹かす風 アカデミー出版

(273) 【評価Cの下】某書評家が誉めていたのだけれど、アマゾンから実物が届いたのを  
見てテンション・ダウン。 ((84)&(160)を(273)として再掲) 2008 Yahoo!ブログ Yahoo!

(274) 東北の寒村の早春、庭先の残雪のすぐそばに、生き活きとした水仙の新芽が 固い  
土を押し上げて出てきたのを 見つけて、幼な心にも生命の息吹きや自然の神秘に感激  
した ((158)を(274)として再掲) 1998 小野寺 時夫(著) 治る医療、殺される医療 読売新聞社

次の(275)は、内在型構文、知覚構文、「の」の代名詞読み、いずれも有り得る。

(275) 『燕京文学』ですよ。北京図書館の中に埋もれていたのを 見つけました。「北京  
図書館？」 ((88)&(114)を(275)として再掲)

1995 中 = (蘭) = (英) 助(著) 北京の貝殻 筑摩書房

次の(276)は、主要部が「結果生産物」となると判断し内在型構文から除外したものである。

また、主節他動詞は知覚動詞ではない。①元のラッピングフィルム→②皺くちゃのラッピングフィルム→③皺を伸ばした状態のラッピングフィルム、というように、「結果生産物」も変遷を辿る。省略箇所への復元に際しては、「結果生産物」を産む過程（遡及する）が介在する。

(276) キャンディーとクッキーの小箱がひとつずつあって、それから、隅のほうに、皺を伸ばしたキャンディーのラッピングフィルム。五枚重ねてある。彼女が皺くちゃのまま放っておいたのを、ぼくが 皺を伸ばし、ぼくが 重ねた。

1999 重松 清(著) 日曜日の夕刊 毎日新聞社

「結果生産物」（「皺を伸ばしたキャンディーのラッピングフィルム」）が、「体言止め」的な効果を伴って提示されている。連体修飾節によって継起的に先行する事態の背景情報が与えられ、ラッピングフィルムが「結果生産物」であることが分かる。②の状態（「皺くちゃ」）に主節主語が働きかけて生じさせた結果状態（「皺を伸ばした」）が、前置されているわけである。後続部分で、③の生成過程（「ぼくが皺を伸ばし、ぼくが重ねた」）が表現される。

### 5.3.2 主要部内在型関係節構文の実例と知覚動詞の有無の関係

5.3.1 では、主節他動詞として知覚動詞が使われている主要部内在型関係節構文と、知覚構文、代名詞読み、結果生産物構文との関連性を確かめた。それでは、内在型構文で知覚動詞を使う意義、そして、知覚動詞を使わずに内在型構文を使用する意義は、「条件反射的な、あるいは、無自覚的な、視線がモノに釘付けになる印象」の存否に関わるのだろうか。

ここでは、上の点との関連を確かめるために、実例から主節他動詞の「知覚動詞」を除いた場合（後続部分の動詞が主節他動詞となる場合）、逆に実例に「知覚動詞」を加えた場合（主節他動詞が知覚動詞となり元の主節他動詞が後続部分の動詞となる場合）を作成して、元の内在型と意味内容等に差異が生じるかどうかを確認する。（比較し易くするため、文字の配列位置を通常とは変えた部分がある。）

(277a)の知覚動詞「見つけて」を省略しても、内在型（(277b)）として通じると思われる。

(277a) この梅の木は、猿の曾祖父の御堂竜二郎が京都に住んでいた頃、その家の庭にあったものだ。祇園の一角にまだ残っていたのを見つけて、みーこのたつての願いで、京都から山梨の自宅へ移植したのである。

2002 ゆうき りん(著) オーパーツ・ラブ SP 集英社

(277b) 祇園の一角にまだ残っていたのをく >、みーこのたつての願いで、

京都から山梨の自宅へ移植したのである。

但し、(277b)は、場合によっては、「梅の木の発見」から移植までに一定期間経過したニュアンスも感じられる。(277a)には、穏やかだが、「条件反射的」な視線の固定が感じられる。

(278a)「京都の有名料亭にいたことは、事実です。そこで、原田は、十五年間、板前修業をしています。その後、名古屋市内の料亭で、板前をしていましたが、五年前、四十三歳の時、伊良湖のホテルRの板前になりました。そこで、事件を起こして、やめましてねぶらぶらしていたのを、東海苑の女将が 見つけて、呼んだのです」「それが三年前ですね？」

2000 西村 京太郎(著) 桜の下殺人事件 双葉社

(278b) ぶらぶらしていたのを、東海苑の女将が < >、呼んだのです」「それが三年前ですね？」

(278b)では、「見つけて」から感じられる、何らかの経緯(好都合等)に関心が注がれない。この例にも、穏やかだが、「条件反射的」な視線の固定が感じられる。一方、(278a)もこの例の場合も、その「条件反射的な、あるいは、無自覚的な「見る」という行為、視線がモノに釘付けになる」印象は穏やかである。この点は、注目点だと考えられる。

次の(279ab)は、上の(277ab)(278ab)とは逆に、知覚動詞相当の「見つけて」を主節動詞として入れてみたものである。文意はほとんど変わらない。

(279a)板前というのも、かなり仁義が要ったもので、こういう悪いことをしては江戸中で誰も雇わない。しぜん無頼の群に入っていたのを、相楽総三が、薩摩屋敷へ訪ねてこい、といって小遣いをやって誘った。

1991 早乙女 貢(著) 幕末愚連隊 文芸春秋

(279b) しぜん無頼の群に入っていたのを... 相楽総三が、< 見つけて >、薩摩屋敷へ訪ねてこい、といって小遣いをやって誘った。

但し、(279a)には、相楽総三の、例えば、細かな事柄を気にせず行動する性格等が伝わるが、(279b)では、「見つけ」た際に、「都合の良さ」等を感じたようなニュアンスが加わる。

総じて、実例では、主節他動詞として知覚動詞に類する動詞が使用可能でも、敢えて使わないのではないかと思われる例が観察される。以下の(280)(281)もその例である。

(280) 筋骨たくましく、叡山の荒法師もたじたじとするくらいの偉丈夫である。事実、田蓮は 高野山の僧兵だったのを文観が 拾い、河内の天野山金剛寺に預けていた。

2002 黒須 紀一郎(著) 現世浄土 作品社

(281) — 安井健次は京極デパートの元外商部員だった。十年前、贋作を顧客に売りつけて



デパートを餌になったのを、熊谷が 拾い、画商として独立させたもので、いわば子飼いの美術ブローカー的な存在だという。 2004 黒川 博行(著) 絵が殺した 東京創元社

「拾う」には、偶然性(発見)と意図性(意図的行為)の意味合いが感じられる。(280)(281)には、「拾う」者と「拾われる」者の間の身分の上下関係や境遇上の優劣関係が介在しそうである。上位者は、下位者の了承を得る過程が必要とされないようなニュアンスがある。

次の(282a)では、知覚動詞が介在しないことが表現効果を高めている。

(282a) 部屋を出入りする看護師さんや先生に「凄い綺麗だねーいい香りだし」って言われる度に母は「これうちで咲いたのを」 持って来てもらったのよ!」  
と自慢げに話していたその1週間後、そのカサブランカの花と香りに包まれた中で母は静かに旅立って逝った 2008 Yahoo! ブログ Yahoo!

(282b) 母は「これうちで咲いたのを」<見つけてもらって>、持って来てもらったのよ!」

(282b)のように、<見つけてもらって>を加えると、そのための努力を求めた意味合いが生じる。花が庭から病院へ運ばれる道のりにも意識が向く印象がある。一方、(282a)では、入院中でカサブランカを愛する話者が、うちで花が咲いた時に期待するのは、即、病院の話者の下へ運ぶことだということが伝わる。それがその通り実現し、会話の現場には、「うちで咲いたカサブランカの花」がある。今、話者にとって、眼前のカサブランカとうちに花が咲く光景は一繋がりのもになっている。知覚行為等を明示する動詞を介在させない内在型が、うちのカサブランカの開花と母が今それを目にする目の状況を直接的に結び付けている。

次の(283)は、テ形・連用形との比較の際見たもので、(283a)の内在型では、家康と忠勝が同席していると取れるのに対し、(283b)のように、知覚動詞のテ形・連用形を使うと、かなりの距離(または、相当な心的距離)が二人の間にある印象を与えと言える。

(283a) 天正10年(1582年)、本能寺の変が起きたとき、家康は忠勝ら少数の随行とともに堺に滞在していたが、家康が京都に行って信長の後を追おうと取り乱したのを..  
忠勝が 諫めて、「伊賀越え」を行かせたという。

((171a)を(283a)として再掲) 2008 Yahoo! ブログ Yahoo!

(283b) 家康が京都に行って信長の後を追おうと取り乱したのを..  
<見て/見>、忠勝が 諫めて、「伊賀越え」を行かせたという。

先の(282a)の内在型の場合と同様に、(283a)の内在型は、知覚行為に言及しないことで、空間的近接感(時間的近接感も)が感じられる。

以上から、主要部内在型関係節構文について、次の点が指摘できる。

#### (284) <主要部内在型関係節構文の主節他動詞に知覚動詞が使用されない傾向とその効果>

主要部内在型関係節構文の表現者は、何らかの対応の必要性を感じた知覚事態を描写することから表現し始めるが、その事態を知覚した知覚行為が、主節他動詞が知覚動詞の場合を除き、明示的に示されない。知覚動詞が使われないことで、描写された知覚事態は、直に、主節他動詞に接続され、対応行為・対応行動が具体的に表現されることになる。事態知覚と当該事態に対する対応行為の実行が一体化された形で表現されることで、主要部内在型関係節構文では、両者が緊密な関係のあるものとして表現されることになる。

### 5.3.3 表現者が描写する知覚事態と主節主語にとっての知覚事態の異同

内在型構文では、主節他動詞が知覚動詞である場合を除き、内在型で描写される事態を知覚したことが明示的に示されない。そのため、表現者が内在型で描く事態を、主節主語も同じ様相で知覚しているのか曖昧になることがある。

内在型構文では、内在型で表される事態を、①表現者のみが知覚したと捉えられる場合②表現者が知覚した事態と同様の事態を主節主語も知覚したと捉えられる場合③特に①②が明らかでない場合がある。多くは、②の場合だと考えられる。しかし、これらに、さらに想像の中で知覚された事態描写に内在型が使用される場合が関わってくる。

以下、この点で特徴のある事例について見ていく。

#### 5.3.3.1 表現者と主節主語が同じ場合

表現者と主節主語の指示対象が一致する場合は、内在型によって描写される事態は、基本的に、主節主語が知覚する事態そのものと解される。

次の(285)では、表現者も主節主語（の指示対象である人）も「僕」である。

(285) 志摩ちゃんが 声をかけようとしたのを 僕は 無言で 止めた。こうして約三十分の

間、僕達は誰も口をきかなかった。

((130)から一部を(285)として再掲)

1988 佳村 昌季(著) 第11幕への序曲「浮輪をしたハチ公」 実業之日本社

はじめに、自分以外の人（「志摩ちゃん」）の行為（「声をかけようとした」）が察知され、それが内在型で描写される。表現者＝主節主語＝「僕」が、その察知した事態からすぐさま対応要請を感じて、「止める」というとっさの「対応」を取っている。

次の(286)は、表現者も主節主語も「私」である。

(286) これも清水さんに上っていただきましょうといい、タッパーに入れたのを私が 持  
って行く。計四郎さん、よろこばれて、 ((134)を(286)として再掲)

2000 庄野 潤三(著) 鳥の水浴び 講談社

先の(285)では、自分以外の人物の行為への「対応」が語られたのに対して、(286)では、自分の行為(「持って行く」)の前段階となる行為(「タッパーに入れた」)が内在型で表されている。「タッパーに入れた」のが、「私」かどうかは、ここからは分からない。誰が行為者かに関わらず、またタッパーに入れる行為を「私」が見ていたかどうかに関わらず、主節他動詞で表現される行為の前提となる行為が内在型によって表現されている。

(287)は、表現者も主節主語も「私達」である(厳密には、表現者は「私達」の内の一人)。

(287) 私達は 二、三の新聞が、いち早く、グロース・シュレックホルンに於ける私達の  
遭難を 伝えたのを切りぬいて、暢気な旅に於ける出来ごとが、決して夢でなかったと  
云う証拠にしようとした。 ((96)&(137)&(205)を(287)として再掲)

1998 辻村 伊助(著) スイス日記 平凡社

内在型事態(「二、三の新聞が、私達の遭難を伝えた」)への主節主語の「対応」には、積極性が感じられる(「証拠にしようとした」)。

会話場面で、その具体的な発話が「 」内で示される場合、表現者と主節主語が同じ場合が多いと考えられる。次の(288)では、談話全体の表現者は別(作者)だが、「 」内には、個々人の個別の発話が表されている。

(288) 桑が、「君の焼き餅も相当なものだなあ」と笑うと、蓮香はますます怒った。「あなた  
が 死病にとりつかれたのを、ようやく治してさしあげたのですよ。焼き餅ぐらい焼  
いたっていいはずですよ」 1997 蒲 松齡(著)/ 立間 祥介(訳) 聊齋志異 岩波書店

直接表示されていないが、表現者も主節主語も「蓮香」である。この例では、主節主語が知覚した内在型事態(「あなたが死病にとりつかれた」)は、主節主語に強く「対応要請」を迫ったものと思われる。また、「あなたが死病にとりつかれた」の部分は、「蓮香」によって記憶され想起された内容である。

### 5.3.3.2 表現者と主節主語の事態の捉え方の間に差異が認められる場合

次の(289)の例では、表現者と主節主語が異なり、両者の事態の捉え方の間に差異が認められる。表現者は「弔辞」を書いた人物で、主節主語は「和子ちゃん」である。内在型事態の行為者は「和子ちゃん」である。

(289) …弔辞には、「冗談じゃないよ、和子ちゃん」いう題で書いたけどさ、冗談じゃない死に方したね。彼女はママ（かし子さん）がおって、毎日毎日、ママを お見舞いに行ってた のを 残して死んだから。フランス映画社は柴田さんという社長がいるの。だからまだいいけど、

((202)を(289)として再掲)

1994 横尾 忠則(著)/ 淀川 長治(著) 二人でヨの字 筑摩書房

主節主語（「和子ちゃん」）の行為は、「残して死んだ」と表現されている。しかし、表現者が描写する、「毎日毎日、ママをお見舞いに行ってた」という事態に、主節主語から新たに働きかけがあったわけではない。「和子ちゃん」は「ママをお見舞いに行ってたのを残し」たかったわけでもなく死を選んでもいない。内在型によって描写された事態（「毎日毎日、ママをお見舞いに行ってた」）を、主節主語は継続できずに死に至ってしまう。

(289)では、表現者によって描かれた内在型事態は主節主語と共有されていない。表現者（弔辞を書いた人物）が事態を脳裏に浮かべた時には、主節主語は既に故人となっていて共有は不可能になっていた。表現者と主節主語の事態の捉え方の差異が決定的な例である。

次の例は、表現者は作者、主節主語は「晴美」であり、内在節主語は「一人の客」である。

(290) 晴美がホームズを見失わないように、視線を下向き加減にして歩いていたので、目の前で、急に一人の客が 方向転換したのを、よけきれず、ぶつかってしまった。「あ、失礼」と相手が謝る。晴美はよろけた拍子に、ちょうど、会場へ入って来たばかりの一人の婦人と衝突してしまった。

1984 赤川 次郎(著) 三毛猫ホームズのびっくり箱 光文社

表現者（作者）は、「一人の客が方向転換した」「現象」事態を、表現者（作者）自身が直接知覚したように描いている。一方、主節主語の「晴美」は、客を「よけきれず、ぶつかってしまった」とあり、表現者（作者）ほど十分に知覚できていなかったことが分かる。

### 5.3.3.3 その他の表現者と主節主語の事態の捉え方の諸相

次の(291)では、引用会話内の内在型構文表現者（「清河八郎」）が同時に内在型行為者であり、主節主語は「御隠居」である。

(291) 豊次郎は不愉快そうな顔つきをして黙っている。清河八郎が、山岡の屋敷で鉄太郎へ文句をいっていたのは、やっぱりこの時分である。「折角新御番の祝儀に参ったのを、門前払いとはどうした訳だよ、あの御隠居は何かわたしに含むところでもあるのか」  
「いやあ、そんな訳はない。が、何しろわれわれ時々持て余す変人だ」「変人とは見え

ん」清河は少し頬をふくらした。

1996 子母澤 寛(著) 逃げ水 中央公論社

会話の表現者で内在型行為の行為者である「清河八郎」が内在型表現を使っている。「御隠居」は、内在型事態（「清河八郎が新御番の祝儀に参った」）に、真摯に向き合うべきだと主張する。一方、主節主語（「御隠居」）は、対応する気配を見せない。主節主語（「御隠居」）は、内在型事態表現者（「清河八郎」）の狙いが分かる。そのため、無視し、内在型事態に自分が相対することを拒否する。内在型事態の価値が共有されない状況が描写されている。

(291)では、内在型事態に対応要請を察知すべき人物は、表現者の清河八郎ではなく、表現を向ける先の御隠居が想定されている。作家である「実際の表現者」は、内在型に対応要請を察知させるものとして描き、読み手に「自己投入」を期待していると考えられる。

次の(292)では、主節主語は省略されている。表現者は語り手で、主節主語も語り手である。

(292) とっさににぎった、ゲンの手。わらいくずれる人がきにからだごとぶつかり、おし

わけて、むちゅうでかけた。ゲンがころんだのを立つ時間もあたえないで、引きずりさえしたらしい。

1987 大原 興三郎(著) おじさんは原始人だった 偕成社

この例の場合、表現者は主節主語として、内在型現象（「ゲンがころんだ」）を直接知覚していない。「～さえしたらしい」とあるからである（「引きずった」ことのみ知覚していない可能性もある。）自分の行為に十分な自覚は無いが、振り返って表現する際に内在型を使用し、「現象」を「見ているかのように」描いている。表現者（主節主語）は、直接事態を見ているわけではないにもかかわらず、現象が「見えるような」効果を持つ内在型で表したうえで、「見ていない」ことを表現していることになる。また、基本的に、そうせざるを得ない。

「ゲンがころんだ」のを、手の感触を通じては察知したが、「引きずった」ことまでは分からなかったことも考えられる。その場合、手の感触を通じて察知した事態が「ゲンがころんだのを」という内在型で表現されていることになる。内在型は、このように、知覚動詞を使用しないことが基本であり、意味解釈への影響は様々である。

尚、一文挟んだ前の文には、主要部そのものではないが、主要部の「ゲン」と密接な関係にある「ゲンの手」が、無助詞格成分として先行提示されている。また、内在型主語の「ゲン」は、主節内で、2種類の格役割を担っている可能性がある。①〈ニ格:ゲンに「立つ時間もあたえないで」〉、②〈ヲ格:ゲンを「引きずりさえしたらしい」〉。一方で、「立つ時間もあたえないで」を、定型的な副詞節と捉えることもできる。

次の(293)は、内在型構文から関係節化が生じている例である。元になる内在型構文の表現者と主節主語は異なるが、内在節主語と主節主語が同じなのか異なるのかははっきりしない。

(293) 木曾街道のほうから 大きな猪を 檻に 入れたのを かついだ 男が 二人、追分のところで一休みしているのを附近の子供達が物珍らしそうに覗き込んでいた。

((150)&(152)&(190a)を(293)として再掲)

2001 平岩 弓枝(著) はやぶさ新八御用旅 講談社

関係節化が生じる前の、元の内在型構文の表現者は「作者」、主節主語は「男(二人)」、内在節主語は「男(二人)」、あるいは、別の人物である。すなわち、「大きな猪を檻に入れた」人物と、それをかついだ男二人が、同一人物なのかどうかははっきりしない。仮に、この「大きな猪を檻に入れた」という行為の主体が、男二人とは別人物と仮定した場合、その行為を男二人がその場で確認したのかも不明である。作中人物の「男(二人)」が「大きな猪を檻に入れた」事態を知覚したのかどうかに関心が薄い表現とも考えられる。さらに、内在型を使って、臨場感のある表現にすることが意識されているのかもはっきりしない。事物間の関係(猪と檻)を表すことが主目的で、そこで選ばれたのが、それら複数のモノが関わる「行為」(「大きな猪を檻に入れた」)への言及である可能性もある。

(294)について確認したい。

(294) これは兵隊に行く前の写真ですね。 母が この写真を 捨てようとしたのを 祖母が 預かって、私に渡してくれました。

((100)&(104)を(294)として再掲)

1999 津島 佑子(著) 私 新潮社

表現者は話し手で、母にとっては娘、祖母にとっては孫である。会話の現場には、内在型構文内の目的語である「(父親の)写真」がある。祖母が母から写真を受け取る経緯は、祖母から聞いたと考えられるが、必ずしも明確ではない。また、「母が写真を捨てようとした」事態を、祖母が表現者と同じように捉えたのかも実ははっきりしない。表現者よりも祖母が事態を重く受け止めた可能性もあるし、表現者の想いがより強い可能性もある。

会話の現場にある「写真」は、三者に関わり、表現者の父親の写真であることまで考えると、四者に関わるとも言える。ある「現象」(「母がこの写真を捨てようとした」)が、表現者によって内在型で表現された時、知覚された事態が主節主語によってどのように捉えられたのか、必ずしも明らかでないと言える。主要部内在型関係節は、表現者が「現象」の知覚者であることが基本(直接知覚を言語化する場合や間接知覚を事態表現によって創出する場合等)だが、そこに、通例、「知覚者」を明示的に示さないという特徴が加わって、意味解釈に様々な影響が出てくる場合があると言える。

## 5.4 主要部内在型関係節構文の使用動機に想定される「表現欲求の内実」

本節では、主要部内在型関係節構文の使用動機を、同構文の表現者が同構文の使用によって実現させたい「表現欲求の内実」という観点から考察する。その際、①主要部内在型関係節構文の実例観察から、同構文では、表現者（あるいは、主節主語）の「気づきとその内容とそれへの対応」が表現されていると考えられること、②表現者（あるいは、主節主語）は、現象事態の知覚者である（想起、想像する場合を含む）と想定されること、について取り上げる。

### 5.4.1 渡辺（2001, 2007, 2008）の「人間観」と様々な「欲求」

5.4.1では、「表現欲求の内実」に関わる「欲求」について取り上げる。人の「欲求」に関する精緻な理論を展開する渡辺（2001, 2007, 2008）に依拠して、渡辺の視点から捉えられた「欲求」について見ていく。

#### 5.4.1.1 様々な「欲求」と「自己形成」

渡辺（2001, 2007, 2008）は、「自己形成史分析」を共通の母胎として、5.5.1.1で取り上げる「セルフ・カウンセリング」と、ここで見る「自己評価分析」とが生まれてきたとする。渡辺の捉える「欲求」は、この「自己形成」と密接に関わるものとしての「欲求」である。

はじめに、「欲求」と「自己形成」との関係のあらましが分かるものから確認していく。

(295) 私たち人間は、生きている以上、つねに何かを求めて生きています。私たちが求めている何かは、実に多種多様です。どうして、私たちが求めるものは、さまざまなのでしょうか。それは、私たちの経験することが、実に、多種多様である、ということからきています。言いかえると、私たちが何を欲するかは、私たち一人ひとりの、過去の経験の積み重ねによる自己形成によって違ってくるといことです。

ある人はお金がほしい、と思います。ある人は名誉がほしい、と思います。ある人は体力がほしい、と思います。ある人は精神力がほしい、と思います。数えあげていけば、果てしがありません。

けれども、自己形成史分析の理論では、とことんまで突きつめてゆくと、人間の抱くあらゆる欲求の背後には、ただ一つの根源的な欲求が潜んでいる、と捉えています。その根

源的欲求を、自己形成史分析では、“自己評価欲求”と名づけています。このことは、自己形成史分析の唯一の前提になっています。

[略]

渡辺 (2008:28)

次に、上の“自己評価欲求”を基盤とする、渡辺 (2001, 2007, 2008) の「人間観」について確認する。(296)は、渡辺 (2008) が提唱する「自己評価分析」の人間観の概要である。

(296) 自己評価分析の人間観では、『私たち人間は、さまざまな条件にもとづいて、積極的には、自己の価値をより高く肯定的に評価できるようになることを求め、消極的には、より低く否定的に評価せざるを得なくなることを避ける』という根源的な欲求性向があることを前提としています。

この根源的な欲求性向を、自己評価欲求性向と名づけています。自己評価分析の理論では、私たちの自己形成の原動力を、この根源的な自己評価欲求性向にあると捉えています。言いかえると、この、より高い自己評価の可能性を追求する、という傾向性が、自己形成を促している、と考えています。

さらに、この、根源的な自己評価欲求性向が、たとえば、プラスの価値概念に結びつくと、特定の条件にもとづいて、自己肯定を追求しようとする欲求が生まれます。この根源的自己評価欲求性向が、マイナスの価値概念に結びつくと、特定の条件にもとづいて、自己否定を回避しようとする欲求が生まれてきます。

私たちは、人生において、他者から否定的に評価される、あるいは、肯定的に評価される、という経験をします。否定的経験からは、マイナスの価値概念が形成され、肯定的経験からは、プラスの価値概念が形成されます。私たちのうちに潜在している自己評価欲求が、この、自己の経験にもとづく、マイナスやプラスの価値概念と結びつくと、特定の積極的、あるいは、消極的な自己評価欲求を生み出す、と言ってよいでしょう。

言いかえると、特定の経験にもとづいた、価値概念を目的として立て、その目的を達成することで、自己の存在価値を評価しようとしたり、その価値概念を規範として課して、その規範を遵守することで、自己の存在価値を評価しようとしたりします。

まとめて言うならば、私たちのうちに潜在している、不特定な根源的自己評価欲求性向が、自己の直接的、あるいは間接的な経験を媒介にして、特定の価値概念 (条件) と結びつくと、実に多種多様な個別的な自己評価欲求が生まれてくるのです。 渡辺 (2008:7-8)

(296)には、不特定な根源的自己評価欲求性向と個別的な自己評価欲求との関係が述べられている。次の(297)では、「自己形成史分析」が世界を大きく三つの次元に分けて捉えるのに



即して、「自然的欲求・社会的欲求・文化的欲求」（渡辺 2001）と「自己評価欲求」との関係が述べられている。

渡辺（2001）は、自然的欲求について、こう指摘する。

(297) 自然的欲求というのは、自然的生命を維持しようとする欲求です。言いかえると、自分の生命を保とうとする欲求です。 [略]

私達は、自然的生命を維持したい、という欲求を充たすことができると、快感を覚えます。しかし、その反対に、自然的生命を維持したい、という欲求を充たすことができないと、不快感を覚えます。

この自然的欲求を充足することができて、快感を覚えているときには、私たちは、自分の存在を肯定的に評価できます。

しかし、その反対に、この自然的欲求を充たすことができずに、不快感を覚えるときには、私たちは、自分の存在を否定的に評価せざるをえなくなります。

それ故、私たちは、自然的欲求の充足によって、無自覚的に自分の存在を評価しようとする傾きをもっている、とすることができるでしょう。

このような自然的欲求充足の背後に潜んでいる、自己評価への傾きを自然的自己評価欲求と名づけたと思います。 渡辺（2001：29）

次に、社会的欲求について、こう述べている。

(398) 社会的欲求というのは、社会的評価を得ようとする欲求です。言いかえると、ほかの人たちから、自分の存在を肯定的に評価されたい、否定的には評価されたくないという欲求です。この社会的欲求は、さらに、三つの欲求に分けることができるでしょう。<sup>45</sup>

まず第一に、特定単独の他者から評価されたいという欲求をあげることができます。

[略]

第二に、特定少数の他者から評価されたいという欲求をあげることができます。

[略]

---

<sup>45</sup> 語用論の領域で言及されることのある、人類学・社会学的背景を持つ研究者に、ゴッフマンがいる。ゴッフマンは、渡辺（2001）の指摘する「自己評価欲求」（特に「社会的欲求」と似たものとして、「自分自身に要求する積極的な社会的価値」を取り上げ、それを面目〔face〕と呼んでいる。下は、面目〔face〕という概念を定義づけている箇所である。

i) 面目〔face〕という概念を定義づけるなら、ある特定の出会いのさい、ある人が打ち出した方針、その人が打ち出したものと他人たちが想定する方針にそって、その人が自分自身に要求する積極的な社会的価値、ということになるだろう。面目とは、認知されているいろいろな社会的属性を尺度にして記述できるような、自分を巡る心象(イメージ)である。ゴッフマン（2012:5）

第三に、不特定多数の他者から評価されたいという欲求をあげることができます。

[略]

他者が、特定のひとりであるか、特定の少数であるか、不特定な多数の人々であるかという点ではちがいがあっても、どの欲求も、いずれも、自分の存在を他者から肯定的に評価されたい、否定的に評価されたくないという点では、変わりがありません。

社会的評価を獲得したい、という欲求を充たすことができると、私たちは満足感を抱きます。その反対に、社会的評価を獲得したい、という欲求を充たすことができないと、私たちは不満感を抱きます。

この社会的欲求を充たすことができ、満足感を抱いているときには、私たちは自分の存在を肯定的に評価することができます。

しかし、その反対に、この社会的欲求を充たすことができずに、不満感を抱いているときには、私たちは自分の存在を否定的に評価せざるをえなくなります。

それゆえ、私たちは、社会的欲求の充足によって、前自覚的に自分の存在を評価しようとする傾きをもっている、とすることができるでしょう。

このような社会的欲求充足の背後に潜んでいる、自己評価への傾きを社会的自己評価欲求と名づけたと思います。 渡辺 (2001: 30-31)

そして、文化的欲求について、こう述べている。

(299) 文化的欲求というのは、文化的成果をあげようとする欲求です。

私たちは、文化的伝統のうちにあって、文化的成果をあげようとしています。

文化的成果をあげたい、という欲求を充たすことができると、私たちは充足感を覚えませんが、その反対に、この文化的成果をあげたい、という欲求を充たすことができないと、私たちは空虚感を覚えます。

この文化的欲求を充たすことができ、充実感を覚えているときには、私たちは、自分の存在を肯定的に評価できます。その反対に、この文化的欲求を充たすことができずに、空虚感を覚えているときには、私たちは、自分の存在を否定的に評価せざるをえなくなります。

そこから、私たちは、文化的欲求の充足によって、自分の存在を評価しようとする傾きをもっている、とすることができるでしょう。

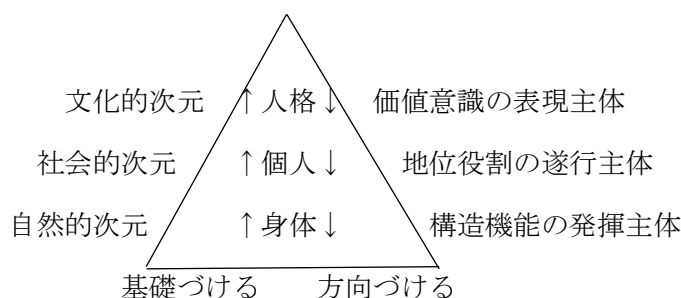
このような文化的欲求充足の背後に潜んでいる自己評価への傾きを文化的自己評価欲求と名づけたと思います。 渡辺 (2001: 32)

渡辺 (2001) は、さらに、根源的欲求としての自己評価欲求について、次のように述べる。

(300) 私たちは、自然的欲求の背後にも、社会的欲求の背後にも、文化的欲求の背後にも、自己の存在価値を肯定したい、少なくとも、否定したくない、という自己評価欲求が潜在していることを明らかにしました。この自己評価欲求こそ、人間に独自の欲求であり、かつ、根源的欲求である、とすることができるでしょう。 渡辺 (2001: 32-33)

渡辺 (2008) は、「自己形成史分析では、人間を端的に“世界との関わりにおいて、自己形成する存在である”と捉えています」とし、世界を大きく三つの次元に分け、「自然的次元、社会的次元、文化的次元と次元を分けて、人間を理解したときに、初めて、いままでの人間についての多種多様な考え方を、一つの間観の中に統合することができる (渡辺 2008: 33-34)」としている。そして、次のような図によって、三次元間の関連を示している。

(301) 図2 三次元間の関連



渡辺 (2008: 43)

#### 5.4.1.2 「自己評価の試み」(渡辺 2008) と「自己形成」との間に想定される相補的關係

本論文では、主として、「自然的欲求」(渡辺 2001) が、5.4.2.3 で確認する「知覚と行為の循環的關係」(本多 2005) を動機付けているという立場を取っている。そして、この「知覚と行為の循環的關係」に見られる相互に補完的な關係が、渡辺 (2001, 2007, 2008) の指摘する様々な「欲求」と「自己形成」との間にも想定されると考える。

この「欲求」と「自己形成」との間の相互に補完的な關係は、主要部内在型關係節と連体修飾節との間に想定される使用動機の間にも觀察され、両者の「表現欲求の内実」の相違として現われると考える。すなわち、主要部内在型關係節構文は、進行中の〈自己形成〉(渡辺 2001, 2007, 2008) の過程そのものとしての〈自己評価の試み〉(渡辺 2008) の過程を、その場に臨場する様相で言語化するのに適した表現形式だと考えられる。この点については、5.4.3.2 で事例に即して確認する。それに対して、一部の連体修飾節(情報付加型名詞修飾節)は、行為主体の当面の〈自己形成〉の態様を属性として行為主体に付与することができ、主体がそのような主体として次の行為に向かう様相を表現するのに適した文法形式だと考え

られる。この点については、5.4.3.1 で事例に即して確認する。また、5.4.3.3では、これらの表現形式による日本文を英語に翻訳した際に、両者の間の相補的な関係が、英語の表現形式上の差としてかなり明瞭な形で現れることを見る。

主要部内在型関係節も連体修飾節も、生起事態の各事態参与者に当該事態に参加したという属性を付与することができるが、進行中の対応行為に伴う属性付与か、選択済みの対応行為下の属性付与かという点で相互に補完的な関係にあると考えられる。すなわち、主要部内在型関係節の場合は、当該関係節による描写後に属性付与の態勢が整うのに対して、連体修飾節の場合は、連体修飾節構造成立と同時に属性付与が完了すると考えられる。この点は、5.5.3.3で事例に即して確認する

注目したい点として、相互に補完的な関係にあると考えられる「知覚と行為」は、主要部内在型関係節構文による表現の表現内容そのものでもあることを挙げておきたい。

次の5.4.2では、「知覚と行為」の問題を「アフォーダンス」との関連から見ていく。

## 5.4.2 「アフォーダンス」と「知覚のなかの行為」

主要部内在型関係節構文の表現者（あるいは、主節主語）は、現象事態の知覚者である（想起、想像する場合を含む）と想定される。人は環境の中にあって自身を取り巻く環境が提供するものを経験する。その環境が提供するものを、ギブソンはアフォーダンスと呼んだ。はじめに、このアフォーダンスについて見ていく。

### 5.4.2.1 アフォーダンス

永井均・中島義道・小林康夫・河本英夫・大澤真幸・山本ひろ子・中島隆博編（2002）『事典哲学の木』講談社 の「アフォーダンス」の項目には、次のような記述がある。

(302) アフォーダンス (affordance: 英語の afford からの造語) とは、環境が動物に提供するものである。良いものでも悪いものでも環境が備えているものである。表面のレイアウトや変化にはアフォーダンスがあり、それは光学情報によって特定される。つまり光の中にアフォーダンスは見える。環境に備わる「価値」や「意味」は、観察者の演繹なしに、直接知覚される。意味は心という孤立した領域にあるわけではなく、環境にある。

たとえば傾斜と凹凸が少ない固くて広がりのある表面は立つことをアフォードする。この支持面のアフォーダンスは、行為で測定される。アフォーダンスは環境の事実であり、

かつ行動の事実である。アフォーダンスを測る単位はまだ物理学にはないが、動物の知覚と行為は毎日それを測定している。アフォーダンスは心理学と物理学と生物学との溝を埋める、それらの領域を横断する単位である。生息地にあるアフォーダンスの集合は、そこで生きる動物を意味しており、動物の生は周囲にあるアフォーダンスの集合を意味している。両者は相補的である。ただし、無限のアフォーダンスを持つ環境全体について考えるなら、それが動物よりも先に存在したことは明らかである。

20 世紀アメリカの知覚心理学者ジェームズ・ギブソン (James J. Gibson, 1904-79) は、パース、ジェームズ以来のプラグマティズムの伝統に深くつながるオリジナルな光学をほぼ一人で半世紀をかけて作りだした。アフォーダンスは彼の造語である。それは心理学に周囲を与える用語である。動物行動が更新し続けるものであることを認めた上で、それが発見している周囲を記述しようとするのは難しい。アフォーダンスについて語ることは誰でもできるが、それを行為として記述することには予想もできない困難が付きまとう。アフォーダンスは心理学に、尽くせない周囲をもたらし、異質な相に入ることをうながしている。

『事典哲学の木』(2002: 33-34) 項目担当執筆者: 佐々木正人

5.4.2.2 では、アフォーダンスとノエ (2010) の『知覚のなかの行為』の関係を見ていく。

#### 5.4.2.2 アフォーダンスとノエの『知覚のなかの行為』

ここでは、ノエ (2010) 『知覚のなかの行為』の「第1章: 知覚に対するエナクティブ・アプローチ序論」の冒頭の記述を見ていきたい。知覚と行為は、切り離しては捉えられないことが主張されている。そこには、アフォーダンスが関わる。日本語訳の太字部分 (太字表記は本論文の筆者による) に当たる原著の英文を、日本語訳の後に掲載する。

(303) この本の主要な着想は、知覚とは行為の仕方であるということにある。知覚は、私たちにに対して、あるいは私たちの中で生じる何かではない。知覚は私たちが行う何かなのである。杖を打ち付けて道を探りながら、物の散乱した空間を進む盲人のことを考えてみよう。彼は、触ることを通じてその空間を知覚しながら進む。一挙にではなく、時間をかけて、熟達した探索と運動によって知覚する。こうしたやり方が、知覚するとは何かについての、私たちの範例である。あるいは、少なくとも範例になるはずである。世界は、身体運動と〔世界と身体とのあいだの〕相互作用を通じて知覚者に出会うことができるようになる。この本で私は、すべての知覚がこのような仕方で、触れることに類似していることを論じたいと思う。つまり、知覚経験は、私たちが身体的技能を所有していることのおか

げで内容を獲得するのである。私たちが何を知覚するかは私たちが何を行うか(あるいは、  
どういう技能知[know-how]をもっているか)によって規定される。私たちが何を知覚する  
かは、私たちが何をできるか[ready to do]によって規定されている。これから詳細に見  
ていくことになるが、私たちは自らの知覚経験をエナクトする[enact: 成立させる]ので  
あり、知覚経験を行為として演じているのである。

知覚者であるとは、運動が感覚刺激へと及ぼす影響を非明示的に理解しているというこ  
とである。いくつかのありふれた事例を挙げよう。私たちが近づくにつれて、対象は視覚  
野のなかでより大きいものとして現れ、私たちがその周囲を動き回るにつれて、対象の姿  
は変わっていく。私たちが音源に近づくにつれて、音はより大きくなる。対象の表面上で  
手を動かすと、感覚が移り変わる。知覚者として私たちは、感覚-運動的依存性  
[sensorimotor dependence]のなすこの種のパターンに精通している。私たちがそれに精通  
しているということは、周囲に何があるのかを見てとろうと、目、頭、身体を動かすとき  
の、無思考の自動性の内に示されている。私たちは、よりよく見るために(あるいは、自  
分の関心を引く対象を上手に扱ったり、嗅いだり、なめたり、それに耳を傾けたりするた  
めに)、自ずと首を伸ばしたり、近づいたりする。私がエナクティブ・アプローチと呼ぶも  
のの中心的な主張は、私たちの知覚能力が、この種の感覚-運動的知識の所有に依存してい  
るというだけでなく、それによって構成されているということにある。

エナクティブ・アプローチの一つの含意として、ある種の身体技能—例えば、目や手の  
運動が感覚に及ぼす効果に最低限親しんでいるという技能や、その他の技能—を有する動  
物だけが、知覚者でありうるというものがある。というのも、知覚するとは、じつのところ、  
一種の熟達した身体活動だからである。するとまた、少なくともいくつかの原始的形  
態における知覚能力を持つ動物だけが、自己運動の能力を持つということにもなるだろう。  
とりわけ、自己運動は、自己アウェアネス[awareness: 気づき]の知覚的様態、例えば、自  
己受容と「遠近法的[perspectival 自己意識] (すなわち、自己の周囲世界との関係を失わ  
ないでいる能力) とに依存している。

エナクティブ・アプローチの二つ目の含意は、知覚とは脳内の処理であり、そうした脳  
内の処理を通じて知覚システムが世界の内的表象を構成するという、一哲学と科学の両方  
で流布している一発想を拒否すべきだということである。知覚が脳内で生じる何かに依存  
しているということは確かであり、脳内の内的表象(例えば、知覚内容を担う内的状態)  
も存在することは、疑いにくい。しかし、知覚の本質は、脳内の処理にではなく、一つの

全体としての動物がなす一種の熟達的活動[skillful activity]にある。エナクティブな見解は、知覚と意識の神経的基盤を理解するための新しいやり方を考案するように、神経科学に促すのである。 [略] ノエ(2010:1-3)

(304) The main idea of this book is that perceiving is a way of acting. Perception is not something that happens to us, or in us. It is something we do. Think of a blind person tap-tapping his or her way around a cluttered space, perceiving that space by touch, not all at once, but through time, by skillful probing and movement. This is, or at least ought to be, our paradigm of what perceiving is. The world makes itself available to the perceiver through physical movement and interaction. In this book I argue that all perception is touch-like in this way: Perceptual experience acquires content thanks to our possession of bodily skills. *What we perceive* is determined by *what we do* (or what we know how to do); it is determined by what we are *ready* to do. In ways I try to make precise, we *enact* our perceptual experience; we act it out. Noë, A. (2004:1)

ノエは、ギブソンのアフォーダンスについても言及している。

(305) [略] ギブソンによれば、環境は面と対象のみから構成されているのではなく、「アフォーダンス」からも構成されている。環境内の事物、すなわち環境の特性は、事物を用いて何かを行う（隠れ場を見つけたり、よじ登ったり、下に隠れたりする）ための機会を動物に提供する。すなわちアフォーロードする。ギブソンによれば、包囲光配列の中にある情報は、環境の配置の特性を特定するだけでなく、環境がもつアフォーダンスをも特定する。私たちは平らな面があることだけではなく、支えをアフォードしてくれるものがあることをも直接的に知覚することができる。木を見る場合、直接知覚しているのは木だけではなく、登ることができるようなものでもある。ギブソンは、自分の理論のこのような特徴をきわめてラディカルなものだと考えていた。というのも、彼の理論は、私たちは世界のなかにある意味や価値を直接的に知覚しているのであって、決して世界に意味や価値をおしつけているのではないと提起するものだったからである。

いまや私たちはギブソンの見解を、エナクティブ・アプローチの文脈において有効なものへと再定式化することができる。この本で私が展開してきた見方にしたがうなら、知覚することとは、感覚-運動的附随性における構造を知覚することである。あるものを平らであると見ることは、まさしく、感覚-運動的附随性のある特定の可能性を生じさせるも

のとしてそれを見ることである。ある面を平らであると感じることは、まさしく、感じている者の運動の可能性を妨げたり形作ったりするものとしてそれを知覚することである。知覚するとき私たちは運動の可能性の語法を用いて知覚しているのだ、と言え、イメージを喚起するような仕方論点を示すことができるだろう。こう考えることは、ギブソンのアフォーダンスという着想を信頼することに力を貸す。知覚することは(まず何よりも)環境が知覚者の運動の可能性を構造化する仕方を学ぶことであり、それゆえさらにそれは、環境からアフォードされる運動や行為の可能性を経験することである。ギブソンの理論は—そしてこれは妥当な理論なのだが—、私たちは平らであることを見て、それからそれを登るにふさわしいものとして解釈する、というものではない。ある面を平らであることとは、運動のいくつかの可能性を利用可能にするものとしてそれを見ることである。それを平らであることとは、特定の可能性をアフォードするものとしてそれを直接的に見ることなのである。

アフォーダンスは動物ごとに相対的なものであり、たとえば動物の大きさや形に依存している。また、アフォーダンスは技能に相対的なものであることは、指摘しておく価値がある。例を挙げるなら、野球におけるよいバッターとは、投げられたある球がそのバッターに対してはある特定の運動可能性をアフォードするようなバッターのことである。バッターの卓越性は、第一義的には、視力の卓越性のことではない。バッターの卓越性を構成しているのは感覚-運動的技能的習熟であって、この技能を有していることにより、それを所有していなければ利用可能でないような行為の機会を状況がアフォードすることが可能になるのだと言ってよいだろう。

したがって、エナクティブな見解によれば、ある意味では視覚のあらゆる対象は(もっと言え、知覚のあらゆる対象は)アフォーダンスである。ある特性を経験することは、何よりも、その特性の感覚-運動的プロファイルをつかむことである。それは、その対象を、運動の可能性または運動のための可能性を決定するものとして経験することなのである。

ノエ (2010: 167-169)

(306) According to the enactive view, there is a sense, then, in which *all* objects of sight (indeed, all objects perception) are affordances. To experience a property is, among other things, to grasp its sensorimotor profile. It is to experience the object as determining possibilities of and for movement. Noë, A. (2004: 106)



#### 5.4.2.3 「知覚と行為の循環」とアフォーダンスの「文化学習」

『事典哲学の木』(2002)では、ギブソンの主張に関して、主として、環境(モノ中心)と動物との「相互作用」との関連で紹介されていた。また、ノエは、ギブソンの主張したアフォーダンスについて次のように述べていた。「知覚のあらゆる対象はアフォーダンスである。ある特性を経験することは、何よりも、その特性の感覚・運動的プロファイルをつかむことである。それは、その対象を、運動の可能性または運動のための可能性を決定するものとして経験することなのである」としていた。それでは、そもそも、そこで指摘されている、ある特性を「経験」することを促す動因・動機は何なのだろうか？

本多(2005)の次の指摘は、この点を考えるのに参考になる。加えて、「知覚と行為の循環」について分かり易く解説されている。

本多(2005)は、「文化学習と知覚行為循環」というタイトルの節で、「その事物がどのようなアフォーダンスをもつか」を発見するための探索活動という問題について言及している。「探索活動のあり方はどのように決まる」のかという問いに、次のような指摘をしている。

(307) その要因は、一つは社会的なものである。たとえば、電話には、話すというアフォーダンスのほかに、舐める、人を殴るといったアフォーダンスもある。しかしわれわれは通常、電話を使って人と会話することはあっても、電話を舐めまわしたり、電話で人を殴ったりすることはない。これは、電話のもつアフォーダンスの実現に対する、社会的な規制を、文化の中で学習することによる。これは Tomasello (1999:84-87) の言う「意図的なアフォーダンス (intentional affordance)」と「自然的・感覚運動的なアフォーダンス (natural sensory-motor affordance)」の区別に相当する。われわれは、事物の意図的なアフォーダンスを文化学習 (cultural learning) によって学習する。

いま一つは、逆説的だが、ほかならぬその事物に対する知覚である。事物に対する知覚が、ほかならぬその事物に対する探索活動をガイドするのである。 [略]

事物を巡る探索という行為がその事物に関する知覚を可能にし、その知覚が探索活動をガイドする。ここには循環的な構造がある。この循環を生態心理学では、「知覚と行為の循環」と呼んでいる。そのような循環の中で発見される、事物のもつ行為の可能性がアフォーダンスということになる。この循環の成立が、アフォーダンスの知覚を支えているわけである。 本多(2005:59-60)

この中の、「事物を巡る探索という行為がその事物に関する知覚を可能にし、その知覚が探索活動をガイドする」様相が、ノエ(2010)が「杖を打ち付けて道を探りながら、物の散乱

した空間を進む盲人のことを考えてみよう」として展開した議論の本質だと考えられる。ノエは、この箇所、「知覚と行為の循環」について語っているものと思われる。また、それは、主として、本多（2005）が Tomasello（1999:84-87）から引用している、「自然的・感覚運動的なアフォーダンス（natural sensory-motor affordance）」に関わると考えられる。

また、ここでは、社会的なものとしての文化が、探索活動のあり方が決まる要因として取り上げられており、これは、渡辺（2001）が指摘する「社会的欲求」や「文化的欲求」が関わってくることを示唆する。そして、そのような、「社会的欲求」や「文化的欲求」を基礎付ける「自然的欲求」が、ノエの言う「ある特性を経験すること」を促す動因・動機だと捉えるのが妥当だと考えられる。

#### 5.4.2.4 人間の持つアフォーダンスと「自己評価欲求」

渡辺（2001）は、「自己評価欲求」を人間に独自の欲求としている。そして、本多（2005）によれば、その人間もアフォーダンスを持つとされる。本多（2005）は、「他者もアフォーダンスをもつということである。他者の持つアフォーダンスは社会的なアフォーダンスであり、その知覚と相補的に知覚される自己は、インターパーソナル・セルフである。（本多 2005:61）」としている。そして、次のように述べる。

(308) なお、社会的なアフォーダンスの知覚は、第三者の存在の知覚や場面の知覚にガイドされることがある。たとえば日本語では、女性が自分の配偶者を指示する用語として、「主人」ないし「夫」、いわゆる下の名前（「太郎（さん／君）」など）、あだ名などが使い分けられるが、この使い分けは、発話場面にいる配偶者以外の人物の違いに応じている。すなわち第三者の知覚にガイドされているわけである。 [略] 本多（2005:62）

また、本多（2005）は、知覚のための活動と行動のための活動の区別について、(309)のよ  
うな Gibson（1966）と Reed（1996）の考え方を紹介している。

(309) Gibson（1966）、Reed（1996）は、知覚のための活動（activity）と行動（behavior）の  
ための活動を区別している。彼らは前者を「探索的（exploratory）」、後者を「遂行的  
（performative）」な活動と呼ぶ。彼らの言う探索的活動は、情報の走査と利用のことであり、  
ふつうは、環境に変化をもたらすほど多大な力を消費する必要はない。他方、遂行的  
活動は、環境に変化をもたらす力を発揮する活動である。例えば、食べ物を見たり、その  
匂いを嗅いだりすることは探索的活動であるが、食べ物を獲得し、かみくだき、食べるこ  
とは遂行的活動である。 本多（2005:62）

「他者」もアフォーダンスを持ち、「私」の社会的なアフォーダンスの知覚が、第三者の知覚にガイドされるということは、「私」の「自己評価欲求」が「他者」の「自己評価欲求」に影響を受けるということの意味し、当然、その逆も考えられる。それは、「私」の「知覚のための活動」が、「私」の「行動のための活動」を、同時並行的に引き起こすことに繋がる。そのように捉えるなら、「知覚のための活動」は主として主要部内在型関係節構文内の従属節、すなわち、主要部内在型関係節による表現内容に合致し、それに対する「行動のための活動」は、主として当該構文の主節他動詞による表現内容に合致すると考えられる。それらの活動の双方が関わる継起的過程を、統合度の高い水準で描写するのに適した表現構造を持つ文法形式が主要部内在型関係節構文だと考えられる。<sup>46</sup>

#### 5.4.3 「自己評価欲求」(渡辺 2001, 2007, 2008) から捉えた二種類の修飾機構の実際

渡辺 (2001, 2007, 2008) がその潜在を主張する「自己評価欲求」は、「自己評価の試み」(渡辺 2008) を動機付け、当面の「自己形成」(渡辺 2008) に関わる。5.4.3 では、このような視点から捉えた二種類の修飾機構の相補的な関係について実例を通して見ていく。

5.4.3.1 では、「過去の経験の積み重ねによる自己形成」と連体修飾の関係を見ていく。

##### 5.4.3.1 「過去の経験の積み重ねによる自己形成」(渡辺 2008) の態様と連体修飾機構

「過去の経験の積み重ねによる自己形成」(渡辺 2008) の態様は、連体修飾節を使用することで、自然な形で表現できる。次に(310)(311)として作例を示すが、(310)は大島 (2010) の言う「集合限定」、(311)は「属性限定」に相当する。

(310) 「集合限定」：夏目漱石の『三四郎』を読んだ学生達

(311) 「属性限定」：『三四郎』を書き終えた夏目漱石

(310)の学生達は、「夏目漱石の『三四郎』を読んだ」という「過去の経験の積み重ね」を経た学生たちである。また、(311)の夏目漱石は、「『三四郎』を書き終えた」という「過去の経験の積み重ね」を経た夏目漱石である。

---

<sup>46</sup> 4章の4.6では、主要部が主格として主節動詞に接続している実例を示した。

(240) 毛の色つやが急になくなり、首の右側に小さなしこりができたなど思ったのが、あっという間に握り拳ほどの大きさになりました。 1983 鈴木 健二(著) 気くばりのすすめ 講談社  
この(240)の場合のように、主要部が主格として主節動詞に接続する主要部内在型関係節構文では、従属節及び主節とも、知覚のための活動を表す場合が多くなることが推測される。

下の(312)及び(313)には、「何を欲するかが、過去の経験の積み重ねによって違ってくる」様相が、文の構成に現われている。すなわち、「何を欲するかが、過去の経験の積み重ねによって違って来た」学生達と夏目漱石が、次を取る行為として何を欲するかが、(312)(313)の表現の中に確認できる。

(312) 『三四郎』を読んだ学生達の多くが夏目漱石の他の作品を読みたくなっらしい。  
「集合限定」

(313) 『三四郎』を書き終えた夏目漱石は、しばらくして、次の新聞連載のために『それから』の執筆を開始した。(『それから』を書き終えた夏目漱石は、…) 「属性限定」  
継起的に先行する事態に事態参与者として関わったという属性を得た主体の当面の自己形成の態様が、連体修飾機構によって表現され、主体がそのような主体として(新たな欲求に動機付けられて)新たな行為に向かう様相が、主節他動詞他の残余の部分で表現されている。

#### 5.4.3.2 「自己評価の試み」(渡辺 2008)の様相を臨場的に表す主要部内在型関係節構文

連体修飾機構が当面の「過去の経験の積み重ねによる自己形成」(渡辺 2008)の態様を言語化する際に関わる一方、主要部内在型関係節構文は、「自己評価の試み」(渡辺 2008)の過程の様相を臨場的に言語化する際に関わる。

(314) ところが七月二十三日から四日にかけて、暴風雨があり、市内の旭川が氾濫した。

金之助は洪水が起ると、大変だと言って小さな柳行李に自分の本を数冊入れたのを  
持って、県庁のある小高い坂の上にさっさと一人で避難した。

1995 伊藤 整(著) 日本文壇史 講談社

(314)の主要部内在型関係節構文の骨格部分は、「金之助は…小さな柳行李に自分の本を数冊入れたのを持って」である。当該関係節の現象描写文の部分は、「(金之助は)…小さな柳行李に自分の本を数冊入れた」で、自身が次を取る行為の前提となる行為が描写されている。これは、「〈動く世界〉に対応する行為の場面」(坪本 2002)の〈動く世界〉に当たり、「対応する行為」に当たるのが「持って」(主節他動詞)だと考えられる。〈動く世界〉への対応は、静的事態の場合に比べてより慎重さが求められ緊張も走りがちかもしれない。しかし、一般的に、〈動く世界〉だからといって、人の自己評価欲求を大きく揺さぶるものとして知覚されるとは考えにくい。(本論文では、しかし、〈動く世界〉への対応も、基本的に、自己評価欲求に動機付けられているという立場を取る)

ところが、(314)の金之助の現象「知覚」には緊迫感が漂い、表現としての臨場感も伴う。

ここには、主要部内在型関係節構文の表現構造が関わっていると考えられる。<sup>47</sup>金之助が「持った」のは、「本を数冊入れた」「柳行李」ではなく、「柳行李」に「数冊入れた本」でもない。内在型で、「小さな柳行李に自分の本を数冊入れたのを持って」と表現され、緊迫感の中でとっさの対応が為されたことが伝わってくる。

対応する外在型表現は、二つ考えられる（「自分の本を数冊入れた小さな柳行李」、「小さな柳行李に入れた自分の本数冊」。仮に、これらを使用した場合、行為表現の連続感と現場に居合わせる臨場感が弱まる。その点、内在型による表現は、事態に巻き込まれ対応を迫られている金之助が現にいる場に臨場し、金之助の行動を見守る感じが鮮明である。自身の行う「小さな柳行李に自分の本を数冊入れた」行為とそれを「持った」行為の描写は、「〈動く世界〉に対応する行為の場面」（坪本 2002）の描写だが、「持った」対象を「柳行李」か「本」か明確化する余裕の無さが、その場の不安と緊張と表裏の関係にある。（表現者は金之助ではない。しかし、「金之助は」と主題化され、読み手の視点は金之助の視点に誘導される印象があるうえ、「大変だ」と心の状態が口にされる描写が先行することで、金之助の行動の中に焦りが感じられることになる。）

金之助は「柳行李」と「本」を知覚している（知覚動詞は現れない）。しかし、金之助の脳裏には、より大きな知覚が成立しているのではないだろうか。直接知覚ではないものの、「旭川が氾濫し洪水が起こる事態が迫る様」が脳裏で前景化されていたと考えられる。この知覚は、金之助の自己評価欲求と不可分である。金之助は、「洪水が起ると、大変だ」と言って、

---

<sup>47</sup> この臨場性を伴う表現は、5.2.1.2 で見た、話者による〈事態把握〉という認知的な営みに関する2類型の内の〈主観的把握〉（池上 2011）の構図から為された典型的な例と考えられる。

また、これは、Langacker (1990)の以下の指摘に見られる「主体化」とも関わると考えられる。

i) a. Vanessa is sitting across the table from me.

b. Vanessa is sitting across the table

Thus (i a) suggests a detached outlook in which the speaker treats his own participation as being on a par with anybody else's, whereas (i b) comes closer to describing the scene as the speaker actually sees it. Langacker (1990:328)

自分が写っている写真へのコメントとしては(i a)が適切で、自身を客体として捉えている。一方、(i b)は、Vanessa が座っている光景を実際に見ている描写に近づき、主体は事態の中に身を置いていることになる。(i b)のように、(i a)に見られる事態の客体的な把握から、内在していた主体的な捉え方のみに至る変化が“subjectification”（主観化／主体化）と呼ばれている。

尚、池上 (2004:30-31) は、以前の Langacker (1985, 1990)に於ける〈主観化〉は、本来の客観的な把握から主観的な把握への転換として説明されていたが、Langacker (1998:75)でそれが改められ、「主観的な把握はもともと内在している (immanent) ものであり、むしろ課されていた客観的な把握が漂白化 (bleaching) し、消失 (loss) することによって、内在していた主観性が顕在化する過程という説明になっている」としている。そして、「事態把握という営みはすべて発話の主体の側の主観的な営みであるという認識を踏まえて言うならば、新しい説明の方の妥当性は疑いの余地のないところである」と指摘している。

自己評価不安に襲われていることを明かしている。これは、金之助の一連の行動が、眼前の「柳行李」と「本」だけではなく、脳裏に「旭川の氾濫と洪水」を知覚する中で為されたと感じさせる描写である。(314)では、意識的であれ無意識的であれ、現象「知覚」の選択も「行為」の選択も、同じく「自己評価欲求」が潜在する中で為されるという様相を捉えた、「知覚のなかの行為」が描写されていると言える。ノエの「知覚のなかの行為」は、「知覚」と「行為」は切り離せないという主張である。渡辺(2001, 2007, 2008)に依拠する本論文では、「知覚」と「行為」と「自己評価欲求」(渡辺 2001, 2007, 2008)は、相互に切り離せないという主張となる。

#### 5.4.3.3 二種類の修飾機構とその英語訳に使用される等位文と進行形との関係性

益岡(2020:14)は、「日本語の情報付加型名詞修飾節構文を他言語の構文—具体的には英語の非限定的関係節構文—と対照することを通じて、日本語の特徴と見られる点に光を当ててみたい」とする中で、(315)と(316)を挙げている。

(315) 学校を卒業するのを普通の人間として当然のように考えていた私は、それを予想以上に喜んでくれる父の前に恐縮した。(夏目漱石『ころ』)  
(益岡の(26))

(316) I had come to regard a university education as commonplace, and I was touched by my father's unexpected pleasure at my graduation. (E. McClellan 訳)  
(益岡の(26'))

益岡(2020:14)は、「寺村(1975-1978, 1980, 1983)は、日本語が英語に比べて情報付加型名詞修飾節構文を多用することを指摘している」とする。そして、寺村(1983)が挙げている日本語の原文である(315)では、『私』を主名詞とする情報付加型名詞修飾節構文が用いられ、それに対する英語の訳文である(316)では「等位文が用いられている、ということである(益岡 2020:14)」としている。

(315)を自己形成史的な視点から捉えるなら、それまでの自己形成では卒業を当然視していた「私」の当面の自己形成の態様が、「私」を主要部とする情報付加型名詞修飾節によって表されていることになる。継起的に後続する、「私」が「恐縮した」(“was touched”)事態の表現は、英語((316))では“and”が使用され、継起的な二つの事態であることを明示的に示す等位文となっている。ある自己形成段階の「私」が、そのような段階の「私」だからこそ経験するような様相で、英語なら等位文で表されるような新たな経験をするのである。

5.2.2.4では、主要部内在型関係節構文が進行形で英訳されている例を見た。

(317) これは、いったん逃げた母親が火の中に引き返そうとするのを、三木さんが止めて  
炎の中から助け出してきたのです。 (松本清張『砂の器』)

(318) Miki-san stopped a mother who was trying to go back into her burning house  
and went in himself to save her baby.” (Cary, Beth. 訳)

三木さんは、「母親が火の中に引き返そうとする」という、自身の「自己評価」が試される局面に遭遇する。正義感の強い三木さんは、迷わず母親に代わって赤ン坊を助けに行く。三木さんの「自己形成」に大きな影響を与えるであろう「自己評価の試み」の過程が、三木さんの「気付き」とそれへの「対応」として統合度の高い複文で表現されている。「自己評価の試み」に臨場する様相で事態を描く統合度の高い複文が、主要部内在型関係節構文であり、英語では、母親の行為を進行形で表すことで、〈客観的把握〉の構図から〈主観的把握〉の構図への転換が図られ、臨場感のある描写が為されることになる。

尚、益岡（2020）は、日本語の名詞修飾節構文と主題構文の関わりとその背後にあるものの検討結果として、次の2点を挙げている。

(319) 名詞修飾節構文のなかの非限定的名詞修飾節構文（情報付加型名詞修飾節構文）において、主名詞と修飾部の間に主題・解説の関係が認められる。

(320) 主題構文がテンプレートとして文構成の基盤を提供する日本語では、名詞修飾節構文においても主題構文の変種がテンプレートとして組み込まれ、非限定的名詞修飾節構文（情報付加型名詞修飾節構文）が多用される。 益岡（2020:17-18）

## 5.5 主要部内在型関係節構文と当該構文の表現者に想定される表現欲求の内実

本節では、主要部内在型関係節構文が、出来事事態の継起的側面を言語表現に組み込む際の、表現対象と表現範囲の選択及びそこに想定される当該構文の表現者の表現欲求の内実について考察する。その際、5.4で取り上げた渡辺（2001, 2007, 2008）が、「自己発見」のために考案した場面記述用紙や場面洞察用紙（渡辺 2001, 2007, 2008）が提供する視座を踏まえて、実例に即して見ていく。

### 5.5.1 「セルフ・カウンセリング」と「自己評価分析」（渡辺 2001, 2007, 2008）

5.5.1では、「セルフ・カウンセリング」及び「自己評価分析」について見ていく。

#### 5.5.1.1 セルフ・カウンセリング（渡辺 2001、2007、2008）

小林司編（2004）『カウンセリング大事典』新曜社の【セルフ・カウンセリング】self-counselingの項目には、考案者である渡辺康磨による以下の記述がある。

(321) ひとりのできる、書くカウンセリング。自分の問題を自分で発見し自分で解決していく力を身につける自己発見法。

1968年に、渡辺康磨により自己形成史分析という自己発見法が作られた。自己形成史分析とは、一定の視点に立って自分の自己形成過程を体系的に解明する方法である。

セルフ・カウンセリングは、この自己形成史分析を基盤にして生まれてきた、自分のための、自分による、自分についての書くカウンセリングである。

日常生活の一場面をとりあげて、記述し洞察していくことによって、自分の既成の価値概念（モノサシ）に気づき、そのとらわれから解放され、新しい未来を切り開いていける方法として生み出された。

話す、聞く、というトーク・カウンセリングでは、聞き手を必ず必要とするが、読む、書く、というセルフ・カウンセリングでは、読み手を必ずしも必要としない。書き手がそのまま読み手となりうるからである。言い換えると、自分が自分のカウンセラーとなり、1人でできるカウンセリングである。また、自分で自分を理解し、受容していく、この方法は、自己教育の方法である、ということもできるだろう。書かれたものは、文字となって残る。そのことから、書かれたものをさまざまな角度から吟味、検討することが出来る。



セルフ・カウンセリングは、自分をつき放して客観的に見つめることに適した方法である。

この方法で自己探求すると、既成の価値概念のとらわれから解放される。自他境界線にもとづき、自己を自己として、そして他者を他者として、ありのままに受け止めることが可能となる。セルフ・カウンセリングはその意味では、あらゆる種類のカウンセリングの基礎となるカウンセリングであるということもできるだろう。

したがって家庭、職場、学校、病院などあらゆる分野のコミュニケーションに活用できる。たとえば、学校であれば生徒指導などに活用できる。生徒自身がセルフ・カウンセリングに取り組むことで、自分の問題を自分で発見し、自分の解答を見出すことができる。このように応用範囲が広いことも、その特徴の一つといえよう。

セルフ・カウンセリングの狙いは相手や自分についての抽象的で一面的な価値概念（モノサシ）を打ち破ることにある。

私たちは、たいてい、自分が知らず知らずに身につけてきた既成のモノサシにはめ込んでものごとを見たり、聞いたり、値踏みしたりしている。そのモノサシにとらわれている限り、自分と相手との関わりをリアルにとらえることができない。

セルフ・カウンセリングは、まず、あらゆるモノサシのとらわれから自由になって事実を事実として受け止めることを目指す。自分と相手があるがままに受け止めることによって、はじめて相手を生かし、自分を生かす可能性が開かれてくる。

セルフ・カウンセリングは、ある日、ある時、ある所で生じた日常生活の一場面をとりあげて、自己探求する。

まず一本の自他境界線にもとづき、自分の行動と相手の行動を書き分けて記述する。外側の言動だけでなく、内面的な意識の動きをも表現する。

記述の仕方には、具体性、継起性、相互性の三つのルールがある。これらのルールのねらいはいずれも、自分や相手に対する既成概念を打ち破ることにある。ルールに沿って書くことで、自分と相手がより具体的に見えてくる。

次に、自分と相手の行動の背後に流れている感情を洞察する。その感情表現を手がかりとして、その奥に潜んでいる欲求を洞察する。さらに、自分と相手の感情や欲求のくい違いを研究する。すると、自分や相手の行動の意味が理解できるようになる。

[略]

小林司編 (2004:420-421)

### 5.5.1.2 セルフ・カウンセリング（渡辺 2007）の実例

以下は、渡辺（2007）に紹介されているセルフ・カウンセリングの具体例である。

（322a）場面記述用紙（書き込み例）

相手が言ったこと、したこと (私が見たこと、聞いたこと)	私が思ったこと、言ったこと、したこと
	①私は空港の出口に向かった。
①「キャー」という声が聞こえた。	
	②私はく何だろう？
	③ずいぶん騒がしいな>と思った。
②男性が目の前を通り過ぎた。	
	④私はくあ、俳優のYだ！
	⑤今日、来日したんだわ！
	⑥うわ～、カッコいいー
	⑦背が高くて、顔、小さい!>と思った。
③報道陣のカメラのフラッシュが一斉に光った。	
④大勢のファンが手を振っていた。	
	⑧私はくうわ～すごい、人だかり！
	⑨照明もすごいなあ！
	⑩私もテレビに写っちゃったりして！
	⑪なんか優越感！>と思った。
⑤後ろから「どいて、どいて！」と声が聞こえた。	
	⑫私はくなに？>と思った。
⑥女性が手で私を押しした。	
	⑬私はくなんなのよ、このお婆さん！>と思った。
	⑭私は「ちょっと、押さないでください」と言った。
⑦女性は「Y様が行っちゃうじゃない！」と言った。	
	⑮私はくなによ、このずうずうしいお婆さんは。

以下省略

渡辺（2007: 36）

セルフ・カウンセリングでは、＜①場面記述→②場面洞察＞というステップを踏む。渡辺

(2007) は、この②場面洞察について、「場面記述で書いた文を、一文一文取り上げ、「関係(意識の対象)」「感情」「欲求」をとりだしていきます」と記している。

先の(322a)の場面記述に関する場面洞察が(322b)(322c)である。

(322b) 場面洞察用紙(36ページの場面記述を基に、場面洞察をした書き込み例)

相手			
文番号	関係	感情	欲求
①	ファン→ファン	興奮	早く俳優 Y を見たい
〃	ファン→俳優 Y	期待感	早く姿を見せてほしい
②	俳優 Y→俳優 Y	驚き	なし
〃	俳優 Y→ファン	感謝	なし
③	報道陣→報道陣	緊張	いい映像を撮りたい
〃	報道陣→俳優 Y	期待感	自分のカメラの前を通過してほしい
④	ファン→ファン	うれしい	俳優 Y を近くでみたい
〃	ファン→俳優 Y	祈る感じ	自分のほうを見て欲しい
⑤	おばさん→私	いらだち	どいてほしい
〃	おばさん→おばさん	焦り	早く Y 様の近くに行きたい
⑥	おばさん→私	いらだち	チンタラ歩かないでほしい
⑦	おばさん→おばさん	はやる感じ	Y 様に早く会いたい
〃	おばさん→俳優 Y	祈る感じ	行かないでほしい

以下省略

渡辺(2007: 56)

(322c) 場面洞察用紙

自分			
文番号	関係	感情	欲求
①	私→私	安堵感	無事に家まで帰りたい
②	私→私	心配	何が起こるか知りたい
③	私→私	好奇心	騒ぎのわけを知りたい
④	私→私	驚き	なし

〃	私→俳優 Y	好感	Yであってほしい
⑤	私→私	うれしい	Yの顔をよく見たい
⑥	私→俳優 Y	すごいという感じ	夢であってほしくない
⑦	私→俳優 Y	あこがれ	いつまでもすてきでいてほしい
〃	私→私	劣等感	スタイルがよくなりたい
⑧	私→人ばかり	驚き	なし
⑨	私→報道陣	驚き	なし
⑩	私→私	とまどう感じ	テレビには映りたくない
⑪	私→私	優越感	Yのそばにいたい
〃	私→ファン	得意な感じ	うらやましがってほしい
⑫	私→私	ふいをつかれた感じ	何が起きたのか確認したい
⑬	私→おばさん	怒り	押さないでほしい
〃	私→私	正当感	注意したい
⑭	私→おばさん	不満	押さないでほしい
⑮	私→おばさん	怒り	自分勝手なことしないでほしい

以下省略

渡辺 (2007: 57)

以上は、ほんの一瞬のエピソードの記述だが、(322c)の自分に関する場面洞察からは、「私」の中に、多くの感情の変化や欲求の動きがあることが分かる。

### 5.5.1.3 セルフ・カウンセリングによる発見

渡辺 (2007) では、(322abc)の作業後の「私」の発見が、(323)のように記されている。(引用内の太字による表示は本論文の筆者による)

(323) 洞察による発見用紙 (書き込み例)

自分の欄を読んで きづいたこと	相手の欄を読んで きづいたこと	自分と相手の欄を読んで きづいたこと
⑩私→私 とまどう感じ テレビには映りたくない	⑤おばさん→おばさん 焦り 早くY様の近くに いきたい	自分⑩私→私 優越感 Yのそばにいたい 自分⑬私→おばさん 怒り

<p>Yのそばにいたい</p> <p>という洞察から、私は俳優 Y のファンではありませんが、有名人のそばにすることができて優越感を感じていました。でも Y のそばにいる報道陣のカメラに映ってしまう、テレビには映りたくない、でも Y のそばに居たい、という気持ちが葛藤していたことに気づきました。</p> <p>⑬私→おばさん 怒り 自分勝手なことをしないでほしい</p> <p>という洞察から、Y 様ファンのおばさんが、Y 様見たさに周りの人を押しのけて行く様に、私は怒りを感じました。「自分勝手なことをしないでほしい」という欲求の奥には、「マナーを守ること」というモノサシがあったことに気づきました。</p>	<p>⑦おばさん→おばさん</p> <p>はやる感じ Y 様に早く会いたい</p> <p>という洞察から、おばさんは Y 様ファンで、とにかく早く Y 様の近くに行きたかったのではないかと気づきました。</p> <p>⑤おばさん→私 いらだちどいてほしい</p> <p>⑥おばさん→私 いらだち</p> <p>チンタラ歩かないでほしい</p> <p>という洞察から、私に対するいらだちの感情はだんだん強まっていったのではないかと思います。</p>	<p>押さないでほしい</p> <p>相手⑤おばさん→私</p> <p>いらだち どいてほしい</p> <p>という洞察から、おばさんに押される前は、優越感に浸っていた私ですが、おばさんに突然押されて、私の感情はプラス感情から一転してマイナス感情に変化していったことに気づきました。一方、私を推す前のおばさんの気持ちはわかりませんが、Y 様に間近で会えるかもしれないという期待感で一杯だったことが推察されます。けれども、私がおばさんの進路に立ちはだかっていたので、おばさんの感情はプラス感情から、一転してマイナス感情に変化していったのではないかと気づきました。</p> <p>この点において二人の欲求は一致していませんが、感情の変化の流れは同じだったのではないかと気づきました。</p>
--	---	---

以下省略

(渡辺 2007:58)

(323)の「自分と相手の欄を読んできづいたこと」では、太字表示の部分で、「私」の感情の変化が特に大きかったことが窺える。主要部内在型関係節構文という表現形式に、継起的に進行する複数の事態を取り込む動機として、この種の感情の変化が関わることが推測される。この種の一瞬の感情の変化の瞬間とほぼ同時に取られたそれへの「対応」、すなわち、「自己評価」の揺らぎから始まる「自己評価の試み」に関わる複数の出来事（事態）を、当該関係節構文に取り込んで表現しようとする表現欲求が表現者に生じることが推測される。

#### 5.5.1.4 自己評価分析（渡辺 2008）と「自己評価の試み」（渡辺 2008）

ここでは、「自己評価分析」（渡辺 2008）について見ていく。主要部内在型関係節構文と「自己評価の試み」（渡辺 2008）の間の各要素間の対応関係を確認することで、表現対象と表現範囲の選択と表現者の表現欲求の内実との関連が捉え易くなると考えられる。

渡辺（2008）では、「セルフ・カウンセリングから、本格的な自己形成史分析に至る橋渡しの役目を担っている」とされる「自己評価分析」について、(324)のように紹介されている。

(324) セルフ・カウンセリングの洞察は、順番に、関係、感情、欲求を取り出して、表現してゆきます。自己評価分析も、関係を取り出すところまでは、全く変わりません。ただ、その先から違ってきます。感情に代わって、“評価像”を取り出し、表現します。

評価像というのは、関心のある対象に対する、プラス、あるいは、マイナスのイメージです。価値概念というのは、評価像を生み出す、プラス、あるいは、マイナスのコンセプトです。 [略] 渡辺（2008:3-4）

次に引用する例は、「セルフ・カウンセリング」の「場面記述／洞察」の、「感情」が「評価像」に、「欲求」が「価値概念」に、置き換えられて為されたもの、と考えれば分かり易い。

(325a) 場面分析用紙（書き込み例）

文番号	記述文	関係	評価記号	評価像	評価記号	価値概念
①	Aさん、今朝言われた書類、	私→Aさん	+	仕事の早いAさん	+	仕事が早いこと
	もうつくったんだ。					
②	私なんて先週から引き続き	私→Aさん	+	仕事の早いAさん	+	仕事が早いこと
	企画書つくっているのに。	私→私	-	仕事の遅い私	-	仕事が遅いこと
③	なんか、私がのろいって言	私→私	-	仕事が遅く課長からほめられ	-	仕事が遅くて課長から
	われているみたい。			ない私		ほめられないこと
		私→Aさん	+	仕事が早く課長からほめられ	+	仕事早く課長から
				るAさん		ほめられること
④	でも、私の書類は企画書で	私→企画書	+	会社にとって重要な企画書	+	会社にとって重要なこと
	重要な書類だから、早々に	私→私	+	会社にとって重要な企画書	+	会社にとって重要なこと
	つけれないのは仕方ないわ			を任される私		を任されること

渡辺（2007:88）

(325b) 関係別場面分析用紙（書き込み例）

対自関係 私→私自身					対他関係 私→（Aさん）				
文番号	評価記号	評価像	評価記号	価値概念	文番号	評価記号	評価像	評価記号	価値概念
					①	+	仕事の早いAさん	+	仕事が早いこと
②	-	仕事の遅い私	-	仕事が遅いこと	②	+	仕事の早いAさん	+	仕事が早いこと
③	-	仕事が遅く課長	-	仕事が遅く課長	③	+	仕事が早く課長か	+	仕事が早く課長か
		からほめられな		からほめられな			らほめられるAさん		らほめられること
		い私		いこと					

渡辺（2007:90）

5.5.1.5 「主要部内在型関係節構文」の構成部分と「自己評価の試み」の要素間の関係

環境内の様々な対象、様々な事態の中から、意識的・無意識的に（自己評価欲求に基づき）、「意識対象」が選ばれ、「自己評価の試み」が為される。「自己評価の試み」には、探索的活動も遂行的活動（5.4.2.4 (311)）も含まれると考えられる。内在型構文は、その使用実態の観察から、何らかの「気付き」を表現の起点としている。2回の陳述（断定）から成る内在型構文は、「気付きの内容」としての事態と、それへの対応としての行為・行動を、自身の表現構造内に取り込みやすい（そして表現として創出しやすい）表現形式だと考えられる。

以下、(326a)の内在型構文を①～④のように細分化し、両者の対応関係<sup>48</sup>を確認していく。

(326a) これは兵隊に行く前の写真ですね。母がこの写真を捨てようとしたのを祖母が預かって、私に渡してくれました。（(101, 105, 296)を(327a)として再掲）1999 津島佑子（著）私 新潮社

- ①母がこの写真を捨てようとした
- ②母がこの写真を捨てようとしたのを
- ③祖母が預かって、
- ④私に渡してくれました。

<sup>48</sup> 「セルフ・カウンセリング」の場合も「自己評価分析」の場合も、通常は、「私が、思ったこと、言ったこと、したこと」の記述の全てから、「私」や「相手」の「感情」や「欲求」、あるいは、「私」の「評価像」と「価値概念」を確認していく。しかし、ここで取り上げる「主要部内在型関係節内の現象描写文と『自己評価の試み』の各要素間の対応関係一覧」内の評価像と価値概念の欄には、概ね、「相手」や「私」の「言ったこと、したこと」から「評価像」と「価値概念」を取り出している。これは、当該関係節構文が、主として、継起的に展開される「(複数の) 行為」を描写することによる。当該関係節構文の後に、しばしば感情表現が現れるのは、描かれないままの「思ったこと」が表出されることも関わると考えられる。

(326b) (326a)の主要部内在型関係節構文と「自己評価の試み」の各要素間の対応関係

▶①「母がこの写真を捨てようとした」 … 現象描写文（知覚事態の表現）

《主要部内在型関係節内の現象描写文と「自己評価の試み」の各要素間の対応関係一覧》

表現者（私）の <b>意識対象</b> （ヒト・モノ）	<b>意識対象と 項関係</b>	表現者（私）の <b>評価像と価値概念</b> （（相手）の評価像と価値概念は通常分析しない）
私→ <b>母</b>	内在節主語	<b>（父の）</b> 写真を捨てようとした <b>母</b>
私→ <b>（この）（父の）</b> 写真	内在節目的語	<b>母が</b> 捨てようとした <b>（父の）</b> 写真
私→ <b>私</b>	<b>（表現者）</b>	<u>（自分の）母が（父の）写真を捨てようとした<b>私</b></u> <u>（父の）写真を母に捨てようとした<b>私</b></u> <u>（父の）写真を捨てようとした母を持つ<b>私</b></u> 等 <u>（自分の）母が（父の）写真を捨てようとした《こと》</u> <u>（父の）写真を母に捨てようとした《こと》</u> <u>（父の）写真を捨てようとした母を持つ《こと》</u> 等
<b>《現象描写文（知覚事態の表現）と評価像&amp;価値概念との関係》</b>		
「母がこの写真を捨てようとした」（現象描写文）＝ 意識対象（ <b>ヒト</b> ）が参与した事態 ⇒ 表現者（私）の評価像／価値概念を生成する連体修飾節（属性限定）の基本構造を成す		

①の知覚事態（基本的には、祖母から聞いた間接知覚と考えられる）は、表現者（私）の自己評価欲求に揺らぎを与え（新たな評価像の発生）、表現者（私）に「自己評価の試み」を動機付けたと考えられる。状況次第だが、①は祖母が直接知覚（現場に居合わせることによる知覚）した際に祖母に「自己評価の試み」を動機付けた可能性が高い。従って、その場合は、①を間接知覚した際の表現者（私）の「自己評価の試み」には、事態の伝達者である祖母の「自己評価の試み」も関わることになると考えられる。

▶②「母がこの写真を捨てようとしたのを」… 内在型及び対応対象の内在型構文への組み込み

▶③「祖母が預かって、」… 内在型構文（対応主体・対応行為追加）生成

▶④「私に渡してくれました。」… 継起的行為の追加

「セルフ・カウンセリング」も「自己評価分析」も、渡辺（2001, 2007, 2008）の創作物（方法論）である。しかし、内在型構文の表現の起点が、事態が継的に進行する中の、人の感情変化のタイミングと重なることが多いと推測され、現象事態の表現構造への組み込み（あるいは、表現による創出）を、両者の関係から捉える意義は大きいと考えられる。



## 5.5.2 文脈内の一表現単位としての主要部内在型関係節構文と表現範囲の選択

5.2では、日本語が〈主観的把握〉(池上 2011)の構図からの表現を好み、移動や知覚等の行為や、行為の主体としての自己が、明示されない傾向を見た。これらを念頭に置きながら、ここでは、内在型構文の臨場性に、表現範囲の選択の問題が関わる点を見ていく。

5.5.2.1では、この問題を文脈との関係性から見る。5.5.2.2では、連体修飾節による先行事態の表現への取り込み(あるいは、表現による間接知覚の創出)について考察する。

### 5.5.2.1 主要部内在型関係節構文生成の際に見られる表現範囲の絞り込み

池上(2004)は、現象文について、「現象文の意味は発話の主体自身の直接的な〈体験〉と関わるものであり、それ故に、もっともすぐれた意味で〈主観的〉なものである。そのような文は、発話者の身体とも、また、その身体の置かれている場とも密着した性格を有しており、発話の主体と発話の場についての〈指標〉的機能を実に豊かに含んでいて、その対極にあって発話の主体と発話の場への指標を全く含まない文<sup>49</sup>と対立する(池上 2004:36)」とする。

また、池上(2005)は、「ある事態を言語化するに際して、話し手がわが身をその事態の中に置くという形で〈臨場的〉に、そして同時に自らを観察の原点として自らにとって問題の事態が如何に見えるかという形で〈体験的〉に把握を行う。—こういう最大限に〈主観的〉な事態把握がなされ、それに基づいて言語化が行われるとすると、結果として得られる言語表現の中には話し手自身に対する直接の言及は見出せず、指示されているの是一見客観的な—しかし、実際には話し手にとっての〈見え〉としての一状況だけを語っているかのような談話が得られる(池上 2005:40-41)」が、「そのような談話であっても、大抵は〈主観的〉事態把握を示唆する何らかの指標 [略] が見出せるはずで、言語化された事態が純粹に客観的な把握によるものではなく、実はその事態の中に埋め込まれた話し手の目を通してのものであるという読みとりが可能になる(池上 2005:41)」とし、「このような読みとりは、日本語のように〈主観的把握〉が一つの〈好まれる言い回し〉(‘fashions of speaking’: Worf 1956: 159)とされる言語の話し手にとっては、かなり自然に起こりうるはずである(池上

<sup>49</sup> 池上(2004)は、Bar-Hillel(1954=1970)の中で挙げられている‘Ice floats on water’のような文を参照するようとし、Bar-Hillelが、‘It’s raining’(文意の十分な理解のためには、発話の場と時間についての知識が必要)や‘I am hungry’(文意の十分な理解のためには、発話者と発話の時間についての知識が必要)といった文と対比しているとする。(池上 2004:44)

2005:41)』として、(327) について、(328) のように述べている。

(327) サイタ。

サイタ。

サクラガサイタ。

(池上の(29)) (池上 2005:41)

(328) [略]、大変印象深い文章としての記憶が鮮明に残っている。それは、この文章が一目桜の開花を客観的に記述したもののように見えていながら、実は今問題にしている〈主観的把握〉を踏まえての言語化という形をとっているからであろう。言語化こそされてはいないが、臨場して見事に咲いた桜に感嘆の声を発している人物の存在が十分に読みとれる。助動詞の「タ」がここでは話し手の気づき、発見、確認、そしてそれに伴う感嘆という主観性の色濃い意味合いをよく表わしている。池上 (2005:41)

以下、上の池上の指摘に見られる、「言語化された事態が純粹に客観的な把握によるものではなく、実はその事態の中に埋め込まれた話し手の目を通してのものであるという〈主観的〉事態把握を示唆する何らかの指標」に関わるものとして、主要部内在型関係節の表現範囲の選択・絞り込みの問題を取り上げ、実例に即して検討していきたい。

次の(329)は、(327)に見られるような臨場性を持つ内在型だと考えられる。

(329) 私事になりますが、千九百八十五年に父親を亡くしました。とても準備のいい人で、まだピンピン元気なときに、自分が入る墓を買っています。最後に入院する前には、不自由な体をひきづって押し入れの中をがさごそと捜しものをしていました。何と、自分の葬式で使う写真を選んでいたので、縁起でもない、と思いましたが、「これ！」と出してきたのを見て笑ってしまいました。十五年ぐらい前の若々しい写真を選んだのです。2001 天外 伺朗(著)「あの世」と「この世」の散歩道 経済界

筆者は、「これ！」と出して写真を出してきた父の息子である。主節主語も筆者だが、省略されている。「これ！」は、主要部そのものではないが、父が自身の葬式で使うために選んだ写真を指し、発話の現場に実在するモノを指示している。「これ！」という声と手の動きに全面的に焦点が当たる印象である。「眼前指示」の「これ！」の効果も加わり、臨場感が漂う。

「の」を代名詞と捉えることも可能だが、その場合は、臨場感は幾分弱まると考えられる。また、「見て」と知覚動詞が使われているが、「見た」対象としては、「事態」よりも「個物 (= 写真)」と捉えるのが自然だと感じられる。

重要な点として、(329)には、主要部内在型関係節構文の表現範囲の絞り込み以前に、〈主観的把握〉(池上 2011) としての特徴が鮮明に現れていることが挙げられる。筆者は、父の「こ

れ！」という声が聞こえ、写真が見える位置に居る。しかし、(329)では、この点に関する直接的な言及は為されず、筆者の知覚によって捉えられる事態が描写されることを通して、筆者が父の身近にいることが伝わるようになっている。

(329)には、注目したい点がある。「これ！」が写真を指すことは、前文脈が無いと分からず、笑った理由も後文脈を見ないとはっきりしないのである。(329)では、内在型構文の使用による臨場感が際立つが、同時に、実は、内在型構文内の省略箇所等の意味内容が過不足なく伝わるように、各種表現が前後に振り分けられているのである。この表現スタイルは、内在型構文に於ける表現範囲の選択・絞り込みと、それを補う文脈内での表現分担を伴い、その結果、日本語の〈主観的把握〉による臨場感のある文脈内に、内在型構文に特にスポットライトが当たるような場が持ち込まれることになる。

(329)内の表現範囲の絞り込みの実際を見るために、(329)から確認できる出来事事態を、生起順に、なるべく単文に近い形で並べてみる ((330))。(出来事性の強いものに限った)

(330)

- ①父が自分の入る墓を買った。
- ②父が不自由な体をひきづった。
- ③父が押し入れの中を捜した。
- ④ (私は) 父が自分の葬式で使う写真を選んでいるのが分かった。
- ⑤ (私は) 葬式で使う写真選びを縁起でもないと思った。
- ⑥父が「これ！」といった。
- ⑦父が写真を出した。
- ⑧ (私は) **写真を見た**。
- ⑨ (私は) 写真が十五年ぐらい前の写真だと思った。
- ⑩ (私は) **笑ってしまった**。
- ⑪父が (最後の) 入院 (を) した。
- ⑫父が (千九百八十五年に) 亡くなった。

継起的に生起する出来事 (事態) の中で、⑥⑦が主要部内在型関係節に取り込まれ、さらに同構文には⑧⑩も取り込まれる。また、内在型構文の意味内容の把握のためには、④と⑨の下線部のような情報が必要だが、文脈内に振り分けられていて利用可能になっている。

池上 (2005) は、(328)の「サイタ。サイタ。サクラガサイタ。」は、これだけで、「臨場して見事に咲いた桜に感嘆の声を発している人物の存在が十分に読みとれる。(池上 2005:41)」

としている。一方、内在型構文では、主として「～たのを、～した」や「～たのが、～した」の基本的な部分が臨場性を表す。(329)もその例である。しかし、(327)の場合が、多くの読み手にとって馴染み深い状況なのに対して、(329)は極めて個人的な事態である。その様な相違がある中、(327)の「サイタ。サイタ。サクラガサイタ。」が持つ臨場性と類似の効果を出しているのが、内在型及び内在型構文による表現範囲の絞り込みと状況把握に必要な言語情報の背景描写への振り分けだと考えられる。

(329)は、次の(331)を後続部分としている。(329)内の内在型構文が描写するスポットライトを照射されたような事態は、(329)と(331)から成る談話内で特別な表現価値を持つように感じられる。

(331) 脳血栓の後遺症で言葉は不自由だったのですが、入院してからは見舞客や家族に丁寧にお礼をいい、死に向かって着々と準備をしている、覚悟のほどはよくわかりました。ところが、容態が悪くなってICU（集中治療室）に入れられると、状況が一変してしまいました。体中に管が入る、いわゆるスパゲティ状態になり、無意識に管を抜こうとするために、両手をベッドに縛りつけられてしまいました。その日から、彼は心をぴったり閉ざしてしまい、外界とのコミュニケーションが無くなってしまいました。ICUなので、見舞いの時間も厳しく制限されており、結局、家族がいないときに亡くなりました。ちょっと前までは、見事に自分の死に向かって着々と演出をしていただけに、この亡くなり方は残念でした。

2001 天外 伺朗(著)「あの世」と「この世」の散歩道 経済界

後続部分では事態が一変する様子が語られる。後の残念な展開が待つ文脈から見れば、(329)内の、『「これ!」』と出して出てきたのを見て笑ってしまいました。』という主要部内在型関係節構文によって描写されるエピソードとその中の父（と筆者）の姿は、大事にした、死を目前にした父（と私）の姿だったと推測される。(329)の、主要部内在型関係節構文の使用は、後の「残念」な事態とコントラストを成すような、意義深い、スポットライトが当たる位置関係になる時点が選ばれている印象である。

### 5.5.2.2 主要部内在型関係節構文生成の際の連体修飾節による先行事態の取り込み

5.5.2.1 では、表現範囲の絞り込みとそれに伴うスポットライトが当たるような表現効果について見た。ここでは、逆に、継起的に先行する事態の連体修飾節による当該関係節構文への取り込みの問題を見ていく。これは、継起的に先行する事態に参加した事態参加者を、

構文内の項関係等に組み込む際に、随伴して観察される現象である。

(332)は、4.4.3.3で、内在型構文内の名詞句に連体修飾節が付加され、複数の事態が表現される例として取り上げたものである。(332)～(334)には、継起的に先行する事態の内在型構文内への取り込みが見られる。((334)は、項に随伴するのではなく、随意要素に随伴して取り込まれる(「逸らしたボールを追って」。))

(332) マンガ中では、雪山に行った静香が 遭難したのを、タイムマシンとタイムフロシキで大きくなった「現在」ののび太が 助けに行く (未来ののび太は風邪で寝込んでいる最中)が、オッチョコチョイの連続で、「一人にしておくとは危なっかしくて見てられない」と言われるエピソードがあったけ。

((134)&(193)を(333)として再掲)

2005 Yahoo!知恵袋 Yahoo!

(333) 小規模ではあっても、ここが徳川十三家の筆頭ならば格式はととのえねばならず、床の間には武家らしく武具を飾り、そして紅葉山に祀ってあった神君の木像を、官軍進駐にあたって深く江戸城内の土中に埋めたのを再び掘り起し、この千駄ヶ谷の庭の一隅に安置したが、これは明治も五年以降のことになる。

1984 宮尾 登美子(著) 天璋院篤姫 講談社

(334) 当時、人気を得つつあったベースボールに落雲館の学生も夢中になった。逸らしたボールを追って学生たちが苦沙弥先生の家の庭に侵入してきたのを叱りつけたものだから、苦沙弥先生、学生たちから復讐のダムダム弾攻撃を挑まれたのだ

((157)を(334)として再掲) 1999 池内 了(著) 天文学者の虫眼鏡 文藝春秋

ここでは、(333)を例に、連体修飾節による先行事態の取り込みの実際を見ていく。

(333)は、(332)と相違点がある。(332)の場合、主節主語が内在型の後に位置する。読み手が「のび太」に自己投入して、内在型で描写される事態(「静香が遭難した」)を「のび太」の視点から捉えるよう誘導する効果は比較的弱い。それに対して、(333)では、主節主語(「ここ(が)」)が内在型の前に位置し、内在型で描写される事態に対する対応行動をとる主体も、同一の主体(「ここ」)である。読み手が、「ここ」(＝篤姫たち)に自己投入しやすい表現構造が用意されている。

(333) 小規模ではあっても、ここが徳川十三家の筆頭ならば格式はととのえねばならず、床の間には武家らしく武具を飾り、そして紅葉山に祀ってあった神君の木像を、官軍進駐にあたって深く江戸城内の土中に埋めたのを再び掘り起し、この千駄ヶ谷の庭の一隅に安置したが、これは明治も五年以降のことになる。

((333)を再掲)

江戸幕府は終焉を迎えている。「格式をととのえねば」ならない篤姫たちは、神君の木像を「掘り起す」機会を窺い、実行し、安置する。それは、「明治も五年以降」まで遅れてしまう。

ここで、継起的に生起する事態とそれを表現することとの関係を捉えるために、ギブソン(2004)の次の指摘を確認する。

(335) これら様々な種類の实在《reality》の知覚は、成長や学習によって発達する。その過程は、確かに多様である。遊離対象《detached object》の知覚の学習と、(例えば、棲息環境を学習する場合においてのような)場所の知覚の学習について考えてみよう。移動させ得る対象は、位置を変えたり、順番を入れ替えたり、比較するために並べたり、数を数えたり、階層的に分類できる。しかしながら、場所は、より大きな場所の中に入れ子になっており、明確な境界を持たず、位置を変えたり入れ替えたりできない。

[略]

事象も、場所と同様に入れ子になっている。エピソードは、さらに長いエピソードの中に含まれている。知覚にとって重要なのは、この入れ子構造であって、任意の瞬間《instants》や持続《duration》を伴う空虚な時間という量的なディメンションではない。我々は、空間そのものを知覚できないのと同様に、時間そのものを知覚することはできない。

[略]

ギブソン(2004:362-363)

入れ子構造になっている事象から、それ自体が入れ子構造になっている特定の事象が、表現対象として選択される。以下、主要部内在型関係節構文が表現される際の、継起的に生起する複数の事態の表現構造への取り込みと、その際の、表現者(ここでは、主節主語としての篤姫たち)の感情・欲求の動きを想定してみる。渡辺(2001,2007,2008)で利用される場面記述用紙と場面洞察用紙の視座の趣旨に沿って、簡略化した仕方で確認する。

(336)に、(333)から確認できる出来事を継起順に単文で簡略化して示す。右側に、篤姫(たち)の評価像を文表現に沿って示す。プラスは肯定的、マイナスは否定的な評価像である。数は程度を表す。+-は、-+より、+の程度が高いことを示し、+と-は併存し得る。

(336)

((333)の一部を改変)

- |                |     |                            |
|----------------|-----|----------------------------|
| ①神君の木像を紅葉山に祀った | ++  | 神君の木像を紅葉山に祀った私(篤姫たち:幕府関係者) |
| ②神君の木像を土中に埋めた  | --+ | 神君の木像を土中に埋めた私(篤姫(たち))      |
| ③神君の木像を掘り起した   | +-- | 神君の木像を掘り起した私(篤姫(たち))       |
| ④神君の木像を庭に安置した  | +-  | 神君の木像を庭に安置した私(篤姫(たち))      |

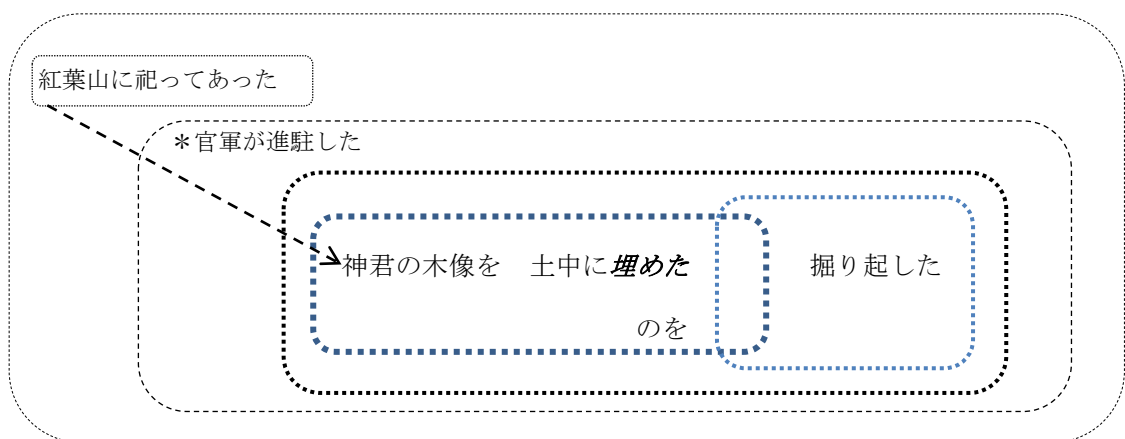
次に、①～④を取り込んだ文を示す。主要部内在型関係節は、< a → c >の順に、より継起的に後行した事態を取り込んでいる。主要部内在型関係節は一つだけ組み込んである。

(337) (333)の一部を改変)

- a. 神君の木像を紅葉山に祀ってあったのを、官軍進駐にあたって深く江戸城内の土中に埋め再び掘り起し、この千駄ヶ谷の庭の一隅に安置したが、これは明治も五年以降のことになる。
- b. 紅葉山に祀ってあった神君の木像を、官軍進駐にあたって深く江戸城内の土中に埋めたのを再び掘り起し、この千駄ヶ谷の庭の一隅に安置したが、これは明治も五年以降のことになる。
- c. 紅葉山に祀ってあった神君の木像を、官軍進駐にあたって深く江戸城内の土中に埋め再び掘り起したのをこの千駄ヶ谷の庭の一隅に安置したが、これは明治も五年以降のことになる。

実例は(337b)である。(338)に(337b)の事態(事象)及びその表現の「入れ子構造」を簡略化して図示する。に交差部分があるのが内在型構文で、一体化され「入れ子構造」の一単位を成している。その一単位の外の継的に先行する事態が連体修飾によって取り込まれる状況が矢印(→)で示してある。ギブソンの「入れ子構造」に関する指摘には、(338)のような単純化への警戒も含まれると考えられる。また、「〈もの〉的な対象まで〈こと〉的に現象化されうる(池上1981:260)」という、日本語の、特に内在型構文についての指摘もある。(338)は、「事象の入れ子構造」からの表現構造への事態の取り込みの際に、スポットライトの当たる内在型とその周囲から成る主要部内在型関係節構文のイメージ化である。

(338) 「事象の入れ子構造」からの主要部内在型関係節構文への事態取り込みモデル



(333)における主要部内在型関係節構文の文脈内での位置は、神君の木像の安置が「明治も五年以降のこと」になる顛末との関係で、効果的な時点が選ばれている印象がある。自己評価欲求の視点から捉えれば、徳川の凋落ぶりの中で、最低限の格式を保持している現況とコントラストを成す、篤姫(たち)の「自己評価の試み」の緊張と意気込みにスポットライト

が当たる時点が選ばれている。<sup>50</sup>

ここで、(339)のように、連体修飾節を取り込まない場合、表現価値が大きく損なわれる。

(339) 小規模ではあっても、ここが徳川十三家の筆頭ならば格式はととのえねばならず、  
床の間には武家らしく武具を飾り、そして神君の木像を、官軍進駐にあたって深く江戸城内の土中に埋めたのを再び掘り起し、この千駄ヶ谷の庭の一隅に安置したが、これは明治も五年以降のことになる。 ((333)の一部を改変し(339)として再掲)

前後の繋がりの不自然さや口調の問題に加え、下線部を、継起的諸事態中から選んで表現する意図が、伝わり難くなることが考えられる。《++神君の木像を紅葉山に祀った私(幕府関係者) → --+神君の木像を土中に埋めた私 → +-+神君の木像を掘り起した私》という評価像の変遷とその悲哀を描くために選ばれた当該「入れ子構造」の選択動機が曖昧になる。

加えて注意したいのが、次の(340b)と(340c)に見られる、内在型構文内の2つの出来事間の「同時性」の問題である。

(340) ((337b)(337c)を(340)b.c.として再掲)

b. 紅葉山に祀ってあった神君の木像を、官軍進駐にあたって深く江戸城内の土中に埋めたのを再び掘り起し、この千駄ヶ谷の庭の一隅に安置したが、これは明治も五年以降のことになる。

<sup>50</sup>渡辺(2008)の示す、社会的自己形成の類型と危機回避の方法は表1の通りである。

表1 社会的自己形成の三類型—危機回避の方法

類 型		基本方式		対 抗 方 式		代 償 方 式	
		積極的形態	消極的形態	積極的形態	消極的形態	積極的形態	消極的形態
他者準拠型	特定の他者の評価に準拠することによって自分の存在価値を評価する	準拠他者の期待に合うようにする	準拠他者の期待から外れないようにする	準拠他者の価値を引き下げる	準拠他者に対する自分の価値を引き上げる	自分を肯定する準拠他者に変更する	自分を否定しない準拠他者に変更する
他者模倣型	特定の他者を模倣することによって、自分の存在価値を評価する	模倣他者に類似するようにする	模倣他者に相違ないようにする	模倣他者の価値を引き下げる	模倣他者に対する自分の価値を引き上げる	自分と類似する模倣他者に変更する	自分と相違しない模倣他者に変更する
他者競争型	特定の他者と比較競争することによって、自分の存在価値を評価する	競争他者より優れるようにする	競争他者より劣らないようにする	競争他者の価値を引き下げる	競争他者に対する自分の価値を引き上げる	自分より優らない競争他者に変更する	自分より劣る競争他者に変更する

渡辺(2008:54,表1)



c. 紅葉山に祀ってあった神君の木像を、官軍進駐にあたって深く江戸城内の土中に埋め再び掘り起したのをこの千駄ヶ谷の庭の一隅に安置したが、これは明治も五年以降のことになる。

詳細は不明だが、「埋めたのを…掘り起し」の間に想定される時間と「掘り起したのを…安置した」の間に想定される時間では、後者がより短いと推測される。なかなか掘り起こす機会を得られなかったように読めるからである。物理的時間のより長いbが、小説家によって選ばれている。仮に、「埋めたのを…掘り起し」の間の方が短かったとしても、やはり、物理的な「同時性」は弱い。(340b)では、「同時性」は成立条件として重きを置かれていないと言える。次の5.5.3で、この主要部内在型関係節構文の成立条件について考察する。

また、連体修飾節構造は、事態参与者に事態に参加したという属性を付与することができる。そのため、主要部内在型関係節構文内に、同構文内の名詞句として連体修飾節構造を組み込むことで、継起的に先行する事態を表現に加えることができる。「事象の入れ子構造」内の一構造単位部分としての主要部内在型関係節構文が、同構文から見て継起的に先行する事態を表現の範囲に加えることができるのである。これは、当面の自己形成の態様を表現する際に発揮される機能と基本的に同じものと考えられるが、表現の範囲の選択の場合は、限定修飾も加わってくると考えられる。

### 5.5.3 主要部内在型関係節構文の成立条件を考える

2.4で、坪本(2014)が主要部内在型関係節構文の成立条件との関連で議論している(341a)(343a)について不明な点を見た。その際、「欲求」の観点の導入が期待される旨を述べた。ここでは、主に「欲求」との関連から、この問題について見ていく。

(341a) [ミカンが裏山で採れた]のを家族そろって家で食べた。 ((25)&(62)を再掲)

(342a) [ミカンが裏山で採れた]のを全て盗まれた。

(343a) [社長が明日その部屋を使う]のを社員たちが今日徹夜で掃除する。((26)&(64)を再掲)

(344a) [社長が明日その部屋を使う]のを昼休みに手隙の社員が集まって簡単に掃除する。

坪本(2014)は、(341a)について、「時計時間では時間も場所も同じとは言えないが、ミカンの収穫を家族で楽しむまでの時間はひとつのものであり、例えば時空を超えて時計時間では計れない充実感を伴うといったことも考えられる。(坪本2014:70)」とする。(343a)については、「別々に見れば『明日』と『今日』とは違うが、社長の部屋の使用は(社員の立場からすれば)『いま』の(自分の)問題である。(坪本2014:71)」とする。

一方、(342a) (344a) も、ほぼ自然な文と考えられる。しかし、(342a)には、(341)のような「充実感」は感じられず、(344a)に、(343a)のような「『いま』の(自分の)問題」としての重圧感までは感じられない。(341a) (343a)は、「時計時間のような客観的な意味においては『同時的』(同一場所)ではないかもしれない(坪本 2014:72)」場合も、主要部内在型関係節構文が成立する理由を、「超時間性を内在した出来事(坪本 2014:72)」という性格に求めたものと考えられるが、「超時間性を内在した」とまでは言えないような(342a) (344a)も、主要部内在型関係節構文として成立すると考えられる。

(341a)～(344a)について、“心のセリフ”と“評価像”を簡略化して想定してみる。本論文が取り上げた、これまでの“評価像”は、主要部内在型関係節構文から文表現通り組み立てたものだったが、ここでは、一步踏み込んで、常識的に推測され得るものも含むことにする。簡略化のため、“心のセリフ”と“評価像”との直接関係は考えず、ランダムに表示した。

同じ主要部内在型関係節から、肯定的・否定的の両感情が同時に生じることも、異なる“評価像”も想定でき、“評価像”の揺らぎの幅も様々であることが想定できる。

(341b) [ミカンが裏山で採れた]のを家族そろって家で食べた。

ああ疲れた。

必死でミカンを取った。

それにしても見事な出来だ。

+ 見事なミカンを食べる私

皆で食べるのが楽しみだ。

+ 家族と一緒にミカンを食べる私

(342b) [ミカンが裏山で採れた]のを全て盗まれた。

がっかりだ。

必死でミカンを取ったのに。

- 大量盗難を経験する私

そんなニュースもあったよな。

- ミカンを売れない私

盗まれるなんて。

- ミカンを食べられない私

(343b) [社長が明日その部屋を使う]のを社員たちが今日徹夜で掃除する。

今日は徹夜だ。

部屋の掃除だ。

社長が明日使うんだ。

- 時間的に拘束される私

他の連中も清掃中だ。

- 気を抜けない私

睡眠とれないだろうな。

+ 徹夜できる私

部下の務めは果たさないと...

+ 社長から認められる私

(344b) [社長が明日その部屋を使う] のを昼の休憩時間に簡単に掃除しておいた。

終わった…。

清掃業者がよくやってるし…。

普段気を付けてるし…。

+ 社内環境に注意している私

早く帰れる。

+ 生活リズムを守れる私

部下の務めは果たしたし…。

+ 社長から認められる私

「発話主体が具体的な経験そのものに伴う『体験内在的』な時間性と空間性のなかで、主体と世界（他者）とが一体化しているような事態（時間）（坪本 2014:72）」は、(341a) (343a) のような密度の濃いものから、(342a) (344a) のように、比較的強度の面で弱いものまで、幅があると考えられる。2つの出来事は「気づき」と「対応」として結び付き、その結びつきの質に濃淡の差を生み出しながら結び付けているのが、表現者（あるいは、主節主語）の自己評価欲求（渡辺 2001, 2007, 2008）だと捉えると自然な理解が得られると考えられる。

本論文では、以上の点とこれまでの考察を踏まえて、主要部内在型関係節構文の成立条件を次のように考える。

(345) 主要部内在型関係節構文の成立条件として必要な3つの要素（主節主語が人間存在や人間が関わる組織等以外の場合は、②は除外される）

- ① 2つの出来事の継起性
- ② 表現者（あるいは、主節主語）が、2つの出来事（「気づき」と「対応」）間に、潜在する自己評価欲求に基づく「自己評価の試み」（渡辺 2008）としての「関連性」を認める視点（瞬間的には無自覚的な行為であっても反省的に“評価像”を捉えられる「関連性」の存在）
- ③ 2つの出来事（事態）の事態参与者を「事象の入れ子構造」内の同一構造内の事態参与者として捉え、その場に臨場して事態を知覚するような、言語による間接知覚を成立させようとする表現者の表現欲求

## 5.6 主要部内在型関係節構文の表現者の表現欲求とレトリック効果

5.3.3では、主要部内在型関係節で描写される事態の認識を巡り、表現者と主節主語間に相違が生じる可能性を見た。本節では、それがレトリック効果を生む側面を見ていく。

### 5.6.1 主要部内在型関係節構文とレトリック

表現者としての小説家等も、自己評価欲求に基づく表現欲求を持つ。それは、主要部内在型関係節によって描写される事態を、主節主語がどのように捉えるかに多彩な彩をもたらすことに繋がり、それがレトリック効果を生むことになると考えられる。

#### 5.6.1.1 主節主語に想定される自己評価の試みとレトリック効果

主要部内在型関係節構文には、表現構造上、表現者と主節主語の事態認識に微妙なズレが生じる余地がある。BCCWJから得られた当該関係節構文には、この特性が生かされて、レトリック的な効果が生み出されているように感じられるものが観察された。

(346) 公家の青侍が女を迎えてゆくふうにとりつくろって、高倉通りを北へ落ちてゆくうちに、大きな溝が あったのを、心急くまめに宮は女装の裾かるがるととび越えてしまわれた。

((55)を(346)として再掲)

1987 原著者不明/ 大原 富枝 大原富枝の平家物語 集英社

(346)内の内在型構文には、ノエの「知覚のなかの行為」で見た、「知覚と行為の循環」が文表現に現われている。①「高倉通りを北へ落ちてゆくうちに」→②「大きな溝があった」→③「とび越えてしまわれた」は、①行為内容→②知覚内容→③行為内容、の継起的表現である。ノエの「知覚のなかの行為」は、知覚と行為が一体化した相補的なものである。それに対して、(346)の場合は、言葉による表現そのものは、①②③のように分節されているが、描写されている知覚と行為そのものは連続的で一体的な事態である。

事態参与者の自己評価欲求の在り様について考えてみたい。「大きな溝がある」ことに気付いた宮は、「自己評価の揺らぎ」を感じたことが想定される。宮にとって、「大きな溝」は「転落・墜落」をアフォードしかねない。それへの対応行為が「心急くまめに宮は女装の裾かるがるととび越えてしまわれた。」と表現されている。しかし、(346)には注意したい点がある

(346)で、表現者(作者)は、「発見」の意味合いを持つ内在型表現を使用することで、自

ら移動することのない溝を、「落ちてゆきたい」「宮」の障害として立ち現れさせる。ところが、次の宮の行為は「女装の裾かるがると」と描かれ、「かるがると」からは、「心配などする必要が無い程余裕を持って」いる宮の様子が伝わってくる。宮は、「大きな溝」のアフォーダンスと距離を取り、難なく溝を「とび越えてしまう」のである。表現者（作者）の表現欲求は、読者に内在型部分で「自己評価の揺らぎ」を共有してもらい、残余の部分で、読者の予測を微妙にズラして、宮の才と余裕を印象付けたい狙いがあると考えられる。宮に「自己評価の揺らぎ」はあったと解されるが、主節他動詞部分からは、自信も感じられ、レトリック効果が巧みに加えられた表現だと考えられる。

次の(347)では、内在型に、連体修飾節による継起的に先行する事態の描写が組み込まれ、微妙なレトリック効果を発揮しているように思われる。

(347) 当時、人気を得つつあったベースボールに落雲館の学生も夢中になった。逸らしたボールを追って 学生たちが 苦沙弥先生の家<sub>の庭に</sub> 侵入してきた のを 叱りつけた ものだから、苦沙弥先生、学生たちから復讐のダムダム弾攻撃を挑まれたのだ

((157)を(347)として再掲) 1999 池内 了(著) 天文学者の虫眼鏡 文藝春秋

表現者は、苦沙弥先生ではない。「叱りつけた」とあり、苦沙弥先生の自己評価は大きく揺さぶられたと想定される。表現者は、「学生たちが苦沙弥先生の家<sub>の庭に</sub>侵入してきた」事態を現象描写文で表し、それを知った苦沙弥先生が「叱りつける」顛末を描写している。

表現者が、自身が知覚したように描いた「学生たちが苦沙弥先生の家<sub>の庭に</sub>侵入してきた」という事態を、主節主語も同じように知覚したとも考えられるが、疑問点もある。「苦沙弥先生の家<sub>の庭に</sub>」とあるからである。苦沙弥先生自身が「苦沙弥先生の家<sub>の庭に</sub>」と表現することはまず考えられない。さらに、「逸らしたボールを追って」とある。

苦沙弥先生が「逸らしたボール」という認識を持った可能性が無いわけではない。しかし、視野の外だった可能性があり、少なくとも前後の事情など苦沙弥先生に関心の外だったと考えられる。表現者は、「逸らしたボール」という連体修飾節構造を使って、読者には事態の存在が分かり、一方、苦沙弥先生が察知しているのかどうかは分からないように描くことができる。(あるいは、直前の事態を連体修飾節によって読者には客観的に伝え、苦沙弥先生については、感情的になっている様子をその行動描写で印象付けることができる。)

表現者は、主要部内在型関係節構文によって、学生たちと苦沙弥先生に関わる間接知覚を提供する。しかし、当該関係節が臨場感を醸し出す中、連体修飾節によって持ち込まれた直前の事態描写にスポットライトが当たるのか否か(当該事態を苦沙弥先生が察知しているか

いないか)、曖昧である。この表現効果が作者の意図によるのかどうかも曖昧である。

後に、「学生たちから復讐のダムダム弾攻撃を挑まれたのだ」と続けて、滑稽味も加味されていると取れる。また、「逸らしたボールを追って」からは、表現者が事態を俯瞰できる位置から観察している印象もある。巨視的に俯瞰する描写からは余裕も感じられる。「苦沙弥先生もそんなに怒らなければ復讐のダムダム弾攻撃を受けないで済んだのに」という意味合いも感じられる表現となっている。

### 5.6.1.2 アフォーダンスと間接知覚とレトリック効果

次に、内在型構文について、アフォーダンスと表現欲求という観点から見ていく。

下の(348)については、「父の埋葬地が不明であつたのを」とあり、本来は、〈見え〉の中に「父の埋葬地」が無いことが分かる点は、2.4のCで既に触れた。(348)には、アフォーダンスの欠如と、その充足を願う孔子の欲求が観察される。

(348) また同じ檀弓篇に、孔子が 父の埋葬地が 不明であつたのを 探し出し、目印として墓を作つたが、その後、雨がひどく降つてその墓が崩れたのに、孔子はそれを聞いて泣きながら、「古は墓を脩めず」といつてそのままにした、と

(66)&(94)を(348)として再掲 2003 近藤 啓吾(著) 四禮の研究 臨川書店

環境が孔子に提供するアフォーダンスは、孔子の父親以外の埋葬地ばかりだった。アフォーダンスは、本来、在るものしか提供しないし、在ったとしても、自身がそのアフォーダンスが提供される環境内に居る必要がある。(348)では、アフォーダンスの欠如が自己評価欲求の揺らぎを産み、それに対して「自己評価の試み」(渡辺 2008) が為される様子が描かれる。内在型構文という言語形式の実体部分が、アフォーダンスの欠如を察知する自己評価欲求の側から創出され、それを切っ掛けとして、一連の事態が展開していく。

以上の点に関連する、渡辺(2007)の(349)の指摘を見る。(350)は、(349)で紹介される「子どもは勉強していなかった」という記述を、場面記述用紙上に整理し直したものである。

(349) お母さんたちに、場面記述の手ほどきをしたときの事です。あるお母さんが、場面記述用紙の相手の欄に、“子どもは勉強していなかった”と書いていました。

私は、そのお母さんに『子どもが勉強していない』という事実は、世界中どこにも存在していないんですよ』とお話ししました。

そのお母さんは、びっくりしたような顔をして「いいえ、そんなことはありません。私はこの目で見たんですから」と反論しました。

私は「そうですか。それでは、お子さんは、いったい何をしていたのですか」と聞いて見ました。

すると、そのお母さんからは「テレビゲームなんかしていたんですよ」という答えが返ってきました。 渡辺 (2007:32)

子どもは、まさにテレビゲームをしていたのです。それが事実です。“勉強していない”というのは、“勉強してほしい”というお母さんの思いの投影であって、子どもの行為の事実そのものではないのです。そのお母さんは、自分の欲の目で子どもを見ていた、ということが言えるでしょう。 渡辺 (2007:32)

そして、「お母さんが見た「子どもは勉強していなかった」という場面を、自他境界線で分けて書いてみると次のようになります」として、(350)が示されている。

(350)

相手が言ったこと、したこと (私が見たこと、聞いたこと)	私が思ったこと、言ったこと、したこと
①子どもはゲームをしていた。	
	①私はくまた勉強してないわ。
	②しっかり勉強してほしいわ>と思った。

\*思ったことはく >の中に、言ったことは「 」の中に書きます。 渡辺 (2007:33)

そして、「左側の欄には相手が実際にしたことを書きます。自他境界線で分けられた用紙に書くと、このように「子どもはゲームをしていた」という相手の姿をありのままに見ることができるようになります (渡辺 2007:33)」としている。

(350)をアフォーダンスの観点から捉えれば、心の中の「勉強してほしい」という欲求が、「子どもが勉強している」というアフォーダンスの欠如を意識させ、それを巡る不満の表れとしての「子どもが勉強していない」という表現を創り出している。同じように、自己評価欲求が創り出す、自身の欲求の投影としてのアフォーダンス的事態が言語化される場合があり、(348)の主要部内在型関係節がその例だと言える。

間接知覚を提供する言語表現とアフォーダンスと欲求の関係を、ギブソン (2004) の指摘から見てみたい。ギブソン (2004) は、居住環境における知覚に関して、「人間という社会的生命体の特殊な集団が存在する」とし、「人間は、環境の一部であるだけでなく、環境の知覚者《perceivers》でもある。従って、ある観察者は、他の知覚者を知覚する。さらに、観察

者は、『他の知覚者がどのようなことを知覚しているのか』知覚するのである（ギブソン 2004 :352-353）」とする。このようなことから、「各々の観察者は、共通の環境を意識する。それは、**特定の観察者**だけの環境ではなく、あらゆる観察者に共通の環境である（ギブソン 2004 :353）」とする。その上で、(351)のように述べている。

(351) 共通の環境が成立するために、二つの根拠が存在し、それらは互いに関連しあっている。

第一に、どの観察者も動き回るので、他の観察者が取っていた視点を占めることができる。

第二に、観察者は、自分が一度も見たことのない事物について他者から聞いたり、その事物を表した絵を見たりできる。この第二の状況では、観察者は、他者が知覚したことを、他者から与えられる情報を介して知覚する。つまり、間接的な知覚、媒介者を介した知覚である。これに対して、上記の第一の状況では、観察者は、言葉や絵と言った媒介を経ることなく、「他者がどのようなことを知覚しているのか」を知覚する。つまり、私自身を引き合いに出して言えば、「私は、あなたが今取っている視点から、対象や場所を見ることができる」。さらに、「私は、あなたが言葉や絵で表現した対象や場所を知ることができる」。これら二つの能力は、つねに同時にはたらく。**あなたが知っていることを私が知るためには、私は我々が部分的に同一であることを知らなければならない。**つまり、私は、自分とあなたとを、ある意味で“同一視”できなければならないのである。 ギブソン (2004 :353)

(348) では、孔子が、ギブソンの指摘する「間接的な知覚」から、多くの人が父親の埋葬地を知っていることを把握し、自分も多くの人と同様に自身の父親の埋葬地を知りたいという状態に導いた構図が窺える。(他者が他者の父親の埋葬地を知覚しているのを孔子が知覚するという、上記の第一の状況が稀に成立し、その結果、孔子に父親の埋葬地を探し出したいという欲求を生じさせる状況も想定可能である。)

また、ギブソン (2004) は、上記の間接的な知覚について、(352)のように指摘している。

(352) 次に、間接的な知覚、即ち、媒介者を介した知覚について検討しよう。これは、直接的な知覚とは別の水準にある。つまり、伝達によって媒介され、音声・絵画・文書・彫刻といった、伝達“媒体”に依存して成立する知覚である。この知覚が間接的だというのは、知覚を特定する情報が、話者・画家・書き手・彫刻家によって提示されているからである。そしてそれは、無限の利用可能な情報の中から、媒介者によって既に選択された情報である。この種の把握《apprehension》は、「音や面に関する直接的な知覚も、間接的な知覚と共に生じる」という事実ゆえに複雑である。記号《sign》はしばしば、意味されている物と共に認識される。にもかかわらず、いかに複雑であろうとも、結果は次のようになる。



絵の場合で言えば、人間は、比喩的に画家の目を通して見ることができる。文書の場合で言えば、書き手の眼や言葉を通して理解できるのである。旅行家・探検家・研究者が理解したことは、このようにして、全ての人々が利用できるようになる。 ギブソン(2004:354)

ギブソンは、間接的な知覚から、「文書の場合で言えば、書き手の眼や言葉を通して理解できるのである。旅行家・探検家・研究者が理解したことは、このようにして、全ての人々が利用できるようになる」とする。一方で、「記号《sign》はしばしば、意味されている物と共に認識される」ために複雑であることも指摘されている。主要部内在型関係節構文も間接的な知覚をもたらす。間接的な知覚は、伝達“媒体”に依存して成立する知覚だとされるが、記号《sign》としての言語も共に認識される主要部内在型関係節構文は、先に見たように、知覚された事態が描写されながら多くは知覚行為に言及されない構文である。また、それもあって、表現者が描写する事態と主節主語が捉える事態がほぼ同一に描かれながら微妙にズレが生じることのある（あるいは構造上の特性からもともと一致するかどうか確定的でない）構文であり、そこに、さらにレトリック性という表現者の表現欲求が関わってくる構文である。表現者が、主要部内在型関係節を使用して間接知覚を提供するこの構文には、ギブソンの言う、伝達“媒体”に依存して成立する知覚としての、間接的な知覚の特徴が際立つという性格が見られる。そこには、〈主観的把握〉(池上 2011) の構図からの描写という日本語の(類型論的な)特徴だけでなく、池上(2011)の指摘にあるような、聞き手・読み手の捉え方・自己投入(聞き手・読み手の自己評価欲求も無関係ではない)が関わり、何より表現者あるいは主節主語の自己評価欲求が関わってくるのである。

次の(353)は、表現者が、読者に、「自己評価の試み」を誘発するような事態を内在型で伝えながら、主節主語に事態とは直接関わりの無いアフォーダンスを振り分けている例である。

(353) いや、男とも人間ともさだかでない赤い煙のようなふたつのかたまりを浮かびあがらせたのである。その朦朧たる赤い影が、指をおりまげて襲撃の姿勢をとっていたのを、ふりそそぐ雪が白じろとふちどったのも一息か二息のあいだで、次の瞬間、ふたりはとうとう雪しぶきをあげて地に伏していた。「伽羅」と、扇千代はあえいだ。敵を応えより、おのれの腰を緊縛する痛みに彼はもだえた。

1996 山田 風太郎(著) 外道忍法帖 講談社

内在型で描写される「赤い影が、襲撃の姿勢をとっていた」という事態は、一般に、自己評価に揺らぎを与え自己評価の試みを誘発する事態である。しかし、(353)の場合、対応行為を取るはずの主節主語は、ふりそそぐ自然物の「雪」である。意志ある者によって為される

「襲撃」と、「襲撃」とは無関係にふりそそぐ自然物の「雪」を結び付けているのは、表現者（作者）の表現欲求であり、その表現欲求によって、赤い影と雪の白の、色彩によるコントラストが描き出される。「襲撃」という人的行為としてのアフォーダンスと「雪」という自然物としてのアフォーダンスが、表現者（作者）の表現欲求によって巧みに内在型構文内の文法機構・表現機構の中に配置されている。そのようにして為された表現によって、「一息か二息のあいだ」の束の間の一瞬が、赤と白との色彩的コントラストを帯びたものとして描き出されている。

## 6. 結論

BCCWJから得られた実例からは、①主要部内在型関係節構文が、「気付きとその内容とそれへの対応」を表すこと、②主要部内在型関係節の表現者は、「現象」を直接知覚する（想起・想像する場合を含む）知覚者のように事態を描写し間接知覚を創出すること、そして、③主要部内在型関係節によって描写される「事態」に関して、「表現者」の事態認識と同構文内の「主節主語」に想定される事態認識との間に、微妙な差異が存在する可能性があること、が観察された。日本語に於ける、事態の〈主観的把握〉の構図からの表現が為される傾向は、「気付きとその内容とそれへの対応」の内の「気付き」に関わる行為等を明示的に示さない傾向にも現れ、主要部内在型関係節構文を臨場性の際立つ表現にしていると考えられる。また、主要部内在型関係節による描写事態に関して、「表現者」と「主節主語」に認識のズレが有り得ることは、この構文を巡る多彩なレトリックに彩りを与えるものと思われる。

主要部内在型関係節（構文）の使用動機は、連体修飾機構との相違から示唆される。連体修飾は、表現者の対応行為を表現する前に「限定修飾」を成立させる。働きかける対象の選択結果を予め表現してから、当該対象に対して取る他動行為を表現する。従って、基本的に、意図的に選んだ対象に対して意図的に選択した行為を行うことが表現される。

主要部内在型関係節は、対応行為を表現する際、対象とそれに対して取る他動行為の選択がほぼ同時に表現される。ある現象（とそれへの気付き）が、表現者（あるいは、主節主語）に対応を迫る様相が先に描写された後、「の」付加段階の「抽象的客体化」を起点として、対応行為が表現されるため、一連の出来事が一続きの現象のような様相の下に表現される。

以下のように、両修飾機構の本質をまとめる。

＜連体修飾節（主要部外在型関係節）と主要部内在型関係節の相違＞

**【連体修飾節の本質】**「現象」が人の意識を捉え、知覚が成立した（あるいは、成立したと想定された）後、その「現象」に対する「値踏み」（渡辺（2001, 2007, 2008））が既に生じた上で生成されるのが、連体修飾節構造（主要部外在型関係節構造）であると考えられる。現象が既に起きた・あるいは既に起きたと想定されることを背景に、値踏みされた現象との関わりに表現価値を置きながら為される表現となる。継起的に先行する（想定される場合も含む）事態に参加した事態参加者が被修飾名詞句として「現象」内から切り出され、「連体修飾節構造」が生成される。さらに、その特定化された対象に対して、既に値踏みされた事態を念頭に置きながら、「自己評価欲求」（渡辺（2001, 2007, 2008））と個々の「モノサシ」（渡辺

(2001, 2007, 2008))に基づいて、対応行為が選択され、それが表現される。連体修飾機構は、以上の表現をするのに適した文法形式である。

【主要部内在型関係節構文生成の本質】主要部内在型関係節構文は、環境世界内に生じる様々な現象から、(表現者はしばしば受け身のまま)、自己評価欲求(自然的欲求・社会的欲求・文化的欲求の背後に潜在している、自己の存在価値を肯定したい、少なくとも、否定したくない、という、人間に独自の根源的欲求)(渡辺(2001, 2007, 2008))が選んだ現象(表現者が気付いた現象)を、気付きの様相のまま「現象描写文」という形式で表現し、かつ、その事態が迫る対応要請を受けて、表現者が事態参与者に対して取る、これも自己評価欲求に基づく対応行為を臨場的に表現するのに適した文法形式である。

本論文が、渡辺(2001, 2007, 2008)に依拠して「自己評価欲求」の視点から主要部内在型関係節構文の使用動機を捉えることには、次のような意義がある。すなわち、先に示した、主要部内在型関係節構文と連体修飾節構造を使用した文との間に見られる関係を、修飾機構の相違とその機構の使用の動機の観点から関連付けることが可能となる。

主要部内在型関係節構文は、「自己評価欲求」(渡辺 2001, 2007, 2008)に基づく「自己評価の試み」(渡辺(2001, 2007, 2008))の過程に臨場する様相で、その過程を言語化して表現するのに適した表現形式である。一方、連体修飾節構造は、継起的に先行する事態に事態参与者として関わったという属性を主名詞(主要部)に付与し、そのような属性を獲得した主体が次にどのように行為を選択していくかを描写するのに適している。ここには、表現時の「自己評価欲求」の在り様の差異が反映されている。「自己評価の試み」に臨場する様相と当面の「自己形成」が成った主体の次の行為選択に関わる様相の差異である。「知覚と行為の循環」(本多 2005)に想定される相補的で循環的な関係性が、「自己評価の試みと自己形成」の間にも見られ、それを言語化するのに適した二つの修飾機構間にも、循環的で相補的な関係性があることが捉えられるのである。

## 参考文献

(本論文が直接引用した文献あるいは参考にした文献のみ以下に記し、引用部分内に紹介されている他の研究者の文献等については、記載していない。)

- 安藤貞雄・小野隆啓 (1993) 『生成文法用語辞典』大修館書店
- 天野みどり (2011) 『日本語構文の意味と類推拡張』笠間書院
- 井川壽子 (2012) 『イベント意味論と日英語の構文』くろしお出版
- 池上嘉彦 (1981) 『「する」と「なる」の言語学』大修館書店
- 池上嘉彦 (2004-2005) 「言語における〈主観性〉と〈主観性〉の言語的指標」(1)-(2)山梨正明他編『認知言語学論考No3』pp. 1-49, 『認知言語学論考No4』pp. 1-60. ひつじ書房
- 池上嘉彦 (2011) 「日本語と主観性と主体性」澤田治美編『ひつじ意味論講座第5巻主観性と主体性』pp. 49-67, ひつじ書房
- Ikegami, Yoshihiko. 1991. "DO-language and BECOME-language: Two Contrasting Types of Linguistic Representation." *The Empire of Signs*, ed. by Yoshihiko Ikegami. Amsterdam: John Benjamins. 285-326.
- 大島資生 (2010) 『日本語連体修飾節構造の研究』ひつじ書房
- 大関浩美 (2008) 『第一・第二言語における日本語名詞修飾節の習得過程』くろしお出版
- 小原京子 (2002) 「構文理論から見た主要部内在型関係節の意味と機能」大堀壽夫編『認知言語学Ⅱ: カテゴリー化』pp. 277-295, 東京大学出版会
- 菊地康人 (2006) 「主題のハと、いわゆる主題性の無助詞」益岡隆志・野田尚史・森山卓郎 (編) 『日本語文法の新天地 2 文論編』pp. 1-26, くろしお出版
- 岸本秀樹・菊地朗 (2008) 『叙述と修飾』研究社
- 黒田成幸 (1999) 「主要部内在関係節」黒田成幸・中村捷 (編) 『ことばの核と周縁—日本語と英語の間—』pp. 27-103. くろしお出版
- 黒田成幸 (2005) 『日本語からみた生成文法』岩波書店
- 河野継代 (2012) 『英語の関係節』開拓社
- 小林司編 (2004) 『カウンセリング大事典』新曜社
- 近藤安月子 (2018) 『「日本語らしさ」の文法』研究社
- 谷光生 (2012) 「節の意味を表す関係節付きの名詞句に関する予備的考察」『宇都宮大学教育学部紀要』第62号、pp. 217-224
- 田村隆夫 (2016) 「コーパスが示唆する主要部内在型関係節の使用動機」河正一・金井勇人・仁科弘之編『小出慶一教授退職記念論文集 ことばの本質を求めて』埼玉大学教養学部・人文社会科学研究科 pp. 78-91
- 田村隆夫 (2017) 「主要部内在型関係節と主要部の先行提示—主要部内在型関係節との語用論的比較のための一考察—」河正一・島田雅晴・金井勇人・仁科弘之編『仁科弘之教授退職記念論文集 言語を巡る ⅸ 章 言語を考える、言語を教える、言語で考える』埼玉大学教養学部・人文社会科学研究科、pp. 271-284
- 田村隆夫・仁科弘之 (2017) 「主要部内在型関係節の連鎖」第35回大会日本英語学会シンポジウム (東北大学)

- 坪本篤朗 (1998) 「文連結の形と意味と語用論」中右実 (編) 『日英語比較選書 第3巻: モダリティと発話行為』 pp. 99-193. 研究社出版
- 坪本篤朗 (2002) 「再び、主要部内在型関係節構文—「分離」と「統合」の間—」『ことばと文化』第6号 静岡県立大学英米文化研究室、pp. 27-44.
- 坪本篤朗 (2014) 「いわゆる主要部内在型関係節の形式と意味と語用論」『日本語複文構文の研究』pp. 55-84  
ひつじ書房
- 永井均・中島義道・小林康夫・河本英夫・大澤真幸・山本ひろ子・中島隆博編 (2002) 『事典哲学の木』講談社
- 中島信夫編 (2012) 『朝倉日英対象言語学シリーズ7 語用論』朝倉書店
- 日本語記述文法研究会編 (2008) 『現代日本語文法6 第11部 複文』くろしお出版
- 日本語記述文法研究会編 (2010) 『現代日本語文法1 第1部 総論第2 形態論』くろしお出版
- 野村益寛 (1998) 「「主要部」を欠く主要部内在型関係節」『日本女子大学文学部紀要』47:39-49.
- 野村益寛 (2002) 「参照点構文としての主要部内在型関係節構文」『認知言語学論考 No. 2』 pp. 229-255.  
ひつじ書房
- 野村益寛 (2014) 『ファンダメンタル認知言語学』ひつじ書房
- 野村益寛 (2016) 「事象統合からみた主要部内在型関係節構文—「関連性条件」再考—」、p. 207 藤田耕司・西村義樹編『日英対照文法と語彙への統合的アプローチ—生成文法・認知言語学と日本語学—』pp-186-211, 開拓社
- 長谷川信子 (2002) 「主部内在関係節: DP 分析」Scientific Approaches to Language, No. 1, pp. 1-33.  
神田外語大学、言語科学研究センター.
- 原口庄輔・中村捷・金子義明編 (2016) 『増補版チョムスキー理論辞典』研究社
- 福地肇 (1995) 『英語らしい表現と英文法』研究社出版
- 堀江薫、プラシャント・パルデシ (2009) 『言語のタイポロジー』研究社
- 本多啓 (2005) 『アフォーダンスの認知意味論—生態心理学から見た文法現象』東京大学出版会
- 益岡隆志 (1997) 『複文』くろしお出版
- 益岡隆志 (2004) 「日本語の主題—叙述の類型の観点から」益岡隆志編『主題の対象』pp. 3-17. くろしお出版
- 益岡隆志 (2008) 「叙述類型論に向けて」益岡隆志編『叙述類型論』pp. 3-18. くろしお出版
- 益岡隆志 (2013) 『日本語構文意味論』くろしお出版
- 益岡隆志 (2020) 「主題構文としての日本語の名詞修飾節構文」プラシャント・パルデシ、堀江薫編『日本語と世界の言語の名詞修飾表現』pp. 3-21. ひつじ書房
- 三原健一・平岩健 (2006) 『新日本語の統語構造』松柏社
- 三原健一 (2008) 『構造から見る日本語文法』開拓社
- 三好伸芳 (2021) 『述語と名詞句の相互関係から見た日本語連体修飾節構造』ひつじ書房
- レー・バン・クー (1988) 『「の」による文埋め込みの構造と表現の機能』東京: くろしお出版
- 渡辺康磨 (2001) 『セルフ・カウンセリング 第2版』ミネルヴァ書房
- 渡辺康磨 (2007) 『やさしくわかる自己発見心理学』ナツメ社
- 渡辺康磨 (2008) 『だれでもできる自己発見法—自己評価分析入門—』ミネルヴァ書房
- Cecchetto, Carlo and Donai, Caterina (2015), *(Re)labeling*. The MIT Press.

- Gibson, James Jerome (1982) “Notes on Affordances,” *Reasons for Realism: Selected Essays of James J. Gibson*, ed. by Reed, Edward and Rebecca Jones, Lawrence Erlbaum Associates, Hillsdale, 401-418. [J. J. ギブソン 「アフォーダンスに関する覚え書き」 境敦史・河野哲也訳、『ギブソン心理学論集 直接知覚論の根拠』 勁草書房, 2004, 337-364] .
- Goffman, Erving(1967) *INTERACTION RITUAL : Essays on Face-to-Face Behaviour*, Anchor Books, Doubleday and Company Inc., New York. [アーヴィング・ゴッフマン 『儀礼としての相互行為 (新訳版) 対面行動の社会学』 (浅野敏夫 訳 (叢書・ユニベルシタス 198) 法政大学出版会, 2012) ] .
- Huddleston, R. and Pullum, G. ed. (2002) *The Cambridge Grammar of the English Language*, Cambridge University Press, Cambridge. [Rodney Huddleston・Geoffrey K. Pullum 『[英语法大辞典] シリーズ 第7巻 関係詞と比較構文』 (藤田耕司・長谷川信子・竹沢幸一監訳 岩田彩志・田中秀毅・藤川勝也・辻早代加 訳 開拓社, 2018)] .
- Langacker, R. W. (1990). *Concept, Image, and Symbol: The Cognitive Basis of Grammar*. Mouton de Gruyter.
- Matthews, P. H. (1997) *The Concise Oxford Dictionary of Linguistics*. Oxford University Press. [P. H. Matthews, 『オックスフォード言語学辞典』 (中島平蔵+瀬田幸人 監訳 朝倉書店, 2009) ] .
- Noë, A. (2004) *Action In Perception*. Cambridge, MA: The MIT Press. [アルヴァ・ノエ 『知覚の中の行為』 (門脇俊介+石原孝二 監訳 飯島裕治+池田喬+吉田恵吾+文景楠 訳 現代哲学への招待 Great Works ) 春秋社, 2010] .
- Tonosaki, Sumiko (1998) Change-Relatives in Japanese, *Journal of Japanese Linguistics Volume 16, 1998*, 143-160.

## 引用文献

- 松本清張全集 5 (1971) の『砂の器』 文藝春秋. P. 151-152, p. 333
- Cary, Beth. Translation 1989. *Inspector Imanishi Investigates*. Soho Press Inc. New York p. 164, p. 239

## 資料 (実例データ)

「現代日本語書き言葉均衡コーパス」『少納言』 (大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所と文部科学省科学研究費特定領域研究「日本語コーパス」プロジェクトが共同で開発した『現代日本語書き言葉均衡コーパス』 (BCCWJ: Balanced Corpus of Contemporary Written Japanese))

## 添付参考資料

BCCWJ から得られた全主要部内在型関係節構文の詳細文型分類別一覧 (p. 1~p. 16)

## 添付参考資料

BCCWJ から得られた**主要部内在型関係節構文**の詳細文型分類別一覧 (p.1～p.16)

(「現象描写文」の末尾が「～た (だ)」「～ていた) という形で形式名詞の「の」に接続して主要部内在型関係節を形成し、その「の」節がヲ格として主節他動詞に接続するもの)



BCCWJから得られた**全主要部内在型関係節構文**の詳細文型分類一覧

(「現象描写文」の末尾が「～た(だ)」「～ていた)」という形で形式名詞の「の」に接続して主要部内在型関係節を形成し、その「の」節がヲ格として主節他動詞に接続するもの)

- 1 1 午前八時三十分、第二百六貨物列車(軍用)が、車両(一二〇〇八号)の車軸一つが焼けたのを修理しているとき、約二〇メートルほどのところで学生五名が歩いていくのを見て、**同列**  
2001 呉 連鎬(著)/ 大畑 正姫(訳)/ 大畑 龍次(訳) 朝鮮の虐殺 太田出版
- 1 2 **当時の実際を伝えるものである。また同じ檀弓篇に、孔子が父の埋葬地が不明であつたのを探し出し、目印として墓を作つたが、その後、雨がひどく降つてその墓が崩れたのに、孔**  
2003 近藤 啓吾(著) 四禮の研究 臨川書店
- 1 3 **たように。また、ギリシャ神話で、オルフェウスが愛しい妻エウリディケーが冥界に行ったのを追いかけて行き、「けっして振り返ってわたしを見ないで」と念を押されていたにもかか**  
2005 鎌田 東二(著) 霊性の文学誌 作品社
- 2 1 **死んで二年目、元和四年(一六一八)の秋の一日、国千代は江戸城の西の丸の濠に鴨がいたのを鉄砲で打って、母君のお江に届け、でかしたでかしたとよこばれたが、秀忠はお江のと**  
1977 田中 澄江(著) 人物日本の女性史 集英社
- 2 2 **を企てていたが、たまたま明の遺臣朱舜水が異民族王朝である清からのがれて亡命してきたのを手厚く保護した。こういう気分のなかで、光圀は学者をあつめて修史事業をつづけ、そ**  
1990 司馬 遼太郎(著) この国のかたち 文芸春秋
- 2 3 **のひとりに席をずらしてもらって私自身ポケットに偶然にも似たようなマスクが入っていたのをひっぱり出して顔にかけ、さて瘦せた尻の肉にも更に死者の骨のようによくいこむベンチの**  
1993 天沢退二郎詩集 思潮社
- 2 4 **馴々しく話しかけた。彼女は、女子挺身隊の娘が、首の腫物で一人出発をおくらしていたのを今つれて行く所だと言った。切符が買えないために、行けるだけ行っては降りて泊って行**  
2002 実著者不明/ 平林 たい子(著) 戦後短篇小説再発見 講談社
- 2 5 **『天才だ、天才だ』なんて…。太宰はなにかの随筆で、井伏先生が人前でオナラをしたのを注意したというような話を書いたことがある。今、本棚を探してみるが、探すとなると見**  
2002 司馬 遼太郎(著) 酒のかたみに たる出版
- 2 6 **には四人の男子があった。長男と次男が早く死んだので、守隆は末子の久隆が出家していたのを還俗させて跡取りとした。三男の九鬼隆季(一六三三～七四年)は父との折り合いが悪く**  
2004 八幡 和郎(著) 江戸三〇〇藩バカ殿と名君 光文社
- 2 7 **慨がひしひしと伝わってくる。彦市は、三月末老薙れた烏猫が流水に乗って流され始めたのを、助けようとして氷の海に落ちる。断崖下の石浜にたどり着いたが、足が折れ顔は傷だら**  
2004 菊地 慶一(著) 流氷 響文社
- 2 8 **力が三河、遠江から大きく後退し、昌幸の岳父尾藤頼忠は兄が羽柴秀吉の家臣となっていたのを頼つて近江に行き秀吉の弟秀長の家臣となっている。天正6年(1578年)、越後の**  
2008 Yahoo!ブログ Yahoo!
- 4 1 **弟であった。重次郎は売り払いをたのまれ、次郎左衛門が真鴨十羽を襦半につつみ持参したのを、密猟と知りながら、礼金を手にした欲から、柳籠へ入れ、風呂敷でくるみ、もち歩い**  
1995 樋口 秀雄(著) 江戸の犯科帳 新人物往来社
- 4 2 **達は二、三の新聞が、いち早く、グロース・シュレックホルンに於ける私達の遭難を伝えたのを切りぬいて、暢気な旅に於ける出来ごとが、決して夢でなかったと云う証拠にしようとし**  
1998 辻村 伊助(著) スウィス日記 平凡社
- 5 1 **すめ、この三毛はかつて唐橋から聞いていた、中臈富永の飼う親猫からこのほど五匹生れたのを、幾島みずから出向いてもらい受けてきたのだという。「あと先にはなりますれど、天璋**  
1984 宮尾 登美子(著) 天璋院篤姫 講談社

- 5 2 二人のあいだに坐るのが一応のしきたりになっている。それに気がついて里美が動きかけたのを、能村が制したのは、今夜は里美を秋葉の横にずっとおいてやりたいという配慮からに違
- 1986 渡辺 淳一(著) 化身 集英社
- 5 3 っている」銀行の頭取が言った。「まあまあ諸君」参加者が口々に不安を述べ始めたのを、会長が制した。「今日はそのようなことを聞かせるためにピーターを招いたのではな
- 1987 中島 渉(著) サザンクロス流れて 中央公論社
- 5 4 落ち着いた、生福寺に住して念仏の行をつづけたとするされるが、その生福寺が廃絶していたのを高松藩祖松平頼重が自家の菩提寺として寛文十年（一六七〇）に再興したのだという。
- 1990 足立 卷一(著) 探訪日本の古寺 小学館
- 5 5 で、日頃から酒を酌み交わす交際であった。この時も、大竹が「荒海」に向かおうとしたのを、四郎が制して壇上にあがったようだ。万一、大竹が敗れては大変なことになる、と四
- 1993 加来 耕三(著) 日本格闘技おもしろ史話 毎日新聞社
- 5 6 かびあがらせたのである。その臃腫たる赤い影が、指をおりまげて襲撃の姿勢をとっていたのを、ふりそそぐ雪が白じるとふちどったのも一息か二息のあいだで、次の瞬間、ふたりほど
- 1996 山田 風太郎(著) 外道忍法帖 講談社
- 5 7 を飲んでいた近衛の兵士のひとりが、酒の勢いで、いっそ謀叛でもやらかそうかと口走ったのを、同僚のひとりが訴えてた。一同はただちに捕えられ、しゃべった兵士は斬首、聞いてい
- 1997 立間 祥介(著) 新十八史略 河出書房新社
- 5 8 ほどの空間があり、そこに男が倒れていた。誰の心遣いか、一応、古布団がかけてあったのを、松之助がそっとめくって東吾にみせる。たしかに男前だが、悶死した顔はすさまじか
- 1998 平岩 弓枝(著) お吉の茶碗 文芸春秋
- 5 9 ずっと歳月が経ってしまい、ついに書くことがなかった。前篇だけが十七年間眠っていたのを、一九九九年に元『世界』の編集長山口昭男氏が読み直して、これだけでも独立してるじ
- 2003 中野 孝次(著) 中野孝次の生きる言葉 海竜社
- 5 10 ある。彼が日本に滞在したのは昭和四七年からだが、その時の名前入りの家具が残っていたのをピューイグ＝ロジェ先生が発見し、彼と同じ官舎に住むことに光栄を感じておられた。フ
- 2003 永富 正之(著) ある「完全な音楽家」の肖像 音楽之友社
- 5 11 神集島・屋形石村・横野村・中里村鬼塚村いい伝えによると古くこの地に鬼（盗賊）がいたのを源久という人が滅ぼし、その主領を討ちとったところを鬼塚として死骸を埋めたといわれ
- 2005 福岡 博(著) 佐賀地名うんちく事典 佐賀新聞社
- 5 12 のび太のどこに惚れて結婚を決めたんですか？マンガ中では、雪山に行った静香が遭難したのを、タイムマシンとタイムフロシキで大きくなった「現在」ののび太が助けに行く（未来
- 2005 Yahoo!知恵袋 Yahoo!
- 5 13 数の随行とともに塚に滞在していたが、家康が京都に行って信長の後を追おうと取り乱したのを忠勝が諫めて、「伊賀越え」を行かせたという。鹿角脇立兜（現存しており重要文化財
- 2008 Yahoo!ブログ Yahoo!
- 6 1 を迎えてゆくふうにとりつくろって、高倉通りを北へ落ちてゆくうちに、大きな溝があったのを、心急くまに宮は女装の裾かるがるととび越えてしまわれた。通行人が立ちどまって、
- 1987 原著者不明/ 大原 富枝 大原富枝の平家物語 集英社
- 6 2 。やがて飲み物が来てもメリーさんは目を開けなかった。志摩ちゃんが声をかけようとしたのを僕は無言で止めた。こうして約三十分の間、僕達は誰も口をきかなかった。興奮の後の奇
- 1988 佳村 昌季(著) 第11幕への序曲「浮輪をしたハチ公」 実業之日本社
- 6 3 なかった。クリスマスのお祝いとか、正月の祝いにやった小づかいが参拾円ほど貯っていたのを子供は持って行った様子だった。家族のひとたちは、逃げるような子供は探したって無駄
- 1988 林 芙美子(著) 「文芸春秋」にみる昭和史 文芸春秋

- 6 4 「う？ 聞いたことのある名ばい」「彰義隊やなかな」銃口が脇腹へ押しつけられたのを、三之助は、軽く払いのけながら、「将棋をさすのァ好きだがね」「こやつ！官軍  
1991 早乙女 貢(著) 幕末愚連隊 文芸春秋
- 6 5 た。たまたま舌の先が触れて、歯が欠けているのがわかった。唇の端からまた血が出てきたのを、ニックはシャツの袖でぬぐった。「ロイド、何人が連れていってかまわないから、オ  
2002 アレックス・カーヴァー(著)/ 新井 ひろみ(訳) 悪魔の眼 ハーレクイン
- 7 1 机に坐って無言で動かない。見かねて、岩崎警部補が食堂に行き、定食弁当を買って来たのを、まさか彼女が持って行くわけにはいかないの、代りに乃木が、机の上に届ける。そ  
1988 胡桃沢 耕史(著) 翔んでる警視正 天山出版
- 7 2 そっくりだったって…。これは兵隊に行く前の写真ですね。母がこの写真を捨てようとしたのを祖母が預かって、私に渡してくれました。私の父親にはちがいないのだから、大切にしま  
1999 津島 佑子(著) 私 新潮社
- 7 3 の父というのが、なんともおかしい。父の異母兄山本三造さんが移民の許可をとっていたのを、父がゆずりうけて、アメリカ移民になった。というはなしもきいた。おそらくほんとだ  
2001 田中 小実昌(著) アメン父 講談社
- 8 1 議事進行について。矢田部君がこの前資料要求したのを外務省はまだ出せないと言って出さないそうだが、その問題についてなぜ出せないかを質  
1977 小柳勇君 国会会議録
- 9 1 本件に関係あると思ひまして押収しました。それからその付近にやはりノートが一冊あったのを差し押えたように記憶していますが、この点はあまり明確にいま記憶がございません  
1976 野間 宏(著) 狭山裁判 岩波書店
- 9 2 をひそめたが、聡明な彼女にはすぐ察しがついた。この写真といっしょに手紙がついていたのを、いったんは怒りにまかせて破りすてたが、後日鉄也が思い出すままに書きつづっておい  
1978 横溝 正史(著) 病院坂の首縊りの家 角川書店
- 9 3 がそんなにチライ思っているのに、あんたはヒドいんだよ。やっとなんか帰ってきたのをみつけて、あとを追っかけたら、知らん顔してサッサ、サッサ行っちゃうんだよ。エレ  
1984 生島 治郎(著) 片翼だけの天使 集英社
- 9 4 いくずれる人がきにからだごとぶつかり、おしわけて、むちゅうでかけた。ゲンがころんだのを立つ時間もあたえないで、引きずりさえしたらしい。それからのおじさんがどうなった  
1987 大原 興三郎(著) おじさんは原始人だった 偕成社
- 9 5 が行った「国民のライフスタイルともの文化」に関する世論調査の結果が新聞に発表されたのを見たからである。新聞には、生活人並みでも若者は個性重視という見出しが大きく出て  
1989 塩田 丸男(著) 人間大好き、雑談大好き リクルート出版
- 9 6 サージのように快い。カセット・テープは、取り敢えず母の遺品が手箱にいっぱいあったのをそのまま持って来た。晩年の母は音楽が最上の慰めで、とりわけ歌曲を愛し、イタリア・  
1991 桐島 洋子(著) 刻のしづく 世界文化社
- 9 7 聖域』、本当はかなり以前に一度完成していて、さる事情でずうっとお蔵入りになっていたのを、やっと今回、多少手を入れて、ようやくこちらで引き取っていただいたという経緯があ  
1992 ひかわ 玲子(著) 竜の聖域 富士見書房
- 9 8 ンションのお家賃とかもあって、おまけに六月に誰かが遠き欧州に取材旅行に行っちゃったのをガンシきれなくなって追いかけてたりもしたから、阿呆みたいにいっぱい使って、それ  
1992 久美 沙織(著) 軽井沢動物記 扶桑社
- 9 9 だと言って売りつけた軸物は、北斎の門弟が模写した絵で、本来、その門弟の落款があったのを抜いて、《北斎老人》と偽筆、偽印章をあとから入れたことが判明した。それで告訴  
1992 水野 泰治(著) 歌麿殺人事件 講談社
- 9 10 段の主格代名詞に『それがし』を使うひとをはじめて見た。神父さまがなにか言いかけたのを制して、マルティナが決然と前に進み出た。「わたくしが寮長です」「ほ。とづくに  
1994 久美 沙織(著) 修道女マリコ 扶桑社

- 9 11 ほうに浮いた乾燥濃縮剤を中のほうに沈めるため三〇秒間強く振る。そして液の下に入ったのを溶かすために五分あるいは二〇分、泡立たせないように緩く振るのです」—三〇秒間強く  
1994 櫻井 よしこ(著) エイズ犯罪血友病患者の悲劇 中央公論社
- 9 12 の努力がみのったのだ。昔のオバアサンは偉かった。お尻からサナダムシが這い出してきたのを、ぬるま湯にひたさせて、決して急がず(あわてて引っぱると、すぐサナダムシはちよん  
1994 實吉 達郎(著) 知らなきや恐い生物常識 広済堂出版
- 9 13 死に方したね。彼女はママ(かし子さん)がおって、毎日毎日、ママをお見舞いに行ってたのを残して死んだから。フランス映画社は柴田さんという社長がいるの。だからまだいいけど、  
1994 横尾 忠則(著)/ 淀川 長治(著) 二人でヨの字 筑摩書房
- 9 14 の命も今日限りということでもある」「なんだって」「しっ」忠常の声が高くなったのを制すると時政は言った。「御所にもし万一のことがあれば、お跡目はどうなる?」「  
1994 永井 路子(著) 闇の通り路 文芸春秋
- 9 15 ある。二八日 二カ月まえに爆撃された中央大学の建物を利用して赤十字病院が開設されたのを見に行く。図書館の閲覧室や体育館にベッドが並べられて病室にはやがわり、一二〇〇人  
1995 笠原 十九司(著) 南京難民区の百日 岩波書店
- 9 16 た。その数日後、植松の店の裏で、伊勢と加勢した布田が組織の連中に袋叩きにされていたのを救ってくれたのが、佐々木だった。「なあ、慎二」伊勢は言った。「俺がいつまでもお  
1996 白川 道(著) 海は涸れていた 新潮社
- 9 17 いいかメアリーはちょっと迷った。「先週わたしと子供たちの写真が『プラウダ』に出たのをご覧になったと思います」「うん、素晴らしいことだ!」スタントン・ロジャース  
1996 シドニィ・シェルダン(著)/ 天馬 龍行(訳) 神の吹かす風 アカデミー出版
- 9 18 、車と、医師の妻にふさわしいものになった。ベニヤの化粧張りがあやうく剥がれかかったのを、いそいで接着したらしい。おれも調子を合わせた。「あやまる必要はないですよ。不  
1996 ジョナサン・レセム(著)/ 浅倉 久志(訳) 銃、ときどき音楽 早川書房
- 9 19 でも一時間後に宮殿を辞した時は、宮殿の空気そのものの中にケイトの言葉が充満していたのを呼吸していたような気がして、その想像に間違いはないように思われた。しかし、気  
1997 ヘンリー・ジェームズ(著)/ 青木 次生(訳) 鳩の翼 講談社
- 9 20 も相当なものだなあ」と笑うと、蓮香はますます怒った。「あなたが死病にとりつかれたのを、ようやく治してさしあげたのですよ。焼き餅ぐらい焼いたっていいはずですよ」「あ  
1997 蒲 松齡(著)/ 立間 祥介(訳) 聊齋志異 岩波書店
- 9 21 ねておあげになるが、女用の袴の付属品はなかったのに、どうしたわけか腰紐が一本あったのを、結び添えて、むすびける…(ほかのお方と縁を結んでしまわれたあなたを、今となって  
1998 紫式部(著)/ 今井 源衛(訳)/ 秋山 虔(訳)/ 鈴木 日出男(訳)/ 阿部 秋生(訳) 源氏物語 小学館
- 9 22 やチームの犬、そして他の人間の安全を脅かすことのない他の手段では手に負えなくなったのを引き離すためにはやむを得ないものとする。この例外は、トレイルの一部あるいは全部で  
1998 坂田 郁夫(著) 犬と遊ぶ 双葉社
- 9 23 呼び入れた按摩が宗悦の恨みごとを口にした。新左衛門が斬りつける。ワッと相手が倒れたのをよく見ると、奥方が血まみれになっていた。深見家は改易となり、遺子新吉は門番だっ  
1999 池内 紀(著) はなしの名人 角川書店
- 9 24 生も夢中になった。逸らしたボールを追って学生たちが苦沙弥先生の家の中に侵入してきたのを叱りつけたものだから、苦沙弥先生、学生たちから復讐のダムダム弾攻撃を挑まれたのだ  
1999 池内 了(著) 天文学者の虫眼鏡 文芸春秋
- 9 25 加減の話を持って来たと思われなくなかったからである。葛籠詰め死体の川洲に上がったのを、町役人もいて、大川に押し流した。これが、佃の寄場に担ぎ込まれた上に、秘  
2000 大佛 次郎(著) 雁のたより 小学館

- 9 26 なって田沢口で内分に川越しをさせた」とあり、乳呑子四人を含む近くの村人が困っていたのを助けるために特別な計らいをしているが、後に問題になった様子はない。それが同情に値  
2001 松村 博(著) 大井川に橋がなかった理由 創元社
- 9 27 か用意できず、それさえもなかなかおおごとだった。これまで二人の女中が寝起きしていたのを、よそに移さなくてはならなくなった。とはいえ女中たちを出した以外、何をしたという  
2001 フランツ・カフカ(著)/ 池内 紀(訳) 城 白水社
- 9 28 ここのところでいいからちょうだい」私の買い物袋からセロリの葉っぱがはみ出していたのを指して話しかけていることはわかったのですが、何を言ってるのか一瞬理解に苦しみました  
2002 脇 雅世(著) フランス仕込みの節約生活術 128 集英社
- 9 29 だいた。今日は朝からなにも食べていないのを思いだした。「うまいな」二切れあったのをまたたく間に胃の腑におさめた。「美音は食べぬのか」「私は先ほどいただきました  
2002 鈴木 英治(著) 闇の剣 角川春樹事務所
- 9 30 きっとその場の思いつきでやったことなんだろう。人なつっこいシンちゃんが近寄ってきたのを捕まえて、目出し帽を頭から被せた。そうしてしまえば当然シンちゃんの動きは鈍くなる  
2002 綾辻 行人(著) どんどん橋、落ちた 講談社
- 9 31 単純なものであったが、専門的なテストが行われて、そのデータが一枚の紙に書き出されたのを、あとからみせて頂いた。知能指数は百四十いくつとかで、まあ心配はないといわれ  
2002 平岩 弓枝(著) 極楽とんぼの飛んだ道 講談社
- 9 32 に野々村さんにそれを洩らしたのでしょうか。実際に小筒さんの車に一千万円が積んであったのを盗んだのか、それとも別の場所で盗んだのかは分かりませんが、とにかくそれを徳永さん  
2002 矢島 誠(著) 倉敷・白壁小路殺人事件 コスミック出版;コスミックインターナショナル(発売)
- 9 33 を歩いていて、とてもきれいで儂いものが道端に落ち、無神経な人間に踏まれそうになったのを、そっと拾いあげて守ったような、そんな気分が残っていた。しばらくのあいだ、それを  
2003 宮部 みゆき(著) 誰か 実業之日本社
- 9 34 立てガラシャ夫人の侍女を削いだという話や、嫉妬深くて夫人のところに庭番が入ってきたのを斬り捨ててしまったという挿話がありますが、忠興はこういうことはしていないはずで、  
2003 井上 力(著) もう一つの大河 講談社出版サービスセンター
- 9 35 り、ことに暁方であったから武装も十分でなく、たまたまに三郎居城の府中へと逃げられたのを追撃し、景勝勢の中の荻田主馬が、北条丹後をよく見知っていて追いついて二鍵つく。丹  
2003 春日 惣二郎(著)/ 腰原 哲朗(訳) 残照 ニュートンプレス
- 9 36 炉理坂高校の制服を着た少女が一路の肩に手をやり微笑んでいる。まるで一路がただ転んだのを助け起こそうとでもしているみたいなのにこと、微笑んで。日常のよくある一コマのよ  
2003 うえお 久光(著) 悪魔のミカタ メディアワークス;角川書店(発売)
- 9 37 まずいた。おかずがとん汁の時、自分の器に入ったぶた肉に、紫色のハンコが押されていたのを見てしまったのだ。担任の女性の先生から「おみおつけが食べられないの？」ときつい調  
2004 東野 由美子(著) 小一教育技術 小学館
- 9 38 。柔らかい岩だから鑿で削れる。隙間は海へ通じていて、潮の満ち干で水が出入りしていたのを、岩で栓をして塞いだ。潮が流れこまないようにな」「岩の厚さだとこんな広いところ  
2004 時海 結以(著) 業多姫 富士見書房
- 9 39 つけたんでやすか」「うん、十日程前に、ここの船頭が地回りの者たちにいたがられていたのを助けたことから知り合いになった。弥太公こそ、よくここが分かったな」「黒柳の与次郎  
2004 高橋 三千綱(著) お江戸は爽快 双葉社
- 9 40 いう記憶がある。ともかくあのとき「三島由紀夫緊急増刊号」みたいなのがいっぱい出たのを片っ端から買ってさ、いろんな人の書いているのを読み直してみたりしたんだけど、説  
2005 朝山 実(著)/ 浅田 次郎(著) 待つ女 朝日新聞社

- 9 41 不安な空気が漂います。その後、図面に記されていない既製のドアや家具が付いてしまったのを見て、江島さんはがっかりして、Aさんに報告しましたが、「Dさんがそれでいいって言  
2005 笠原 顯司(著)「住みか」のヒント 東京図書出版会;リフレ出版(発売)
- 9 42 以前知恵袋で、財布のチャック(ファスナー)が壊れたのを靴修理屋に持って行き、直してくれた、という回答がありました。どこの靴修理屋でも財  
2005 Yahoo!知恵袋 Yahoo!
- 9 43 らさかのぼっていった。白沢から峰を一つ越えたところに、一匹の大きなやつが棲んでいたのを夏のうちにはたずねておいたのだ。小十郎は谷に入ってくる小さな支流を五つ越えて、な  
2006 国語総合 教育出版株式会社
- 9 44 【評価Cの下】某書評家が誉めていたのだけれど、アマゾンから実物が届いたのを見て、テンションダウン。だって著者名より訳者名の方が大きい背表紙と表紙!だけ  
2008 Yahoo!ブログ Yahoo!
- 9 45 菜炒めに... パプリカとセロリのサラダは赤と黄色のパプリカがハンパ状態で残っていたのを使ったモロヘイヤとしめじの和え物はモロヘイヤは頂いたがイマイチ使いこなせないの  
2008 Yahoo!ブログ Yahoo!
- 9 46 の写真を見てください。中身が何か分かりますか?以前、記事にしたものが数日前に届いたのを本日開封しました。あまりにも大きな箱に、期待はしなかったものの違和感を感じずには  
2008 Yahoo!ブログ Yahoo!
- 9 47 アライグマ。丁度、今朝捨てる予定の「燃えるゴミ」がガレージのシャッター付近にあったのを見つけたのか、お写真のような感じでこちらに歩いてきます。ゴミを散乱されたら大変!  
2008 Yahoo!ブログ Yahoo!
- 9 48 なかったガーデンラックをおろしてきて、この背に絡ませようと.....地植えて花が咲いたのを切ったのが4月24日でした。こちらの記事↓<http://blogs.yahoo>  
2008 Yahoo!ブログ Yahoo!
- 9 49 お値段。。少し考えちゃうなあ。と思ってたところへ、ネスレのメルマガが送られてきたのを見てたら、簡単1分ヨガの文字が!!!ちょうどいいやーと思って、早速やってみた。暇  
2008 Yahoo!ブログ Yahoo!
- 9 50 拾ひ鐘にためぬあぢきなき日に一人かぞへつ 去年の藤の実が棚下の砂利の間に芽をふいたのを労わりながら小雨の降る日に抜いて移し植えるというのであります。これなども全く実生  
2008 Yahoo!ブログ Yahoo!
- 9 51 たが、マダイでは自己最高という。上野さんは「先日大きいマダイが紀伊民報に載っていたのを見て、いい勝負だと思った。こんなマダイに巡り合えるとは」と喜んだ。ホント、メダタ  
2008 Yahoo!ブログ Yahoo!
- 9 52 その木の下に、モミジのこぼれ種から芽吹いた、3, 4cmのモヤシより細い芽が出ていたのをそっと抜いて持ち帰ってきたものだ。今年の春小指より小さかったものが、鉢植えて今は  
2008 Yahoo!ブログ Yahoo!
- 9 53 や先生に「凄い綺麗だねー いい香りだし」って言われる度に母は「これ うちで咲いたのを持って来てもらったのよ!」と自慢げに話していたその1週間後、そのカサブランカの花  
2008 Yahoo!ブログ Yahoo!
- 9 54 眉上げて苦笑いしていた事とか?どの曲だったかひらひら♡型の紙が降って花道に落ちてたのを思わず目が合った様子の慶ちゃんに頂戴♡頂戴♡したら手渡ししてくれた事とか?そんな  
2008 Yahoo!ブログ Yahoo!
- 9 55 になるとのこと。確かに油はちょっとしくじったなあ。牛テールからたっぷり脂が出ていたのを除去する必要があります。使用材料など◆スーブ国産牛ゲンコツ、国産牛テール、国  
2008 Yahoo!ブログ Yahoo!
- 9 56 出口には、番人のたき火にあたりながら性悪の馴染み客がどこか余所の女郎のところで遊んだのを見つけてつかまえようと、姉女郎の言いつけで見張り役の新造や禿が寒そうにしている。  
1994 中野 三敏(著) 内なる江戸 中野三敏|著 弓立社

- 10 1 の夜は夜営した。その夜半、オランカイ人三千ばかりが、太鼓を打ち、半弓を射かけてきたのを、鉄砲で撃退した。そのまま追撃し、早天にはオランカイの都を見くだす山上にまで到着  
1987 司馬 遼太郎(著) 韃靼疾風録 中央公論社
- 10 2 いまお話し申します」景晋の気は動いている。宗俊は一息入れた。小姓が茶を捧げてきたのを、グツと飲み干した。口中に爽やかな香りが広がった。「わたくしの知友が、長崎で女  
1992 多岐川 恭(著) 練堀小路の悪党ども 新潮社
- 10 3 早春、庭先の残雪のすぐそばに、生き活きとした水仙の新芽が固い土を押し上げて出てきたのを見つけて、幼な心にも生命の息吹きや自然の神秘に感激した。小学校に入ってから、先生  
1998 小野寺 時夫(著) 治る医療、殺される医療 読売新聞社
- 10 4 なかったろうか。深紅の、まだ瑞々しい、大きな押花を、岡村さんが薄紙に包んで下さったのを、胸の内ポケットに納め、私は家へ帰って、寝間に置いてある亡妻の骨壺の上に、それを  
1999 上田 閑照(著)/ 岡村 美穂子(著) 大拙の風景 燈影舎
- 10 5 る男だが、彼の個展にピカソが来て、サイン代わりに三、四本の線でラク書きをして行ったのを、まるで宝物のようにしまい込み、複写までして来る人ごとに見せている。ピカソといか  
2000 岡本 太郎(著) 青春ピカソ 新潮社
- 10 6 も、早晚郷居する事に極めて五十円貰った。それと父が家禄平均の際に別の下賜金を貰ったのを合わせて、久米郡の梅本村へ少しばかりの土地を買って家屋を建築した。けれどもそれに  
2002 内藤 鳴雪(著) 鳴雪自叙伝 岩波書店
- 10 7 シアに聞こえるように大きな声で言った。「楽しみじゃない？」カルが手を伸ばしてきたのを、一歩横によけたとき、アナスタシアが部屋に戻ってきた。「もちろん。おもしろそう  
2003 スーザン・マレリー(著)/ 高木 明日香(訳) 愛を忘れた大富豪 ハーレクイン
- 10 8 れもめっぽう足の早い捷疾鬼と名乗る悪鬼が、仏舍利（お釈迦さまの遺骨）を盗んで逃げたのを、追いかけて取りもどしたという伝説の持ちぬし…。いま生きていたら、オリンピック出  
2004 杉本 苑子(著) オール讀物 文藝春秋
- 10 9 保育園の先生！！事務的に子供に接する先生ってどうなの？なぜ？子供がお花を摘んできたのを「置くところないからお母さんに持ってってもらって」はあ？と思いました。子供は先生  
2005 Yahoo!知恵袋 Yahoo!
- 10 10 妹が沖縄のお土産もらったのをお裾分けしてもらいました。いかにもアメリカっぽい豪快なクッキーです。ヘーゼルナッツ  
2008 Yahoo!ブログ Yahoo!
- 10 11 このオ、調子にのるな！これは、ユキが一生懸命…。」と、クマがゲンコツをふりあげたのをよけながら、容子は、「で？で？判定は？もちろん、パッチリOKよね！」と、  
1990 くらしき 里央(著) 恋とお菓子はキケンがいっぱい ポプラ社
- 11 1 日本猫。 二三子伯母さんの二女素子ちゃんが、うちの近くの大黒湯の前で死にかけていたのを、拾ってきた。足が不自由で、大きさはハムスターくらいしかない、ほんとに小さな猫だ  
1995 樋口 修吉(著) 花川戸へ 中央公論社
- 12 1 御鳥見方に引きたてられて、尋問されたが、次郎左衛門は利根川の川口で網にかかっていたのをひろってしめころしたとも、新川でゆきずりの旅行者から買いとったとも色々申したて  
1995 樋口 秀雄(著) 江戸の犯科帳 新人物往来社
- 13 1 普通、自殺者なら顔の正面に銃口を向けません。銃弾は被害者の頭部に留まっていたのを病院で取り出し、鑑識課で検査をした結果、現場に残されていたマイクロモデルAから発砲  
1988 = (泡) 坂 妻夫(著) 花火と銃声 講談社
- 13 2 たもので、こういう悪いことをしては江戸中で誰も雇わない。しぜん無頼の群に入っていたのを、相楽総三が、薩摩屋敷へ訪ねてこい、といって小遣いをやって誘った。そんなことで  
1991 早乙女 貢(著) 幕末愚連隊 文芸春秋
- 13 3 「もともとは、長綱先生とこちらの聖さんのお祖父さんのお住まいでして、人手に渡ってたのを、三年まえ長綱先生が買いもどされたんです。もう三十年まえからここに建っていますか  
1995 津原 泰水(著) ようこそ雪の館へ 講談社

- 13 4 ルシャ猫、血統書付き。浅草松屋のペットショップで、大きくなりすぎて売れ残っていたのを、うちで引き取った。本当におとなしい猫で、愛想もそんなによくなかった。クロが  
1995 樋口 修吉(著) 花川戸へ 中央公論社
- 13 5 た。四課、杉山の方へ廻し、アンプルに入れたり、包装したりして完成、兵器として来たのを、四課北沢隆次が保管した。私は滝脇に会っている。私は足腰が悪いため、ほとんど外  
1996 佐伯 省(著) 疑惑 講談社出版サービスセンター(製作)
- 13 6 由里ちゃんがひっくり返って、ピキニの上が取れちゃって」「そうそう。流れちゃったのを、どっかのおじさんが拾ってくれてさ」「由里ちゃん、泣いちゃって可愛かった」  
1997 山本 文緒(著) シュガーレス・ラヴ 集英社
- 13 7 ホテルRの板前になりました。そこで、事件を起こして、やめましてね。ぶらぶらしていたのを、東海苑の女将が見つめて、呼んだのです」「それが、三年前ですね?」「そうです  
2000 西村 京太郎(著) 桜の下殺人事件 双葉社
- 13 8 慈真庵の前身は七世祖が建てて天官、地官、水官を祀った三官殿であった。荒れ果てていたのを九世祖が万暦一〇(一五八二)年に修復し、さらに一〇世祖の維藩は隠居後にそれを四合  
2001 横山 廣子(著) 流動する民族 平凡社
- 13 9 が『万葉集』に残されている。額田王は、中大兄の嫡であった。元来弟王子の嫡であったのを、中大兄が奪ったとされているが、実際はそう見せ掛けて、額田王の方から近づいたのか  
2002 黒須 紀一郎(著) 役小角 作品社
- 13 10 は山王日枝神社として元来は桓武天皇にかかわる関東平氏の守り神であり、川越在にあったのを太田道灌が江戸城梅林坂に勧請、以後徳川家康もこれを尊崇した。江戸城拡張に伴って社  
2002 林 順信(著) 東京都電幕情 JTB
- 13 11 叡山の荒法師もたじたじとするくらいの偉丈夫である。事実、円蓮は高野山の僧兵だったのを文観が拾い、河内の天野山金剛寺に預けていた。彼は、益性とは反対に氏も素性も定か  
2002 黒須 紀一郎(著) 現世浄土 作品社
- 13 12 なのは維摩会であるが、その創始は伝説的で、鎌足の時代のことと伝え、しばらく中絶したのを不比等が再興したという(『続日本紀』天平宝字元年閏八月壬戌条)。だが、儀礼として  
2003 吉田 一彦(著) 文化史の構想 吉川弘文館
- 13 13 線名取駅下車 平安中期の歌人、藤原実方の墓。道祖神社の前を通りかかった時に落命したのを村人が葬ったといわれている。藤中将実方の墓道祖神社●名取駅下車 日本武尊の勧請に  
2004 実著者不明 奥の細道 学習研究社
- 13 14 の榊形門と石垣部分が見えている。浜御殿は汐留川の河口に位置し、將軍の獵場であったのを、家光の子、綱重が拝領して別荘としたものである。綱重の子、家宣が六代將軍となった  
2004 平井 聖(著) 泥絵で見る大名屋敷 学習研究社
- 13 15 京極デパートの元外商部員だった。十年前、贋作を顧客に売りつけてデパートを誠になったのを、熊谷が拾い、画商として独立させたもので、いわば子飼いの美術ブローカー的な存在だ  
2004 黒川 博行(著) 絵が殺した 東京創元社
- 13 16 毫け隠居がおっ死んで、困われてた女アさささと別な男とくっついてさ、空き家になったのを妻が安く買ったのさ」「安くたって一軒家だよ。大枚叩いた訳だろさ。旦那と一緒に  
2005 京極 夏彦(著) 覗き小平次 中央公論新社
- 14 1 衛家と深い関係にあり、勤王僧と呼ばれたひとで、逮捕の危険を逃れて薩摩まで落ちのびたのを、西郷は助けようとしてあちこちに嘆願したが、藩の態度はひどく冷たかったという。  
1984 宮尾 登美子(著) 天璋院篤姫 講談社
- 15 1 して紅葉山に祀ってあった神君の木像を、官軍進駐にあたって深く江戸城内の土中に埋めたのを再び掘り起し、この千駄ヶ谷の庭の一隅に安置したが、これは明治も五年以降のこと  
1984 宮尾 登美子(著) 天璋院篤姫 講談社
- 15 2 申しあげましたが、英艦が、鹿児島島の商船三隻、鹿児島湾の奥の方に避けさせてありましたのを探し出し、それを引出しまして、質にとったところが、談判が不調になったというので戦



- 16 1 は私の肩にしるしをつけ、その部分の私の血を吸いとって、その血を自分の手に吹きかけたのを、私の頭にふりかけながら、『われ、わが名において、なんじ、ジャネットを洗礼す』と  
1993 久野 昭(著) オカルティズムへの招待 文芸春秋
- 16 2 が氾濫した。金之助は洪水が起ると、大変だと言って小さな柳行李に自分の本を数冊入れたのを持って、県庁のある小高い坂の上にさっさと一人で避難した。片岡家ではそれを知らず、  
1995 伊藤 整(著) 日本文壇史 講談社
- 16 3 たはあまりの長いお見限りの言い訳も恥ずかしく思われたのか、櫛を折って手にされていたのを御簾の中にさし入れて、「この櫛の常盤木の葉のように変わらぬわたくしの心に導かれ  
1999 瀬戸内 寂聴(著) 女人源氏物語 小学館
- 16 4 で毎年奉納なさっている。画家の中島千波さんはナスを左向きに二つ、右向きに二つ置いたのを縦一列にして描いている。このナスのシンプルな構図は新鮮で、ぼんぼりを引きたてさせ  
2002 木村 しづ子(著) 柿の木の下で 日本随筆家協会
- 16 5 「宇宙って、ヘンなものですねぇ」「どうして…？」如来様は煙草の灰を畳に落としたのを、細い指でつまんで灰皿に入れながら、微笑して言った。「宇宙の中に、太陽だの、地  
2005 三橋 一夫(著) 鬼の末裔 出版芸術社
- 17 1 た。『瀟湘臥遊図巻』という、東京国立博物館にある南宋の絵画についてレポートを書いたのを先生が読んで気に入ってくださったらしい。そして、その宋画の展覧会で、中国絵画の  
2001 小川 裕充(著) 本の窓 小学館
- 17 2 の真相が又奇々怪々のものであった。従来予防接種に際し接種液を注射筒に吸入準備したのを、実施者が機械的に接種するという事は稀ではあろうが否定できない事実であった。埼  
2003 田井中 克人(著) 69人目の犠牲者 ウインかもがわ;かもがわ出版(発売)
- 18 1 は、揺すった。が、亀次郎は、ぐったりとなっている。クロロフォルムの小瓶をとりだしたのを、唐沢は投げだすように置いて、「要らねえよ、死んだ」「いい最期だったぜ、こい  
1991 早乙女 貢(著) 幕末愚連隊 文芸春秋
- 18 2 よって、みきに代って、親神のおもわくを伝え、天理教という宗教団体の改革をはかられたのを、真柱は教団の邪魔者として排撃したのだった。それを、僕はあの時気がつかなかった  
2004 芹沢 光治良(著) 神の微笑 新潮社
- 21 1 ある。珠光名物で、濃い鉛色のふっくらした茶壺。同じ博多商人の神谷が一千貫文で買ったのを、島井が二千貫文で譲り受け、大事にしている。北九州の大大名である大友宗麟が、六千  
1978 城山 三郎(著) 黄金の日日 新潮社
- 21 2 幌の弁護士たちは「トロツキスト」のレッテルを貼りつけるだけで弁護せず、見捨てていたのを彼がひきうけたため、仕事はまわってこなくなってしまった。七〇年、瀬戸内海で発生  
1986 鎌田 慧(著) この国の奥深く 日本評論社
- 21 3 子の動きに関する情報は正確だった。「リーは、もとはと言えば福原総領事が使っていたのを俺がそのまま引き継いだんだ。福原総領事は俺が生きているのを見て、喜んでくれた。当  
2000 帯木 蓬生(著) 逃亡 新潮社
- 21 4 父母の写真のコピーを送ってくれたが、このもとになる写真は、父がどこかにしまっていたのを、父が死んだあと、伊藤八郎が見つけたのだろうか。(田中のうちの祖父母の写真はない  
2001 田中 小実昌(著) アメン父 講談社
- 21 5 問もしなかった。「ボクの前稿のメ切が間に合わなくなって、ボクが乱暴に書きとばしたのを、太宰が順に清書してくれたことがある。太宰は清書しながら、ある所にくると、『ああ  
2002 司馬 遼太郎(著) 酒のかたみに たる出版
- 21 6 、Government Menの略(つまり政府の人=役人)で、ギャングが使っていたのを新聞が取り上げてから定着したものです。  
2005 Yahoo!知恵袋 Yahoo!
- 22 1 の上に空をのせ鳥の中にあつた時間のぶんだけ娘は地球を翔んだぼくが枯れ葉の下にうめたのを娘は掘りおこしこの小さな空の亡命者のために墓をつくったどんな樹の中にも空があつた

- 23 1 へ退った。榎津の実家は、海岸通りの公園に面したところで、以前は会社の独身寮だったのを買取って貸間業なのである。共に明治三十一年生まれで六十四歳の両親、三十六歳の妻、  
1975 佐木 隆三(著) 復讐するは我にあり 講談社
- 23 2 ように僕の心をあたためてくれた。「あなたギター練習してるの」「納屋に転がってたのを借りてきて少し弾いてるだけです」「じゃ、あとで無料レッスンしてあげるわね」とレ  
1987 村上 春樹(著) ノルウェイの森 講談社
- 23 3 や、中本さんたちの同人雑誌ですよ。『燕京文学』ですよ。北京図書館の中に埋もれていたのを見つけました」「北京図書館？国立北京図書館の前身は、魯迅が開館に尽力した京  
1995 中 = (蘭) = (英) 助(著) 北京の貝殻 筑摩書房
- 23 4 に入れれば、鼠は休みなく二昼夜もそのあたりを這いまわり続ける。ひとしきり動き廻ったのを冷凍庫に入れて休ませれば、さらに活動の持続期間は永くなるわけだ…そのうちケース  
1996 大江 健三郎(著) 大江健三郎小説 新潮社
- 23 5 鉄太郎へ文句をいっていたのは、やっぱりこの時分である。「折角新御番の祝儀に参ったのを、門前払いとはどうした訳だよ、あの御隠居は何かわたしに含むところでもあるのか」  
1996 子母澤 寛(著) 逃げ水 中央公論社
- 23 6 さて、どうしてわたしの自転車に乗っていったのか、話してもらおうか」「捨てられてたのを直して乗ってたんですけど」「大学生協のまえから乗っていったんだらう」「ちが  
1998 廣瀬 誠(著)/ 鷲田 小彌太(著) 論争を快適にする 30 の法則 PHP 研究所
- 23 7 た。—やばいかな？—瞬思い、安全策をとって、「ミネラル」といった。出て来たのを一口のむと、ウイズ・ガス、つまり味の無いソーダ水だった。ウイズアウト・ガスのただ  
1998 奥田 継夫(著) 食べて歩いてやっとな旅人らしく 三一書房
- 23 8 藤君が寝ている、然し私は暫らくの間口もきけなかった。身体は汗に湿れてぐったりしたのを、すっかり拭いてナイトシャツに着かえさせてくれた。繃帯を解くと、借り物みたいな腕  
1998 辻村 伊助(著) スウィス日記 平凡社
- 23 9 屋に十円で入質し附属地入船町四丁目鮮人博化宝方に行きて、平然賭博に夢中になって居たのを逮捕されたのである。此の間実には僅々四、五時間であるが、其の大胆と猛悪と凶暴には、  
1999 古野 直也(著) 張家三代の興亡 芙蓉書房出版
- 23 10 る玄丹の眼が異様に光った。「これを玄丹殿にはご存じですか。生首に喰らいついていたのを取って来たのです」破魔之介は、その異態のものを、あの“清月亭”に運んだ男の生首  
2000 黒木 忍(著) 怪奇・伝奇時代小説選集 春陽堂書店
- 23 11 ザがおいしそうだったので、私の注文でそれを加えてもらったが、鉄鍋のまま運ばれてきたのをフウフウ吹きながら食べるおいしさは格別だった。中のひとつを噛み切ろうとしたら、  
2001 吉沢 久子(著) 私の気ままな老いじたく 主婦の友社;角川書店(発売)
- 23 12 かった。先生が一同から、ありたけのずずだまを取り上げ、教師机の上にならなくなったのをかき集めて立ち去ると、そろりそろりと頭を持ち上げた生徒たち、顔を見合わせ、それぞ  
2001 齋藤 史(著) 齋藤史歌文集 講談社
- 23 13 堂竜二郎が京都に住んでいた頃、その家の庭にあったものだ。祇園の一角にまだ残っていたのを見つけて、みーこのたつての願いで、京都から山梨の自宅へ移植したのである。「ほん  
2002 ゆうき りん(著) オーパーツ・ラブ SP 集英社
- 23 14 とっていました。竿出してカブセ(撒き餌)をやってね。火を焚いてカブセで集まってきたのを網に誘導してね。養合羽着て一日中雨に濡れる日もあった。そんな漁でしたよ。そのあ  
2002 川口 祐二(著) 苦あり楽あり海辺の暮らし 北斗出版
- 23 15 石油といっても当時は照明用石油ランプの灯油が主力で、タンク車で鉄道輸送されて来たのをタンクに移し貯蔵、小売業者に卸したのであろう。さらに西側農地に競馬場が開設され  
2002 高山 禮蔵(著) 関西電車のある風景今昔 JTB

- 23 16 一つは、自然の地色にこまかな文様のもの。どちらもホテルの通路に無造作におかれていたのを買った。コンサートのにぎやかな石は、花のない日、玄関の韓国民具の台にのせたりして  
2002 澤地 久枝(著) 愛しい旅がたみ 日本放送出版協会
- 23 17 ろう。滝の前から山道をたどると、松林のなかに子安の塔がある。昔は仁王門の下にあったのを明治の末にこの地へ移建した。塔を何故この場所へ移したのかその理由は—と考えて、ハ  
2003 鈴木 曾雄(著) 京都ともある記 文芸社
- 23 18 」の鍵だ。「これは何の部屋?」「彼の仕事場よ。お手伝いさんの休憩所になっていたのを改装したのよ」「お手伝いさんがいたの?」  
2003 蓮見 圭一(著) ラジオ・エチオピア 文藝春秋
- 23 19 「火葬場の時はどういう風にして食べたの」宮崎「皆が骨を拾っている時、落っこちたのをポケットに入れて、持って帰って食べた」鑑定人「その後はお墓の中の骨を食べたわけ  
2003 一橋 文哉(著) 宮崎勤事件 新潮社
- 23 20 がないと思えるように、料理の腕を大いにふるえるように、と奮発した筈が、出来上がったのを見たら余りに立派でピカピカで、これは私ごときの使わせて頂ける御台所ではない、とす  
2003 半藤 未利子(著) 夏目家の糠みそ PHP 研究所
- 23 21 講ノートの余白に書きつけたペン字のAB対談形式の時局批評で、丸山の死後にみつかったのを夫人の了解を得て初めて公にするものだそうである。題して「現状維持と現状打破」  
2004 早野 透(著)/ 朝日新聞社(著) 朝日新聞 朝日新聞社
- 23 22 、まだ大物のコースまでは望まないようなので、さしあたりはおソバにして、ざるにのったのをすすりこんだ。食堂自体、「長寿館」というらしいが、赤子をつれた母親や、ひげづらの  
2004 池内 紀(著) ニッポン発見記 講談社
- 23 23 ある地蔵は、昔十王堂に納められていたもので、慶応三年(一八六七)の大洪水で流されたのを昭和一六年に発見し改めて建てたものだそうです。さて十王橋を渡り左の道に入るとそこ  
2004 塩澤 裕(著)/ 萩原 敏之(著) 中山道風の旅 さきたま出版会
- 23 24 の五重の殿閣である。高さは六七・三mで、日本の法隆寺五重塔の二倍もある。少し傾いたのを修復しており、途中まで登って参観することができた。この塔には副階が付いているが  
2004 川端 俊一郎(著) 法隆寺のものさし ミネルヴァ書房
- 23 25 では、樹脂を見たのは13日の夕方で、テーブルの上の本の下に半分くらい裸のままあったのを見たと言っているが、どうなんだ」A「その点については、分かりません」妻の供述  
2004 小林 潔(著) ガサ! 徳間書店
- 23 26 この鞆は最初の自供(六月二十一日)では、自転車の荷台にゴム紐でくくりつけられていたのを、「自転車からおろして鞆ごと山の中へおっぽうっちゃったんだ」というものだった。  
2004 鎌田 慧(著) 狭山事件 草思社
- 23 27 人のところへ届けてきたのだ。なんでも子熊の頃に、猟師の仕掛けた猪用の罠に掛っていたのを助けてから仲良くなったといっておった」熊が帰ったあとで男は鯉雑炊を作ってくれた  
2004 高橋 三千綱(著) 暗闇一心斎 文藝春秋
- 23 28 ってェと、変なことが知れた。ヤマトが、お嬢さんの世話やいてるってな。一酔っぱらったのを、家まで送り届けたり、一度なんざ、わざわざ鎌倉まで行って喫茶店でデートよォ」  
2005 矢作 俊彦(著) リンゴ・キッドの休日 角川書店
- 23 29 がいれば、ぜひ乗ってみたいわ」それならうってつけの馬がいる。ロンドンから到着したのを一目見て、小柄なレリアにぴったりだと思った優美な黒い牝馬。本来は乗馬好きな母のた  
2005 バトリシア・F・ローエル(著)/ 古沢 絵里(訳) 愛と復讐の館 ハーレクイン
- 23 30 飼っていたボタンインコが落鳥してしまいました。この夏に卵詰まりだったのを手術し、快復したのですがやはり無理をしていたのでしょうか…今朝は元気に餌をついば  
2005 Yahoo!知恵袋 Yahoo!
- 23 31 ます。セメントのアク抜き剤ってのがちゃんとあります。下のリンク先は検索して出てきたのを適当に貼りましたが、左官用品を扱っている建材屋で取り寄せしてくれます。ひよっとし  
2005 Yahoo!知恵袋 Yahoo!

- 23 32 目ほど前から 3歳くらいの雄のシーズーを飼い始めました。捨てられていて保護されていたのをひきとったのですが、威嚇が激しいのです。普段は家族の留守中はゲージに入れており、  
2005 Yahoo!知恵袋 Yahoo!
- 23 33 込んでます。すると、イザという時とても助かります。先日は、ぎゅうぎゅうになっていたのを開いてみたら、5,000円くらい入ってました。バスなど小銭がいる日だったので、  
2005 Yahoo!知恵袋 Yahoo!
- 23 34 ある牛にこみと肉とうふを注文・・・「おいよ！」という声と共にあつという間に出て来たのをパクリ。ウマー。うん、相変わらずの美味しさ（以前より肉が硬い気もするけど）ですね  
2008 Yahoo!ブログ Yahoo!
- 23 35 ったら、もう（笑先日迎え入れた老犬がくん今朝の朝ごはんあげたときに、捨てられてたのを確保してから初めて尻尾を振ってくれてましてん・・・やっぱ、うれしいっすね  
日記にコメ  
2008 Yahoo!ブログ Yahoo!
- 23 36 すよね？今日のは花屋さんで片隅に寄せられてなく、普通に咲かせてもらっていたのをシューしました。サイズ、径10～11cm位、丈1m位でした。皆さん  
2008 Yahoo!ブログ Yahoo!
- 23 37 て、屋に注文したら凄い勢いで、売切れでした、必死で探して大手書店の支店で一冊残ったのを発注しました出版社に聞いたらやはり専門書扱いです。というより建築の「文芸書」とし  
2008 Yahoo!ブログ Yahoo!
- 23 38 ってるのも色もいいですよ？この紫陽花、今朝モコちゃん散歩中に咲いていたのをシューしたものです。サイズ、径10～11cm位、丈1m位でした。皆さん、  
2008 Yahoo!ブログ Yahoo!
- 23 39 、ひとつひとつ苗を手で植えたものである。ある日、蛭に初めて喰われた。蛭に喰いついたのを取り払おうとするとゴムのように伸びる。そして、喰われたところから一筋の血が流れる  
2008 広報あしかがみ 栃木県足利市
- 23 40 か、私も写したやん？」と思い、探し出してきました。ありました。すぐ近所に咲いていたのを5月22日に撮影してすっかり忘れていた在庫です。  
2008 Yahoo!ブログ Yahoo!
- 23 41 の台所収納包丁刺し（包丁はさせないのを直してもらった）トイレのタオルかけ（はずれたのを、直してもらった）郵便受け。。（割れたまま）お風呂の隙間！（あきっぱなし）言っ  
2008 Yahoo!ブログ Yahoo!
- 23 42 やっぱ発芽には温度が大切よね～と毎日気にかけてながら水をやっていたので今日、発芽したのをみつけたときはとってもうれしかったです(\*^\_\_^\*)そうそう、ナス  
2008 Yahoo!ブログ Yahoo!
- 23 43 10年ぶりくらいで煌林へ行きました。私が注文したのは五目焼きそばでした。・・・来たのを見てびっくり麺が少ないのですTT私が普段行く所は大目のところが多いのですが、ここ  
2008 Yahoo!ブログ Yahoo!
- 23 44 クのアイシャドウだ。もうバックナンバーになってしまっていたが、倉庫の奥に入っていたのを引っ張り出してもらった。キレイな色・・・私の敏感肌は完全に治っていた。ピンクの  
2008 Yahoo!ブログ Yahoo!
- 23 45 だめになるのだと思う。1部の時に、バチを投げたのか、落としたのかして、足元にあったのを、足蹴にしました。でも、その後新しい機もおとして、しまっ・・・。足蹴にした1  
2008 Yahoo!ブログ Yahoo!
- 24 1 へ食いにいけばいいんだ」「こんなにおそく」（祇園あたりへ）といいかけようとしたのをのみこみ、「ホテルにでも行けば、深夜レストランがやっている」もう少し大きければ  
1976 城山 三郎(著) 毎日が日曜日 新潮社
- 24 2 と思っても、それらしいものもないので」と、おっしゃって、ご自分の長いお髪を髪にしたのを趣のある箱に入れ、昔の薫衣香を一壺添えておあげになった。叔母君が、「侍従の君は  
1985 紫式部(著)/ 円地 文子(訳) 円地文子の源氏物語 集英社
- 24 3 長さんは話す。『ええ、この町には、料理屋やバーなどがおおく、残飯や料理をすてたのを、毎朝、ビニールのふくろに入れて歩道のすみにおきます。その生ごみを一日おきに都の  
1988 久保 喬(著) お父さんは鳥のように 童心社

- 24 4 と、これは、条約面に従い差支えない道を通行したのに、英人を殺害しようと企て襲撃したのをとめず、捨置いたためである。第二、この罪科のため、日本国その罰を受けるとして、  
1989 子母澤 寛(著) 幕末奇談 文芸春秋
- 24 5 ) 此の技は立つて居る者に応用することも出来る。2対手の右手を一旦左に逆にして倒したのを図の如く左足膝外側部に当てゝ更に右へ逆にとる。(そうすると相手は自然に起き上らう  
1991 南 博(著) 近代庶民生活誌 三一書房
- 24 6 制し方は第三技の変化技の何れを応用してもよい。4対手の右手を一旦左に逆にして倒したのを図の如く左膝外側部に当て更に右へ逆にとる。(そうすると相手は自然に起き上らうとす  
1991 南 博(著) 近代庶民生活誌 三一書房
- 24 7 ジャムをつけたりジャガイモをふかしたり、宮内府にあったチーズを少しずつ分けて頂いたのを頂いて居りました。寝るといっても着のみ着のままいつでも何所にでも出られるよう申  
1995 愛新覚羅 浩(著) 「女の生き方」四〇選 文芸春秋
- 24 8 るのが習慣だった。いまはそれもできない。新刊書は著者や出版社からおくっていたのを手にして、あ、こんな本がでていたのだなとわかる。ときたま友人との会話のなかで、あ  
1995 梅棹 忠夫(著) 夜はまだあけぬか 講談社
- 24 9 だか。この世のものではないっていうけどな…」あれはちゃんと生きていたと言いかけたのを国王が制して黙らせた。「詳しく聞かせてもらおう。幸い、と言っではおかしいが、そ  
2003 茅田 砂胡(著) デルフィニア戦記 中央公論新社
- 24 10 トボールの長老のある日の夕食がつづつである。「酒は焼酎をコップになみなみとついだのを、チビリチビリとやりながら、ツマミはセイダのタマジだ。それに生味噌に生ネギをこま  
2004 池内 紀(著) ニッポン発見記 講談社
- 24 11 タを食べてもらおうと思うのですが茹でたパスタをタッパーに入れて冷蔵庫に入れておいたのをチンして食べて果たしておいしいだろうか・・・と思ったものですから。やっぱり茹でた  
2005 Yahoo!知恵袋 Yahoo!
- 24 12 クラーは私だけでしょう。ちなみに当時その日のライブ録音のテープを会場で売っていたのを買いました。。。(大自慢)  
2005 Yahoo!知恵袋 Yahoo!
- 24 13 (小松菜、人参、えのき、白菜、トマト) 鴨の燻製を母からもらっていたのを使いました。外のラベルに『このままでもおいしいですが、温めてい  
2008 Yahoo!ブログ Yahoo!
- 24 14 ボンカレーの一番辛いやつを買っておいたのを今日の夜に食べた。所詮ボンカレーだから、と思って食べたらかかり辛かった。ボンカレ  
2008 Yahoo!ブログ Yahoo!
- 25 1 「BSAは昔、わたしも乗ったことがあります。ハルビンで英国人の貿易商がもっておったのを借りましてね」「オートバイにお乗りになるんですか」ぼくはすっかりうれしくなっ  
1976 五木 寛之(著) 凍河 文芸春秋
- 25 2 品をきちんと詰め、「これで旅行用品は全部、整ったわ、書類と本はあなたが選り出したのを反対側に並べておきましたけど、最終的に自分で見て下さいね」と云った。「何から何  
1991 山崎 豊子(著) 大地の子 文芸春秋
- 25 3 いった雑煮、白あえ、煮しめなどが真っ先に思い浮かびます。雉は、親戚の人が山で獲ったのを毎年必ず届けてくれました。若水(元日の朝にその年、初めて汲む水。一年の邪気を取り  
2004 野崎 洋光(著) 名人板前日本料理の秘伝 講談社
- 25 4 問いに、スクリーン・ガラスの士官は平然とうなずく。「部下から俺の副官が多量に借りたのを又貸ししてもらって読んだ。すげー笑えるな」「…さすがです、大尉殿っ。なんて男前。  
2005 津守 時生(著) 三千世界の鴉を殺し 新書館
- 25 5 ユータは…」タルシャンが悪戯っぽくウインクする。「エシュロンが使おうとしていたのを盗んだ。奴らは民主主義の敵だ」「でもヘキサグラムの中央にこれを建てることにどん  
2005 池上 永一(著) ニュータイプ 角川書店
- 25 6 日の3時からの資産ドックセミナーは出版社がチラシつくってくれそうですが新人が作ったのを添付します。超人気の二次会も6時から六千円会費で好評です。以上分からない事や相談

- 25 7 ル投げたて、見事にGET☆ソロの龍寺くんが投げたやつね。なんか後ろの子が取り損ねたのを確保。ライブ終わったの10時半なんですけど・・・こんな長時間初めてーほんと忘年会  
2008 Yahoo!ブログ Yahoo!
- 26 1 る。清明は、顔を笑み崩した。「そうだろう。保憲さんが、どっかの寺から貰ってきたのを分けてくれてな。酒造の折に麦芽を混ぜ、普通の酒より甘くしているそうだ。なかなかい  
2002 渡瀬 草一郎(著) 陰陽ノ京 メディアワークス;角川書店(発売)
- 27 1 嬉しかったです。タオルはよく使いますが自分で買う事はあまり無いので。私は以前頂いたのを今でも大事にしています。  
2005 Yahoo!知恵袋 Yahoo!
- 28 1 落ちの金をつくるためだったと知らせ、逮捕後は凶器の千枚通しは店で氷割りに用いていたのを彼女が持って来たが一貫して供述している榎津だから、警察ではくりかえし追及されたし  
1975 佐木 隆三(著) 復讐するは我にあり 講談社
- 28 2 ったところであった。これも清水さんに上っていただきましょうといい、タッパーに入れたのを私が持って行く。計四郎さん、よろこばれて、例の上半身を二つ折りにする清水式のお辞  
2000 庄野 潤三(著) 鳥の水浴び 講談社
- 28 3 、自ら事故を引き起こしたにもかかわらず、パラシュート落下事故は「測定地点に落としたのを誰かが民間地域へ持ち去ったのだ」と、読谷村民に責任を転嫁する不遜な発言をする始末  
2001 山内 徳信(著) 憲法を实践する村 明石書店
- 28 4 い！！ま…まさか家で見れるとは思っていませんでした！TBSチャンネルで放送開始したのを妹が録画してくれましたwイケメン3兄弟が面白い！！特に…要潤が面白い！（笑）いや  
2008 Yahoo!ブログ Yahoo!
- 29 1 くの忘れちゃったのね」「手袋、ぼくにも買ってくれた？」「このあいだ買ってあげたのを、あなたはケーブ・コールウッドにもって行ってすぐにだめにしちゃったでしょ？」母が  
2002 ホーマー・ヒッカム・ジュニア(著)/ 武者 圭子(訳) ロケットボーイズ 草思社
- 30 1 「はあ、風呂焚きの下人でございますが」「そやつが、何として、原田の手に」捕えたのを逃がしたといえは、宿直の夜番に罪が及ぶ。主膳正の耳に入れる時を慮っているところだ  
1996 早乙女 貢(著) 女の浮城 読売新聞社
- 30 2 して食べる。父が好きだった。大阪帝塚山の義姉が徳島へ行ったとき、八百秀で買って来たのを送ってくれたという話をすると、レジの岡さんは、八百秀はみやげ物屋でいちばん大きな  
2000 庄野 潤三(著) 鳥の水浴び 講談社
- 30 3 写真を選んでいたので。縁起でもない、と思いましたが、「これ！」と出して来たのを見て笑ってしまいました。十五年ぐらい前の若々しい写真を選んだのです。脳血栓の後  
2001 天外 伺朗(著) 「あの世」と「この世」の散歩道 経済界
- 30 4 (昭和二十八年十一月・朝日新聞社)だ。分厚い本なので、押入れの奥に突っ込んであったのを引っ張り出したら、薄井秀一という名前が出てきた。明治四十一年「五月には薄井秀一ら  
2002 横田 順彌(著) 明治時代は謎だらけ 平凡社
- 30 5 ようとしたので、長田巡査の協力を得、2名で被疑者の両腕を掴んだら振りほどこうとしたのを、押さえつけ制圧して逮捕した。事例25(私人逮捕)6逮捕時の状況 被疑者は前  
2002 実著者不明 実務逮捕手続書 松華堂;立花書房(発売)
- 30 6 重なものであります。殊に鎮海湾ではその陸から取れない。はるばる佐世保から持って来たのを少々貰って、洗濯するにも顔を洗うにもそれを用いるので一層貴重である。飲み水や飯を  
2005 中山 吉弘(著) 熱きバトルのはて ブイツーソリューション;星雲社(発売)
- 30 7 」の結末を教えてください。ユアン・マクレガーが出ていたので、以前にテレビで放送したのを録画したんですが、途中で切れてしまって・・・。レンタルして見直すほど、面白い内  
2005 Yahoo!知恵袋 Yahoo!
- 30 8 いのでしょうか？携帯のシールを、剥がしたくなかったので、1週間そのままにしておいたのを、携帯を見せていると、『剥ぐの忘れてるよ』と剥がれた事があります。叫びました。

2005 Yahoo!知恵袋 Yahoo!

- 30 9 アニメのプラネテスは再放送してますか？BSでやってたのを教育テレビで再放送してますよ・  
・・・  
2005 Yahoo!知恵袋 Yahoo!
- 30 10 た方どう思いますか？やはりつまらないですか？あれ大好きっ！小学生の頃テレビでやったのを録画して毎日観てたよ。最後まで観たら巻き戻して・・・ってエンドレス状態でした。そ  
2005 Yahoo!知恵袋 Yahoo!
- 30 11 大きさの木の箱に30m線を巻き、パソコンは例によって100均のラジオから取り出したのを使いました。25mでも試してみただけだもダメでした。どうすれば良くなるでしょうか？  
2005 Yahoo!知恵袋 Yahoo!
- 30 12 、にんじん、ゴボウ等の根菜類や、わらび、きのこの等の山菜です。くるみは山で取ってきたのを搗り潰して、砂糖を入れ、雑煮の出汁でのばしてタレにします。岩手県下閉伊郡岩泉町  
2005 Yahoo!知恵袋 Yahoo!
- 30 13 Yahoo! ブログって一つしか開設できないんですか？また、開設したのを削除と言うか、消すことはできますか？違うテーマで開設したいと思うのですが、方法が  
2005 Yahoo!知恵袋 Yahoo!
- 30 14 あんまりしていなかったのは日記を見れば丸分かりですが（汗）ということで適当に描いたのをアップ。たまにはこういう目の描き方も練習しないと。http://www.gpar  
2008 Yahoo!ブログ Yahoo!
- 30 15 い感じでしょう？この花は先日ホームセンター園芸館花屋さんで、お花勉強会中に見たのをシュートしたものです。サイズ丈30cm位でした。皆さん、感想コメントど  
2008 Yahoo!ブログ Yahoo!
- 30 16 ではありません。火曜日の深夜は今期アニメが目白押しで辟易としております。撮っておいだのをチェックするのが大変です。何かを落としていかないと身が持たないなあ。  
2008 Yahoo!ブログ Yahoo!
- 30 17 理してます！！ってところをみせたくて・・・その画像を・・・昨日ちゃんと、作ったのをとりましたから・・・【実際に、ココでやるわけじゃないのね・・・(笑)】リ||\*  
2008 Yahoo!ブログ Yahoo!
- 30 18 。まだ取り外すものが少し残っているのですが電子レンジは付け替えないので新しく買ったのをどう置くか色々試してみて、アイデアが浮かびました♪PC27の時に最初は旦那様  
2008 Yahoo!ブログ Yahoo!
- 30 19 ったのは、発売から約3年経過した、2001年11月。中古で、¥980円で売っていたのを、GETした。パッケージと、タイトルから、なんとなく面白そうに思えし、何より安  
2008 Yahoo!ブログ Yahoo!
- 30 18 めて見た缶の炭酸飲料で、味は賛否両論・・・で感じみたいなのですが。さっそく冷やしたのを開けて飲んでみましょう♪コップに出した感じは、普通のコーラと色など変わりませんね  
2008 Yahoo!ブログ Yahoo!

\*\*\* 31 =その他・文型分類を避けたもの \*\*\*

- 31 1 詞がある。また幕末の文久元年（一八六一）の丹波組の記録によると、出水で桶が流されたのを引き  
関係節化 上げてくれた、下流の稲荷島（島田市稲荷）へ貰い受けに行ったときの礼金などに金  
2001 松村 博(著) 大井川に橋がなかった理由 創元社
- 31 2 、左、木曾海道中仙道と記した標石がみえる。木曾街道のほうから大きな猪を檻に入れたのをかつ  
関係節化 いた男が二人、追分のところで一休みしているのを附近の子供達が物珍らしそうに覗  
2001 平岩 弓枝(著) はやぶさ新八御用旅 講談社
- 31 3 分はあれを知っている。確か、何十年も昔に会ったことがある。陰陽師たちに追われていたのを助け  
関係節化 た“妖しの獣”―？…それにあの狐の瞳―。誰かに似ている。自分のよく知って  
2002 足立 和葉(著) 晴明ふしぎ草子 小学館

- 31 4 **だくさんの感動ストーリーだぞ！▼料理が得意な戦闘メイドの朝霧かずさ▲廃棄されていたのを拾**  
**関係節化** われたりニアが、活躍する…！？があ〜でいあんHearts 第3巻●ソフトガレー  
 2003 実著者不明 アニメディア 学習研究社
- 31 5 **間のように思えたのだ。実際、少年を見ていると、先だってヌマオオヤマネコに捕らわれたのを助**  
**関係節化** けてやった、怯えきった小さなウサギを思い出した。ヌマオオヤマネコはウサギの耳を  
 2005 アンジー・セイジ(著)/ 唐沢 則幸(訳) 七番目の子 竹書房
- 31 6 **シアムでのハンセンVSアンドレ戦ですね。アンドレが試合中に右腕にサポーターを付けたのをチェ**  
**関係節化** ックしようとした高橋氏をローブに振ってラリアット！！  
 2005 Yahoo!知恵袋 Yahoo!
- 31 7 **あるパスタを接着剤で貼りつけスプレーで着色したものです。以前、我家に飾ってあったのを見た**  
**関係節化** 友人からリクエストがありここ3年ほど、講習してみんなで作ってました。さすが  
 2008 Yahoo!ブログ Yahoo!
- 31 8 **ように、視線を下向き加減にして歩いていたので、目の前で、急に一人の客が方向転換したのを、よ**  
**けきれず、ぶつかってしまった。「あ、失礼」と相手が謝る。晴美はよろけた拍**  
 1984 赤川 次郎(著) 三毛猫ホームズのびっくり箱 光文社
- 31 9 **吉はじろりと視線を龍馬に移した。「袖はお前が取ったのか、それとも誰かにちぎられたのを取戻し**  
**て来たのか」「私がとめているうちに、私の手に残りました」「お前の手に残**  
 1986 山岡 荘八(著) 坂本竜馬 講談社
- 31 10 **確か、ショパンを父が繰り返し聴いていたのを、私も黙ってそばに座ってきいたのを記憶している。**  
**いや、より正確に言えば、** 1990 横溝 亮一(著) ウィーンのおばあさんとプラハのおじいさん 音楽之友社
- 31 11 **がありませんから。なにしろ十八年前の冬の朝、あの銀杏の木の下で捨てられて泣いていたのを、執**  
**事の玄英さまに拾われて養女にさせていただいた身ですもの。この貧乏寺で—** (あわて  
 1995 五木 寛之(著) 蓮如 中央公論社
- 31 12 **し願えませんか？」すべて打ち合わせどおりの展開だった。「わたしは送ってもらったのを、ちゃん**  
**とアルバムに貼ってあります。お貸しするのはかまいませんけれど、返却して下**  
 1998 有栖川 有栖(著) 最新「珠玉推理」大全 光文社
- 31 13 **董卓が人気取りで—先帝(霊帝)に宦官の排除を進言して官職を解かれ、地方に追放されたのを呼び**  
**返されて、侍中に任じられた蔡邕である。その蔡邕を、司徒王允は捕えて詰問した**  
 2001 安能 務(著) 三国演義 講談社
- 31 14 **なくなっちゃって…。仕事を辞めることを考えてたときに、たまたま街でチンピラに絡まれたのをコウ**  
**さんに助けてもらったんだ。コウさん、すごく颯爽としてカッコよくて…。** ちゃん  
 2002 仙道 はるか(著) 永遠に見る夢 イー・コネクション;星雲社(発売)
- 31 15 **しくこの[悲しみの]感情を燃え立たせていた。彼女らは飢饉のとき道端に捨てられていたのを彼女**  
**に拾い上げられ、養われ、教えられ、清らかで滅びることのない生へと手ずから導か**  
 2003 土井 健司(著) 古代キリスト教探訪 新教出版社
- 31 16 **を叩いた。見張っていた甚之助は、その同僚の後から水茶屋勤めふうの女がずっと現われたのを、通**  
**りすぎりと思っていた。「何とそれが、与力の付けた女探索だったのですよ。初め**  
 2004 別所 真紀子(著) 残る蜚 新人物往来社
- 31 17 **わたしも犬を飼っているからどれだけ大切かはわかるけど、男の子が火の中に入っていったのを誰も**  
**止めなかったのが不思議…。止めてれば犬も男の子も助かったのに。** 2005 Yahoo!知恵袋 Yahoo!
- 31 18 **挿したら見事根付いたミントちゃんも、ゼラニウム鉢の間借り生活から、一戸建てへ(爆)デザート**  
**に飾る日が楽しみだわ**  
 2008 Yahoo!ブログ Yahoo!
- 31 19 **母橘三千代が没した。その三月、皇后は父が再興した興福寺維摩会が、しばらく絶えていたのをなげ**  
**いて、再び復興せられたが、他方、翌年の一周忌を期して母君の往生菩提のために西**  
 1986 林 陸朗(著) 光明皇后 吉川弘文館
- 31 20 **連港の無料宿泊所に泊まったが叔父はいない。三味線で花連港の街を門づけして回っていたのを街民**  
**が見かねて金を集め、基隆から故郷へ帰した。花連港瑞穂村はタバコ専門の移民村**  
 2001 竹中 信子(著) 植民地台湾の日本女性生活史 田畑書店